

# 東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 9 —

福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査 I

2013

九州歴史資料館



周防灘上空から行橋市街地を見る（東上空から）



延永ヤヨミ園遺跡周辺の地形（上空から）

# 序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成19年度から東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施しています。本書で報告する延永ヤヨミ園遺跡は県東部、行橋市街地にほど近い低丘陵上の遺跡で、その存在は早くから知られていましたが、東九州自動車道建設に伴って初めて本格的な発掘調査が実施されました。併せて、一般国道201号行橋インター線や県道直方行橋線バイパス建設に伴う発掘調査も実施され、予想を遙かに超える多種多様な遺構・遺物が出土しました。東九州自動車道建設に伴う発掘調査の内容は、平成23年度から4カ年をかけて順次報告していきますが、これらの資料は、この地域のみならず、広く全国的な視点から検討・評価すべきものだと考えています。そのために、本書が活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関、行橋市・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成25年11月30日

九州歴史資料館

館長 荒巻 俊彦

## 例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市大字延永・吉国に所在する遺跡群の発掘調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第9集にあたる。
2. 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。  
なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室、行橋市・同教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 延永ヤヨミ園遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第15地点にあたる。
4. 本書に掲載した写真は、遺構を飛野・城門が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。  
なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。
5. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、飛野・城門が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池・城門の指導の下で実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・蓑島・中津・田川」を改変したものである。  
また、使用する座標は世界測地系による。
9. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は、九州歴史資料館へ移管された。
10. 本書の執筆・編集は飛野が行った。石材については当館学芸調査室杉原敏之の助言によるところが大きい。

# 目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I. はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査経過	4
3. 調査の組織と関係者	7
II. 位置と環境	11
1. 地理的環境	11
2. 歴史的環境	11
III. 調査の内容	17
1. 延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査概要	17
2. 竪穴住居跡	19
3. 小 結	167

## 図版目次

- 巻頭図版1 周防灘上空から行橋市街地を見る（東上空から）
- 巻頭図版2 延永ヤヨミ園遺跡周辺の地形（上空から）
- 図版1 1. I・V区全景（南東上空から） 2. I・V区全景（上空から）
- 図版2 1. I区北半（上空から） 2. I区南半（上空から）
- 図版3 1. 1号竪穴住居跡（北西から） 2. 2号竪穴住居跡（南から）  
3. 3号竪穴住居跡（西から）
- 図版4 1. 4号竪穴住居跡（東から） 2. 4号竪穴住居跡北辺（南から）  
3. 4号竪穴住居跡東南隅付近（南から）
- 図版5 1. 4号竪穴住居跡東辺（東から） 2. 5号竪穴住居跡（東から）  
3. 5号竪穴住居跡カマド周辺（南西から）
- 図版6 1. 6号竪穴住居跡（東から） 2. 6号竪穴住居跡カマド周辺（北東から）  
3. 6号竪穴住居跡カマド周辺（北から）
- 図版7 1. 6号竪穴住居跡カマド（南から） 2. 7号竪穴住居跡（西から）  
3. 8～11号竪穴住居跡（北から）
- 図版8 1. 8号竪穴住居跡カマド（南東から） 2. 9号竪穴住居跡遺物出土状態（西から）  
3. 10号竪穴住居跡遺物出土状態（東から）
- 図版9 1. 13号竪穴住居跡（北から） 2. 13号竪穴住居跡カマド検出状態（北から）  
3. 13号竪穴住居跡カマド内（東から）
- 図版10 1. 14号竪穴住居跡（西から） 2. 15号竪穴住居跡（西から）  
3. 16号竪穴住居跡（北から）
- 図版11 1. 16号竪穴住居跡完掘後（北から） 2. 16号竪穴住居跡遺物出土状態（南西から）  
3. 16号竪穴住居跡屋内土坑（北から）
- 図版12 1. 15・16号竪穴住居跡間の溝（西から） 2. 17号竪穴住居跡（南西から）  
3. 18・19号竪穴住居跡（南西から）
- 図版13 1. 20～22号竪穴住居跡（北東から） 2. 20号竪穴住居跡カマド（南から）  
3. 20号竪穴住居跡カマド完掘後（南東から）
- 図版14 1. 21号竪穴住居跡南辺（西から） 2. 22号竪穴住居跡東辺（南から）  
3. 23号竪穴住居跡（南西から）
- 図版15 1. 24号竪穴住居跡（北西から） 2. 24号竪穴住居跡カマド周辺（北東から）  
3. 25・26号竪穴住居跡完掘後（北西から）
- 図版16 1. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態（北西から）  
2. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態（北東から）  
3. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態（北西から）
- 図版17 1. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態（南西から）  
2. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態（南西から）  
3. 27号竪穴住居跡（南東から）

- 図版18 1. I - 3区全景(上空から) 2. 29号竪穴住居跡(南東から)  
3. 29号竪穴住居跡埋甕(北から)
- 図版19 1. 30号竪穴住居跡(南東から) 2. 31号竪穴住居跡(北東から)  
3. 32号竪穴住居跡(北東から)
- 図版20 1. 33号竪穴住居跡(南西から) 2. 34号竪穴住居跡(南東から)  
3. 35~44号竪穴住居跡(南東から)
- 図版21 1. I - 6区全景(上空から) 2. I - 6区北西部(上空から)
- 図版22 1. I - 6区南西部(上空から) 2. I - 7区全景(上空から)
- 図版23 1. 35号竪穴住居跡(南東から) 2. 38号竪穴住居跡(南から)  
3. 41号竪穴住居跡カマド周辺(南東から)
- 図版24 1. 41号竪穴住居跡カマド(南東から) 2. 43号竪穴住居跡カマド付近(南から)  
3. 45号竪穴住居跡(北西から)
- 図版25 1. 45号竪穴住居跡カマド(東から) 2. 46~48号竪穴住居跡(北東から)  
3. 48号竪穴住居跡カマド(南東から)
- 図版26 1. 49・50号竪穴住居跡切合関係(北西から)  
2. 49号竪穴住居跡(南西から) 3. 51・52号竪穴住居跡(南西から)
- 図版27 1. 51号竪穴住居跡遺物出土状態(北西から)  
2. 53号竪穴住居跡石庖丁出土状態(北西から)  
3. 54号竪穴住居跡屋内土坑(北から)
- 図版28 1. I - 7区全景(西から) 2. 57号竪穴住居跡カマド(南から)  
3. 58号竪穴住居跡(南から)
- 図版29 1. 59号竪穴住居跡(南西から) 2. 60・61号竪穴住居跡(東から)  
3. 63号竪穴住居跡(南西から)
- 図版30 1. 64号竪穴住居跡(北から) 2. 64号竪穴住居跡完掘後(西から)  
3. 65~67号竪穴住居跡(北から)
- 図版31 1. 65号竪穴住居跡カマド周辺(南から) 2. 65号竪穴住居跡カマド(南から)  
3. 65~67号竪穴住居跡(東から)
- 図版32 1. 69号竪穴住居跡周辺(東から) 2. 71号竪穴住居跡(南から)  
3. I - 7区東端(西から)
- 図版33 出土遺物1(土器:住2・4)
- 図版34 出土遺物2(土器:住4・5・6)
- 図版35 出土遺物3(土器:住6・5付近・7)
- 図版36 出土遺物4(土器:住9・10・13)
- 図版37 出土遺物5(土器:住13・14・15・16)
- 図版38 出土遺物6(土器:住16・18・20)
- 図版39 出土遺物7(土器:住25)
- 図版40 出土遺物8(土器:住25・26・27・29・30・34・36)
- 図版41 出土遺物9(土器:住37~39・41・43)



図版42	出土遺物10 (土器：住43・45・50・51)
図版43	出土遺物11 (土器：住51・52・63・69・74、石製品1)
図版44	出土遺物12 (石製品2)
図版45	出土遺物13 (石製品3)
図版46	出土遺物14 (石製品4)
図版47	出土遺物15 (石製品5、土製品)

## 挿図目次

第1図	延永ヤヨミ園遺跡の位置……………	1
第2図	東九州自動車道路線図及び調査地点位置図 (1/100,000) ……	2
第3図	延永ヤヨミ園遺跡調査区割図 (1/2,000) ……	6
第4図	周辺遺跡分布地図 (1/50,000) ……	10
第5図	行橋市鬼熊遺跡遺構配置図 (1/2,000) ……	12
第6図	上毛町下唐原遺跡群遺構配置図 (1/6,000) ……	14
第7図	延永ヤヨミ園遺跡周辺地形図 (1/6,000) ……	16
第8図	竪穴住居跡出土鉄製品等実測図 (1/2)……………	18
第9図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	19
第10図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	19
第11図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	20
第12図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	21
第13図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	21
第14図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	22
第15図	4号竪穴住居跡実測図 (1/30) ……	折込
第16図	4号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	26
第17図	4号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	27
第18図	4号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)……………	28
第19図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	29
第20図	5号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) ……	29
第21図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	30
第22図	5号竪穴住居跡付近遺構検出時出土土器実測図 (1/3)……………	30
第23図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	31
第24図	6号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) ……	32
第25図	6号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	33
第26図	6号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	34
第27図	7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	36
第28図	8号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) ……	36

第29図	8～12号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	37
第30図	9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	38
第31図	10号竪穴住居跡遺物出土状態実測図 (1/30) .....	39
第32図	10号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	40
第33図	10号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	41
第34図	13号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	43
第35図	13号竪穴住居跡遺物出土状態実測図 (1/30) .....	43
第36図	13号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	44
第37図	13号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	45
第38図	14号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	46
第39図	14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	46
第40図	15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	47
第41図	15号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	48
第42図	15号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	49
第43図	15号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3) .....	50
第44図	16号竪穴住居跡屋内土坑土器出土状態実測図 (1/30) .....	51
第45図	15・16号住居跡間溝状遺構実測図 (1/30) .....	52
第46図	16号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	53
第47図	16号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	54
第48図	16号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3) .....	56
第49図	15・16号住居跡間溝状遺構出土土器実測図 (1/3) .....	56
第50図	17号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	57
第51図	17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	57
第52図	18・19号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30) .....	58
第53図	18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	59
第54図	20号竪穴住居跡およびカマド周辺実測図 (1/60、1/30) .....	60
第55図	20号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	61
第56図	20号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	62
第57図	20号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3) .....	62
第58図	21・22号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	63
第59図	21・22号竪穴住居跡出土土器実測図 (11は1/4、他は1/3) .....	64
第60図	23号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	66
第61図	23号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	67
第62図	23号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	68
第63図	24号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	69
第64図	24号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) .....	70
第65図	24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	70
第66図	25・26号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	72

第67図	25・26号竪穴住居跡遺物出土状態実測図 (1/30) .....	折込
第68図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) .....	75
第69図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3) .....	76
第70図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) .....	77
第71図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3) .....	78
第72図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (1/3) .....	80
第73図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 6 (1/3) .....	82
第74図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 7 (1/3) .....	83
第75図	26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	84
第76図	27号竪穴住居跡実測図 (1/30) .....	86
第77図	27号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	87
第78図	28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30) .....	88
第79図	28・29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	90
第80図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4) .....	92
第81図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3) .....	93
第82図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) .....	94
第83図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3) .....	95
第84図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (1/3) .....	96
第85図	31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	98
第86図	33号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	99
第87図	31・33・34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	100
第88図	34～36号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	折込
第89図	36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/2) .....	104
第90図	37号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	105
第91図	37号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) .....	106
第92図	37号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3) .....	107
第93図	38号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	107
第94図	38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	108
第95図	39～43号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	折込
第96図	39・40・42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	112
第97図	41号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) .....	113
第98図	41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	114
第99図	竪穴住居跡出土玉類等実測図 (1/1、1/2) .....	115
第100図	43号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) .....	115
第101図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	116
第102図	44号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	117
第103図	45号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	118
第104図	45号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) .....	118

第105図	45号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	119
第106図	45号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	120
第107図	46～48号竪穴住居跡実測図 (1/60)……………	121
第108図	46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	122
第109図	48号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) ……	122
第110図	48号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	123
第111図	48号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	125
第112図	49・50号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	126
第113図	49号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	127
第114図	50号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	128
第115図	51～53号竪穴住居跡実測図 (1/60)……………	130
第116図	51号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	131
第117図	51号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	132
第118図	51号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)……………	133
第119図	52・53号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30) ……	134
第120図	52号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	135
第121図	52号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	137
第122図	53号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	137
第123図	54号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	138
第124図	54号竪穴住居跡石庖丁出土状態実測図 (1/20) ……	138
第125図	54・55号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	139
第126図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	140
第127図	57号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……	141
第128図	56～60号竪穴住居跡実測図 (1/60)……………	142
第129図	56・58～60号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……	143
第130図	61・62号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	145
第131図	61・62号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	146
第132図	63・64号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	147
第133図	63号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	148
第134図	64号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)……………	150
第135図	64号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……………	151
第136図	65～67号竪穴住居跡実測図 (1/60)……………	152
第137図	65・66号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	153
第138図	68～70号竪穴住居跡実測図 (1/60)……………	154
第139図	69・70号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	156
第140図	71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	157
第141図	71号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……………	158
第142図	73・74号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……	159

第143図	73・74号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	159
第144図	竪穴住居跡出土石製品等実測図 1 (模造鏡ほか、1/2、2/3).....	161
第145図	竪穴住居跡出土石製品等実測図 2 (石庖丁、1/2).....	162
第146図	竪穴住居跡出土石製品等実測図 3 (砥石 1、1/2).....	163
第147図	竪穴住居跡出土石製品等実測図 4 (砥石 2、1/2).....	164
第148図	延永ヤヨミ園遺跡 I 区遺構配置図 (1/400).....	折込

## 表目次

表 1	東九州自動車道福岡工事事務所管内調査地点一覧.....	3
表 2	延永ヤヨミ園遺跡の調査区及び調査年度 (平成24年度まで) .....	7
表 3	延永ヤヨミ園遺跡 I 区竪穴住居跡一覧.....	168



工事が進む延永ヤヨミ園付近 (壁面の土層は阿蘇4)

# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市小倉JCTで九州縦貫自動車道から分岐し、九州東部の主要都市を貫いて鹿児島市に至る全長436kmの高速道路である。福岡県内では、平成26年度に全線を供用開始する計画で、急ピッチで工事がなされている。

明治30年（1897）に福岡県小倉～大分県長洲間に敷設された現JR日豊本線、そして大正9年（1920）に設置された国道10号線（小倉～鹿児島間）が長く東九州の大動脈であったが、以下のような地形的な制約から福岡県東部を縦断する第3、第4の動脈の建設は遅れた。

北九州市の南に位置する京都郡苅田町は瀬戸内海に面し、市街地のすぐ背後には標高406mほどの高城山を主峰とする山並みが南北に屏風のように連なって、奥行きのない地形となっている。現在では埋め立て地に工場用地が広がるが、古くは国道10号線付近まで海岸であったといわれる。平坦地が狭く、古代には官道もこの間に造られていたはずである。雨窪地区や馬場地区の遺跡で緑釉陶器などの特殊な遺物が一定量出土しているものの、官道そのものは未確認である。近代化以前は今に痕跡を多く留める中津街道（通称勅使街道）が唯一の幹線道路であった。その後、中津街道を襲う国道10号線に続く2本目の南北幹線道路は埋め立て地を走り、東九州自動車道の苅田北九州空港IC供用に併せて平成18年に開通した。3本目の幹線道路となる東九州自動車道は町域のほとんどをトンネルで通過するように設計されたが、上記の地形的制約を示しているといえよう。

また、築上町から豊前市にかけては、標高1,200mの英彦山山塊から派生する無数の丘陵地が北東方向に延びていくつかは周防灘に達し、そこも古くから交通のネックとなっていた。平成4年（1992）に旧日本道路公団によって連続する低丘陵をオープンカットした椎田道路が供用されるまで、国道10号線・JR日豊本線、そして国道10号線の前身の中津街道が丘陵地を迂回して海岸に接する山裾に集められていた。その後、同24年には築上郡上毛町土佐井から京都郡みやこ町勝山に至る京築広域農道が10本のトンネルを掘削して椎田道路のさらに南側に完成した。国指定史跡唐原古代山城が位置する丘陵を除いて全線がオープンカット工法となる今回の東九州自動車道は、椎田道路を取り込むものの、福岡県東部の周防灘沿岸を縦断する4本目の幹線道路ということができる。



第1図 延永ヤヨミ園遺跡の位置



第2図 東九州自動車道路線図及び調査地点位置図 (1/100,000)

地点	工 事 件 名	遺跡名	所 在 地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書 番号	備 考
0	苅田 IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4,000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1,700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4,500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13,100	H16・ 20・21	1,200	H20	H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35,300	H18・19	3,900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32,100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30,600	H18・ 20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10,700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24,200	H20～22	5,000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29,600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21,500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18,200	H20	8,440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7,500	H20	6,180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12,200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17,500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24,810	H22	24,810	H19～23	H23～	2・9集 (本冊)	
16	福岡		行橋市吉国	4,400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5,100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82,500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12,710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20,650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19,190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4,820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10,050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16,100	H20	6,360	H21・22			
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46,620	H20・21	31,550	H22～24			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14,710	H20・21	2,900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18,590	H20	12,750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7,000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18,774	H19・22	16,574	H22～24			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10,950	H21	3,300	H21			
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13,888	H21・22	13,888				H22 行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17,636	H20・21	4,560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15,013	H20	15,013	H21			H21 行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42,940	H20～22	3,420	H22・23	H24・25	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29,491	H20～22	29,491	H21～23			H21 八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1,110	H21					遺跡なし
38	福岡	皆見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町皆見	1,132	H21	1,132	H22	H25	10集	
39	福岡	皆見中園遺跡 皆見大塚古墳	京都郡みやこ町皆見	8,218	H21・22	5,918	H21～23			H22 皆見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 ハッ重遺跡	京都郡みやこ町皆見・下原	45,510	H19～21	22,763	H20～22	H23～	3・10集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町皆見	5,080	H21	3,580	H21・22	H23～	10集	
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26,000	H21・22	26,000	H22・23	H22		一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24,359	H21					

表1 東九州自動車道福岡工事事務所管内調査地点一覧



## 2. 延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査経過

小倉JCT～苅田北九州空港IC間は、新北九州空港の開港に合わせて平成18年2月に供用が開始された。それ以南の東九州自動車道建設予定地の発掘調査に着手したのは、日本道路公団が分割民営化された後の平成19年度である。19年度予算を作成する18年度秋の段階で、19年度に調査着手が可能であった地点は第4地点（京都郡苅田町大字馬場；馬場遺跡群）及び第8・9地点（同町上片島；岩屋古墳群）だけであった。第8・9地点は本線以外に土取り場が設定され、50,000㎡を超える面積を対象としていたために2班を投入する計画で予算を組んでいたが、結果的には工事の施工計画、古墳及びその周辺部だけの調査で終わった。その結果、補正の段階で大幅な減額となる見込みとなり、新たに発掘調査着手が可能な地点を西日本高速道路株式会社へ照会したところ、この延永ヤヨミ園遺跡の一区（I-1区）を提示され、急遽12月から調査を開始することとした。翌20年度以降は用地取得に併せて順次調査を行い、最終的にI区の調査が終了したのは平成23年3月末で、足かけ5年に及ぶ長期の調査となった。なお、東九州自動車道建設に関わる延永ヤヨミ園遺跡のすべての発掘調査の終了は同23年8月のことであった。

延永ヤヨミ園遺跡の位置する低丘陵では、東九州自動車道建設工事のほかに、関連して国道201号行橋インター線建設工事及び県道直方行橋線のバイパス建設工事がほぼ同時に施工されている。いずれも発掘調査担当は福岡県教育委員会で、遺跡名は「延永ヤヨミ園遺跡」を使用している。本来、『福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡編）』1976に記載された同遺跡は、今回の調査区でいえば東九州自動車道関係調査区の北端（II-2区）、県道直方行橋線関係調査区の北端（V-1区）付近である。各事業に関わる埋蔵文化財の有無についての照会に対し、近接する同一丘陵上の周知の遺跡の名称を用いて回答したことから、東西500m、南北400mほどの丘陵・谷部を同一遺跡名で呼ぶこととなった。「行橋市内遺跡等分布地図」（『行橋市文化財調査報告書』第37集、2010）では「延永ヤヨミ園遺跡」の範囲を丘陵北端を削り込んで東西に走る旧県道直方行橋線を北限、国道201号線「吉国」交差点から北へ走る市道を西限としてラインを引いているが、当然ながら現集落が位置する丘陵上により広く展開するはずであるが、その範囲は今後の調査の進展に期待したい。

実際の発掘調査に際して、相前後して着手するそれぞれの調査地点をどう区別するかということが課題となった。調査に即応するために、仮称として東九州自動車道建設用地内をI・II区、国道201号行橋インター線建設用地内をIII・IV区、県道直方行橋線建設用地をV区と大きく分け、それぞれの地区内で着手時期・地形等を考慮して細分した。たとえば、I区で最初に着手した地点はI-1区である。調査に入ってみると、各事業の調査対象地の大部分が大字吉国に含まれていることが判明し、報告にあたっては遺跡名の変更を考えたこともある。しかし、調査が進展するにつれ、各地点ともに長期にわたる各種の遺構が濃密に分布し、多種多様な遺物の出土を見るとともに、中に大型木樋や墨書土器・木簡といった注目すべきものも多くあった。ここで発見調査された集落は地形や位置関係から見て当然本来は同一の集落のはずであり、これらをいくつかの遺跡名に分けてに報告するより、同一遺跡として報告するほうが遺跡を理解する上でより有効であろうと考えて、仮称のI～V区とした地区名をそのままにして報告を続ける。

延永ヤヨミ園遺跡 I 区は仮称でさらに 1～7 区に分けて調査を行った。以下で各年度ごとに調査の概要を記す。

平成19年度 初めて調査に着手した地点は 1 区で、現状は休耕した畑地であった。12月12日に背丈ほど伸びた茅を伐採することから作業を開始した。その後、重機を用いて表土掘削を行い、作業員の投入は翌20年 1月10日からである。調査区は東が高く、西へ向かって緩やかに下降していた。高位の東端付近では9万年前に噴出したといわれる阿蘇4火砕流に起因する灰白色の火山灰が露出していたが、それ以外では同じく阿蘇4起源の黄褐色火山灰の再堆積層で、乾燥すれば非常に固いが雨に脆いものであった。

この調査では、中世後期の区画溝や耕作に伴うと見られる浅い溝などの発掘を主として行い、3月26日に撤収して最初の発掘を終えた。

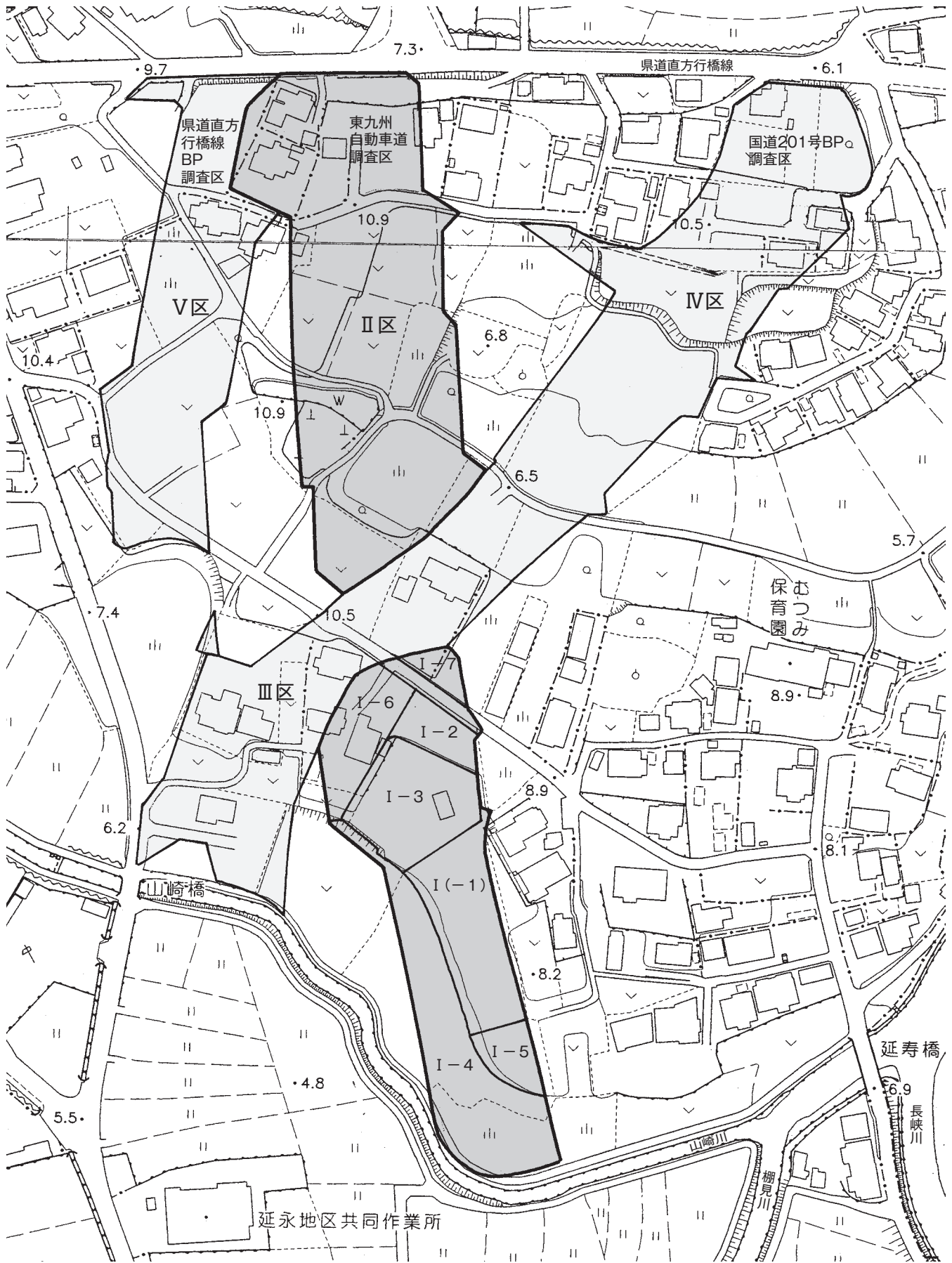
同20年度 4月28日から重機を搬入して、市道南西側の1～6区内で最高所となる2区とした畑地、続いて1区南の一段低くなる5区とした畑地の表土掘削を先行実施した。5月7日からは作業員を投入して19年度に着手した1区の調査を再開した。中世の遺構発掘をほぼ終了して後に2区、続いて5区へ移動した。

それらが終了した後、再び1区に戻って堅穴住居跡等の調査を中心に再開した。この過程で弥生時代終末と思われる土壙墓群の存在に気付いた。前年度にもそれと認識しないままに一部の発掘を行っていたのであるが、改めて精査を行った。

1区中央付近を略東西に併走する2条の溝の南西付近は広く赤褐色（上層）、黒褐色（下層）の包含層が覆っていた。しかも非常に多くの遺物を包含していたので重機を用いず、すべて人力で除去した。次年度報告となるが、15号堅穴住居跡付近の包含層中には完形を含む多くの土器がまとまって出土し、その意味をまだ測りかねている。

住居跡群の調査と平行して、排水用パイプを挟んで1区の北西に位置する3区（畑地）及び1区西側の一段低くなる4区（水田）の表土掘削、調査を行った。3区東端は隣接する2区と1m以上の比高差がある。従って、3区の東半部は灰白色の阿蘇4火砕流層が露出し、遺構も希薄で中近世と思われる土坑群を検出したのみであったが、西半は非常に多くの土器を含む包含層に覆われ、ほとんど遺構のラインが見えなかった。そのため、トレンチ数本を設定して堆積状況を確認するととどめて本格的な発掘は次年度へ送った。4区も西半が包含層に覆われていたが、これは山崎川という小河川へ続くものと思われ、ここではトレンチ調査にとどめた。包含層との境付近に小溝が掘削されていて、その溝の東（高位）側では各時代の井戸が比較的集中して掘削されていた。この年度の調査は3月26日に終了した。

同21年度 4月13日から重機を用いて4区北部の表土掘削及び3区西半の包含層の除去を開始、同16日から作業員を投入して3区の遺構検出を開始した。併せて、前年度に終了していなかった1区北半の住居跡群の調査も行っている。1区堅穴住居跡群、3・4区北部の調査が終了した後、8月下旬にはI区南端となる4区南東端部へ移動した。5区で検出した幅4mの大型溝が、この調査で「U」字状に大きくカーブすることが判明し、水運に関わる運河のような性格であろうと思われた。また、山崎川に向かって下降していく地形は4区中程と同様であるが、ここでは土層観察用に開けたトレンチで偶然に祭祀を思わせる古墳時代の土器群を確認した。こうしてこの年度は9月30日に一旦調査を終え、次年度調査予定の6区の表土掘削を年度末に行った。



第3図 延永ヤヨミ園遺跡調査区割図 (1/2,000)

表2 延永ヤヨミ園遺跡の調査区及び調査年度（平成24年度まで）

事業名	調査担当者	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
東九州道	飛野	I区	I-1~5区	I-1・3・4区	I-3・6・7区		
	城門		II-1区	II-2区	I-4区、 II-1~3区	II-4区	
国道	進村		III-C区	III-C区、 IV-C区			
	下原			IV-A区	IV-A・B区	IV-B区	
	城門				III-C区		III-C区
	大庭					IV-B区、 III-A・B区	III-C区
県道	小澤・岡田			V-A・B区			
	宮地				V-2~4区		
	飛野					V-5~7区	V-5~7区

同22年度 I区北西端の宅地跡を6区として、隣接する3区北西端の一部と併せて4月15日から調査に着手した。ここでも高位となる北東部は阿蘇4火砕流（黄褐色土）が露出し、住居跡は壁が残らないほどに削平を受けていた。西半部はその再堆積層からなる包含層に覆われていて遺構検出は困難を極めたが、堅穴住居跡や地下式土坑などを検出して7月9日には6区の調査を終えた。

その後、4区南西端の用地買収が遅れていた部分約150㎡について、7月10日から重機による表土掘削を開始した。しかし、その日から14日にかけて累計500mm以上の大雨が降ったために調査区が水没、その後の水抜きに2日間を要したこともあって、人力による掘削は同月22日より開始した。想定通り丘陵の落ち際に井戸や土坑等の遺構が散見され、山崎川に向かって包含層の堆積が見られた。そのため包含層中に6本のトレンチを設定して堆積状況を確認した上で、図面・写真の記録を取り、8月3日に重機による埋め戻しを行った。

7区はI区北東端、市道北側の300㎡弱の部分である。国道201号行橋インター線と立体交差する付近で、立体交差部の底地は国土交通省が原因者となって発掘調査がなされた。23年度春からこの部分に工食用道路を設置したいという西日本高速道路株式会社の要請を受けて、年度末の2月18日から表土掘削に着手した。調査は北東部から先行して、工食用道路幅5mほどを先行して引き渡し、残りの部分は3月25日に埋め戻しまでを終了した。ここでも隣接する行橋インター線と同様に重複する住居跡群が検出された。こうして、延永ヤヨミ園遺跡I区の調査をすべて終了した。

### 3. 調査の組織と関係者

発掘調査に着手して以降、本報告書作成に至る間の西日本高速道路株式会社関係者は以下の通り。

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
西日本高速道路株式会社九州支社							
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀（～9.30） 本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔
同福岡工事事務所							
所長	竹國一也	竹國一也	福田美文	福田美文	中蘭明広	源谷秋義	源谷秋義

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
副所長 (技術担当)	高尾英治	高尾英治	高尾英治 (~ 9.30) 岩尾 泉	岩尾 泉 (~ 9.30) 入江壮太	入江壮太 今井栄蔵 (~ 9.30) 井 秀和 井 秀和 (10.1 ~)	松繁浩二 井 秀和	松繁浩二 井 秀和
副所長 (事務担当)	大内智博 (~ 11.30)	塚本國弘 (~ 9.30) 塚本國弘 (12.1 ~)	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博 (用地課長兼務)	甲斐島武司 (同)
総務係長	白川雄二	白川雄二	白川雄二 (~ 9.30) 江口政秋 江口政秋 (10.1 ~)	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之 (~ 5.10) 原野安博	甲斐島武司
工務課長	上川裕之 (~ 6.30) 大久保良和 (7.1 ~)	大久保良和 石塚 純 (10.1 ~)	大久保良和 (~ 9.30) 石塚 純 (10.1 ~)	石塚 純	石塚 純 (~ 9.30)	豎山哲二	田中康一郎
行橋北工事長	福島 剛	福島 剛 (~ 1.31) 羽山広幸 (2.1 ~)	羽山広幸	羽山広幸 (~ 9.30) 税田賢二 (10.1 ~)	税田賢二	税田賢二 (~ 9.30)	福島博文 (10.1 ~) 福島博文

また、発掘調査にかかる福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。なお、平成23年度に福岡県教育委員会は組織を改編して、文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査部門を九州歴史資料館文化財調査室へ移管した。

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
福岡県教育委員会							
総 括							
教 育 長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	榑崎洋二郎	榑崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副 課 長	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋			
参 事	新原正典	新原正典	小池史哲	小池史哲			
	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋				
課長補佐	中藪 宏	前原俊史	前原俊史	日高公德			
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳			
庶 務							
管理係長	井出優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫			
庶務担当	淵上大輔	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔			
調査・整理							
調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文			
参事補佐			新原正典	新原正典			
技 師	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣			

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
九州歴史資料館							
総 括							
館 長					西谷 正	西谷 正	荒巻俊彦
副館長					南里正美	篠田隆行	篠田隆行
参事 (文化財調査室長)						飛野博文	
企画主幹 (総務室長)					圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹 (文化財調査室長)					飛野博文 (調査担当)	飛野博文 (調査担当)	
企画主幹 (文化財調査室長補佐)					吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査 (文化財調査班長)					小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹
庶 務							
企画主査					塩塚孝憲	長野良博	長野良博
事務主査					青木三保	青木三保	
事務主査							南里成子
主任主事					熊谷泰容		
					近藤一崇	近藤一崇	
主 事					谷川賢治	谷川賢治	三好洸一
調査・整理報告							
技術主査 (保存管理班長)					加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
同参事補佐					小池史哲	小池史哲	池邊元明
主任技師							城門義廣
技 師					小林 啓	小林 啓	小林 啓

なお、発掘調査にあたっては、福岡県高速道路対策室、行橋市役所（高速道路対策室他）および行橋市教育委員会、工事関係者、そして地元有志および調査地に隣接する方々の大きな御協力を得て、無事に発掘調査を終了することができた。記して謝意を表します。



第4図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

- |                |              |               |             |
|----------------|--------------|---------------|-------------|
| 1. 延永ヤヨミ園遺跡    | 12. 福丸古墳群    | 23. 綾塚古墳      | 34. 神手遺跡    |
| 2. ビワノクマ古墳     | 13. 入覚コウチ遺跡  | 24. 橋塚古墳      | 35. 徳永川ノ上遺跡 |
| 3. 恩塚古墳        | 14. 入覚大原遺跡   | 25. 中黒田遺跡     | 36. 居屋敷遺跡   |
| 4. 百合ヶ丘古墳群     | 15. 下崎ヒガンテ遺跡 | 26. 扇八幡古墳     | 37. 鬼熊遺跡    |
| 5. 木ノ元幸古墳群 1号墳 | 16. 八雷古墳     | 27. 箕田丸山古墳    | 38. 矢留堂ノ前遺跡 |
| 6. 浄土院遺跡       | 17. 前田山遺跡    | 28. 天生田古墳群    | 39. 福原長者原遺跡 |
| 7. 岩屋古墳群       | 18. 下稗田遺跡    | 29. 竹並遺跡      | 40. ヒメコ塚古墳  |
| 8. 葛川遺跡        | 19. 宝山貝塚     | 30. 甲塚古墳      | 41. 辻垣遺跡群   |
| 9. 上片島遺跡群      | 20. 黒田エノヲ遺跡  | 31. 彦徳甲塚古墳    | 42. 柳井田早崎遺跡 |
| 10. 徳永丸山古墳     | 21. 寺田川古墳    | 32. 豊前国府跡惣社地区 | 43. 福富小畑遺跡  |
| 11. 願光寺裏山古墳    | 22. 庄屋塚古墳    | 33. 京ヶ辻遺跡     | 44. 大久保明神遺跡 |

## Ⅱ．位置と環境

### 1．地理的環境

行橋市は福岡県の東部、瀬戸内海の西端周防灘に面して位置する。北は北九州市・京都郡<sup>みやこ</sup>苅田町、西は京都郡みやこ町（旧勝山町）、南はみやこ町（旧犀川町・豊津町）及び築上郡築上町（旧築城町・椎田町）と接している。

北九州市との境はカルスト地形の平尾台で、その一端から南に延びる山塊が京都郡と田川郡を隔てる。その山塊はさらに南へ延びて北部九州の霊山英彦山（1,200m）に連なり、英彦山山塊は大分県との県境となっている。英彦山山塊から北東方向に無数に派生する山並みは狭い谷を発達させて一部は周防灘まで達し、既述したように交通の障害となっていた。

行橋市付近は通称京都平野あるいは行橋平野と呼ばれる盆地状の地形となる。気候区分は瀬戸内系で、数多く築かれている溜池は特徴ある景観をなしている。主要河川は今川・祓川の両2級河川で、いずれも英彦山を源流とし、異なる谷を流れて市街地東で周防灘に流れ込むが、いずれの流域も保水力が乏しく、これも溜池築堤の一原因になっている。今川上流では昭和46年（1971）に油木ダム（田川郡赤村）が竣工、祓川上流では平成29年の竣工を目指して伊良原ダム（みやこ町犀川下伊良原）工事が進められている。

行橋市街地の大部分は標高5m以下で、古代の海岸線がこのラインで復元されている。現在陸続きとなっている簗島は、江戸時代以降の干拓によって戦後、島でなくなった。また、苅田町との境の一部をなす小波瀬川の流域は小波瀬川の規模に不釣り合いなほどの広い水田となっているが、東九州自動車道や国道201号行橋インター線建設予定地内等の試掘調査の所見ではいずれも古くはアシ原で、長く湿地帯であったと考えられる。その湿地帯の一角に、古代豊前の国津であったといわれる「草野津」の遺称を残す「草野」がある。草野に接する苅田町片島は周囲を水田に囲まれていて、古くは文字通りに「島」の様相を呈していたことであろう。また、この湿地帯の南端は延永ヤヨミ園遺跡の所在する丘陵に接し、丘陵東端付近は「津熊」と呼ばれている。

### 2．歴史的環境

平成23年度に刊行した「延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査Ⅰ」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』2）で本遺跡周辺の歴史的環境を概観したが、ここでは弥生時代の遺跡に限って記す。

行橋市周辺で最古の弥生土器は、昭和34年（1959）年に海岸砂丘上の長井遺跡<sup>註1</sup>で採集された板付Ⅰ式土器である。砂利採取に伴って、500基以上の箱式石棺などが破壊されたと伝えられる。ここで採集された土器は夜臼式・板付Ⅰ式（前期初）から城ノ越式（中期初）に至るものが含まれていて、長期にわたる大規模な墓地であったと考えられているが、長井遺跡の内容あるいは関連する集落遺跡はまだ不明である。次いで、昭和62年に国道10号線バイパス工事に伴って辻垣地区でヲサマル遺跡<sup>註2</sup>・畠田・長通遺跡<sup>註3</sup>が調査された。溝状遺構や流路からの出土であるが、比較的まとまった資料であると評価されている。これらの遺跡では「環濠」と呼ばれる溝状遺構や土坑などが検出されているが、住居跡や建物跡・貯蔵穴といった弥生前期に通有の遺構は見られなかった。辻垣地区は祓川右岸の標高10mほどの地点に位置し、先の長井遺跡、そして現河口からの直線距離は約3kmで



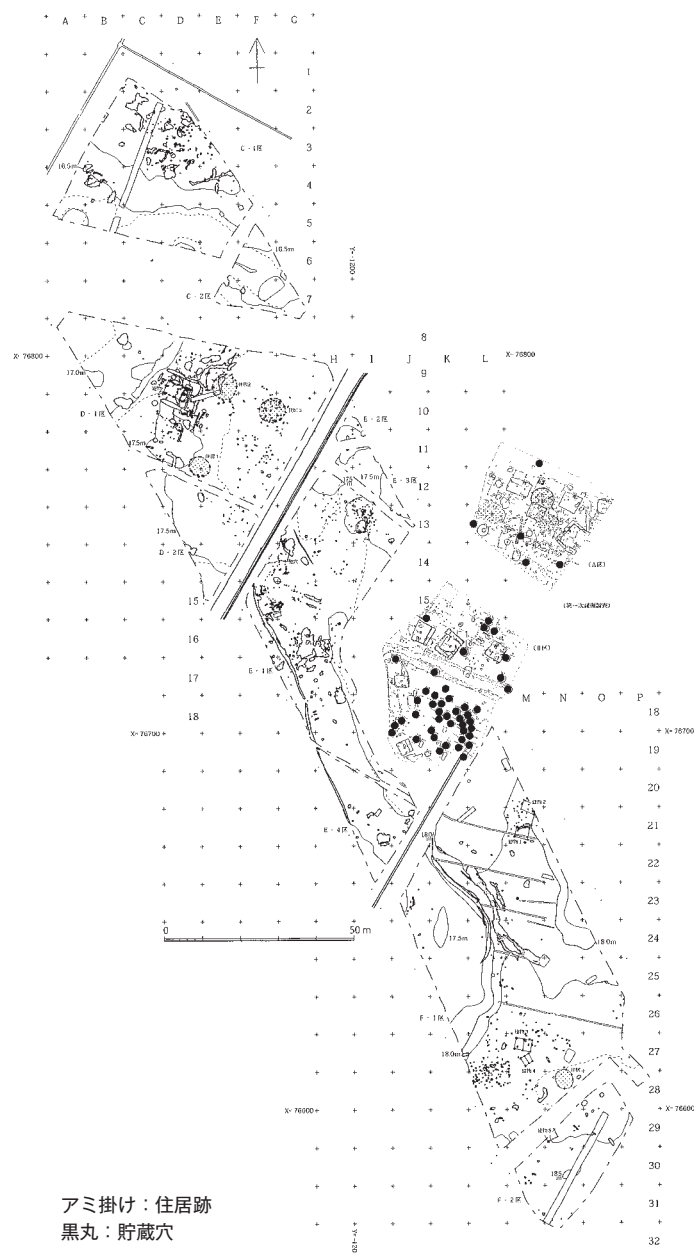
ある。この地域では、弥生文化は海からやってきたようである。

これらに続く遺跡が<sup>註4</sup> 菟田町葛川遺跡である。高城山塊南西端の丘陵先端に位置し、眼下に小波瀬川流域の湿地帯が広がる。最大幅2.6m、同深さ1.9mの断面V字形の溝が60×40mほどの規模の平面卵形をなして巡る、京都平野でもっとも古い確実な環濠遺跡で板付Ⅱ式の古い段階に位置付けられている。環濠の内外で27基の貯蔵穴が確認されているが、調査区内には同時期の竪穴住居跡はなかった。なお、葛川遺跡に先行する可能性のある環濠が今回の東九州自動車道の建設予定地で調査されている。今川右岸の河岸段丘端の<sup>註5</sup> 矢留堂ノ前遺跡で、詳細は26年度に報告の予定である。

みやこ町<sup>註5</sup> 神手遺跡は幅0.5～1m、深さ0.5～0.6mの断面V字形の弧状溝があって、その内部で19基の貯蔵穴が調査された前期後半の遺跡である。その後、「環濠」内に円形住居跡が存在するとの指摘がなされた。この遺跡は祓川右岸の段丘上にあり、辻垣地区から2.5kmほどを隔てるのみであり、両遺跡には系譜上の関連があるものと思われる。

前期後半～末には集落が拡散する。平野北部では菟田町法正寺木ノ坪<sup>註6</sup> 遺跡（現海岸線から7km、以下同）、西部ではみやこ町大久保明神<sup>註7</sup> 遺跡（12km）、南西部今川流域ではみやこ町犀川小学校校庭<sup>註8</sup> 遺跡（13km）、そしてさらに遡って田川郡赤村合田<sup>註9</sup> 遺跡（20km）まで達する。同じく南部祓川流域ではみやこ町タカデ<sup>註10</sup> 遺跡（15km）や、近年ではタカデ<sup>註10</sup> 遺跡のさらに南、みやこ町伊良原ダム建設予定地（20km）でも弥生前期土器が出土している。

市内下稗田遺跡は独立した低丘陵上に展開する遺跡で、33万㎡の広大な面積を調査して弥生時代前期～中期の円形竪穴住居跡127基、貯蔵穴1600基余りや墓域を調査した。しかし、ここには環濠はなく、住居跡と貯蔵穴は見かけ上混在する。一方、市内<sup>註11</sup> 鬼熊遺跡の中心部は、現状では水田中に浮かぶ比高差1mほどの畑地であった。第1次調査では円形住居跡のほか貯蔵穴とされる土坑57基が調査され、そのうちの40基近くが住居跡から離れて集中するというあ



第5図 行橋市鬼熊遺跡遺構配置図（1/2,000）

り方を見せた。第2次調査は東九州自動車道建設に伴ってその周辺で、第1次調査区を含む幅50m前後、延長340mを対象に実施した。そこでは、壁体が残らず、円形に配列された柱穴から想定した円形住居跡がほぼ全域で検出されたが、密度は非常に疎であった。一方、通常は住居跡よりも深い貯蔵穴がほとんど存在しない。これらを併せて考えると、集落の中心部付近に貯蔵穴群を集中配置した可能性が考えられ、葛川遺跡や下稗田遺跡のあり方などと比較して興味深い現象である。

中期前半の遺跡はほとんどが前期から継続するようである。既に前期の中から行橋平野のほぼ全域に集落が拡散していたこともあり、新たな展開は窺えない。ここでは、延永ヤヨミ園遺跡の西3kmほどに位置する下崎ヒガンデ遺跡<sup>註12</sup>を紹介しておこう。詳細は未報告であるが、弥生時代から中世にいたる各種の遺構が検出されていて、その中で弥生中期後半の遺構として7基の円形住居跡と38基の貯蔵穴などが検出されている。貯蔵穴の中、20基ほどが集中配置されていたが、その場所は集落のはずれ、谷の縁である。すなわち集落の最奥部に置かれていたといえる。ここでも鬼熊遺跡と同じように集落全体で貯蔵穴群を管理しようという意志が読み取れる。また、中期後半という時期に至っても貯蔵穴が主体となっていることも注目すべきであるかも知れないが、これは多分に遺跡の立地環境に由来するものであろう。遺構の性格上時期比定はやや困難であるが、築上郡上毛町桑野遺跡<sup>註13</sup>では中期前半には既に1×1間の倉庫群が集落の端に作られていたようで、そこでは深い大型の貯蔵穴は見られなかった。調査が梅雨の田植え時であったとはいえ、常時湧水・湛水するような土質であったことが、貯蔵穴を用いなかった理由の一つと思われる。

弥生時代中期は福岡市とその周辺で甕棺墓が盛行し、武器形青銅器や銅鏡などの威信財が副葬される時期であるが、周防灘沿岸では甕棺墓は日常容器を用いた小児棺のみで、青銅器も後期に至って小型銅鏡あるいは鏡片が用いられるだけであった。ところが、近年の大規模圃場整備事業に伴って思わぬところから青銅器がまとまって出土した。行橋市の南東、大分県境に近い福岡県豊前市鬼木四反田遺跡<sup>註14</sup>で銅鏡片が中期初頭の土坑から、中広形銅戈片が竪穴住居跡から出土、ほかにも銅鏃(土坑)、朝鮮半島製小型仿製鏡片(竪穴住居跡)が出土した。近接する鬼木鉾立遺跡では中広形銅矛の耳部が溝から、河原田塔田遺跡<sup>註15</sup>では土壙墓から細形銅戈片が出土したのである。前期～中期に限らず弥生時代の遺跡はそれまで行橋平野部が量的に多く知られていたし、大規模遺跡の調査が続いたこと、そして何より豊前市域は古墳が非常に少ないことや行橋平野部に古代寺院や国府跡などが位置することなども影響して、弥生時代も行橋平野部が優位にあると思われていたのであるが、内容という意味で豊前市域を含む山国川流域が存在感を示しつつある。

中期後半から後期に至っても、行橋平野とその周辺では遺跡は満遍なく分布し、小型鏡や鏡片を出土する墳墓が分散するが、特記すべきような規模・内容の遺跡はあまり知られていない。この延永ヤヨミ園遺跡は竪穴住居跡の数でいえば県内でも屈指の密度と規模をもつといえるが、その評価はすべての報告を終えるまで待ちたい。そのほかには鍛冶炉を伴い、吉備系の土器を出土した築上町安武深田遺跡<sup>註16</sup>、そして舶載鏡をはじめとする豊富な副葬品を出土したみやこ町川ノ上遺跡<sup>註17</sup>の墳墓群が特筆される遺跡といえよう。中・後期の環濠集落は未発見である。

一方、山国川流域でも国道バイパス・圃場整備事業によって多くの遺跡が調査されてきたが、中に注目すべき遺跡がある。築上郡上毛町大字下唐原では、平成元年に国道10号線豊前バイパス建設に先立って郷ヶ原遺跡<sup>註18</sup>が調査された。幅40m、延長180mに及ぶ調査区内で、70基近い竪穴住居跡と幅4m強の弧状溝などを検出した。弧状溝は深さ1.4mの断面V字形に近いものと同1m強の断面

U字形に近いものが重複することが複数の土層観察で認められた。出土遺物からそれぞれ弥生終末、後期前半頃に位置付けられるものと思われるが、集落は溝が埋められた後も継続していた。その後、周辺部で行われた調査からこの遺跡が東西400m、南北250mの大規模な環濠集落である可能性が指摘



第6図 上毛町下唐原遺跡群遺構配置図 (1/6,000)

された。<sup>註19</sup>そこでは複数の環濠が想定されていて、詳細は今後刊行される報告書によって明らかとなっていくことであろう。

この後期環濠集落の前身ともいってよい遺跡が下唐原地区の北西、段丘上の桑野地区で調査されている。牛頭天王遺跡<sup>註20</sup>・中桑野遺跡<sup>註21</sup>は前期後半から中期にいたる遺跡で、陸橋を伴う直線的な溝（環濠と思われる）や巨大な掘立柱建物跡などが見つかっている。また、これらと関連する遺跡と思われる大塚本遺跡<sup>註22</sup>では一辺長15m前後の墳丘に最大幅4mの周溝が巡る中期の方形墳丘墓と、列状に配された土壙墓群が検出された。墳丘墓は削平のために顕著な遺構・遺物が認められなかったが、特異な遺跡である。近年では青銅器を副葬する甕棺は区画墓、多くの場合は墳丘墓に小児棺とともに複数が埋葬されていて、列埋葬をなす大多数の甕棺とは区別されていたことが明らかとなっているが、同様の現象が甕棺墓盛行地帯から遠く離れたこの地域で見られることは注目される。

この山国川地域では、小型ながら初期の前方後円墳も存在している。<sup>註23</sup>5世紀代の墳墓は全くといってよほど知られておらず、6世紀後半代には爆発的に大小の古墳が築造され、やがて、垂水廃寺という古代寺院が建立された。弥生時代前期から古墳時代、さらに古代にかけての社会的変遷が辿れる数少ない地域といえる。一方、全長120m、10数面の三角縁神獣鏡など出土した京都郡苅田町の前方後円墳石塚山古墳の被葬者は、古墳の立地や内容からみて「派遣将軍」ともいわれる。また、行橋平野では5世紀代の小古墳から甲冑の出土が際立ち、前方後円墳も連綿と築造されるなど畿内色が濃い地域といわれていて、山国川流域とは好対照である。

註1 定村貢二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生式土器」(『九州考古学』25・26号、1965)

註2 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」(『一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993)

註3 福岡県教育委員会「辻垣畠田・長通遺跡」(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1994)

註4 苅田町教育委員会「葛川遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第3集、1984)

- 註5 福岡県教育委員会「神手遺跡」(『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 - 6 -、1992)  
福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡3」(『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 - 9 -、1997)
- 註6 荏田町教育委員会「黒添・法正寺地区遺跡群」(『荏田町文化財調査報告書』第6集、1987)
- 註7 みやこ町教育委員会「みやこ町内遺跡群Ⅲ」(『みやこ町文化財調査報告書』第4集、2009)所収
- 註8 昭和23年(1948)、小倉高校教諭田頭喬氏による調査。犀川町史編纂委員会『犀川町誌』1995に紹介されている。
- 註9 赤村教育委員会「合田遺跡」(『赤村文化財調査報告書』第1集、1985)
- 註10 犀川町教育委員会「城井遺跡群」(『犀川町文化財調査報告書』第4集、1994)
- 註11 行橋市教育委員会「鬼熊遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第27集、1999)  
行橋市教育委員会「鬼熊遺跡2 - 第2次発掘調査報告書 -」(『行橋市文化財調査報告書』第45集、2012)
- 註12 辛嶋智恵子「下崎ヒガンデ遺跡」(『行橋市史 資料編 原始・古代』2006)
- 註13 福岡県教育委員会「桑野遺跡 上の熊遺跡 小松原遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集下巻、1997)
- 註14 豊前市教育委員会「鬼木四反田遺跡(遺構編) 鳥越今井野遺跡」(『豊前市文化財報告書』第20集、2005)  
豊前市教育委員会「鬼木四反田遺跡(遺物編)」(『豊前市文化財報告書』第21集、2006)
- 註15 豊前市教育委員会「河原田塔田遺跡」(『豊前市文化財報告書』第19集、2004)
- 註16 福岡県教育委員会「安武深田遺跡」(『一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1991)
- 註17 福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4・7・9集、1995～1997)
- 註18 福岡県教育委員会「郷ヶ原遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第10集、1998)
- 註19 以下の報告書で遺構配置図が紹介されている。  
上毛町教育委員会「下唐原太郎丸遺跡」(『上毛町文化財調査報告書』第16集、2012)
- 註20 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)
- 註21 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集、1978)
- 註22 福岡県教育委員会「大塚本遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998)
- 註23 郷ヶ原遺跡の西北方の河岸段丘端に全長30mほどの能満寺古墳が所在、夔鳳鏡片・四獣鏡などが出土。同遺跡西の段丘端には全長60mほどの西方古墳が所在。未調査。  
大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)  
福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996)



第7図 延永ヤヨミ園遺跡周辺地形図 (1/6,000)

## Ⅲ．調査の内容

### 1．延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査概要

先述した「調査の経過」と一部が重複するが、1～7区と分けて調査を行ったⅠ区の概要を記す。

東九州自動車道建設にかかる吉国・延永地区の調査対象地は幅約60m、延長約400mに及ぶため、中央付近で立体交差する国土交通省所管の国道201号行橋インター線を挟んで北をⅡ区、南をⅠ区とした。Ⅱ区北端は旧県道直方行橋線が丘陵端を削り込んで敷設されているために比高差3～4mの崖となっている。旧県道の北は狭い畑地を挟んでさらに2mほど落ちて、小波瀬川流域に広がる水田となる。Ⅰ区南西部は山崎川という小河川に沿って対象地の中で最も低い標高5.0～5.4mの水田となるが、ここでも本来高位となっていた丘陵側では井戸・土坑・溝などが検出された（Ⅰ-4区）。

検出した遺構には竪穴住居跡・井戸・土坑・地下式土坑・土壙墓（弥生・中世）・溝や無数の柱穴がある。時代的には弥生時代終末期から古墳時代初頭・古墳時代後期・古代・中世に至る各時代の各種遺構があるが、今年度は竪穴住居跡の報告を行う。調査時に竪穴住居跡の支柱穴を直ちに判別できなかったこともあって、柱穴の遺構番号をおおむね通し番号とした結果、遺物を出土して番号を付した柱穴がⅠ-1区だけで900基近くなった。また、Ⅰ区の遺物総量はパンケース430箱に及び、整理作業を2ヶ年ほど前倒して実施したが、それでも他の事業との兼ね合い等もあってすべての出土遺物の水洗を終えていないのが実情である。今回は住居跡出土遺物の整理を最優先とし、柱穴からの遺物はほとんどが未整理であるため、この報告で支柱穴と判断した柱穴の遺物の紹介は次回報告に譲ることとする。

また、調査時には便宜上1～7区の中で、それぞれに「301号竪穴住居跡」、「701号土坑」のように遺構番号を付していたが、本報告にあたって、竪穴住居跡は基本的に南から北へ向かって番号を付け替えている。なお、注記等は調査時の番号で行っている。

#### Ⅰ-1区

調査区北東部に防火水槽があり、そのすぐ南に里道がある。地形図では畑への進入路のようにになっているが、地籍図では1・3区の間をそのまま直進して水田の手前で北西に向きを変えて水田と畑の間をたどる里道が記されている。この里道の中、北東-南西へ走る部分の南側の丘陵部（畑地）をⅠ区とした。耕作が放棄されてほぼ全面が荒地だったために、最初に着手した部分である。標高は6.7～7.7m（表土掘削前の現標高、以下同。）で、遺跡の乗る丘陵の西端となる。主たる遺構に矩形に囲繞する中世の区画溝の他、竪穴住居跡、弥生・中世の土壙墓などがある。

#### Ⅰ-2区

調査区北端近く、市道南西部で一番高い畑地を呼称した。標高は8.1～8.7mで、中世の掘立柱建物跡・土坑・地下式土坑・溝などがある。弥生・古墳時代の遺構は見られないが、市道を挟んだ北側（7区及び国土交通省所管部分）では該期の住居跡が濃密に検出されていることから、中世以前に削平されたのであろう。

#### Ⅰ-3区

1区の北西部、2区の南西部にあつて、現状の地形は1区に連続する標高6.7～7.0mの畑地である。2区との比高は1.5mほどあり、したがって3区北東半は大きく削平されて中近世の土坑数基

が検出されたのみである。これらの土坑が削平されてもなお残ったとは考えられないので削平の時期を推測できる。一方、南西半では非常に多くの土器を含む包含層が広がっていた。土器が多いために遺構が現れているものかと迷ったが、検出ができないために改めて重機を投入して掘り下げ、漸く各種遺構を確認した。主要な遺構は竪穴住居跡の他、大量の土器を出土した弥生終末～古墳初頭の方形周溝、古代～中世の井戸、中近世の溝・土坑などである。

I-4区

山崎川と丘陵の間に営まれた標高5～5.4mの水田部を呼称した。丘陵側は当然ながらしっかりした地山が現れて、古墳時代・古代～中世に属する井戸・土坑などが検出された。地山が落ちていく境界付近には小規模な溝が掘削されていて、その西（山崎川）側では遺構を確認できず、包含層が続く。ただ、南端付近では土器が集中する部分があり、何らかの祭祀行為が行われたようである。

I-5区

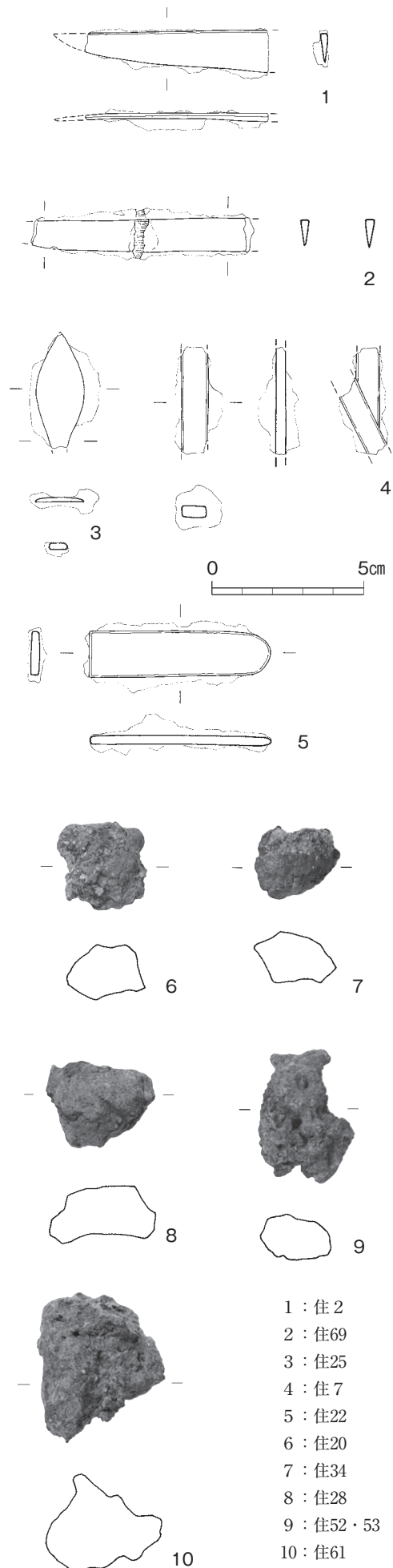
I-1区南端付近には中世の区画溝を踏襲したと思われる段があり、その南の畑地を呼称したものである。竪穴住居跡1軒、古墳後期の溝があるが、ほとんどが中世の遺構である。運河と思われる大型の溝が検出されている。

I-6区

2・3区の北西側は宅地化していて、調査着手が遅れたためにここを6区とした。なお、2・3区との境界付近に、重機の通行を想定して掘り残した部分があって、ここも6区と同時に調査を行ったために遺構番号が一部混乱した。北東半では竪穴住居跡の壁が残らないほどに削平されていたが、西半では包含層に覆われて多くの住居跡が検出された。主たる遺構は竪穴住居跡と中世の溝・地下式土坑などである。

I-7区

市道の北東側である。7区の北側隣接地は国土交通省所管の国道201号行橋インター線建設予定地となる。本来は宅地の庭先で、長く空き地であったが用地買収が遅れたため、最後の調査となった。ここでも竪穴住居跡が重複して検出された。



第8図 竪穴住居跡出土鉄製品等実測図 (1/2)

- 1 : 住2
- 2 : 住69
- 3 : 住25
- 4 : 住7
- 5 : 住22
- 6 : 住20
- 7 : 住34
- 8 : 住28
- 9 : 住52・53
- 10 : 住61

## 2. 竪穴住居跡

### 1号竪穴住居跡 (図版3、第10図)

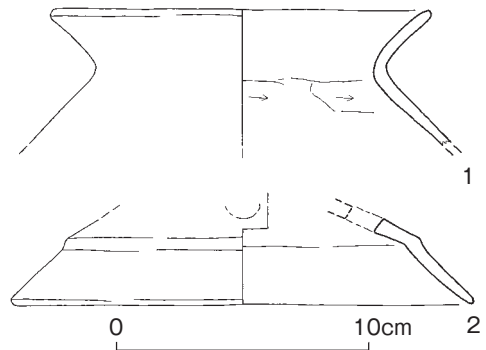
調査区内丘陵部南端付近に位置し、調査時には「501号竪穴住居跡」としていたものである。西に向かって下降する緩斜面に位置することもあるが、検出時から直ちに住居跡と認識していたものではなく、床面で炉跡と思われる焼けた部分を検出し、また土器が比較的まとまって出土したことなどから住居跡と判断した。住居跡と認識せずに掘り下げたために要領を得ない部分がある。

北西辺が弧を描き、南東辺が直線的となる変則的な平面形となるが、I区では他に例がなく、本来のものという確信はない。弧を描く立ち上がりの内側に南東辺と平行に近い直線的な浅い段があるが、これが本来の壁の痕跡であるかも知れない。

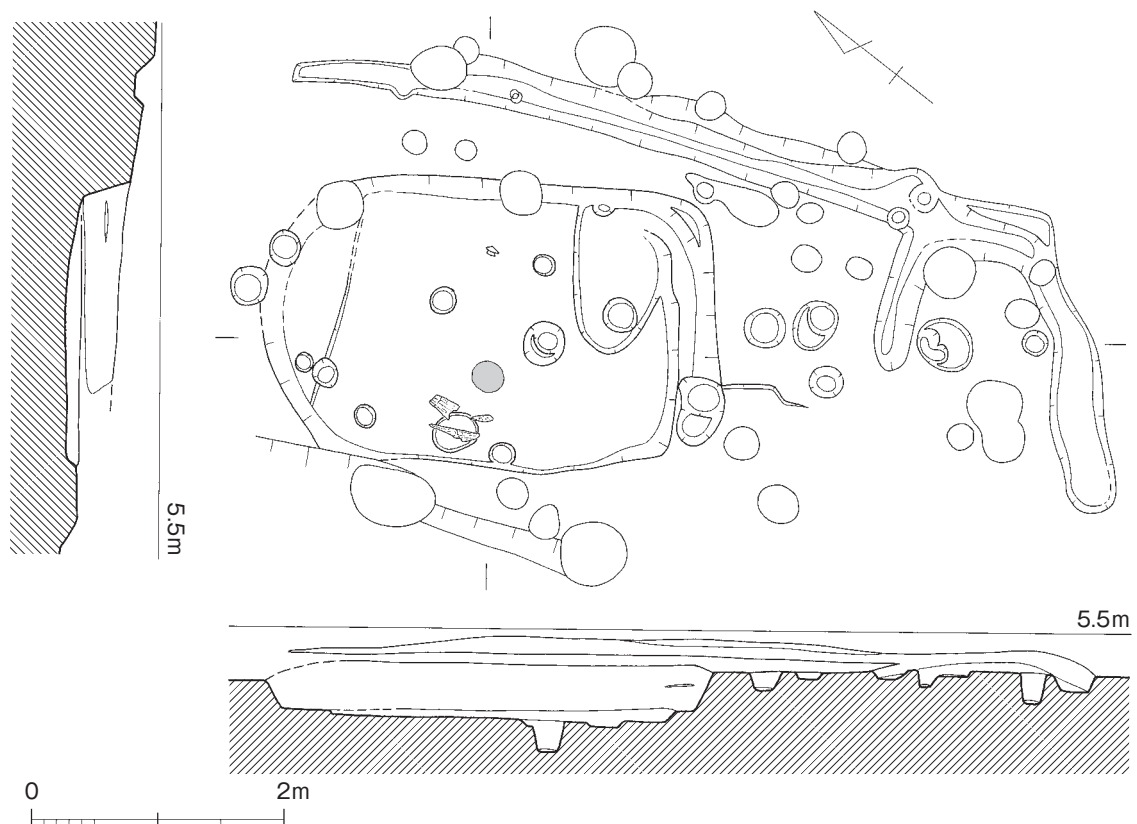
中央からやや西に偏して被熱赤変した部分があり、炉の痕跡と思われる。炉跡の南東に支柱穴と思われる柱穴があるが、対となる柱穴は発見できなかった。

### 出土遺物

土器 (第9図) 図示できるものは少ない。1は器表が荒れる甕小片。体部内面は篋削りで仕上げる。2は有段の高杯脚部で、屈曲部上に円孔が一部残存。小片で、器表が荒れて外面は煤けるようである。



第9図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第10図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



## 2号竪穴住居跡（図版3、第11図）

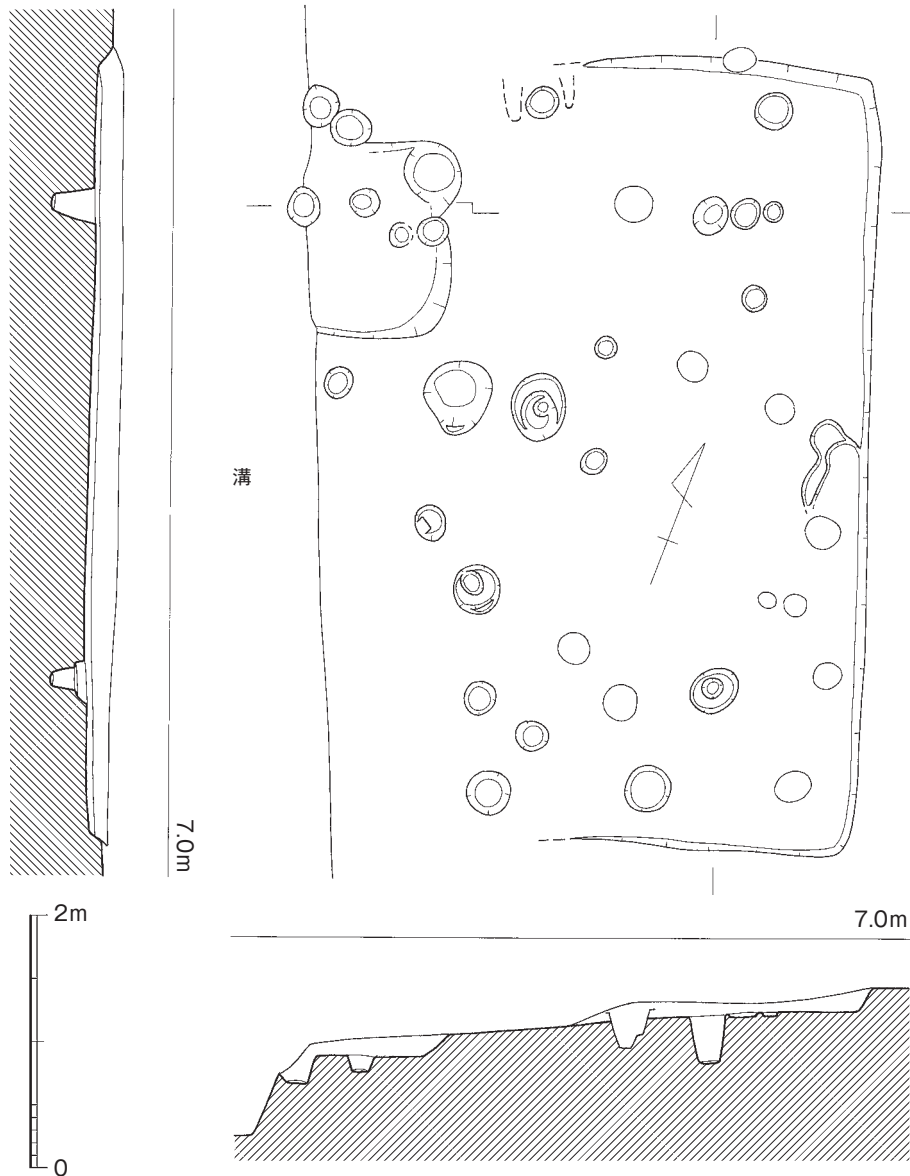
I-1区南半は中世の方形区画溝があり、その内部にも小規模な溝や無数の柱穴があるものの、明確な建物跡は把握できていない。その方形区画の南西寄りで検出した住居跡で、西半はすでに残っていないかった。この遺跡では住居跡として初めて発掘したこともあって、一部が残存していたカマドの袖を飛ばしてしまうとともに、赤変した火床も掘り下げたようである。

残存する北東辺の規模は約6.2mで、その付近の深さは約0.2mを測る。

### 出土遺物

鉄製品（図版44、第8図1） 残存長6cmの刀子片で、切先を欠く。出土位置は特定できていない。長さ2cmほどの茎かと思われる残片もある。

石製品（図版46・47、第146図1・8・第147図15） いずれも砥石である。第146図1は灰白色～黄白色を呈するが、図で縦方向に鮮やかな灰赤色となる部分が縞状に入る。石英斑岩製であろう。4面の使用面は非常に滑らかとなる。同8は南辺際で出土した大型砥石で、淡灰緑色を呈する粘板



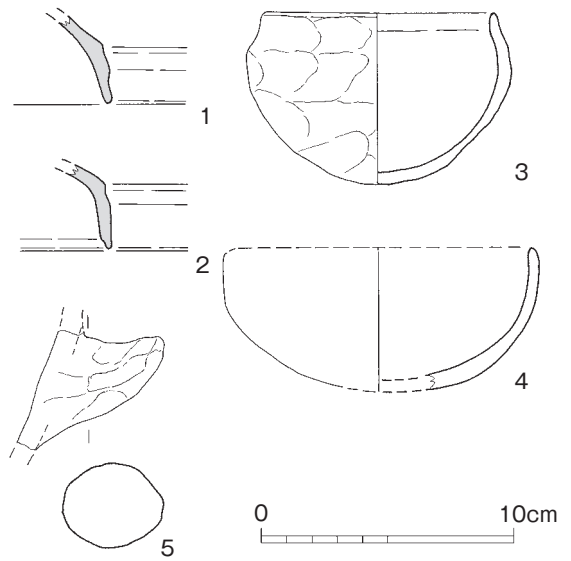
第11図 2号竪穴住居跡実測図（1/60）

岩製。主として3面を使用し、これも非常に滑らかとなる。ただ、面的に使用していない面にも条痕があって、部分的に使用されているようである。第147図15は大部分が暗褐色となる砂岩製で、使用面は非常に滑らかな浅い播り鉢状となる。図右側面も比較的滑らかで、使用されてるのかも知れない。

土器（図版33、第12図） これも出土遺物は少ない。

1・2は小片であるが須恵器ということで図示した。天井部・口縁部間の稜線はしっかりしていて、1の口端部は丸く終わるが、2では凹面をなす。

3～5は土師器。3はカマド付近から出土したもので、底部付近が完存、口縁部付近で1/3が残存する。二次的な熱を受けて赤く、あるいは黒く変色し、特に外面の器表が荒れている。丸底の鉢あるいは椀といった形状で図示したが、図で口縁部とした部分はあるいは欠損・摩滅したものであるかも知れない。4も半球形の鉢あるいは椀で、体部は1/2が残存するが口端部はほぼすべてを失う。これも器表が荒れていることもあって、口端部の形状には不安がある。5は甑把手で、これも器表が荒れる。



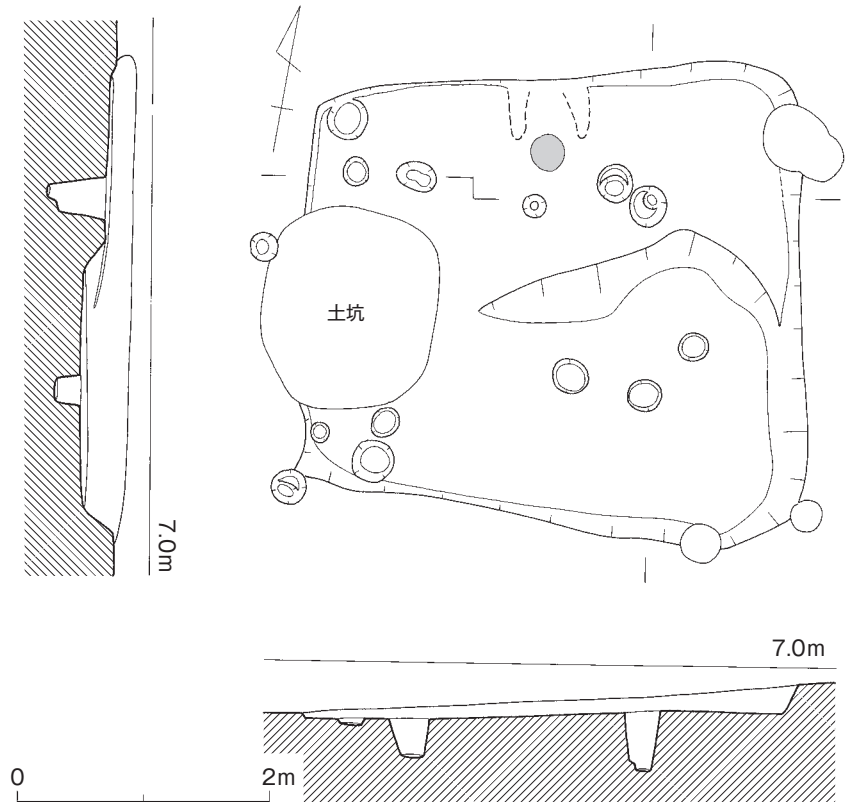
第12図 2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 3号竪穴住居跡

(図版3、第13図)

2号竪穴住居跡の北約6mに位置する。南北長3～3.8m、東西長4mほどの歪な平面形となるが、方形プランを意図したものであろう。深さは最大で0.3mほどとなる。これもカマドには気付かなかったが、北辺中央付近に被熱赤変する部分があり、カマドの火床を想定できる。

南半の不整形の落ち込みは、I区内で他に例がないことから発掘のミスであろう。

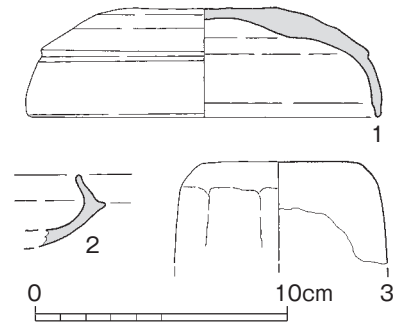


第13図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

## 出土遺物

土器（第14図） これも出土遺物は少ない。1はここに図示したが、注記には「J（住居跡）2・3付近」とあって帰属が曖昧なものである。天井部は完存し、口縁部付近は1/4が残存する。天井部・口縁部間にはしっかりした稜線を有し、口端部は内傾する面をもつ。天井部の回転鏡削り調整は雑で、焼け歪む。2は杯身小片。

3は土師器というよりは土製品といった方が相応しい。器表の仕上げは比較的丁寧で、あまり熱を受けた風ではないが支脚であろう。1/2ほどが残存していて、上面から見ると正円とはならず、面をとったように見える。



第14図 3号竪穴住居跡出土土器  
実測図（1/3）

## 4号竪穴住居跡（図版4・5、第15図）

3号竪穴住居跡の西側、3mほどの位置にあって、中世の方形区画に切られる。4.5×3.6mの長方形プランをもち、深さは最大で0.55mほどが残る。

北辺中央付近に炭・焼土が集中していたが、断ち割ってみると下位は灰黄褐色土の堆積で、炭・焼土は上部のみであった。その西隣には焼けて赤変した面を含む粘土塊が見られたが、これは破壊されたカマドの袖と思われる。ただし、火床・支脚の痕跡等は見られず、この場所にカマドが設置されたという確証は得られていない。

一方、この住居跡では南東隅付近でも南北1m強、東西0.5m強の不整な形で青灰色粘土の塊があり、倒立した甑が粘土に半ば埋もれて出土した。なお、甑の下位には焼土が堆積し、焼土の下位及び壁との間には白色粘土ブロックを交えた灰褐色粘土が観察された。また、この部分では甑の下に底部が押し潰された甕が正立し、その下には支脚状の石材が検出され、火床と思われる赤変した床面も確認している。I区では東辺にカマドが置かれた例はないが、V区（県道建設予定地）では東南隅付近に置かれたカマドの例がある。周辺から土器がまとまって出土したことも含めてこれがカマドと思われるが、発掘時に明瞭な袖は確認できなかった。

## 出土遺物

石製品（図版46、第146図2） 暗灰色～灰黒色となる粘板岩製砥石で、図に示した面と右側面が使用により非常に滑らかとなっている。また、左側面も部分的に使用されている。図背面は剥離面で、これもごく一部が使用されている。

土器（図版33、第16～18図） 良好な状態で土器が出土している。南東隅近くでは、住居跡内側に傾いて倒立した甑（29）が口縁部の一部が割れるものの、ほぼ完形の状態で出土した。口縁部の半分を甑で覆われるように、その下にはこれもほぼ完形の甕（28）がほぼ正立、その割れた底部の中に立った石が半ば入り込んでいた。調査時にはこの位置にカマドがあるとは全く思っておらず、支脚と思われる石材も正確な図化を怠っている。結果的には火床も確認したことから、ここが最終的なカマドの位置であると考えてよい。なお、伏せられた甑の中には割れた須恵器杯蓋が入っていた。また、この甑の下位及びその下の甕は大部分が粘土に覆われていた。また「北辺」と注記のあるものがある（3・20）。出土状態を図化していないので、「破壊されたカマド」から出土したものと思われる。



第15図 4号竖穴住居跡実測図 (1/30)

甌の北側では、ほぼ床面に接して須恵器杯身（5）や土師器椀類（8～13）、土師器高杯の杯部（19）が重ねて置かれていた。西側では土師器鉢（18）が伏せて置かれ、南には土師器鉢・甕（16・17・23）が伏せられ、あるいは横位で出土している。このように、甌の周辺に各種土器が集中していることも、本来のカマドがここにあったことを裏付けているのであろう。そのほか、甌から離れたところから出土した土師器甕などはほとんどが押し潰されていた。

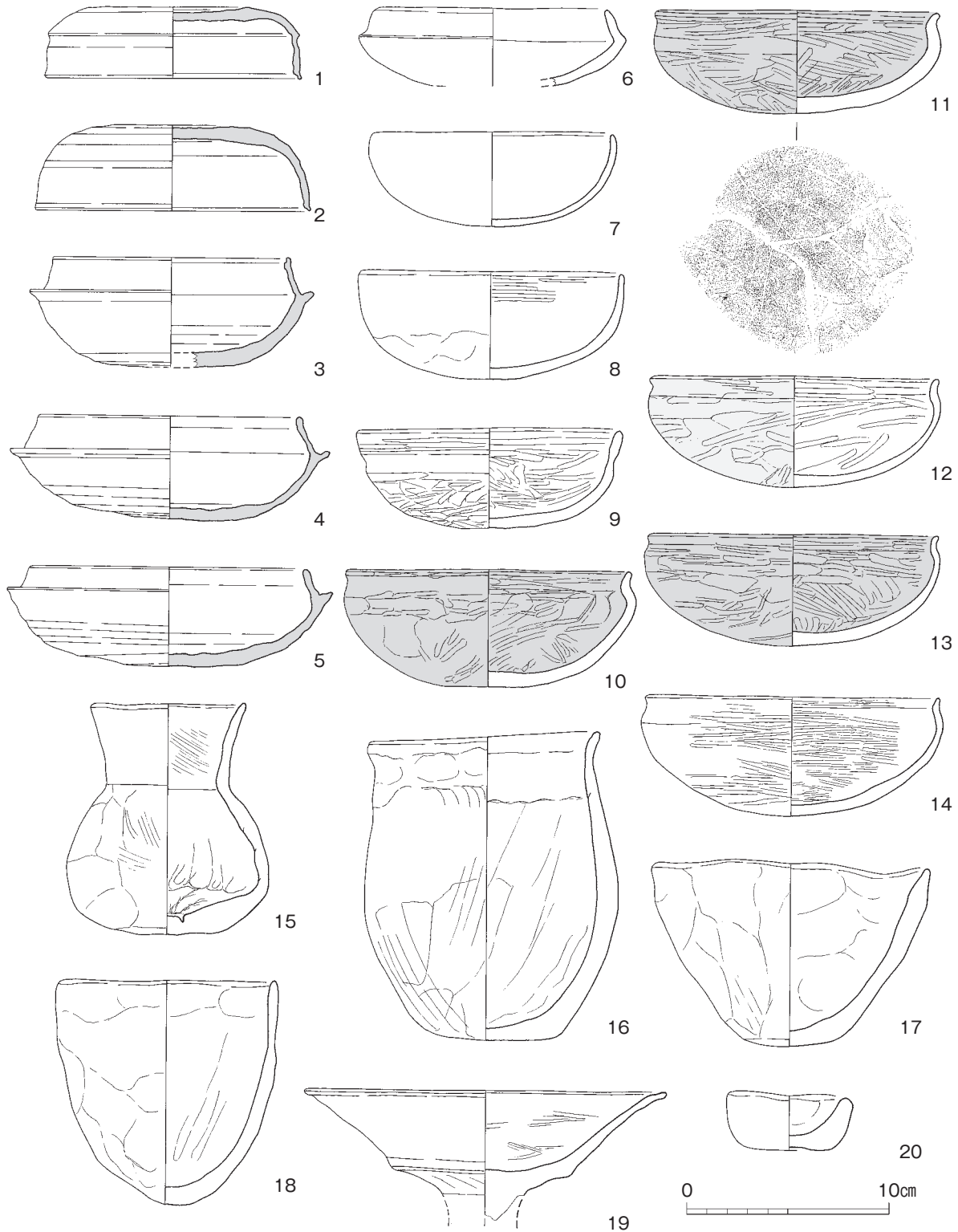
1～5は須恵器蓋杯。1は天井部がほぼ完存し、口縁部付近は1/4が残存する。天井部は焼け歪んで扁平化するが、口縁部との稜線はしっかりしていて、口端部内側の面も同様である。胎土は粗いといってよく、熔融した黒色粒が目立つ。2は天井部の1/2、口縁部付近の1/4が残存。天井部・口縁部界は甘い凹線で画する。口端部は小さいがしっかりした面を作っている。調整は丁寧になさされていて、天井部外面に「×」のような弱い篋記号が見える。3は体部の1/3が残存、口端部の面も含めて丁寧に作られている。4は体部がほぼ完存するが、口縁部は1/4ほどが残存するのみである。口端部は面をもたないものの、小さく屈曲させて区別している。胎土粗く、調整も雑である。5はほぼ完存し、これは口端部を丸く収めている。これも黒色粒が目立ち、胎土・造作ともに雑である。

6以下は土師器で、6～14は椀類である。6は杯とすべきか、須恵器の器形を模倣したものである。胎土良好で調整は丁寧になされるが、焼けて赤変する。これは支脚に据えられた28の下付近から出土した1/4の破片である。7・8は底部から口縁部にかけて丸く移行し、口縁部に変化を加えない椀である。7は1/4の残片で、焼けて器表が荒れている。8は完存するが、これも熱を受けて赤くなった部分は器表が剥離する。本来は全面が黒色であったようである。9は以下で紹介する椀と口縁部の形状が異なっていて、6とセットとなる蓋である可能性もあるが、出土時に椀と重ねて置かれていたこともあってここでは椀としておく。胎土精良で、非常に丁寧に作られている。外底面では篋削りを施した後に全面を篋磨きで覆い、内面も丁寧に篋磨きで仕上げる。灰黄褐色を呈し、完存する。10～14は口縁部を小さく外彎させる椀で、10・11・13は内外面を黒色とし、12では外面を赤色とする。10・11はほぼ完存。口縁部を小さく、強く外彎させる形状も含めてよく似た土器である。胎土・作りともに良好で、外底面には篋削りの際の面が観察できるとともに繊細な篋記号が刻まれる。内外面全体を篋磨きで仕上げる。12もほぼ完形、13は1/2の残片であるが、この両者も口縁部の外彎が弱く、胎土精良で丁寧に調整されるなどの点でよく似ている。ただ、12は外面には赤色顔料が多く残るが、13では内外面を黒塗りにする。器面の調整手法は10と同じである。14も12・13とよく似た形状であるが、体部が深くなる。ほぼ完形で胎土精良、内外面の全面を篋磨きで仕上げる。

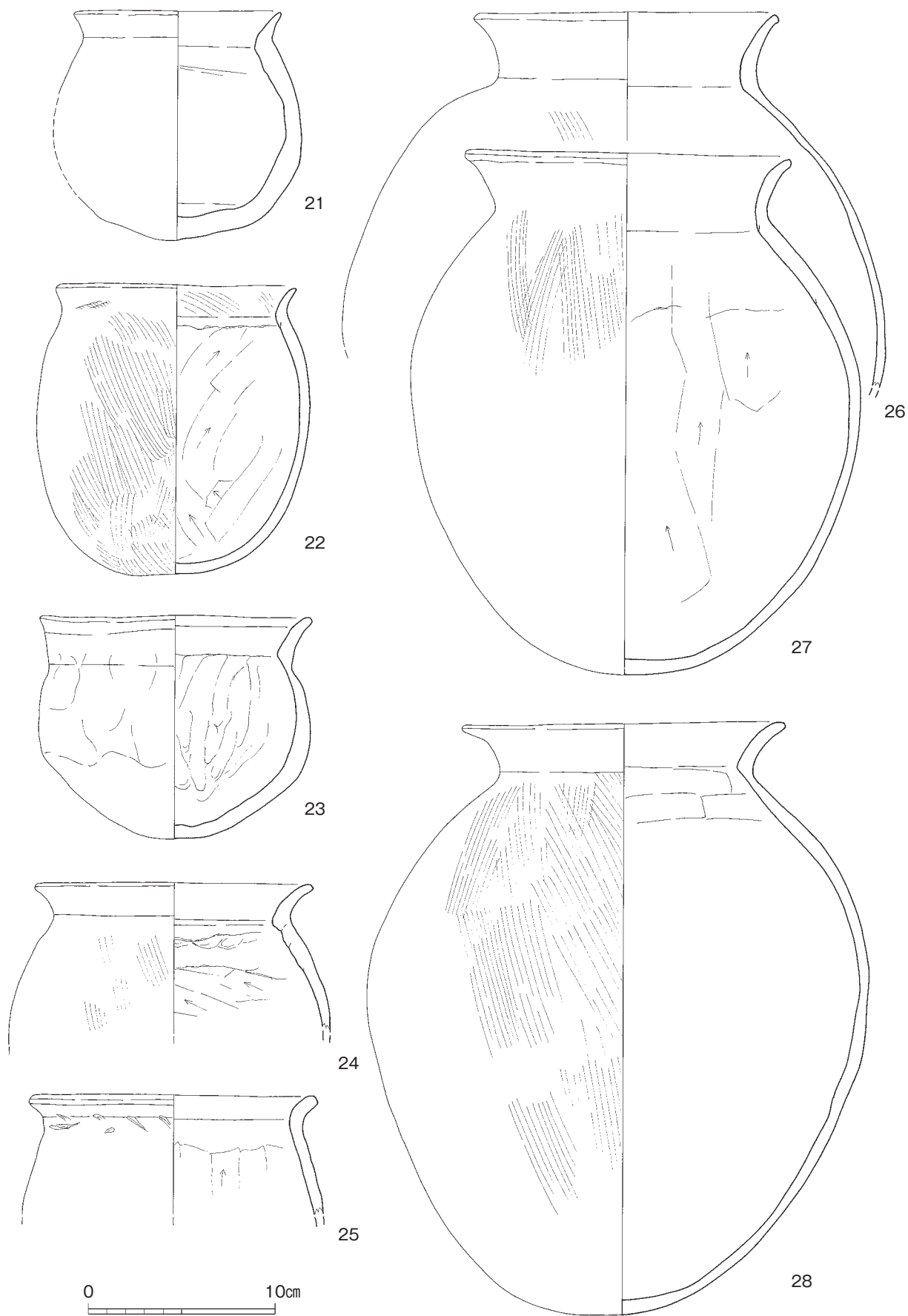
15～20は甕以外の小型の土師器を図示した。15は直口壺で体部はほぼ完形、口頸部は1/3が残存する。手捏ねで作られたようであるが、体部には部分的に刷毛目が使用されている。なお、底部は平底となり、内面には絞り痕が残る。16は完形で、甕と呼ぶべきであろうが口縁部の外反が非常に弱い。外面では頸部に指頭痕、その下位にごく疎らな刷毛目が見える。また、体部外面下半では型押しで整形したような弱い面が観察できる。内面は篋削りで仕上げるが、黒色の付着物が多く残る。17は手捏ねの鉢で、外面は一部に刷毛目が見える。口縁部は波打ち、内面には液体が溜まったような形状で暗茶褐色に変色した部分がある。18は丸底砲弾形の鉢で、ほぼ完存。外面は焼けて器表が荒れていて調整痕は不明、内面もはっきりしないが篋削りのようである。19はほぼ完存する高杯杯部で、出土状態から推してこの形状で椀類として使用されていたのであろう。口縁部は直線的に延びるが、口端部付近はやや開いて内面を弱く匙面状に造作する。底部との間の稜線は甘い。丁寧に

作られた土器であるが、器表が荒れている。20は1/2が残存する手捏ね小型土器。胎土精良で、これも丁寧に作られている。

21～28は甕として報告しておく。21～24はいずれも短く高く外反する口縁部をもつ。21は体部上半と底部付近が接合しないが、図上復元した。体部が肉厚で、口縁部は薄くなって終わる。外面

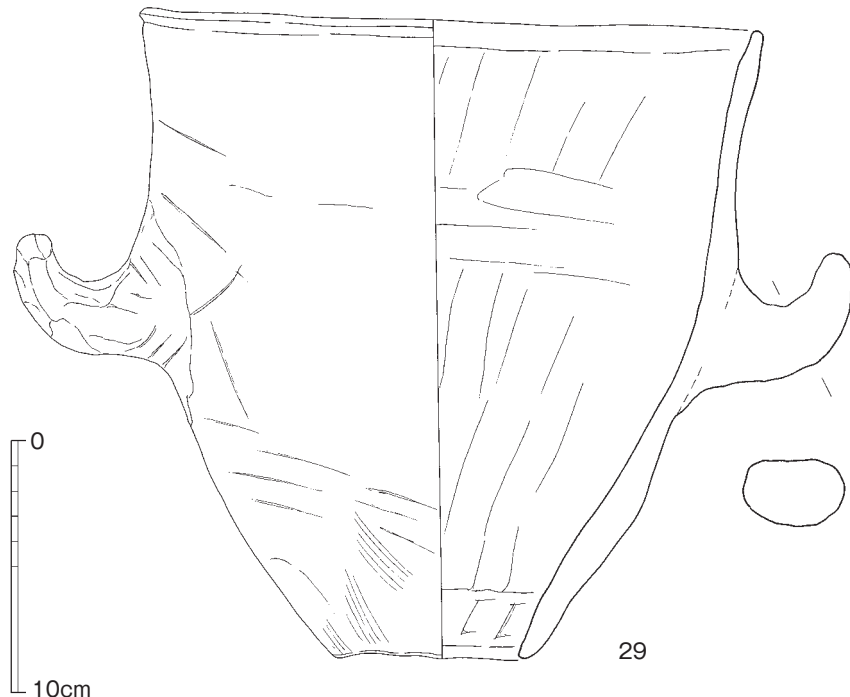


第16図 4号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第17图 4号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)

は焼けて器表が非常に荒れているが、体部内面は篋削りが見える。22はほぼ完存するが、これも焼けて外面が荒れている。内面では底部付近が灰褐色、それ以上頸部までが黒褐色に変色している。23も完存するが、口縁部は波打ち、体部は歪んでいる。体部内面では篋削りの後に幅広い篋磨き状の調整を施した痕が残る。また、体部外面では底部付近が黒褐色、体部上半が焼けて赤変、頸部付近から上部が暗褐色



第18図 4号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

となり、火にかけられていたことがわかる。24は口縁部の一部を欠くほかは図示した部分がほぼ残存する。これも体部外面は焼けて赤変して器表が荒れるとともに、内面には頸部以下に焦げ付きが残る。25は1/4ほどの残片で器表が荒れているが、体部外面は粗い刷毛目を施すようである。26は口頸部の3/4ほどが残存する。体部は外面を刷毛目、内面を篋削りで仕上げる。27は体部がほぼ完存する。口端部外面が煤けて黒色となり、外底面付近は焼けて大部分の器表が剥離している。28もほぼ完存し、口径17.2cm、器高は31.5cmを測る。これも火を受けて器表が荒れる。

29はほぼ完存する甑で、胎土粗く作りも粗雑である。口端部を小さく外反させる部分があるが、完周しないことから意図的なものではないようである。

### 5号竪穴住居跡 (図版5、第19・20 図)

3号竪穴住居跡の北3mほどの場所に辺を揃えるようにして位置する。これも西辺はすでに失われていて、規模が分かる東辺の長さは約4.5mを測る。深さは0.2mほどである。

カマドを破壊するように小規模な中世溝が走り、また同様に中世の埋甕が掘り込まれていた。支柱穴のうち、南東部は大型の柱穴が相応しいが、これは埋土中で検出したものであるために除外している。

カマド袖は砂粒を多く混ぜた青灰色粘土を使用し、内部には土師器高杯を倒立させた支脚が残存していた。火床の痕跡は支脚のすぐ南に残るが、レベルは高杯杯部・脚部の境付近にあたる。

### 出土遺物

石製品 (図版46、第146図4・7) 5・10号竪穴住居跡の検出作業中に出土した砥石で、いずれの住居に伴うものか確認できていないが、ここで紹介しておく。4は灰色の粘板岩製で、図に示した面は黒色化する箇所があり、背面は赤みを帯びる。図上面・右側面・背面が特に磨られていて、



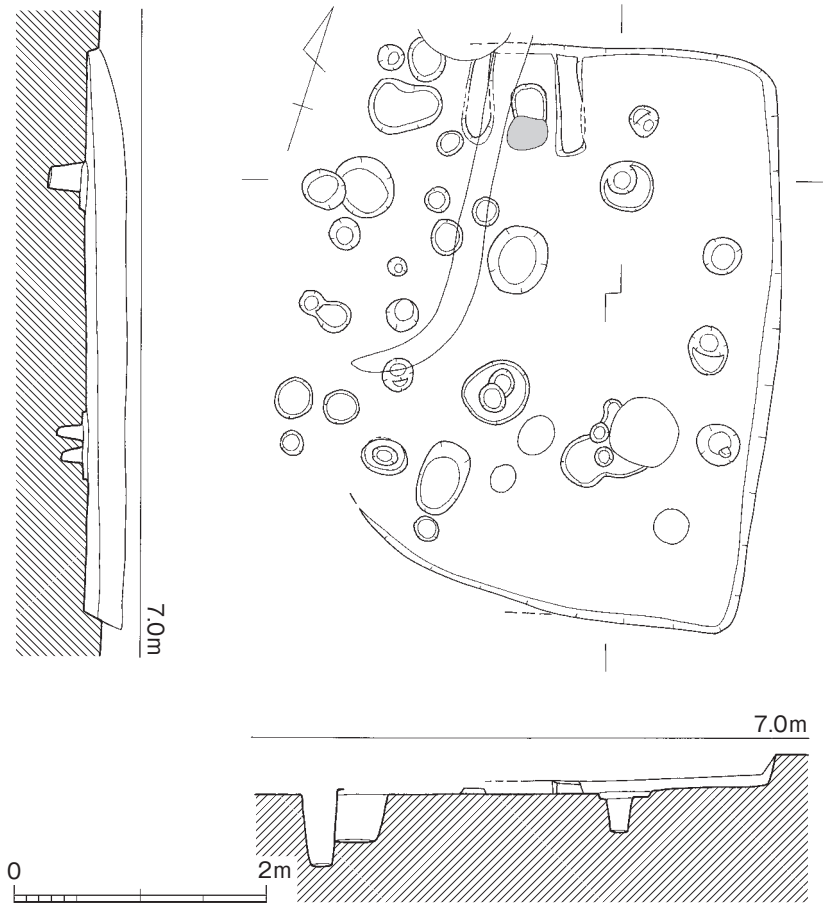
平滑化していない左側面も部分的に滑らかとなっている。7も粘板岩製砥石であるが、小片。使用面がわずかに残る。

土器（図版34、第21・22図）

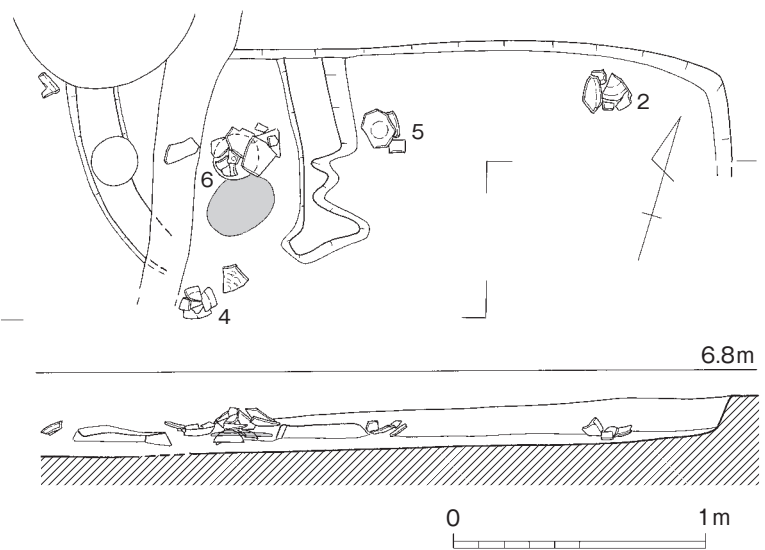
1・2は須恵器蓋杯で、2は住居跡北東隅付近から出土したものである。1は小片であるが、胎土精良で丁寧に作られている。2はほぼ完存。口端部に内傾する面をもち、外底面の篋削りは丁寧になされる。胎土に黒色粒が目立つ。

3～6は土師器。3は口縁部をわずかに外反させる半球形の椀で、焼けて器表が荒れる。4はカマド前面から出土した椀で、これも焼けて器表が荒れるとともに、細片化している。5はカマド右袖の東から出土した椀で、口縁部の1/3ほどが残存する。口縁部を小さく外反させ、その付近は横撫でを施し、最大径付近から下位は篋削りの後に丁寧に篋磨きを行う。内面の調整痕はよく見えないが、撫でのようなものである。6はカマド内に倒置して支脚として使用された高杯で、全体に焼けて赤変し、器表が荒れる。杯部には稜線などはなく、緩く曲線を描いて立ち上がり、口縁部はわずかに開く。脚部上半は中実で、脚端部の開きが小さい。

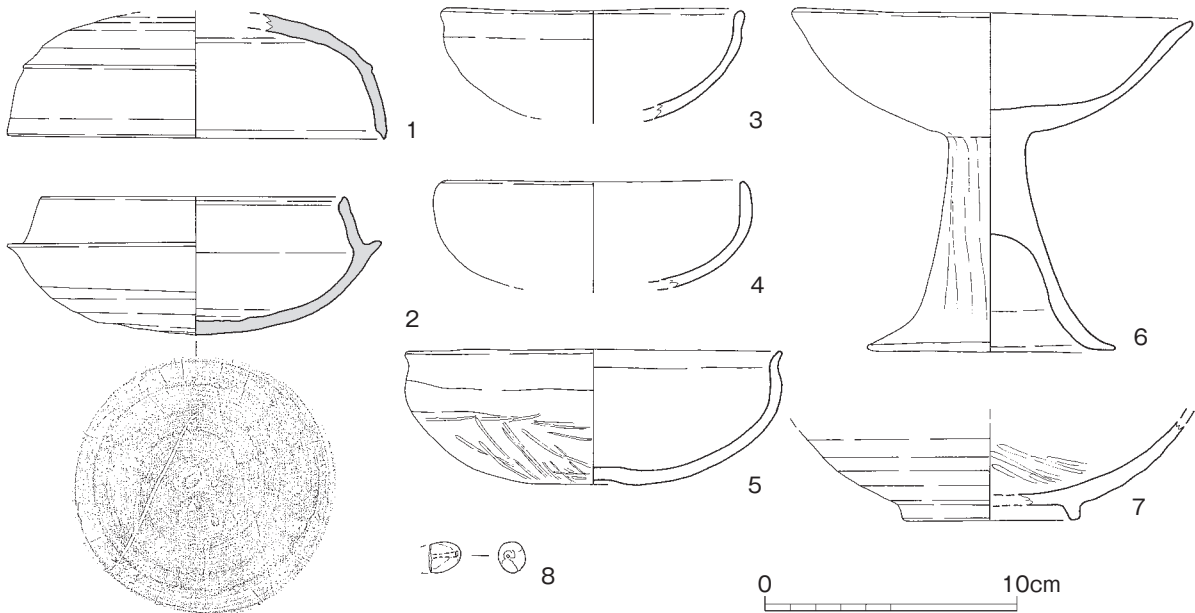
7は灰黄白色を呈する中世土師器椀で、混入したものであろう。しっかりした高台を



第19図 5号竪穴住居跡実測図（1/60）



第20図 5号竪穴住居跡カマド周辺実測図（1/30）



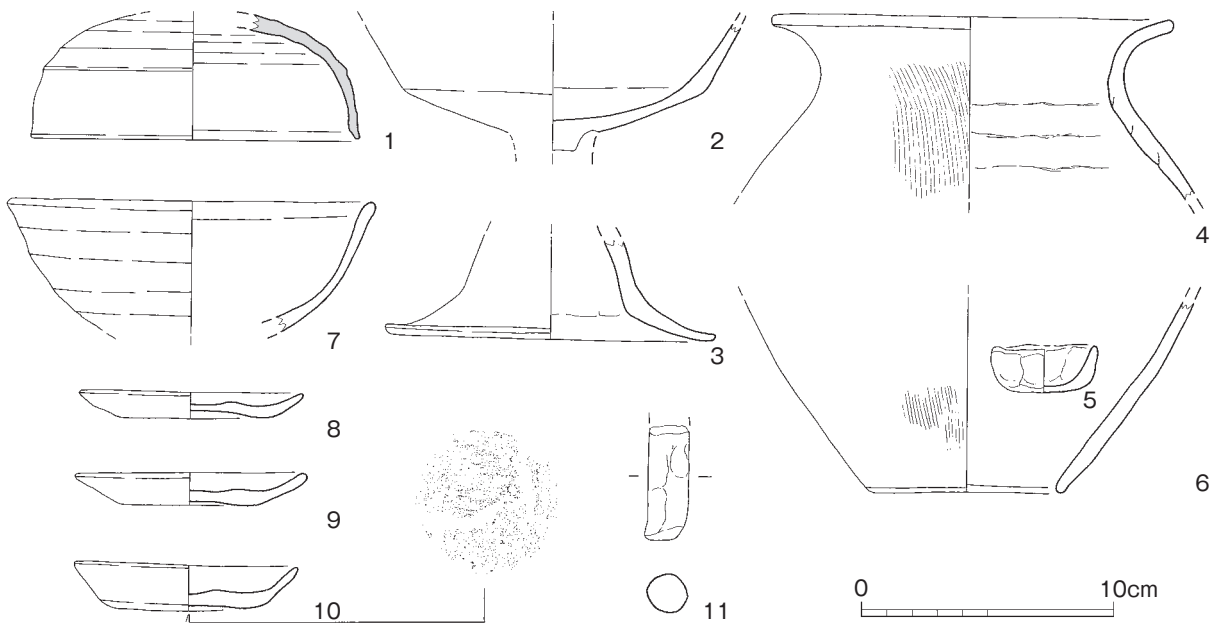
第21図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

もち、体部外面には水挽き痕が目立つ。体部内面は丁寧な篋磨きで仕上げる。

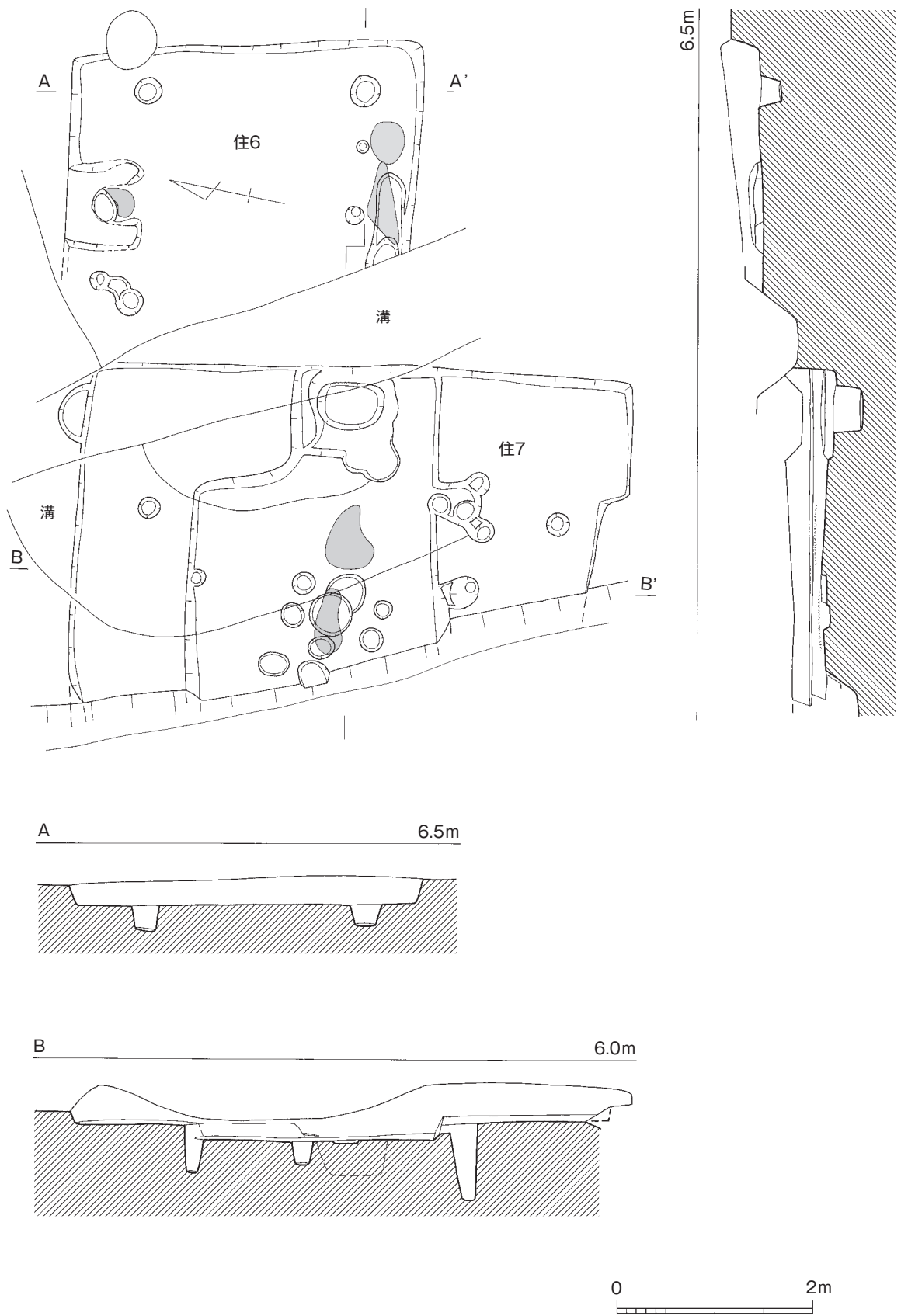
8は2の須恵器と同じ注記があるので、その付近から出土したものであろう。残存部の最大径は1.2cmほどで、直径1mmの非常に小さな孔が貫通する。胎土はおおむね良好だが、焼けて赤変する土製品。

第22図は5号竪穴住居跡付近の遺構検出時に出土した土器である。明らかにこの遺構に伴うものでないものもあるが、ここで紹介しておく。なお、注記は「J(住居跡)6・7上層」としてある。

1は須恵器杯蓋片で、1/4ほどの残片。天井部・口縁部界の稜線はしっかりしていて、胎土はセピア色となる。2は高杯片で、器表が荒れている。3は高杯脚部で、これは赤く焼き上がるようである。これも器表が荒れている。4は甕の小片で、これも器表が荒れる。5は手捏ね土器。6は1/2が残存する、器表が荒れる甑である。



第22図 5号竪穴住居跡付近遺構検出時出土土器実測図 (1/3)



第23図 6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7は灰白色となる土師器碗で、1/4が残存する。体部は丸く立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。8～10は小皿で、いずれも底部は完存あるいはそれに近い。8は胎土精良だが器表がとても荒れている。9も胎土精良で、これは外底面に回転糸切り痕が残る。10は前2点と異なって器高が高い。これは外底面に回転糸切り痕とスダレ状圧痕が残る。

11は土師器の棒状土製品で、下端がわずかに曲がることから脚端であるかも知れない。微砂粒が器表に多く浮くが、おおむね胎土良好といってもよい。

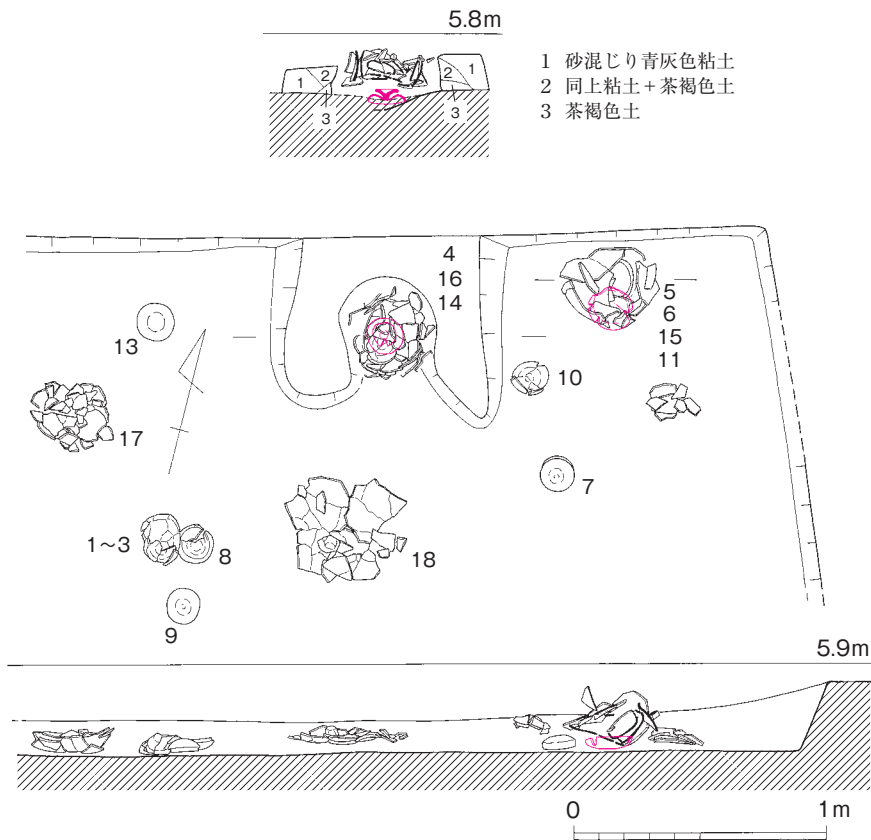
### 6号竪穴住居跡 (図版6・7、第23・24図)

4号竪穴住居跡の西5mほどの場所に、これも辺を揃えるようにして位置する。北西隅付近から西辺は中世の方形区画溝によって破壊されている。東辺で測った南北長は3.6m、深さは同所で0.4mほどであった。

北辺に接してカマドが設置され、検出時から中央部に押し潰されて細片化した甕が見えていた。その甕を除去したところ、支脚として使用された土師器高杯がやはり押し潰されていた。カマド袖は主として砂粒を交えた青灰色粘土を使用し、I区で検出したカマドでは珍しく袖内側の一部が赤変硬化していた。また、南辺近くでも袖と同様の粘土塊が0.1～0.15mの厚さで残存していたが、この意味はわからない。

### 出土遺物

土器 (図版34・35、第25・26図) カマド内では上記したように支脚として使用した高杯の上に細片化した土師器甕 (16) が置かれ、さらにその中に須恵器杯蓋 (4) が伏せ置かれていた。これは甕を割ってカマド内に詰め込む際に、須恵器杯蓋を納める空間を作り出したものと思われる。なお、

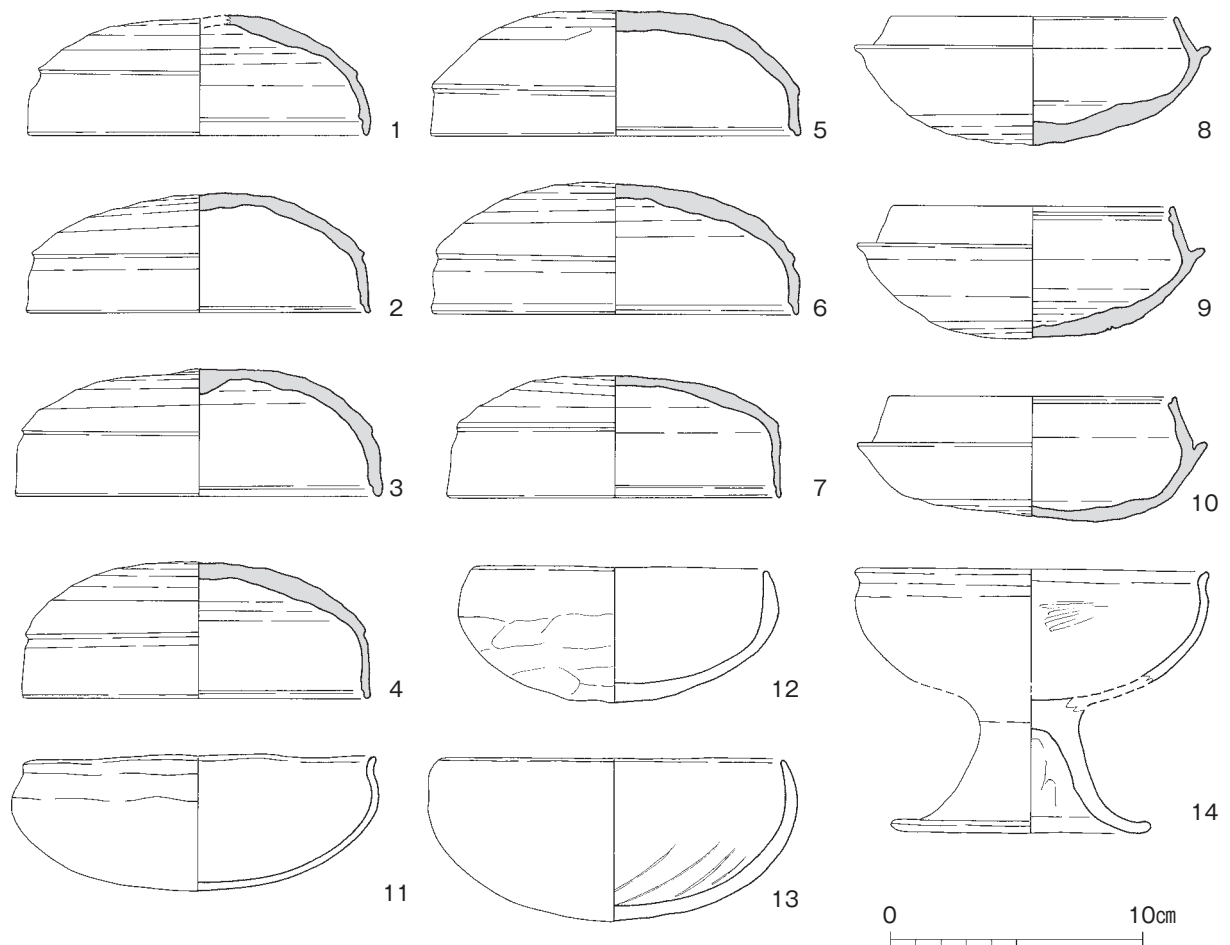


第24図 6号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30)

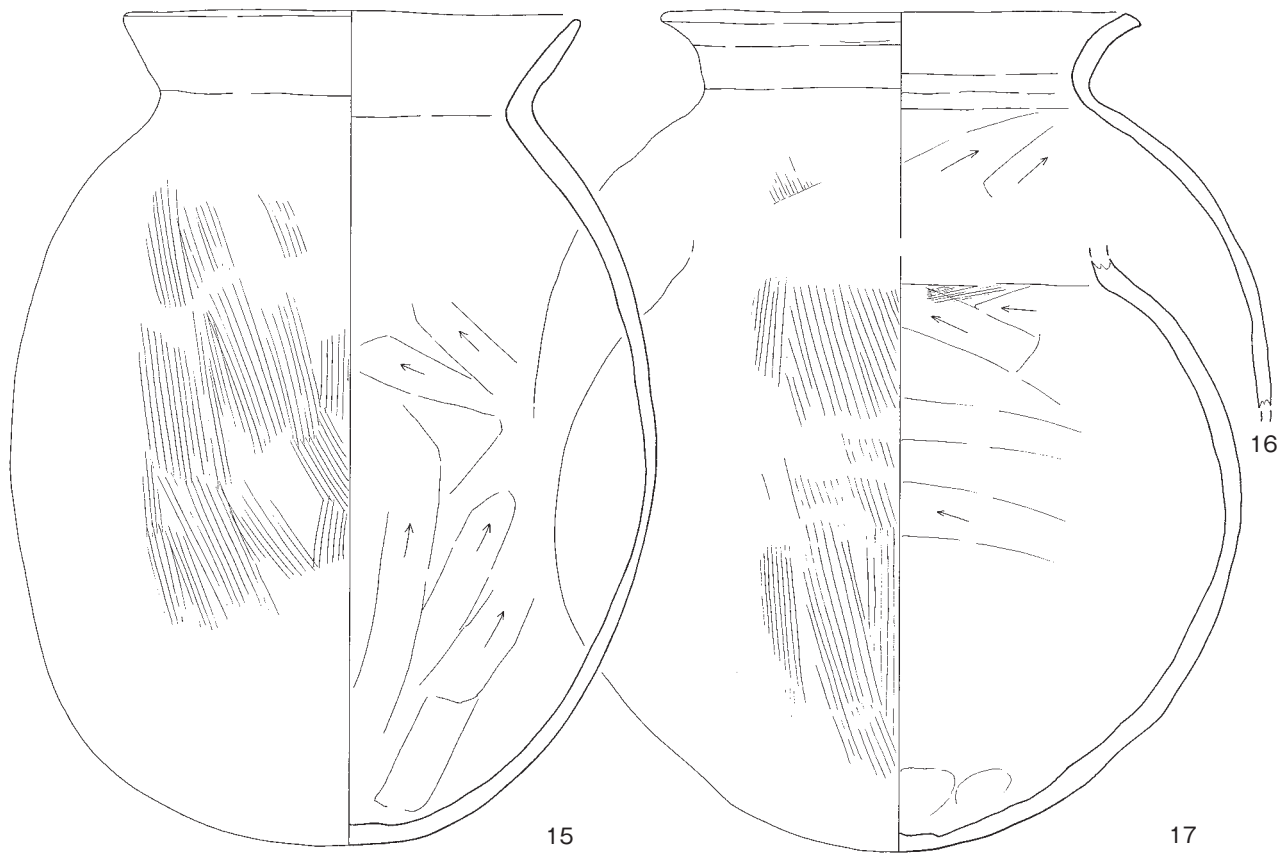
この甕の下半部は接合し得ないので図化していない。カマド右（北東）側では須恵器杯蓋2点（7・10）がやや距離を置いて単独で伏せて、また壁際には土師器甕（15）が置かれていた。この甕の中には須恵器杯蓋2点（5・6）が重なって、内面を上に向けて置かれていた。また、甕を除去すると、その下に土師器椀（11）が正立して置かれていた。

カマド左側では、土師器椀（13）が伏せて置かれ、土師器甕（17）が潰れた状態でそれぞれ出土した。カマド前面では甌（18）が潰れた状態で、その西側でまとまった須恵器蓋杯（1～3・8・9）が出土した。1～3の杯蓋は3が一番下になり、1が最上部となって重ねて伏せられていた。これらの東側に接して8の杯身が正置される。これらの南側、0.1mの距離をおいて杯身（9）が伏せられていたが、特に小型の土器類については、使用時は4号竪穴住居跡のように重ねてまとめておくのが一般的であると思われ、本例のように甕の中に入れてたり、分散して配置するということにはどのような意図があったものか、興味深い。

1～10は須恵器蓋杯で、1を除いて完存もしくはそれに近く、いずれも調整等は丁寧になされている。1は1/2が残存し、天井部・口縁部界の稜線はシャープである。胎土に黒色粒が目立ち、焼け歪む。2・3は全体に器肉が厚くなる。4は焼成が甘く、天井部付近が部分的に灰白色となっている。5は内外面に灰を被り、これも黒色粒が目立つ。口縁部は折り曲げたような形状となり、天井部との境に稜線や沈線はない。7も胎土に黒色粒が目立つ。これは器肉が薄く、天井部内面に茶褐色の付着物が残る。これらの杯蓋の法量は口径13.2～14.6cm、器高4.7～5.4cmである。

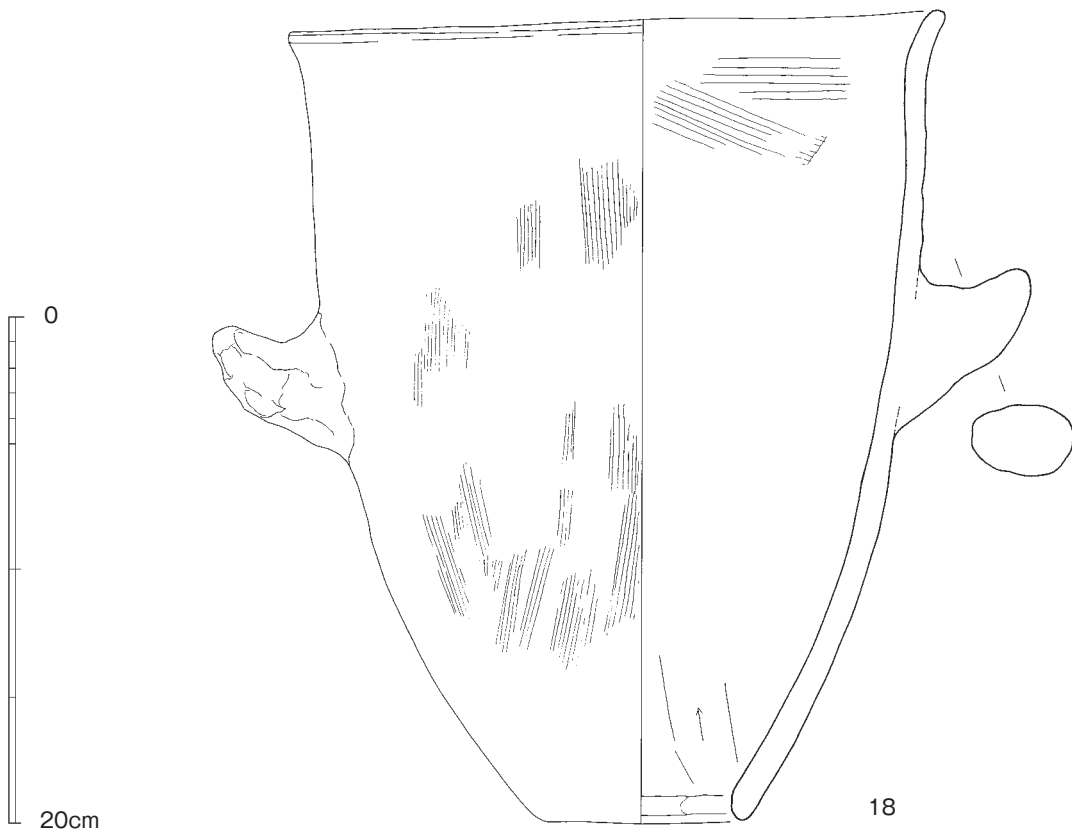


第25図 6号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



15

17



18

第26图 6号竖穴住居跡出土土器実測图2 (1/3)

杯蓋（8～10）は口径11.2～11.4cm、器高5.0～5.2cmとほぼ同じ法量となるが、8は口端部に変化を加えず、9では内面に沈線を刻み、10は内傾する面をつけるなど微妙に異なっている。10は胎土中の黒色粒が目立つ。

11は口端部を小さく外反させる椀で、焼けて器表が荒れ、口縁部付近の内面が黒色化している。胎土に直径2mmほどの石英粒が目立つ。12・13は口縁部にあまり変化を加えない椀。12は口縁部下を肥厚させ、本来灰赤褐色であったようだが口縁部の一部は非常に赤変している。内面に黒色の付着物が見える。13は完形。外底面に煤が付着し、煤のない部分はすべて器表が剥離している。内底面にシャープな4本の平行線が刻まれている。

14は椀形の杯部をもつ高杯で、これは図上復元したもの。胎土精良で、丁寧に作られているようだが、焼かれて非常に荒れている。

15～17は甕。15はほぼ完存。底部付近が非常によく焼かれていて赤変するとともに、対応する内面は黒色化する。16は口縁部が強く外反する。17とともに外表の剥離が甚だしい。

18はほぼ完存する甕。口縁部を弱く外反させるほかは変化に乏しい。これも器表が荒れる。

## 7号竪穴住居跡（図版7、第23図）

6号竪穴住居跡に切られる位置にあるが、重複部分を中世区画溝が走る。また、西側は既に削平されている。南北長は5.2mほどであるが、南辺東端部が0.3mほど張り出している。現状では検出面からベッド状遺構までの深さが0.15～0.2mほどなので、本来的には出入口として階段状の施設があったことも想定できる。一方、東辺に接して、形状のしっかりしたいわゆる屋内土坑が設置されているが、外周が浅く掘り込まれていることを考えれば蓋で覆われていた可能性がある。

ベッド状遺構は南辺、北辺に平行して設置されるが、対称形とならない。また、これは地山削り出しである。主柱穴は断面に示した2本であろう。通常はベッドに接するように設置されるのであるが、南側のそれはベッドに食い込んでいる。

## 出土遺物

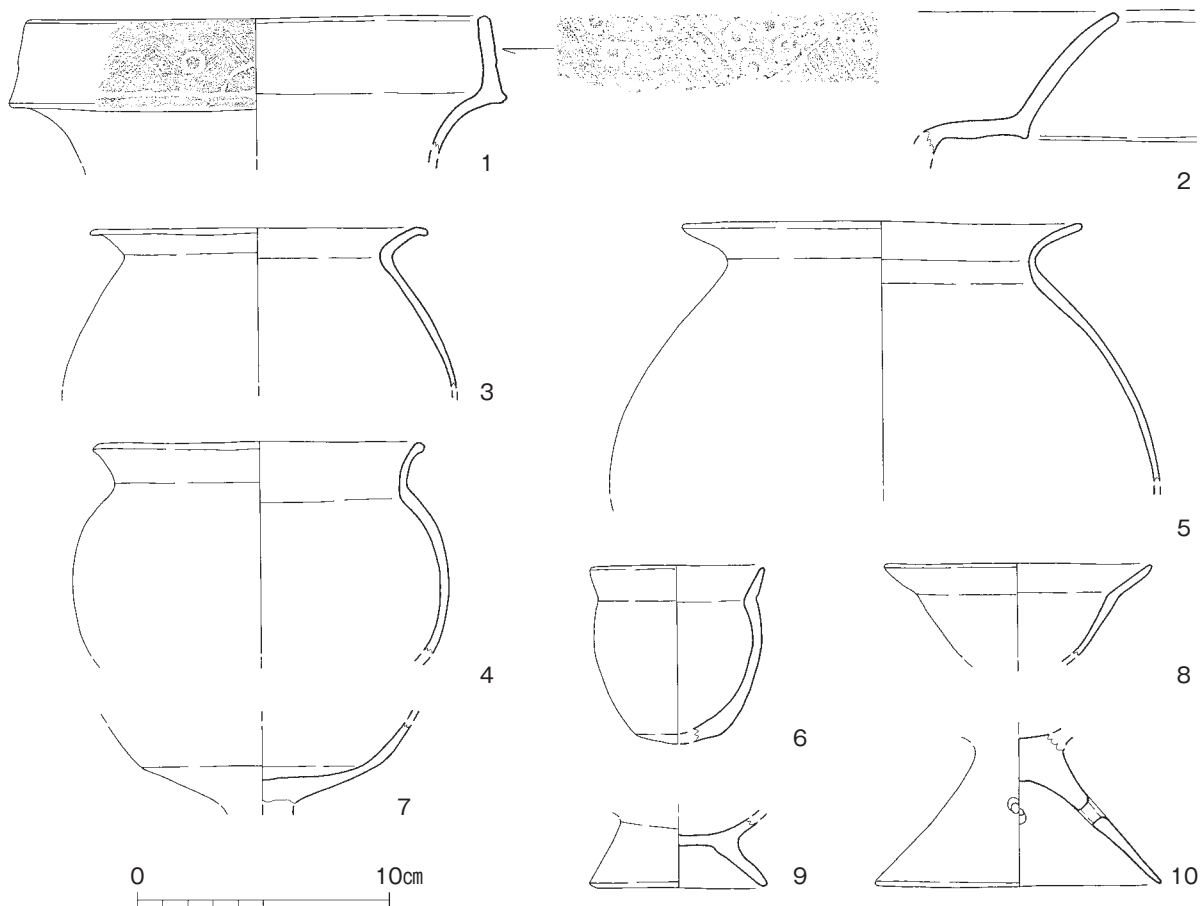
鉄製品（図版44、第8図4） 鉄鏃の茎であろう。残存長3.5cmで、断面は長方形となる。

石製品（図版46、第147図11） 暗灰色砂岩製の砥石。図示した面、上下両側面及び右側面が滑らかとなるが、粘板岩製砥石のような平滑な面ではない。あまり使用されていないのであろう。

土器（図版35、第27図） 1は二重口縁壺片で、最大径13mmほどの石英や角閃石などを含み、胎土は粗いといってよい。同一個体と思われる施文された口縁部片が2点あって、暗灰色～灰白色といった色調となる。文様は円形スタンプと篋描複線鋸歯文、そしてより細かい原体を用いた篋描複線山形文である。残された破片からは文様の規則性は窺えない。2も二重口縁壺小片であるが、これは器表がほとんど剥離している。

3～6は甕で、いずれも器表が非常に荒れている。3は口縁部が強く外反し、端部がさらに外彎する。4は口縁部の外反が弱く、端部をわずかに肥厚させている。5も口縁部が強く外反し、端部は丸く終わる。頸部内面も丸く曲線を描くが、器肉は薄い。体部外面肩部以下に煤が付着し、内面は器表が荒れている。6は小型甕小片で、反転復元図に不安がある。

7は高杯片で器表が荒れる。8は脚付鉢か。二次的な火を受けて器表が荒れる。9は脚台で、図示部はほぼ完存。10は小型器台あるいは高杯の脚部で、円形透孔は均等に配置されていない。



第27図 7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

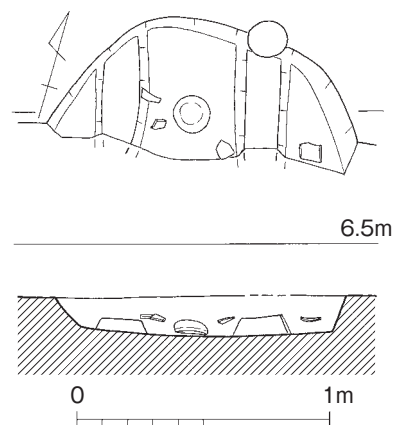
### 8号竪穴住居跡 (図版7・8、第28・29図)

住居跡中央部を中世区画溝に壊されて、一部が残存する小型住居跡である。東辺は11号竪穴住居跡を切る。規模は南北長3m弱、東西長2.5mほどである。深さは南西隅で0.5mほど、カマド付近では0.15mほどに過ぎない。

北西隅でカマドの一部を検出した。袖には主として黒褐色硬質の土を用い、表層・内部に青灰色粘土が混入していた。その内部中央付近に土師器碗が伏せて置かれていた。火床は確認していないが、位置的には溝内となり、破壊されたものであろう。

#### 出土遺物

土器 カマド内に伏せ置かれていた土師器碗が所在不明となっていて、今回は紹介できない。

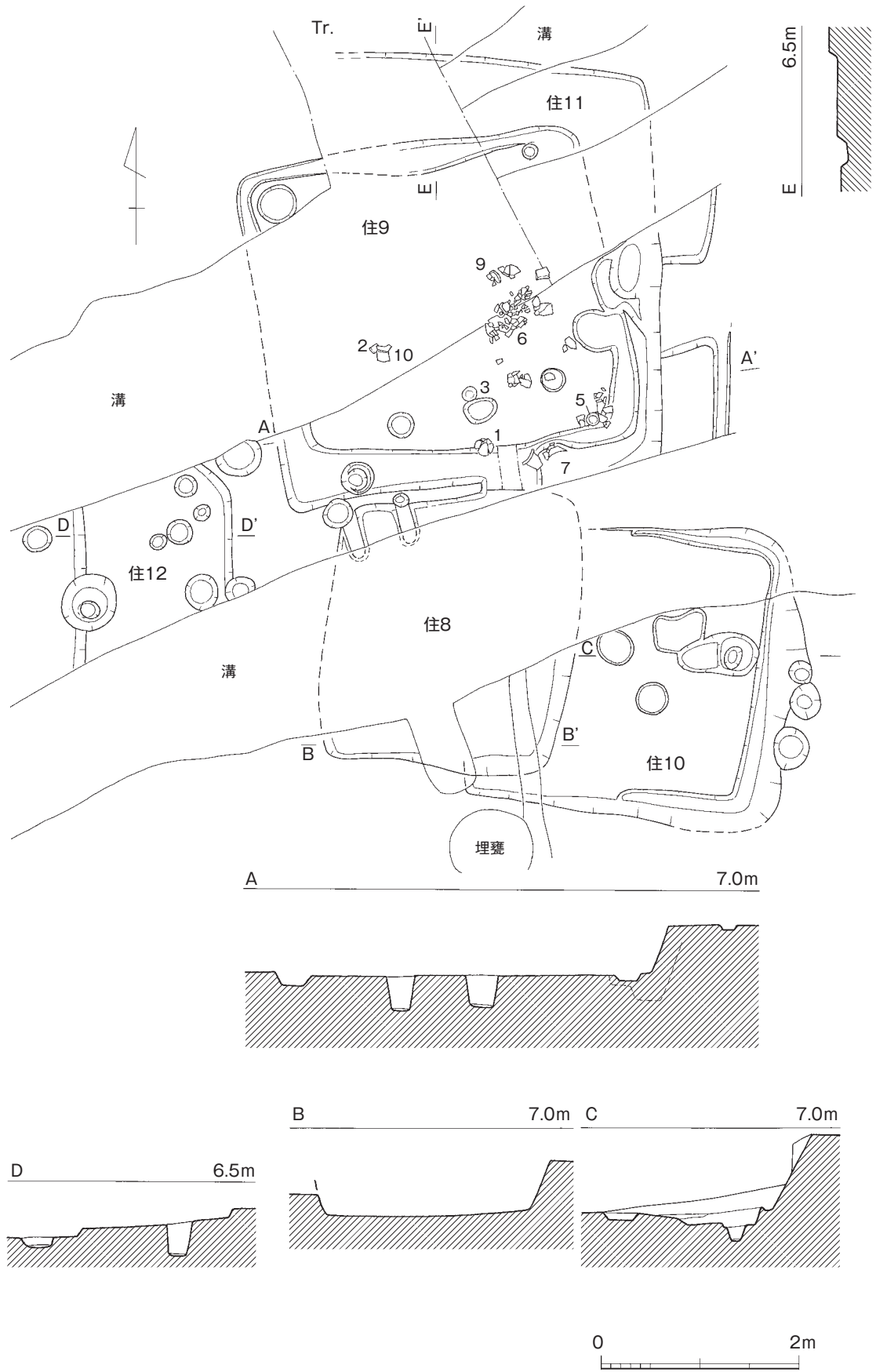


第28図 8号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30)

### 9号竪穴住居跡 (図版7・8、第29図)

8号竪穴住居跡の北に近接して位置するが、これも中央部を中世区画溝が走り、また調査の便宜上設定したトレンチ・畦などが内部にあってカマド・炉の有無や主柱穴は不明のままである。





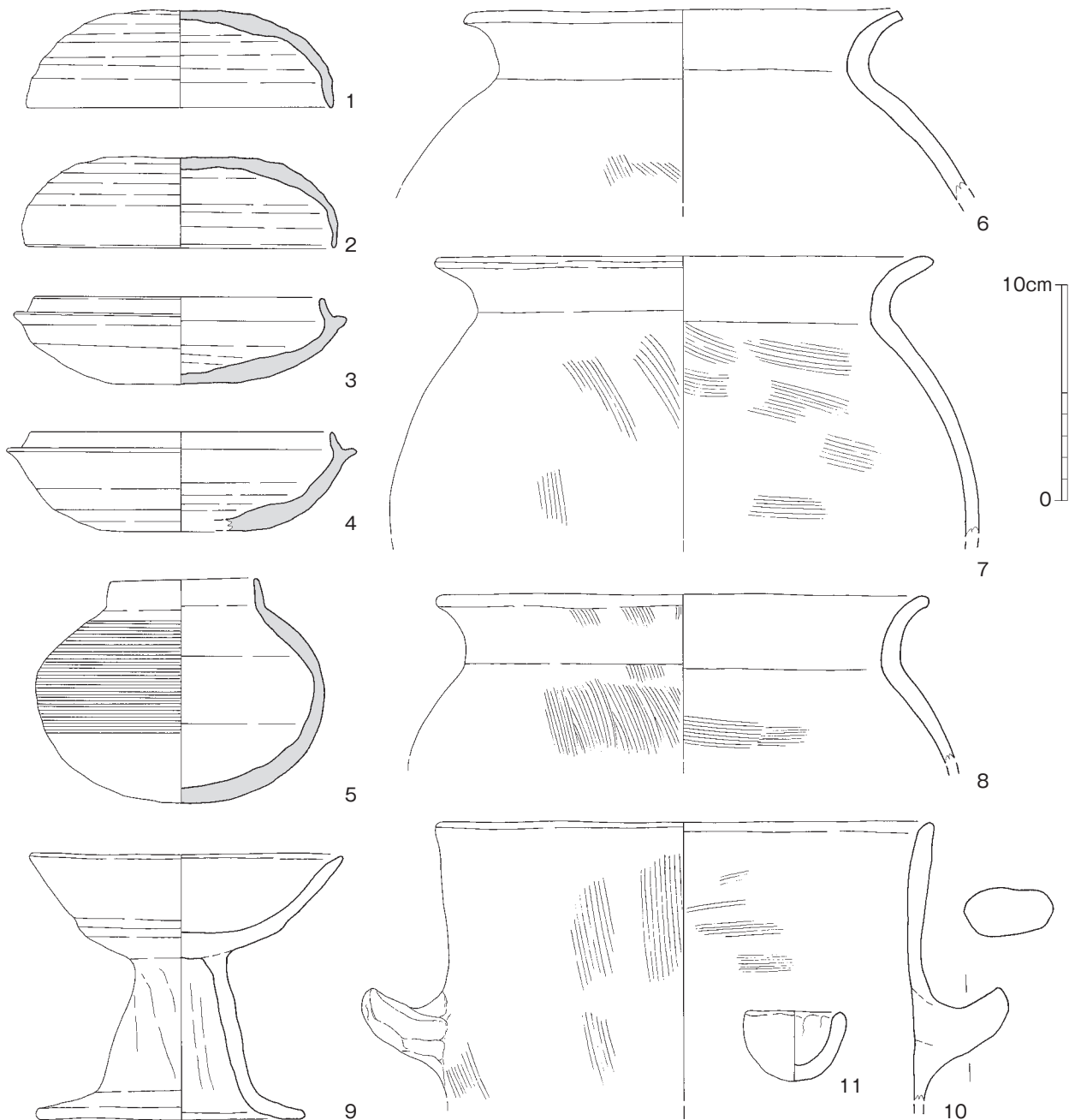
第29図 8～12号竖穴住居跡実測図 (1/60)

ただ、不規則ながら周壁溝と思われる深さ0.1m弱の浅い溝が3.5m前後の規模で方形に巡ることから、住居跡とすることは許されよう。

### 出土遺物

土器（図版36、第30図） 床面近くで分散して土器が出土したが、須恵器短頸壺（5）は他に比べて高い位置で、かつ正立した状態で出土していて一括性に疑問がある。

1～5は須恵器、ほかは土師器である。1はほぼ完存、天井部が接地して出土した。天井部・口縁部界は浅い凹線を刻むだけである。天井部の回転篋削りは丁寧であるが、全体に調整は雑といつてよい。2は2/3ほどの残片で、器形は1に似る。ただ、破面に砂粒が全く見えないほどに胎土精良で、調整も丁寧に施す。3もほぼ完存し、調整は丁寧になされている。4は口縁部の1/4が残存



第30図 9号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

する。器肉が厚いが、調整等は丁寧である。これらの蓋杯は、いずれも口端部を丸く収めている。5は口縁部のほとんどを欠く短頸壺で、体部は完存する。体部中位以上のカキ目は細かい丁寧なもので、底部付近の篋削りも丁寧に施される。なお、底部付近は灰を被る。

6～8はいずれも口縁部を強く外彎させる甕で、6は口端部に面をもって断面方形に近くなる。

9は高杯で杯部は3/4が、脚部は1/4ほどが残存する。杯部は肉厚で、口縁部下の段はかろうじて刻まれている。脚部は中空で、太く短い。

10は灰黄白色～黄白色となる甑で、口縁部にはほとんど変化を加えていない。器表が荒れている。11は手捏ね土器で、赤く焼けている。

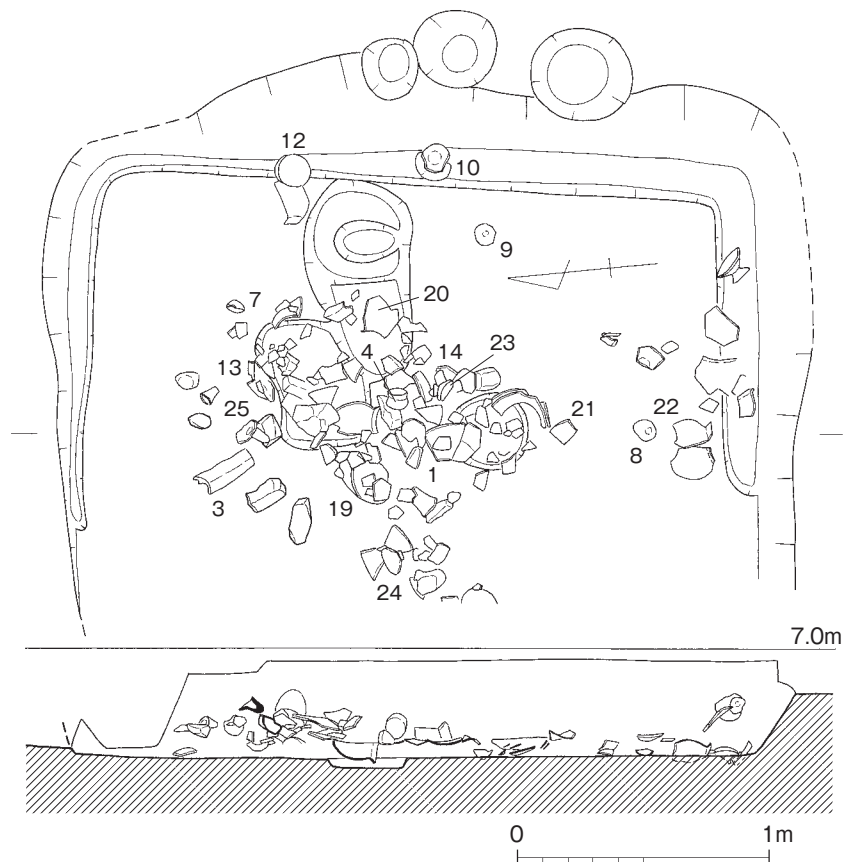
### 10号竪穴住居跡（図版7・8、第29・31図）

8号竪穴住居跡の東にあって、それに切られる。また、北辺も中世区画溝に切られるが、かろうじて規模は分かる。規模は南北長3m、東西長は3.2mほどで、東半では浅い周壁溝が残る。

東辺中央付近に屋内土坑が検出されたが、支柱穴は不明であった。また、屋内土坑の延長にある浅い落ち込みを炉に想定することが可能だが、炭・焼土などの記録はない。

### 出土遺物

石製品（図版45・46、第145図7・第147図9） 第145図7は粘板岩製石庖丁片で、暗灰色を呈し、左に図示した面では図右上から左下にかけて節理が走る。刃部は鋭いが刃毀れが多く見られる。穿孔は両面からだが、孔が小さくかつ間隔が芯々で1.5cmと非常に近い点が特徴となる。第147図9は淡灰色の砂岩製砥石。図示した面及び右側面が使用されているが、他の面は全く使用されていない。



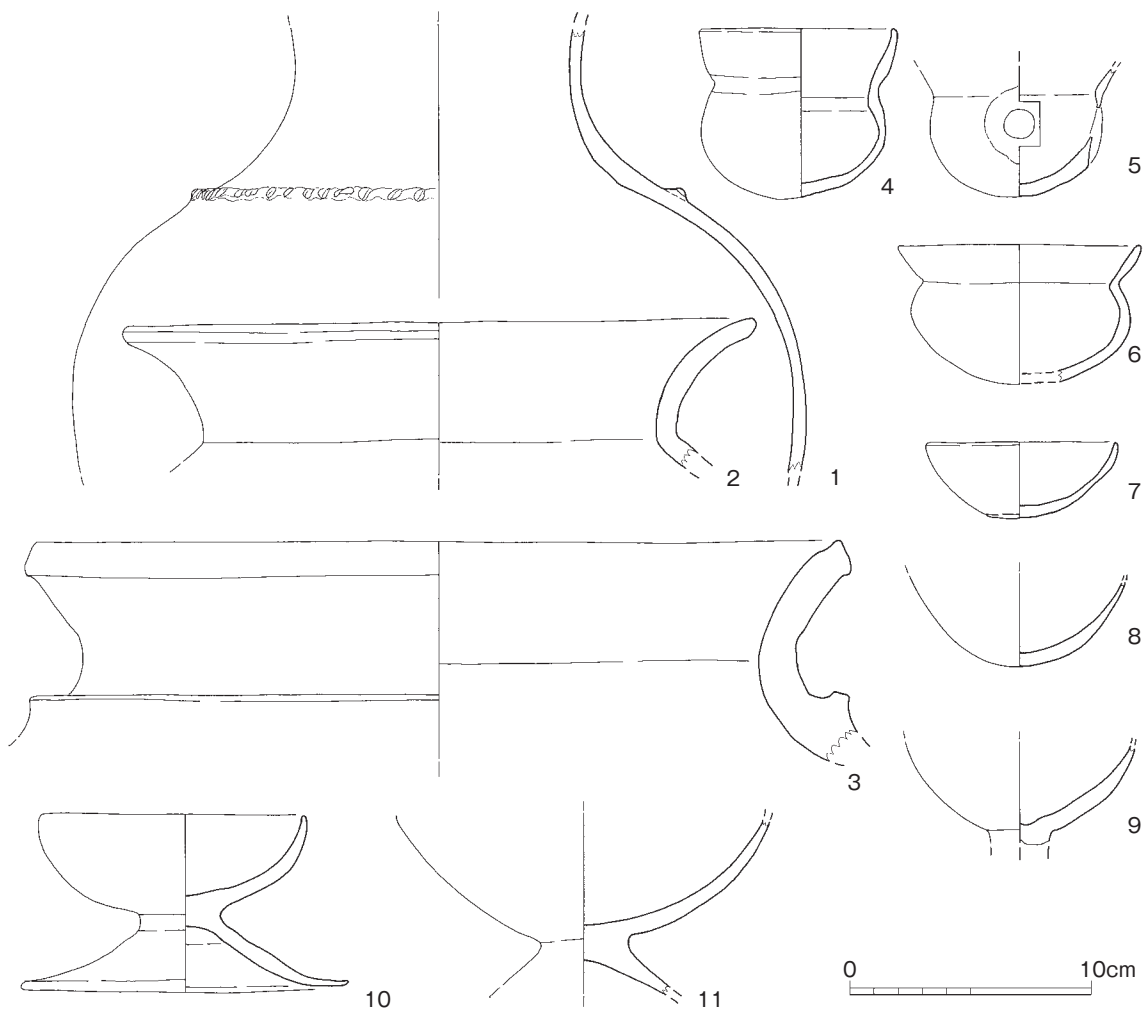
第31図 10号竪穴住居跡遺物出土状態実測図（1/30）

土器（図版36、第32・33図） かなりの量の土器が出土したが、図・写真に見るように多くが破碎するなど、投棄されたような状況であった。1は頸部が長い壺で、胎土粗く器表が焼けて荒れている。肩部に刻目突帯を巡らせる。2は口縁部が強く短く外反する甕で、1/4ほどが残るがこれも器表が荒れている。3は頸部に無文の突帯を巡らせる甕で、器肉が厚い。1/4の残片で、胎土は粗い。

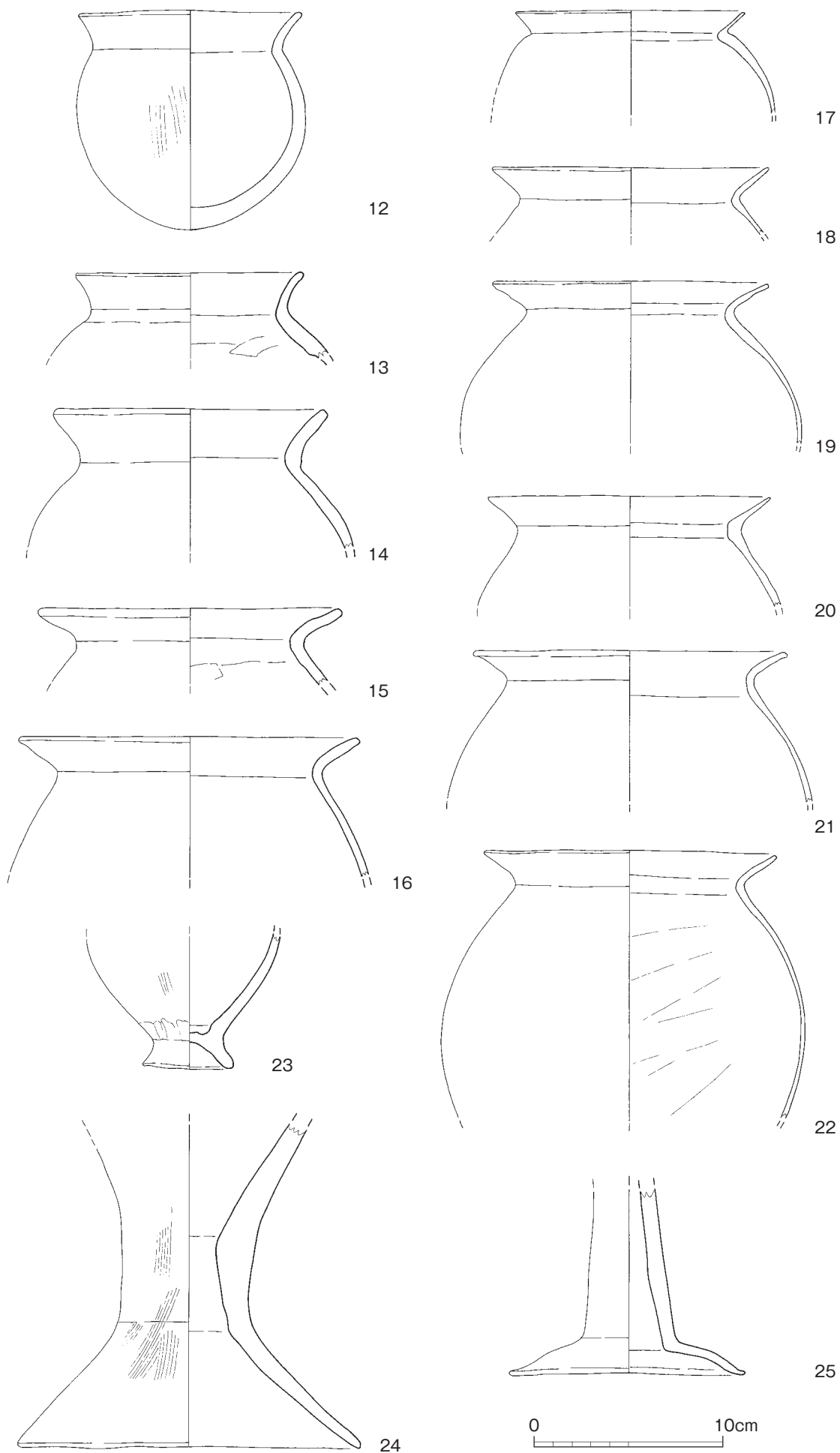
4～6は小型壺。4はほぼ完存するが、火にかかったようで器表が荒れる。頸部を強く横撫でしてくぼませ、口頸部は開きが小さく内彎気味に延びる。5は4に比して体部が肉厚で、口端部は残存しないようであるが、薄くなっているため4ほど長くはないと思われる。頸部下に内側から叩いた穿孔があり、その周辺も広く剥離している。体部の2/3が残存するが、これも焼けて器表が荒れる。6は体部が扁平となり、口縁部が短いもので、頸部内面の稜は鋭い。体部はほぼ完存するが、これも器表が荒れている。

7は口縁部に変化を加えない半球形に近い鉢であるが、底部は意識して平底とするようである。灰黄白色を呈し、器表は荒れる。8は丸底の鉢で、これも器表が荒れている。

9は10のような小型高杯になるのであろう。口端部を欠き、器表が荒れる。10は口縁部のほとんどを欠くが、それ以外はかなり残存する。脚部が低く大きく開き、これも器表が荒れている。11は



第32図 10号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第33图 10号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)

椀形の杯部が大きく脚付鉢としたがよいであろうか、脚部のほとんどを欠く。椀部の1/3が残存するが、口端部はまだ延びるかも知れない。これも器表が荒れる。

12～22は甕で、いずれも器表が荒れている。12～16は口端部に変化を加えない、比較的肉厚のものである。12はほぼ完存し、体部外面が荒れているが内面は丁寧な撫でで仕上げる。14～16は小片で、復元口径に不安がある。17は頸部が完周、口縁部の1/2が残存するが、口端部はほとんどが剥離していて、本来の形状が図示したようなものであったか多少不安がある。19は口端部が摩滅するが、現状で断面方形に近く成形していることはわかる。1/3が残存。20は1/2が残存し、これも口端部は本来の形状を残さないようである。これも含めて薄手の甕は灰黄白色となる傾向がある。21はやはり口端部を断面方形とする。22は口縁部付近の3/4が残存し、口端部を内側へわずかにつまむような形となる。これは内面に篋削りが観察できる。

23は脚付甕あるいは鉢片で、図示部はほぼ完存する。器表が荒れるが、外面に刷毛目がわずかに見える。24は筒型の器台。同じ方向の内外面が特によく焼けて赤変する。25は高杯脚部で、これも焼けて器表が荒れる。

### 11号竪穴住居跡（図版7、第29図）

9号竪穴住居跡の北東に重複している。北東隅付近で確認したラインを住居跡として呼称したが、その付近の深さは0.05mほどに過ぎない。9号竪穴住居跡を掘り進める過程で、東辺のテラスを気にしていたが、改めて図面を検討すると、このテラスが11号竪穴住居跡に帰属するもので、テラス北端の落ち込みが11号竪穴住居跡の屋内土坑であることが分かる。

なお、これも炉やカマドの有無、支柱穴は確認できていない。

土器小片が若干出土するが、時期等は判断できない。

### 12号竪穴住居跡（第29図）

8号竪穴住居跡の西に近接して、2条の中世区画溝の間でコーナーと思われる部分を認めて呼称したが、区画溝の南北で連続するラインを確認できず、カマドや炉なども認められなかったため、住居跡との確信はない。ただ、このラインから1.5m西側で、ほぼ並行して走るラインもあって、ベッド状遺構である可能性がある。

これも時期等を判断できるような出土遺物はない。

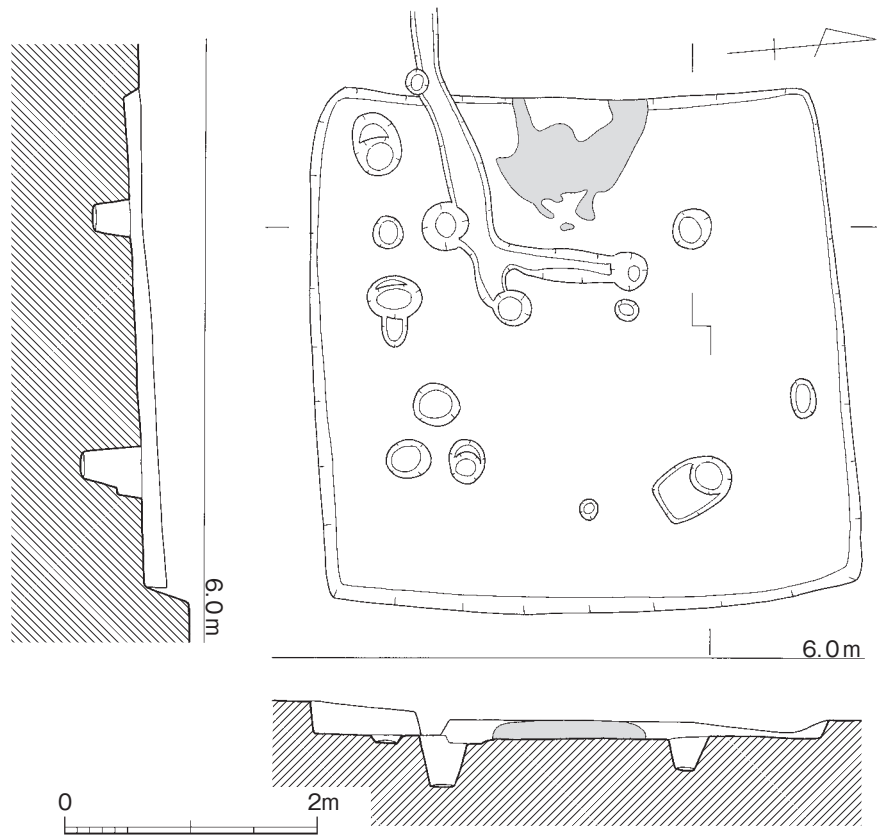
### 13号竪穴住居跡（図版9、第34・35図）

12号竪穴住居跡とした落ち込みの西隣にあって、やはり中世の区画溝が掘り込んでいるが床面には達していなかった。平面形は整った方形となり、一辺長4.1～4.2mを測る。深さは東辺付近で最大0.4mが残存する。

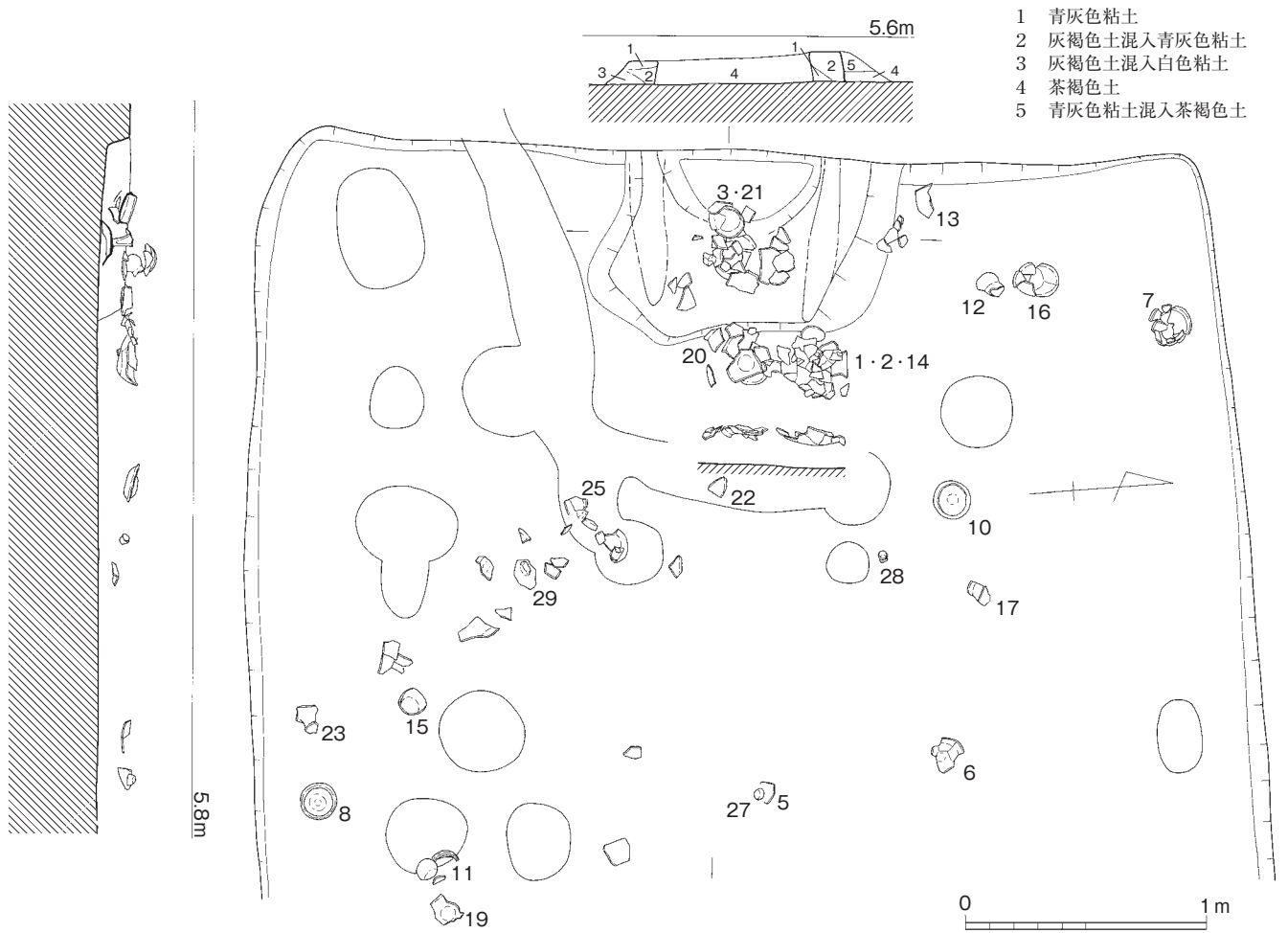
カマドは西辺に設置される。検出時にはすでに焼土が表面に見え、平面的に袖を捉えることはできなかったが、断ち割って横断面を観察すると袖と思われる立ち上がりを観察できた。袖は青灰色粘土とそれに灰褐色土を交えた土を使用していて、袖内面に焼けた様子は見られなかった。

### 出土遺物

石製品（図版45、第145図9） 砂岩製石庖丁片で、緑味を帯びる灰色となる。非常によく研磨さ

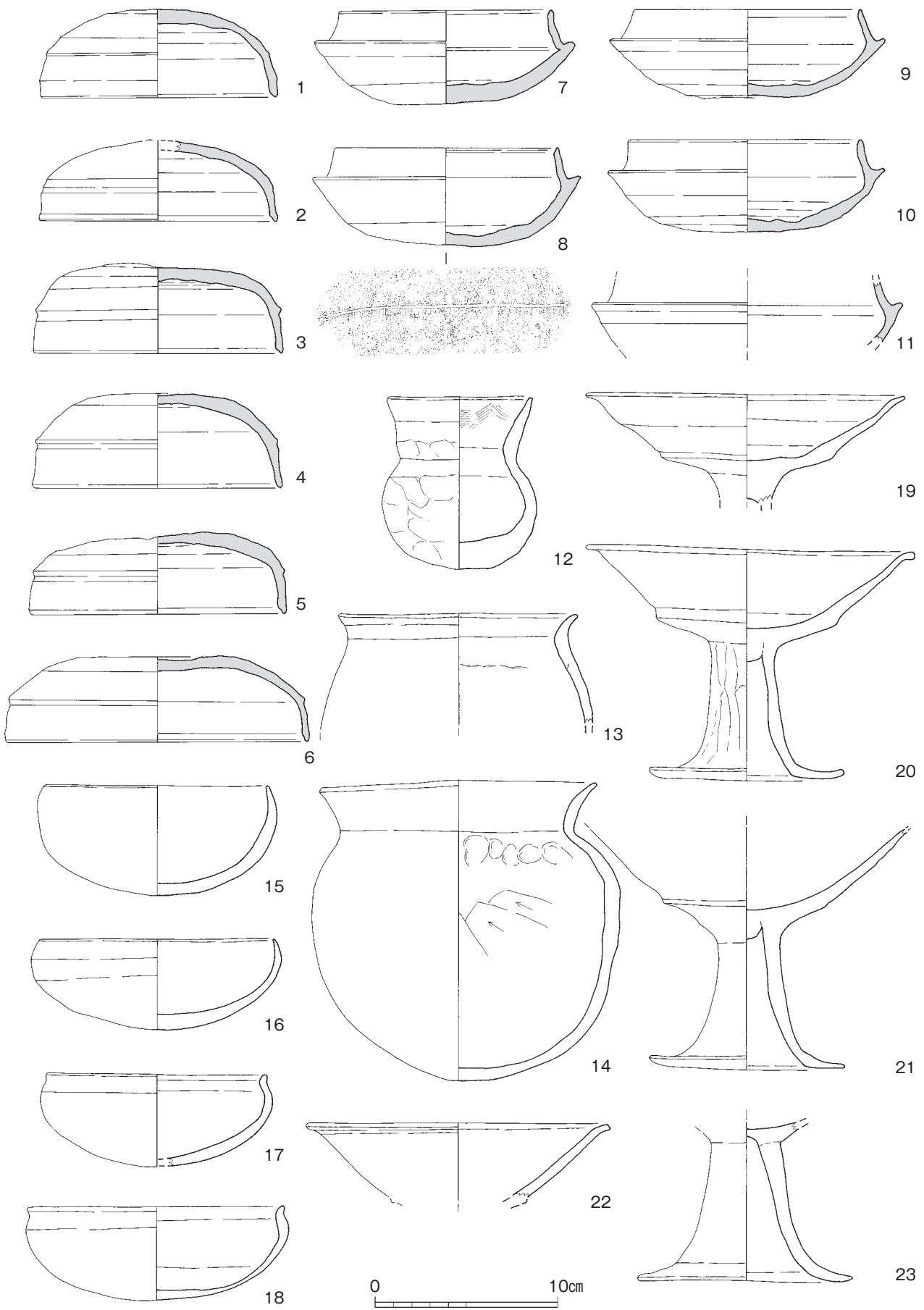


第34图 13号竖穴住居跡実測図 (1/60)



- 1 青灰色粘土
- 2 灰褐色土混入青灰色粘土
- 3 灰褐色土混入白色粘土
- 4 茶褐色土
- 5 青灰色粘土混入茶褐色土

第35图 13号竖穴住居跡遺物出土状態実測図 (1/30)



第36图 13号竖穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



れているが、背は大部分が失われているようである。

土器（図版36・37、第3・376図） カマド内に須恵器杯身（3）が正置されていたが、その位置は支脚に使用された高杯（21）の真上ではない。同じくカマド内には甕片も散乱していたが、これは復元できなかった。カマド前面でも甕や高杯などが潰れた状態で出土したが、特に高杯などは焚き口の正面にあって、やはり廃棄の状態を示しているのであろう。そのほか、須恵器蓋杯類やミニチュア土器などが住居跡内に散乱していて、意図的な配列とは思えない出土状況であった。なお、18の椀はP2とした柱穴内に置かれたような状態で出土した。

1～11は須恵器。杯蓋は天井部・口縁部を区別し、口端部は強弱があるが面を意識している。口径は13～14cmのものが5点、1点のみ16.6cmの大きなものがある。杯身は口径11.7～12.7cmを測る。口端部に面を作るものと丸く終わるものがある。1は口縁部付近の1/4が残存、丁寧な篋削りが施された天井部は丸くなる。2は焼け歪む小片で、これは天井部・口縁部界を甘い沈線画している。3は3/4が残存し、天井部外面は全体に灰を被る。同内面は丁寧に横撫でで仕上げる。4は1/4が残存、口端部に弱い面を作る。5は3/4ほどが残る。胎土はやや粗く、焼け歪む。6は天井部付近で1/2が、口縁部付近で1/4が残存する。調整は丁寧になされるが、器表に砂粒が浮き、黒色粒が目立つ。7はほぼ完存し、全体に肉厚で焼け歪む。口端部内側をわずかにくぼませ、立ち上がりの下端内側が深く切れ込んでいる。8もほぼ完存。内底面に同心円文当て具痕が、外底面に篋記号が刻まれる。調整は丁寧である。9は口縁部の1/2が残存し、口端部は面取りを意識するように強く横撫でを施す。胎土精良で調整も丁寧、黒色粒が目立つ。10は体部が完存、口縁部は1/4が残る。これは焼成が甘く、淡灰黄色となる。11は1/3の残片で、黒色粒が目立つ。

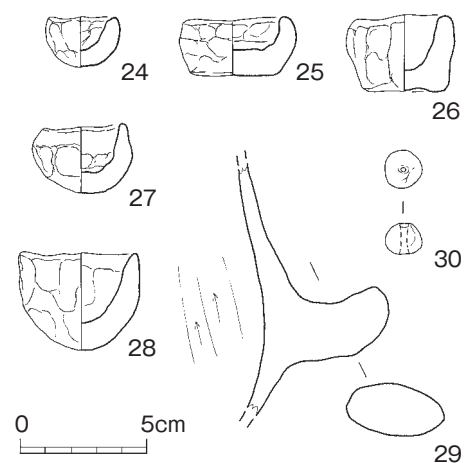
12以下は土師器。12は手捏ねの小型壺で、形状は不整。肉厚で、器表が荒れるとともに外底面付近が剥離している。13は図示部の2/3が残存するが、器表が荒れている。14は口縁部付近が完周、体部は1/3ほどが残存する。非常に熱を受けたようで、赤変するとともに形状が歪む。

15・16は口縁部にあまり変化を加えない椀で、いずれも大部分が残存するが全体に焼けて赤変、器表が荒れている。17・18は口端部を小さく外反させるもので、17はやはり焼けている。18は黒色顔料が塗られているようで、調整は丁寧であるが、胎土は特別なものではない。口縁部の2/3が残存。

19～23は高杯で、杯部はいずれも上半部（稜以上）が発達する。いずれも焼けて赤変し、器表が非常に荒れている。19は上半部中位が外方へ一旦膨らみ、口縁部はまた外反する。20は杯部の2/3、脚部の1/3が残存する。口端部は水平に折り曲げられ、脚裾も接地面が大きく作られる。21は口端部をのぞく杯部は完存、脚部は1/2が残存する。これも脚裾は接地面が大きい。22も口縁部を小さく外反させる1/4の残片で、23は脚裾の接地面が前2者よりも小さい。

24～28は手捏ねミニチュア土器で、丸底・平底の2種がある。29は内外面の器表が荒れて煤ける甑片。

30は土玉で、直径1.5cm、高さ1.2cm、重量は2.06gである。胎土は良好だが、得別な細工をしていない。土



第37図 13号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

錘であろう。

#### 14号竪穴住居跡(図版10、第38図)

13号竪穴住居跡のすぐ北に位置し、一辺長3mほどの小型の方形プランをもち、深さは最大で0.3mほどである。北辺は2.6×1.3mほどの方形土坑に切られる。

炉・カマドは不明で、支柱穴も明瞭ではないため、住居跡との確信はない。

#### 出土遺物

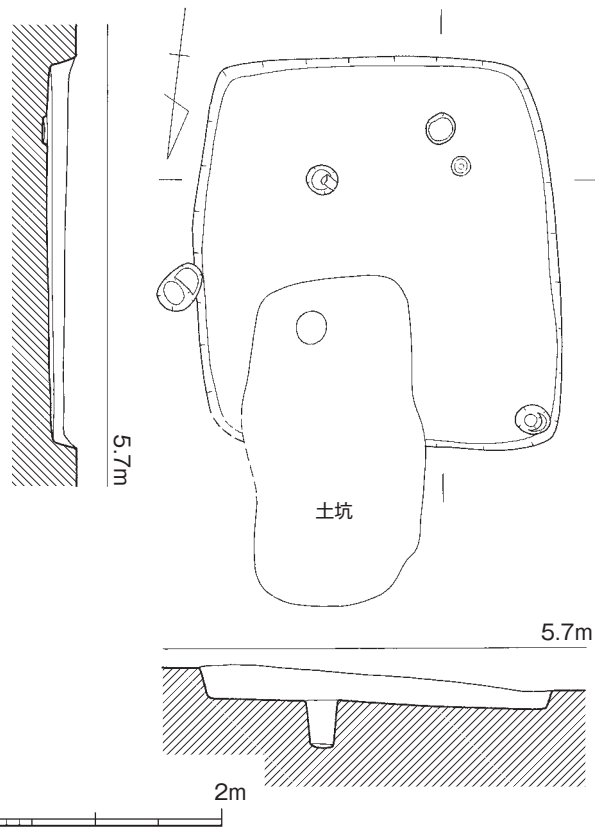
石製品(図版46、第146図3)

灰褐色粘板岩製の砥石で、図示した面及び左右側面が顕著に使用されていて、下側面も若干すれたような痕跡が見える。図示した面には幅1cmほどの凹部が見られる。

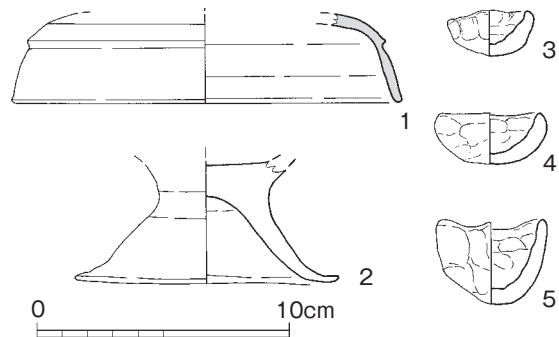
土器(図版37、第39図) 完形の土師器碗が伏せられた状態で出土したが、今回は整理ができておらず紹介できない。それ以外の埋土中から出土した土器を図示した。

1は須恵器杯蓋の残片で、天井部・口縁部界の稜線は明瞭で、口端部内側は面を意識する。

2～5は土師器で、2の高杯脚部は器表がとても荒れている。3～5は手捏ねの小型品。出土状態は確認できていない。



第38図 14号竪穴住居跡実測図(1/60)

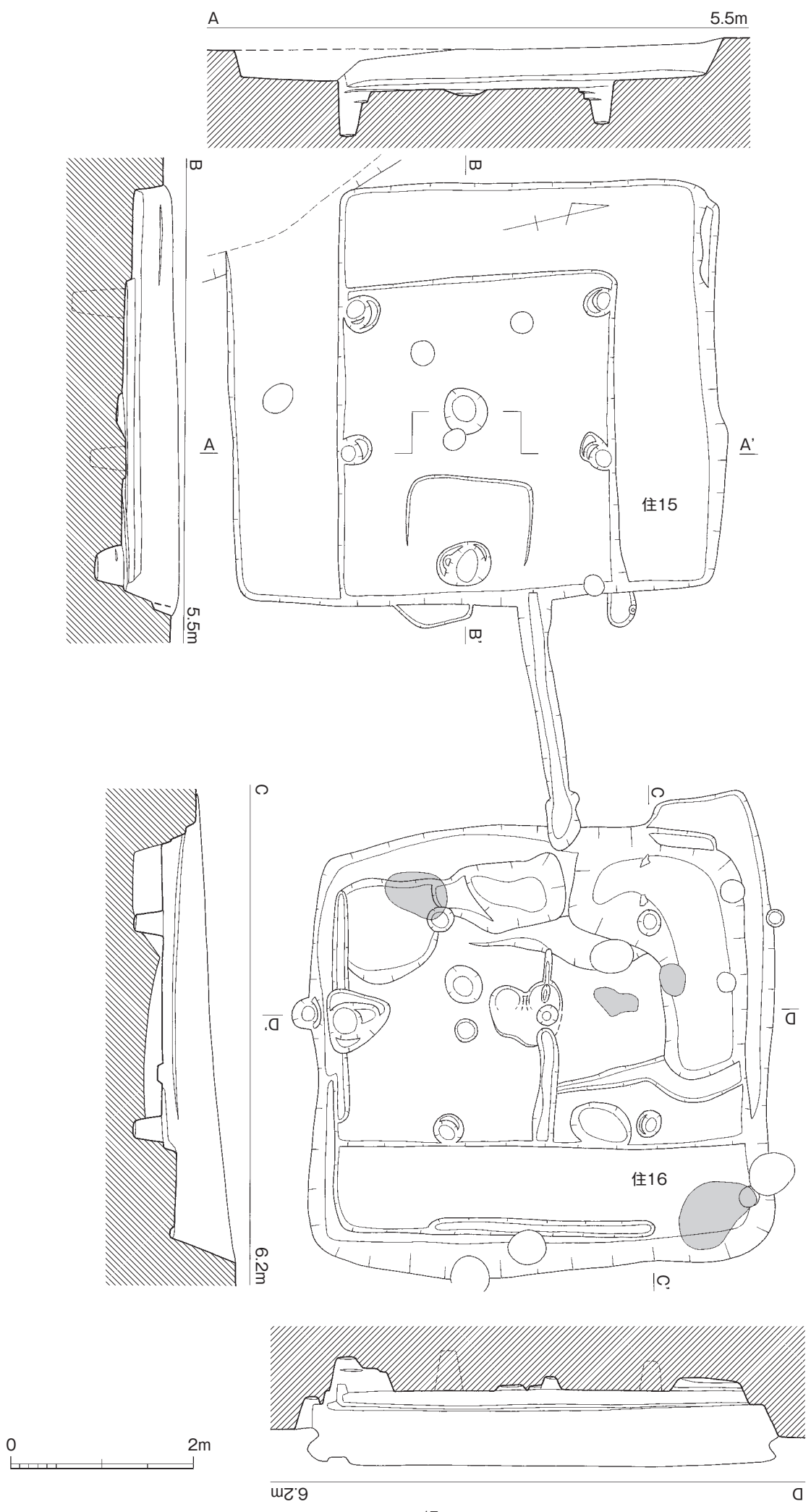


第39図 14号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

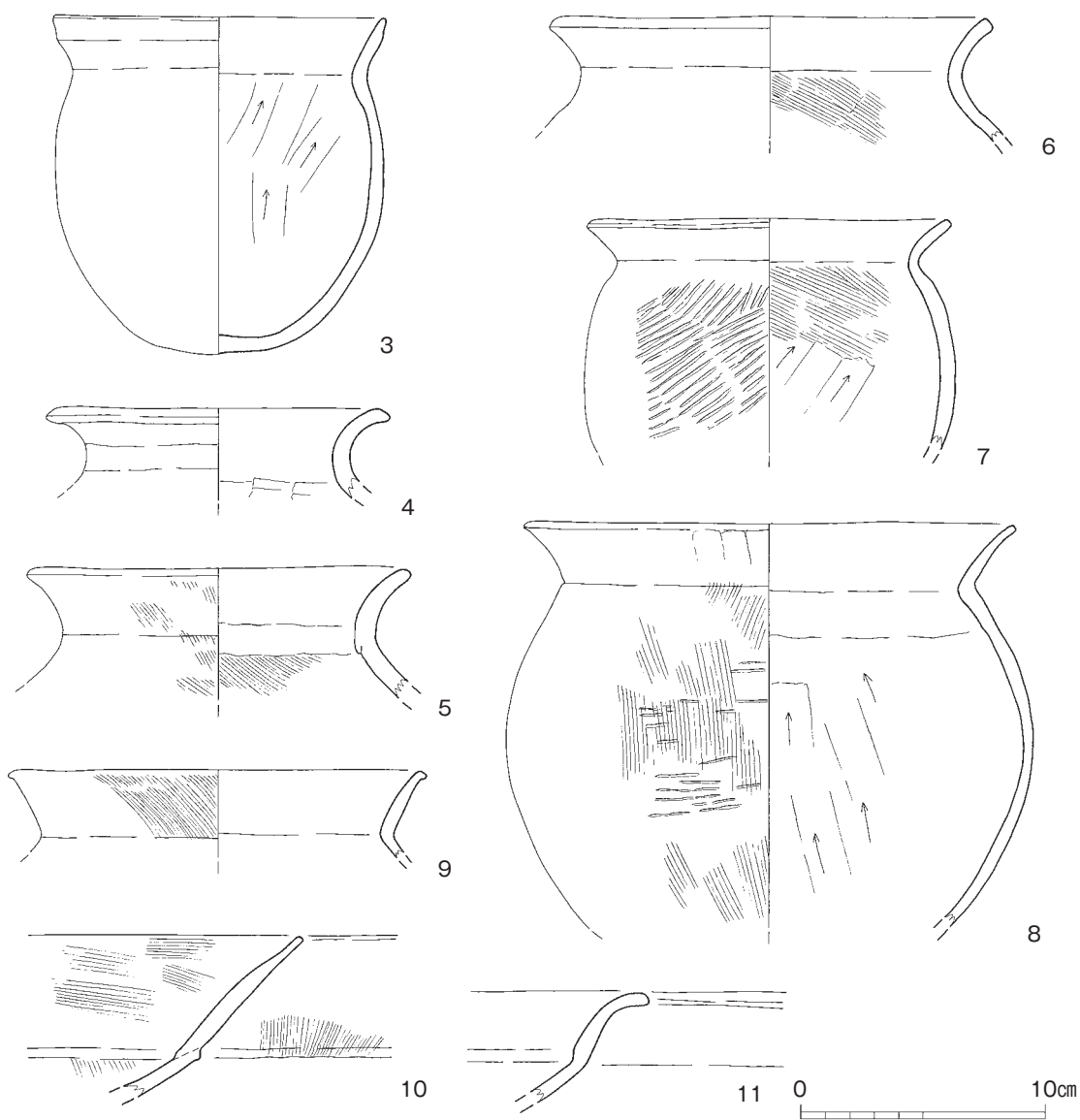
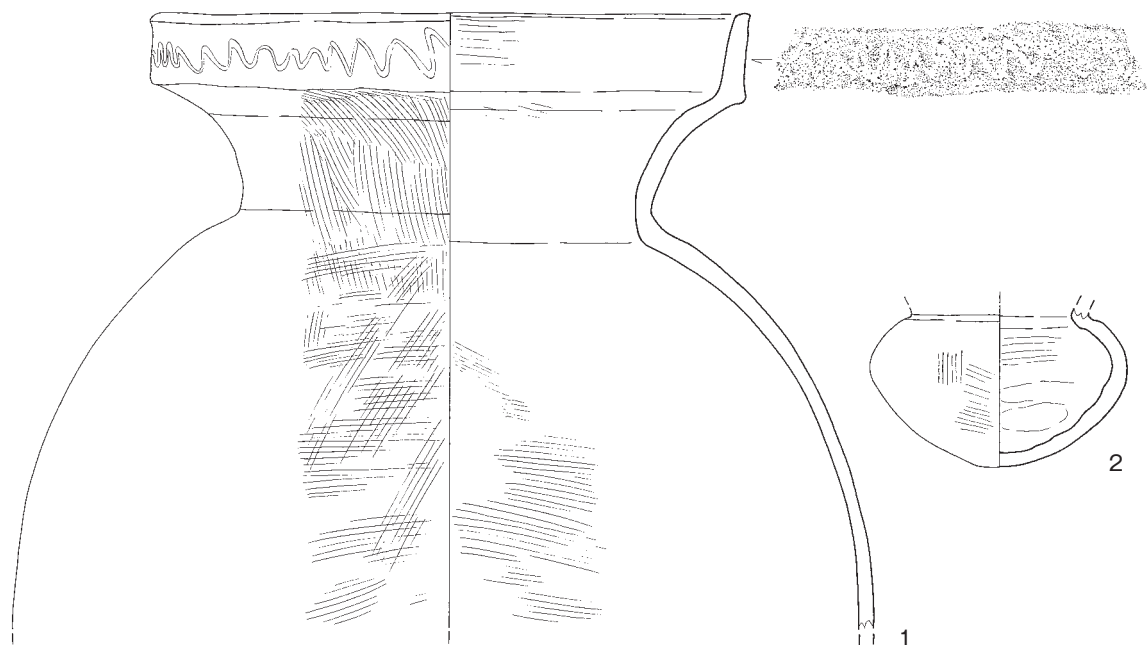
#### 15号竪穴住居跡(図版10、第40図)

14号竪穴住居跡の北西に近接して位置し、南西隅が一部破壊されている。東西長4.5m、南北長5.3mほどの平面プランを有し、北・西・南辺にベッド状遺構を設ける。図では西辺・南辺のベッド状遺構に段差があるようになっているが、これは掘り過ぎたものである。

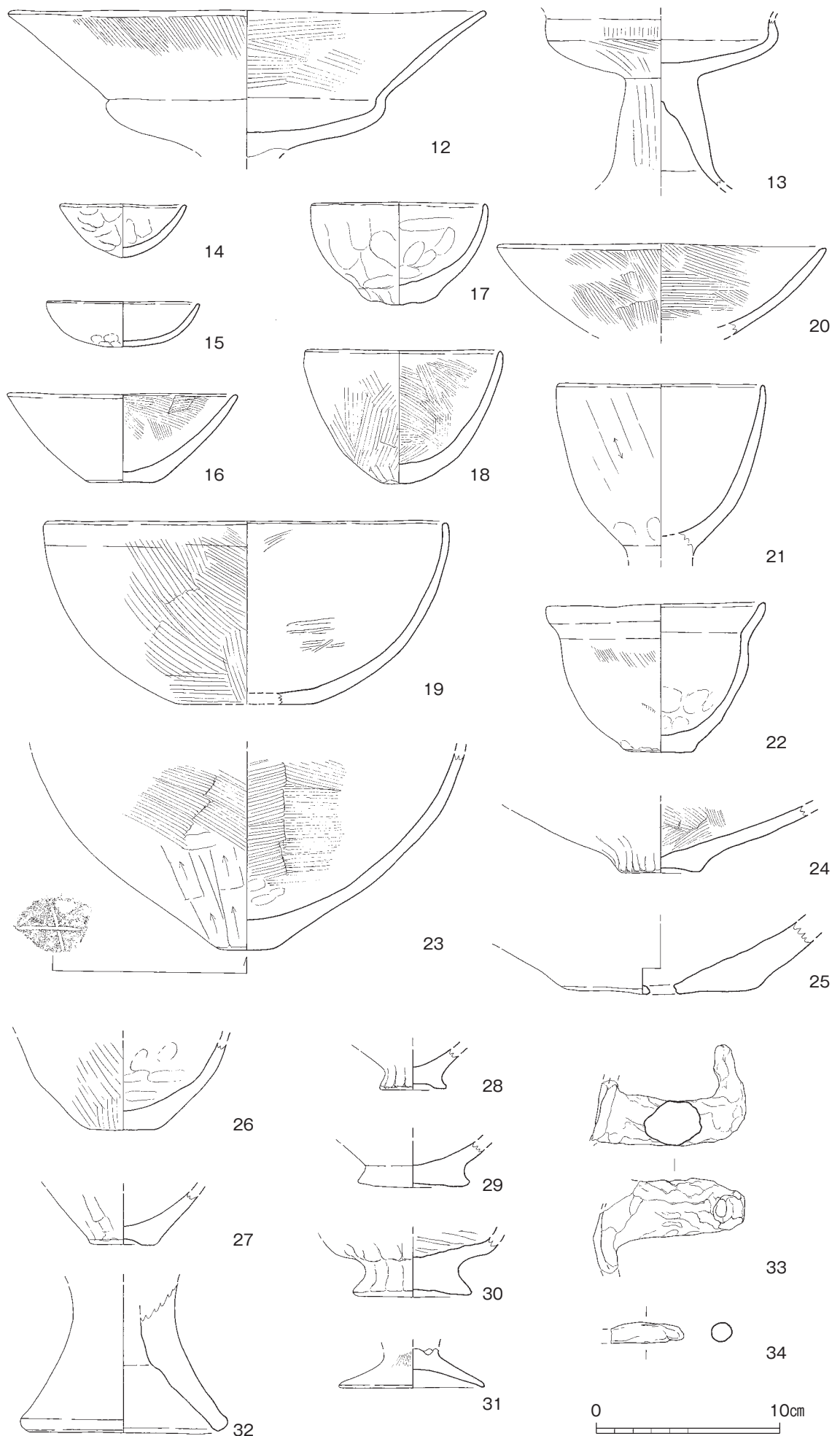
床面中央付近に炉跡があり、それを挟んでやや東にずれた位置に支柱穴がある。この支柱穴の配置は2本柱の場合の典型的なパターンであるが、この住居跡ではベッド状遺構コーナーにも2基の柱穴があって、しかも先の支柱穴と同程度の大きさ・深さをもっている。通常の4本柱支柱穴の場合に比べて柱穴の間隔が狭く、この住居跡はその点で特殊な構造といえる。



第40图 15·16号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第41图 15号竖穴住居跡出土土器実測图1 (1/3)



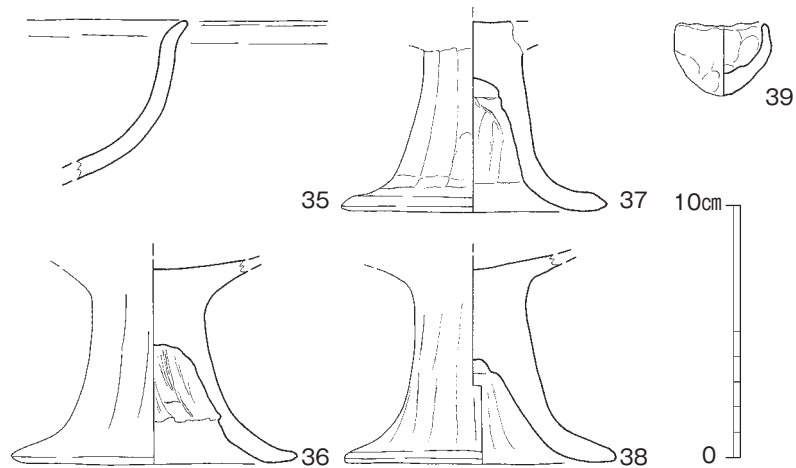
第42图 15号竖穴住居跡出土土器実測图2 (1/3)

東辺中央付近に扁円形の屋内土坑があるが、ここも先の7号竪穴住居跡同様に屋内土坑を囲むように方形の浅い段がある。

なお、後述する16号竪穴住居跡との間にある溝状遺構との先後関係は確認できていない。

#### 出土遺物

土器（図版37、第41～43図） 住居跡内北西隅で、検



第43図 15号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

出面に近い浅い位置からまとまった土器の出土があり、これらは明らかに住居廃絶後に投棄されたものであるが、本住居跡出土土器として最後にまとめて図示している（第43図）。それら以外は埋土中から出土したもので、まとまったあるいは良好な状態での出土がなかったことから出土状態の記録はない。

1は復元口径24cmほどの二重口縁壺で、口縁部の2/3が残存するが器表は内外面ともに荒れている。口縁部はほぼ直立し、外面に篋描波状文を刻むが整ったものではない。2は肩の張りが強い小型壺で、口縁部を欠くが体部は1/2が残存。胎土は粗く、調整も雑な感がある。

3～9は甕。3は口縁部の外反が弱く端部が丸く終わるもので、体部は赤変して器表が荒れる。口縁部付近の1/3が残存。4は小片で、口端部を外方へ引き出すような形状となる。これも外表が荒れている。5は口端部を丸く収める1/4ほどの残片で、頸部付近には粘土紐の継ぎ目がよく見える。6～9は口端部に面をもち、断面が方形となるが、6は頸部が曲線を描く。体部内面は荒れているが、刷毛目で調整するようである。7は図示する範囲では体部がほぼ完存するが、口縁部付近はほとんどを欠く。体部外面は疎らな叩きで、内面上半は刷毛目、下半は篋削りで調整する。頸部内面は丸くなる。8は頸部付近で2/3が残存。口縁部は外彎気味に延び、頸部内面は丸くなって体部は張りが弱い。体部は焼けて赤変、器表が荒れているが、叩きの後で全面に刷毛目を施す。

10・11は高杯口縁部の小片。10は口縁部が長く直線的に延び、内外面を刷毛目で仕上げる。11は口縁部が短く強く外彎するもの。12は3/4が残存する。杯部下半はとても浅い椀形となり、上半が長く延びるもので、刷毛目はよく見えるが、篋磨き・暗文などは見えない。下半外面は篋削りの後に刷毛目を施す。13は図示部がほぼ完存する。杯部下半の形状が12とは異なっているが、同じように口縁部が大きく開くものであろう。これも杯部下半外面には篋削りが見える。

14～19は大小の鉢である。14は口径に比して身が深い手捏ね品で、胎土は良好。15はほぼ完存する浅いもので、丁寧に作られるが底部付近外面には指頭痕が残る。前2点は丸底であるが、16は平底の底部が1/3ほど残存する。底部から口縁部にかけてわずかに内彎しつつもほぼ直線的に伸び、端部は丸く終わる。胎土良好、調整も丁寧になされる。17は完存する肉厚の底部をもち、外底面は未調整のようである。手捏ねで器表が荒れる。18も底部付近が完存。小さな平底となり、体部は砲弾形となる。19は口径22cmを測る。平底で、体部は丸く立ち上がって口縁部は加飾せずに終わる。

胎土良好、調整も丁寧になされるが、体部外面中位以上には煤が付着する。

20は底部を欠くが浅い鉢であろう。内外面を刷毛目で仕上げる。21も底部を欠くが、残存部から肉厚であったようである。外面下端は指押さえ、それ以上と内面は縦方向の丁寧な撫で(?)で仕上げる。22は甕とすべきであるかも知れないが、ここでは鉢としておく。頸部が締まらず、口縁部は短く立ち上がって端部に面をもつ。胎土精良、調整も丁寧になされる。これは頸部以下が完存する。

23～27は壺・甕の底部でいずれも平底となる。23は小さな底部から高く立ち上がり、外底面に篋描で「+」を刻む。24は浅く立ち上がる。25は大きな平底となって、中央に焼成前の穿孔がある。外底面は丁寧に撫でられ、内面は指撫でで仕上げるようである。26は外面を疎らな浅い刷毛目で仕上げる。27・28は小さな上げ底となる。29は厚底、30は極度の厚底で、これは内底面を撫であるいは幅広の篋磨きで仕上げる。31は脚台。

32は筒型の器台片で、胎土が粗いが外面は丁寧に撫でられている。33は直角に近く折り曲げられた棒状品で、基部は剥離している。把手であろうか。34は直径1cmほどの棒状品で、灰黒色～黒色となる。

35以下は埋土上層でまとまって出土した土器である。35は高杯あるいは鉢で、器表が荒れる小片。口端部が強く外反し、肉厚である。36～38は脚端部を一部欠損するほかはいずれも図示部がほぼ完存する。細部の形状は異なるが、高さ・脚部径などはよく似ている。39は丁寧に作られた手捏ね土器である。

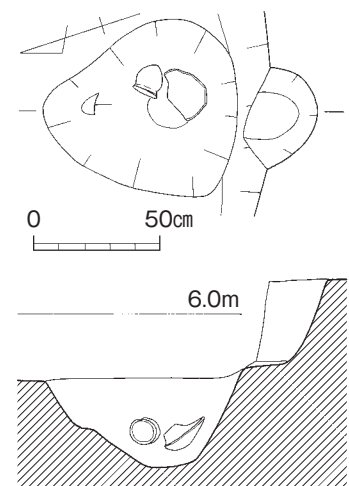
#### 16号竪穴住居跡 (図版10・11、第40図)

15号竪穴住居跡の東、2.5mほどの距離をもって、ほぼ方位を揃えて位置する。平面的には一辺5mほどの方形プランとなるが、北辺や東辺、南辺などに狭いテラスがあって、床面では4m強の規模となる。

北東隅及び南西隅付近で焼土ブロックの広がりがあった。北東隅のそれは検出面から0.1mあまり下位であったが、床面からは0.4mほど浮いていて、埋没過程で投棄された様を呈していた。南西隅のそれはほぼ床面上に広がっていた。

ここでは15号竪穴住居跡と違って、東辺のみにベッド状遺構を設け、屋内土坑を南に配していた。また、柱穴検出時の床面が通常と異なって濁っていたために除去した結果を図示している。床面を一旦掘り返して貼り床としたものようで、I区のみならず例は少ない。

屋内土坑に対応するように、中央付近で壁が部分的に赤変する2基の炉跡状の土坑を検出している。1基は床中央を東西に走る溝状遺構と重複するが、先後は確認できていない。恐らく一連のものと思われる。この溝(第45図)は平面的には住居外へ続き、15号竪穴住居跡と重複してそれから先は不明である。15号竪穴住居跡との先後も確認できなかった。この溝の床面高をみると、16号竪穴住居跡内ベッド状遺構下から中央土坑まで、及び住居跡外でもほぼ同じレベルを維持し、ただ中央土坑か



第44図 16号竪穴住居跡屋内土坑土器出土状態実測図 (1/30)

ら貼り床付近のみ5.6～5.7mと若干高くなっている。住居跡外では一部の壁が被熱赤変していたが、埋土に炭が多く混入するといった特別な状況は看取できなかった。特殊な遺構であったが、十分な注意を怠ったために重要な情報を見落としたかも知れない。

### 出土遺物

石製品（図版44・45、第144図6・8・第145図5） 第144図6は黄白色・灰緑色・灰褐色が層状に重なる滑石を使用した石錘で、残存長9.0cm、幅4.3cm、厚さ3.1cm、重量は184.9gである。仮にA（図左）・B（図右）面として説明を加える。

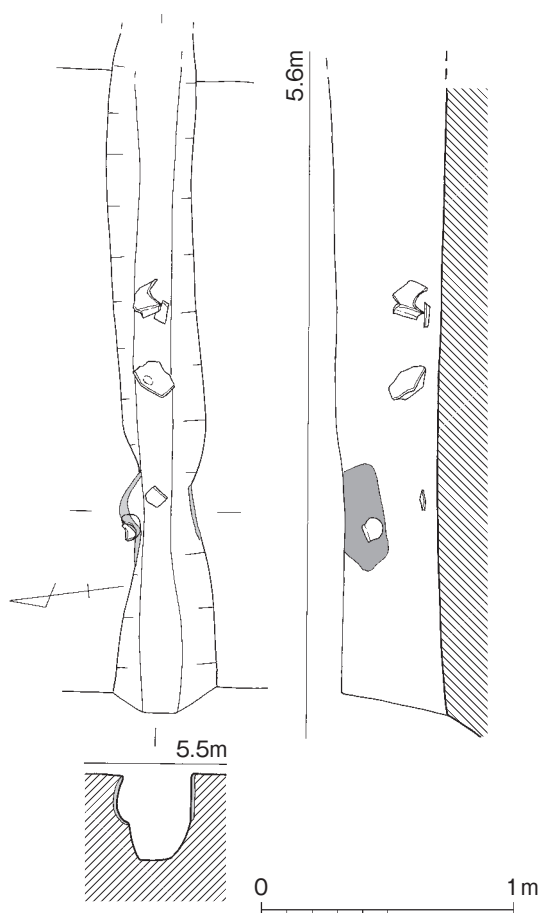
A面：中央やや下位に直径8mm、上端近くに直径5mmほどの円孔が穿たれ、両孔間には幅・深さともに2mmのシャープな溝が彫られる。下の孔ではさらに下方に延長及び直角方向にも同様の溝が掘り込まれているが、この孔辺りから下位は表面が剥落して細部が不明瞭である。下方に掘り込まれた溝の先端はやはり下端部が破損してB面に続いていたどうかはわからない。両孔の間は表面がよく平滑化されているが、両側縁では上の孔付近でよく磨られている。その下位は敲打されたままで平滑化されていないが、これが本来的なものか使用の結果生じたものかは定かでない。

B面：上下の孔の大きさはA面ほどではないが差異があつて、こちらでは上の孔が大きくなっている。穿孔は口径の大きい方から小さい方へ向かってなされたと考えられるので、その場合この2つの孔は逆方向から穿孔がなされたといえる。両孔の間にはやはり溝が掘り込まれるが、A面と違って上端の幅が広くなりシャープさを欠く。下の孔の付近から下位はやはりこちらも表面が大きく剥落して溝の有無はわからない。他方、上の孔から上方へ向かってやはり幅広い溝が掘られていて、上端部では溝というよりは彫りくぼめたようになる。この面も両孔の間はよく磨られて平滑化する。

第144図8はサヌカイト製石鏃で、長さ1.6cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量0.9gを測る。左右不对称で、剥離も浅い。「(旧)住17」の注記があつて、この住居跡に伴うものではない。「(旧)住17」は16号竪穴住居跡の東2mほどの位置で住居跡のコーナーを認めたと設定した遺構であるが、発掘の結果は住居跡と認めるに足るものではなかったために抹消している。

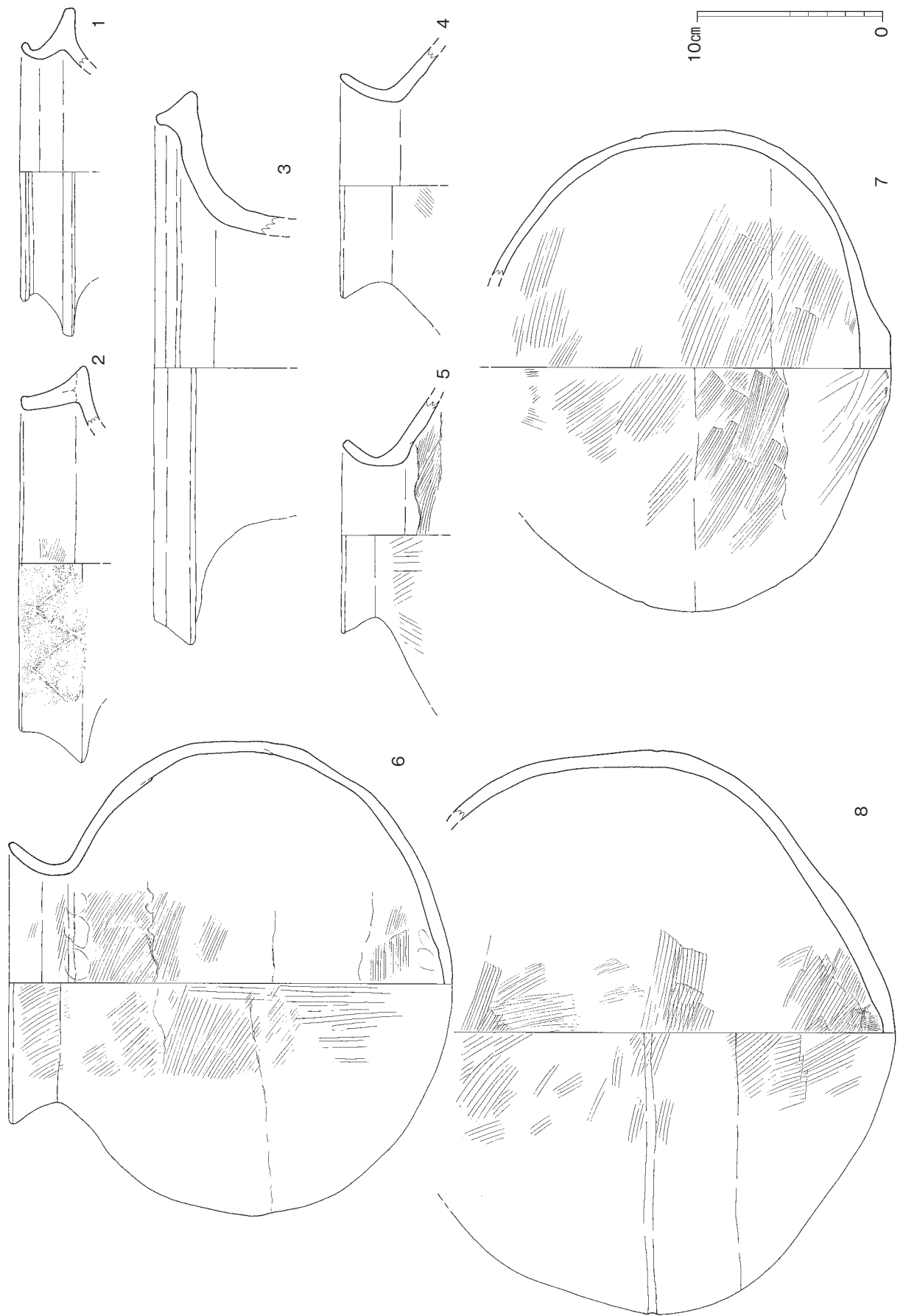
第145図5は石庖丁片で、暗灰色を呈するが淡灰黄色の斑が入る。いわゆる立岩産であろう。背は丸くなり、刃部は鋭い。これも両面穿孔である。

土器（図版37・38、第45・46・48図） 北東隅の焼土ブロック及びその下位から出土した土器を28～32に図示した。それ以外の土器の中、いくつかはナンバリングして取り上げているのだが、照合可能な作図を怠っていて、個別の出土位置を特定できないでいる。

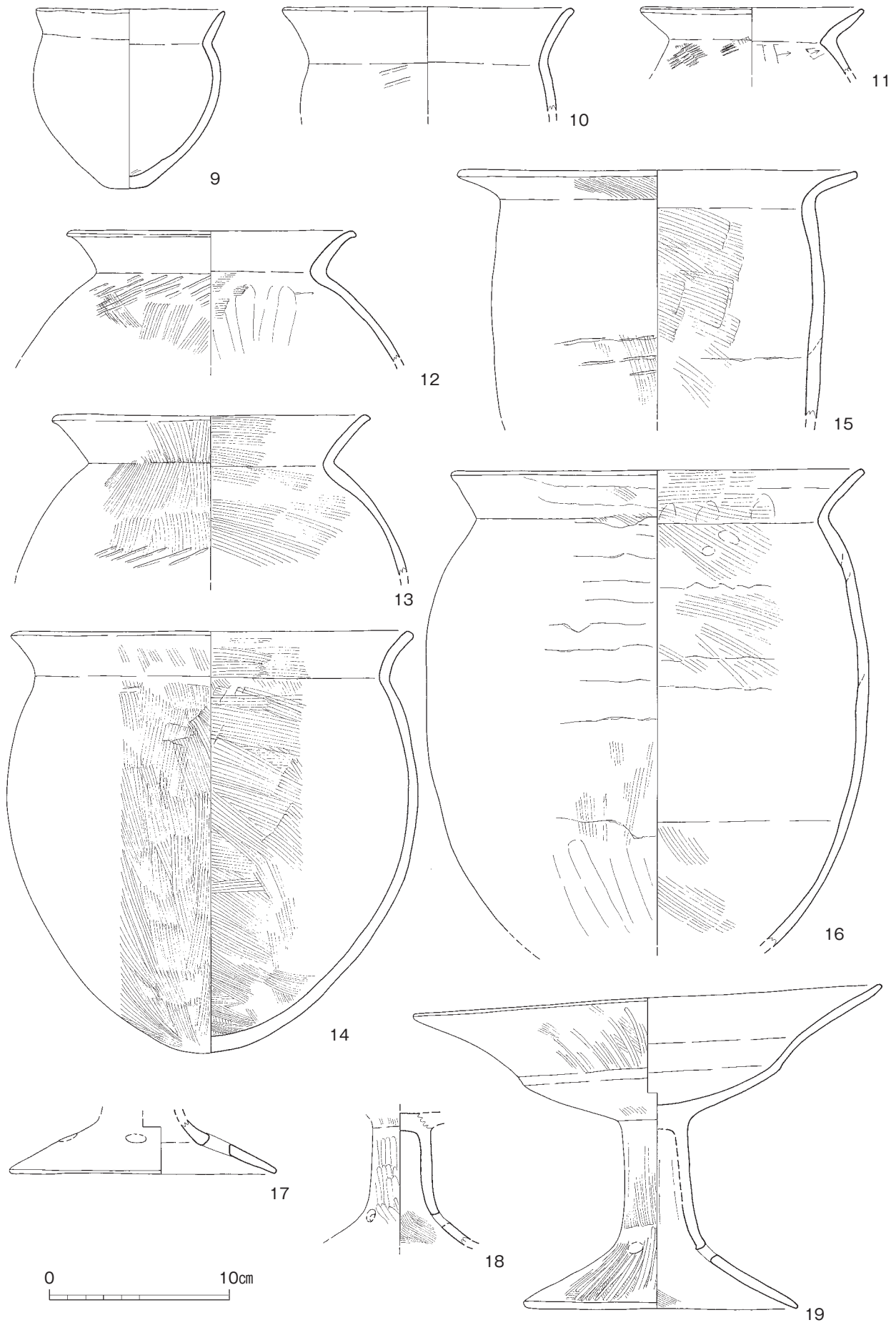


第45図 15・16号住居跡間溝状遺構実測図 (1/30)





第46图 16号竖穴住居跡出土土器実測图1 (1/3)



第47图 16号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)

また、15・16号竪穴住居跡間の溝状遺構出土土器について、すべての整理が終了していないが、一部を図示しておく。

1は頸部・口縁部が鋭角をなして屈曲する二重口縁壺で、顎となる部分が籠状に突出するとともに口縁部が小さく強く外反する。小片で、器表が荒れる。2は口縁部が小さく内傾して立ち上がるもので、これも器表が荒れる小片。3は口縁部が大きく開き、端部を内側上方に肥厚させるもので1/4ほどが残存。灰白色に近く、胎土は粗い。

4～6は体部が張り、口頸部が短く外反するもので、壺・甕いずれと呼ぶか微妙な形態となる。4は焼けて器表が荒れている。5は頸部が締まり、口縁部が短いもので2/3が残存する。体部内面は細かな刷毛目で仕上げる。6～8は体部が3段階で成形されていて、それぞれの継ぎ目を境に調整痕が異なる。6は頸部以下がほぼ完存する。体部は球形に近く、頸部が曲線を描いてあまり開かない口縁部へ続く。また、下半は焼けて赤変する。7・8は口頸部を欠くが、やはり体部の張りが強い。7は小さな平底となり、下膨れの体部となる。下位の継ぎ目部分では、上から貼り付けた粘土を刷毛目、部分的には篋削りで平滑化しようとしたようだが上手くいかずに盛り上がった部分が残る。8は底部が尖り気味となって体部最大径部がやや下位にある。図示部の1/2ほどが残存し、体部上半が焼けて器表が荒れる。

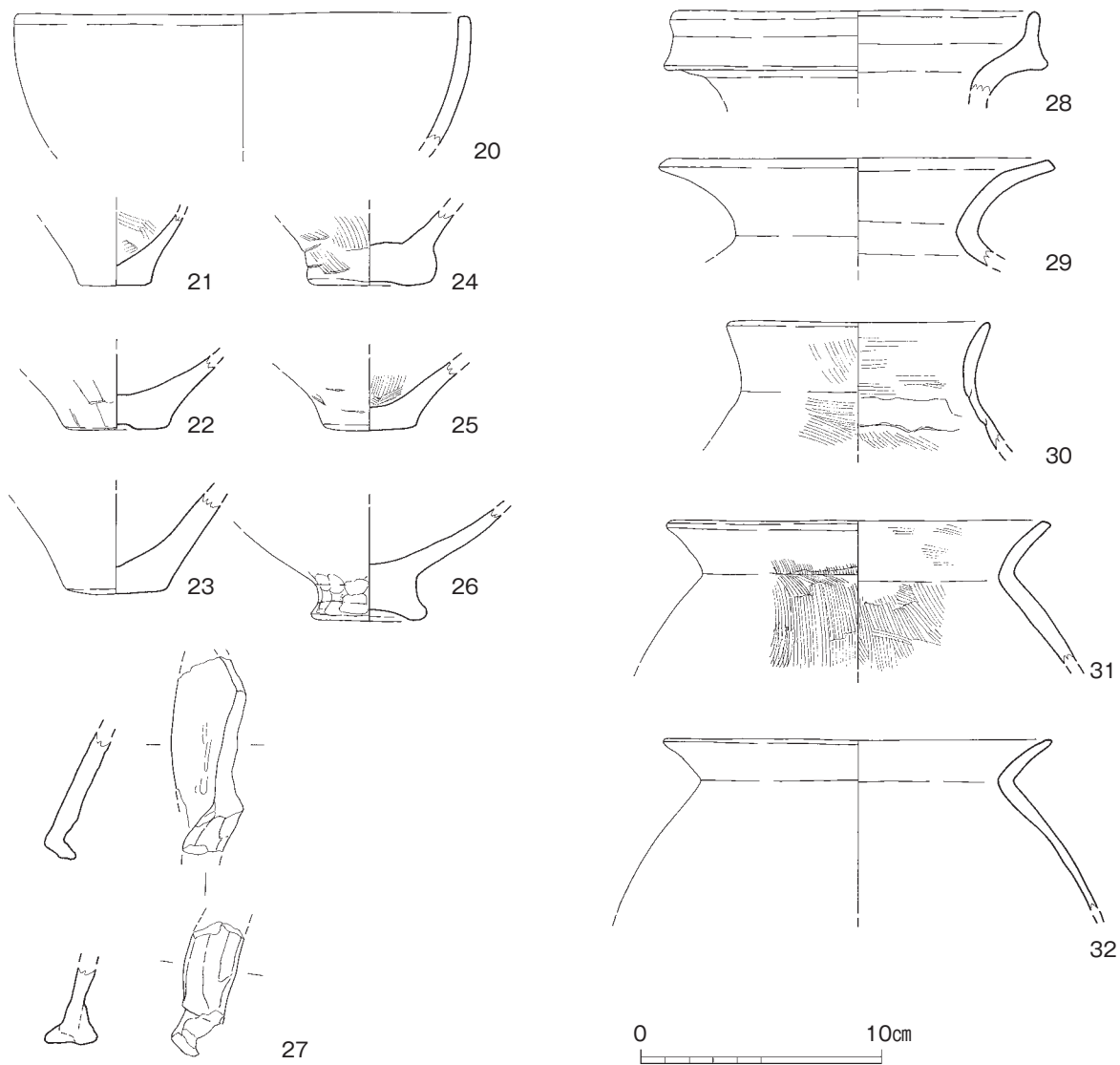
9～16は甕。9は平底で頸部以下は完存、口端部が本来の形状であるかいささか不安がある。屋内土坑内に置かれたものであるが器表が非常に荒れている。10は口縁部が長くなる小片で、器表が焼けて荒れているが、叩き痕がかすかに見える。11は小片で、細かな平行叩きが施され、口端部が上方に小さくつままれている。灰黄色～暗灰色を呈する。12は頸部付近の1/4が残存し、これは口端部が外方へつままれる。体部外面は間隔の広い叩きが施された後に大部分を刷毛目で仕上げている。内面は刷毛目の後に縦方向に撫でている。焼けて赤変し、器表が荒れる。13は頸部付近の1/3が残存。これは全体を刷毛目で仕上げているが、外面に叩きが観察できる。14は体部の張りが小さく、口縁部の外反も弱い。体部外面の下半では縦位の篋削りを施した後に刷毛目でその痕跡を覆うようである。15はさらに体部の張りが弱く、口縁部は強く外反する。焼けて器表が荒れるとともに煤が全体に付着するが、外面に叩きの痕跡が見える。16は底部を除いてほぼ完存するもので、外面全面に煤が付着し、粘土紐接合痕がほぼ全面に残る。体部下端付近には焦げ付きも見られる。

17は小型高杯の脚部で、円形透孔が4個配されるようだが等間隔ではない。器表が荒れている。18は高杯で図示部は完周。これも器表が荒れていて、円孔は3個見える。19は全体がわかる高杯で、全体の2/3以上が残存する。口縁部は外彎しながら大きく開き、下半との境は弱い稜をなす。器表が荒れているが、刷毛目の後に縦方向に暗文を付すようである。脚部には3個の円孔を配して、やはり刷毛目の後に暗文を施す。

20は鉢と思われる小片で、胎土精良で丁寧に作られているが、器表が荒れる。21～26は底部。26は脚台状となる。

27は手焙形土器の小片で、下半の鉢部と覆い部の接合部付近の残片である。覆い部の前面は肥厚させている。胎土に特徴的なものはない。

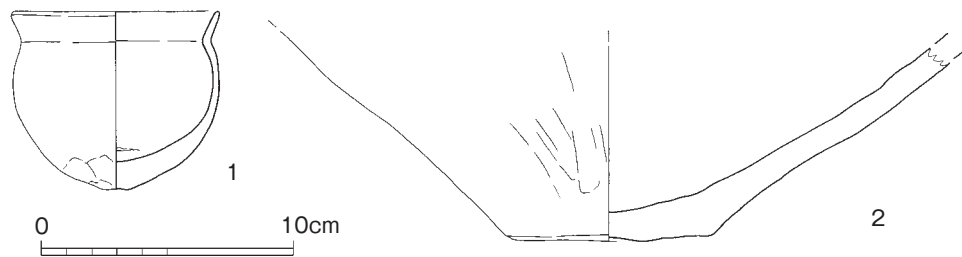
28～32は住居跡内北東部に焼土などとともに廃棄されていた土器群で、検出面から浅いところであったことから、住居跡が半ば以上埋もれた後に投棄されたものであろう。28は二重口縁壺の小片で、赤く焼き上がる。29は口縁部が強く長く外反するもので、1/4が残存する。器表が荒れて、



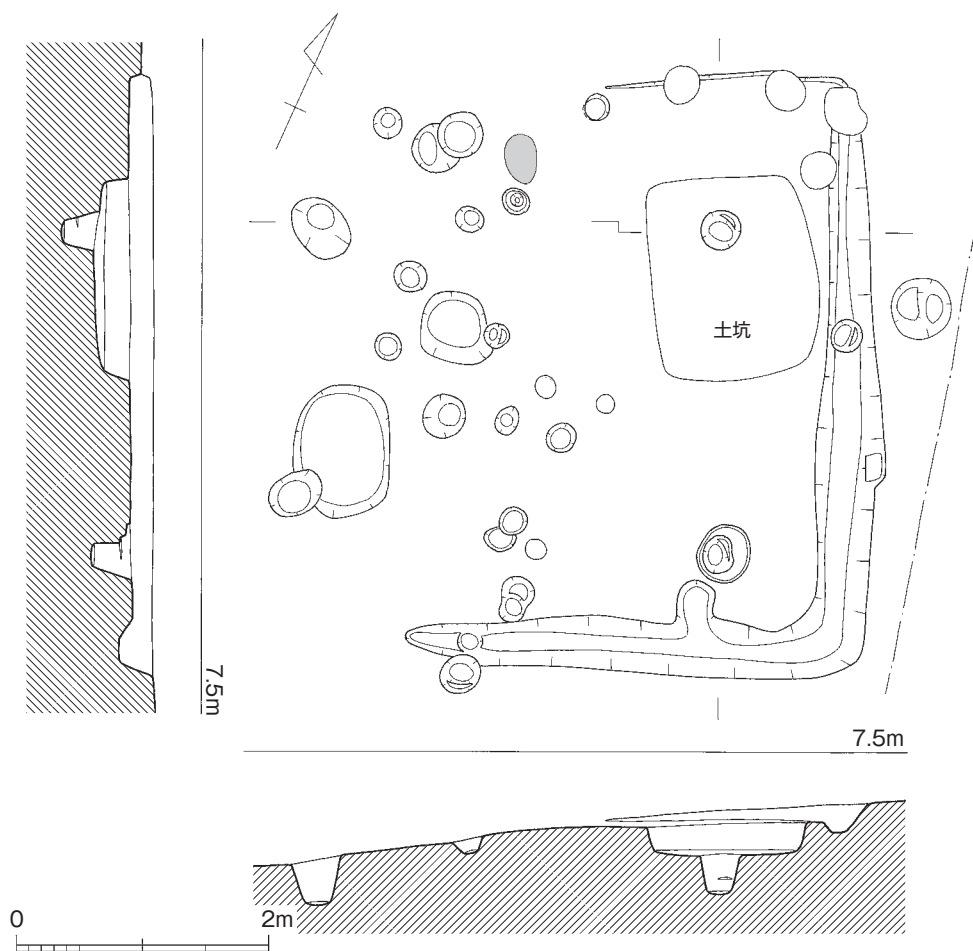
第48図 16号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

調整痕は見えない。30は口縁部の外反が弱い小片で、体部内面には粘土紐の継ぎ目が残るが全体に丁寧な調整を施す。31は口縁部付近が1/4ほど残存、器表の保存状態も良好である。32も口縁部の1/4が残存し、これは器表が非常に荒れている。口端部も本来の形状を残すか疑問がある。

第49図は15・16号竪穴住居跡間の溝状遺構から出土した土器の一部である。ここからは在地系の二重口縁壺なども出土しているが、冒頭に記したように、今回は住居跡出土遺物を中心に整理したために、溝状遺構の整理が終了していない。



第49図 15・16号住居跡間溝状遺構出土土器実測図 (1/3)



第50図 17号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1は小さな平底をもつ小型壺で、体部中位以上の1/3を欠く。口縁部の開きは弱く、体部も張りが小さい。体部下端付近は篋削りで仕上げている。胎土は良好で、調整も丁寧である。2は平底の底部で、体部が大きく開く。これも器表が荒れている。

#### 17号竪穴住居跡 (図版12、第50図)

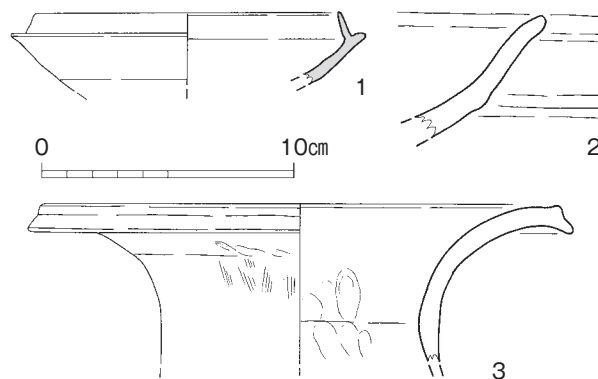
16号竪穴住居跡の北東9m付近、調査区境に近く位置する。これも西辺が失われていて、カマドも袖は残っていなかったが、北辺近くに被熱赤変した部分があることからその存在が想定できる。

残存する東辺は長さ4.8mで、深さは0.2mほどである。東辺及び南辺にはやや幅広い不整の周壁溝が巡る。東西断面軸にのる柱穴を支柱穴とした場合には、支柱穴間距離が南北で2.2～2.7m、東西で3.2～3.3mと東西に長い平面形が想定できる。

なお、内部の長方形土坑は後世のもの。

#### 出土遺物

土器 (第51図) 1は須恵器杯身で、図示部の1/4が残存。復元口径は12cmである。



第51図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

胎土精良で、丁寧に調整される。2は土師器高杯の小片。口縁部下端の稜はとて甘く、内面は篋磨きで仕上げるようである。3は口縁部が大きく開く非在地の弥生土器で、器表が荒れているが1/4が残存する。

### 18号竪穴住居跡 (図版12、第52図)

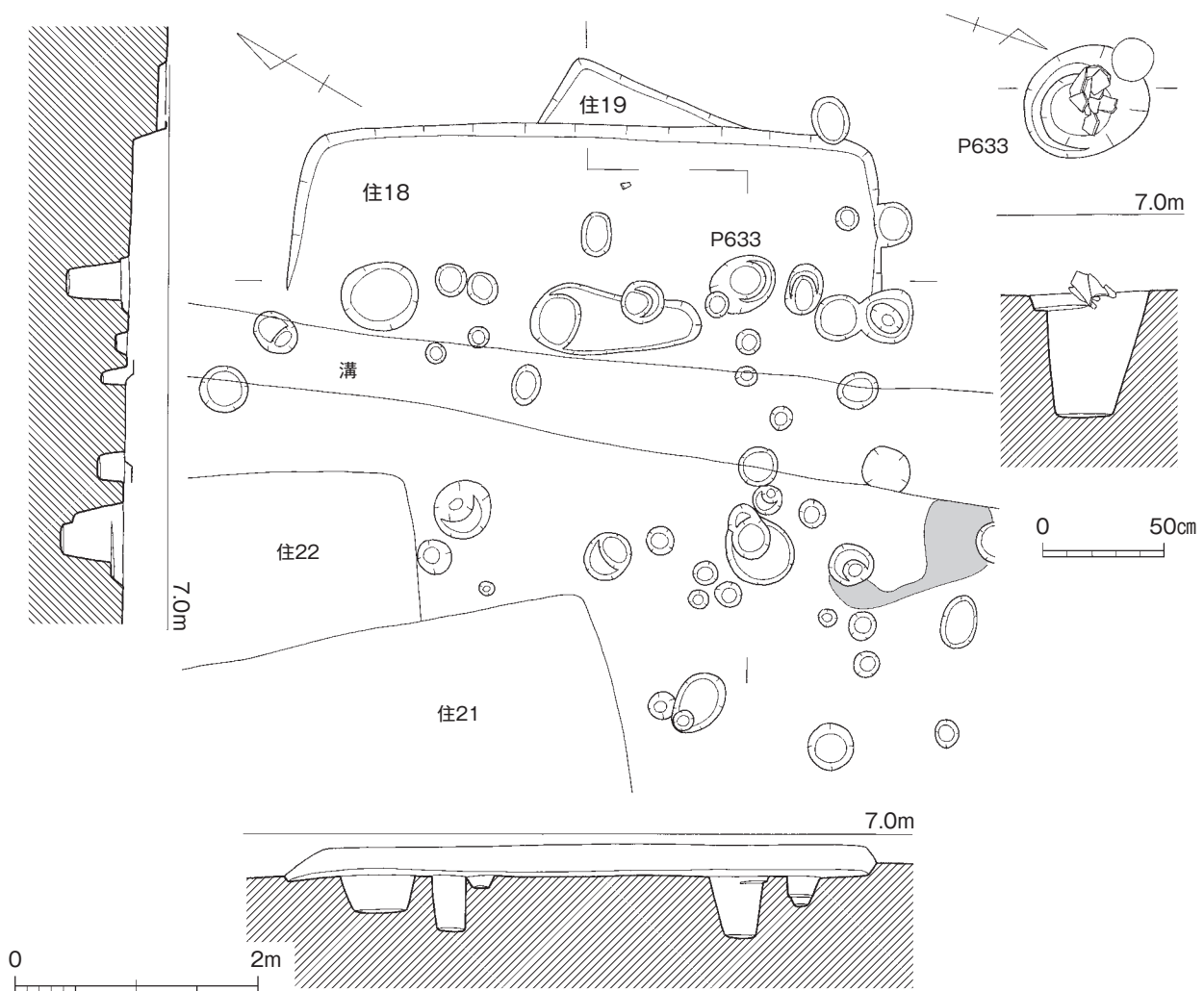
17号竪穴住居跡の北西に近接し、これも西半は失われている。東辺長は4.6m、深さは最大で0.25mが残存する。支柱穴は4本で、カマドの痕跡は確認できない。

#### 出土遺物

土器 (図版38、第53図) いずれも埋土中からの出土である。1～3は須恵器。1は1/4が残存、天井部・口縁部界の稜は甘く、凹線を刻む。口端部はわずかに面をもつ。胎土は良好で、調整も丁寧に行われている。なお、天井部内面に同心円文当て具痕が残る。2も1/4ほどの残片で、これは焼成不良で灰白色を呈し、器表が荒れている。3は平底となるもので、身としておく。外底面は撫でられていて、篋記号が刻まれる。

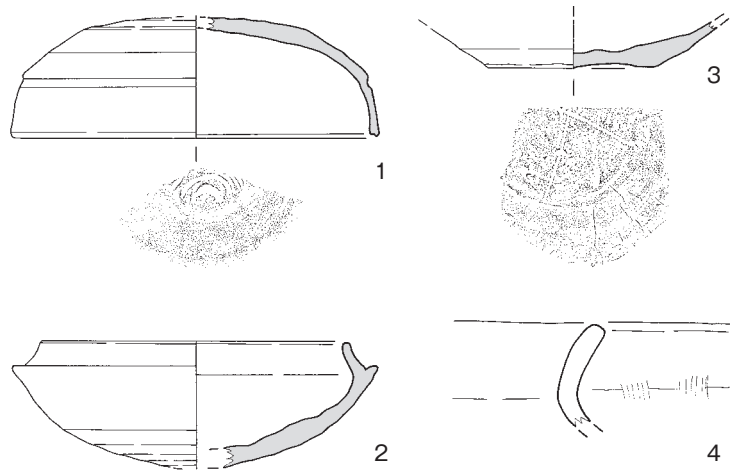
4は土師器甕小片。5は甑で、1/4ほどが残存。器表が荒れている。

6は床面から出土した支脚でほぼ完存する。手捏ねで作られたようで、断面系はおおむね円形と



第52図 18・19号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

なる。器表は荒れて細部は窺えないが、図のような小さなくぼみが3ヶ所あるが、用途がわからない。作成時の偶然で生じたものであるかも知れない。図底面は灰赤色、側面は大部分が灰黒色となり、上面はほぼ全体が灰黒色となっていて火にかけられたようである。

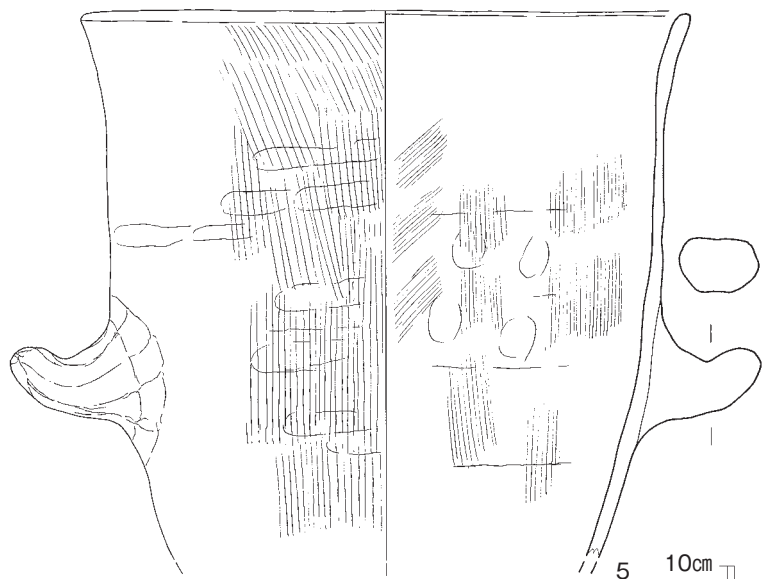


### 19号竪穴住居跡

(図版12、第52図)

18号竪穴住居跡の東辺からはみ出た三角形の落ち込みを住居跡としたが、南東隅が18号竪穴住居跡の南に現れておらず、東辺が2.7mに満たない規模となって住居跡としては小さすぎる。住居跡でないかも知れない。

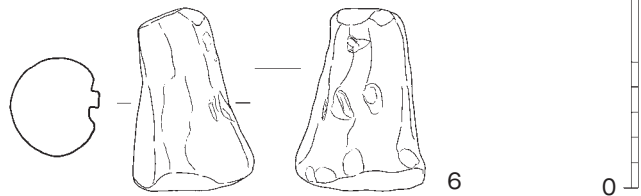
出土遺物はない。



### 20号竪穴住居跡

(図版13、第54図)

19号竪穴住居跡の北西に近接し、南西隅を22号竪穴住居跡に切られる。北東辺は浅い耕作用溝で一部が破壊されている。平面形はほぼ一辺長4



第53図 18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

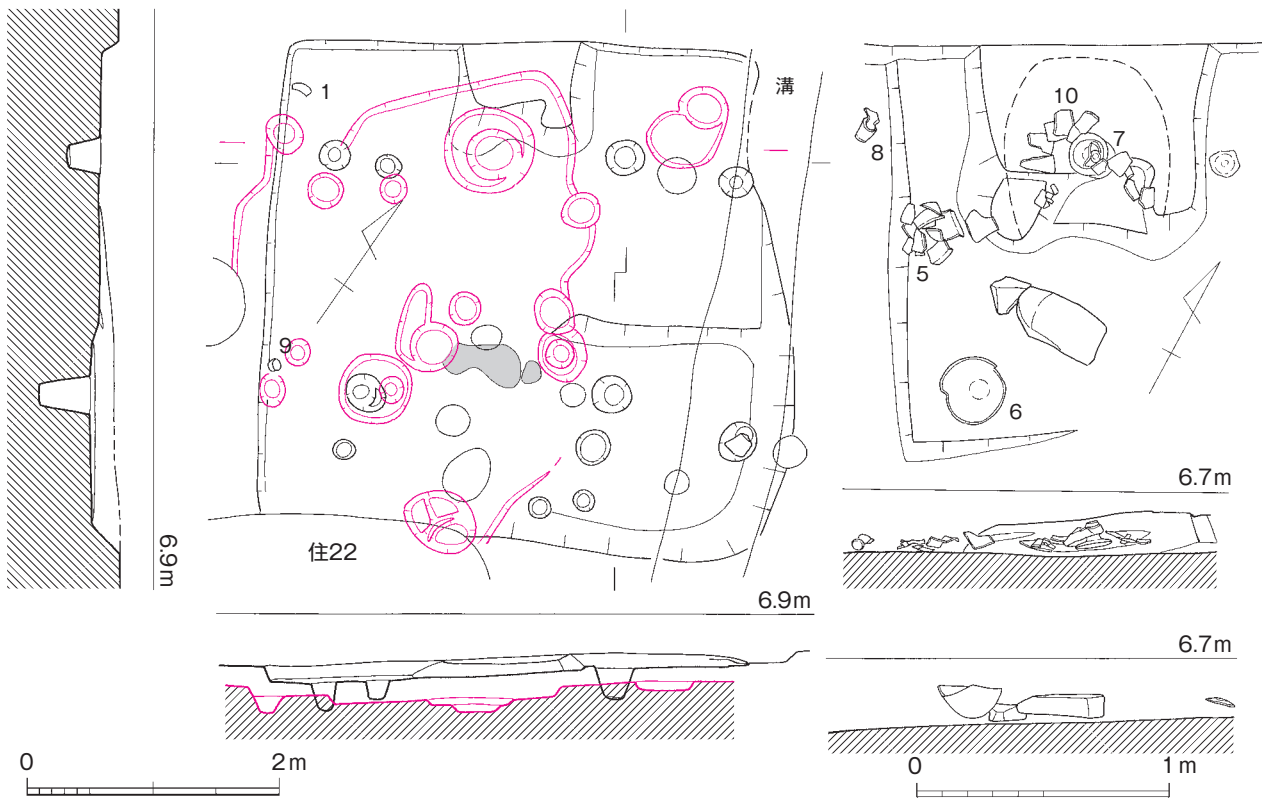
mの正方形に近いプランとなり、深さはカマド付近で0.1mに過ぎない。

北西辺中央にカマドが設置されるが、検出時は全面が暗青灰色粘土と茶褐色土がよく混ざった土で覆われていて、故意に潰されたとの印象であった。左袖はなお暗青灰色粘土を用いた袖の基部を一部で確認できたが、右袖は基底部分が推測できたのみである。

なお、床面に掘り込まれた浅い落ち込みと、それを除去した後に確認した柱穴群がある。明らかに古い土器が伴うが、形状が不整で性格も分からないままである。

### 出土遺物

鉄滓 (第8図6) 一部の表面がガラス化して光沢をもち、砂粒をかんでいる。磁石には反応せず、



第54図 20号竪穴住居跡およびカマド周辺実測図 (1/60、1/30)

13.9gを測る。

土器 (図版38、第55～57図) カマド内では通常は伏せ置かれる土師器高杯 (7) が、ここでは脚部が正立、杯部がその上に伏せられた状態で出土し、周辺に甑片 (10) が散乱するが点数は少ない。カマド左袖前面には土師器甕 (5) が潰れた状態で、そのさらに前面に土師器甕底部 (6) が正置された状態であったが、上半は全く残らない。カマド正面の石材は花崗岩で、加工痕や使用痕といったものは残っていない。そのほか、土器は住居跡内に分散して出土した。

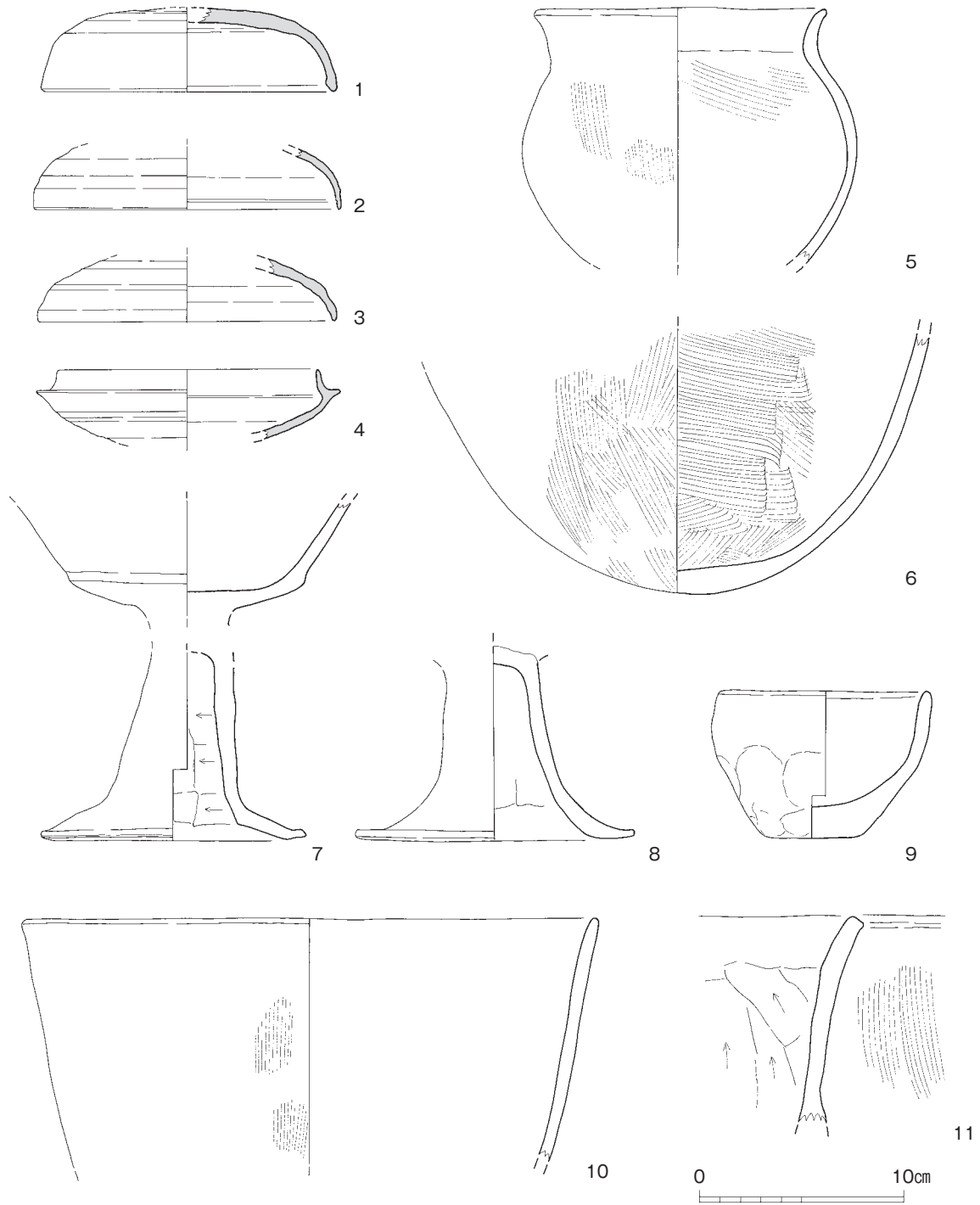
1～4は須恵器。1は口縁部の1/2が残存、口端部に面をもつが、天井部から口縁部にかけては丸く連続して境界はない。胎土良好で調整も丁寧であるが、焼成不良で灰白色となる。2～4は小片。いずれも丁寧な調整が施され、天井部から口縁部にかけて連続する点では似ているが、2は器肉が薄く口端部内面に沈線を付し、3は器肉が厚く口端部は丸く終わる。

5は口縁部が短く弱く外反するもので、壺と呼んでもよいような形である。頸部は完周し、体部下半は焼けてピンク色となって、器表の剥離が見られる。6は図示部がほぼ完存する甕体部片で、外面は焼けて器表が荒れるが、内面は良好に遺存する。

7は支脚として用いられた高杯で、杯部と脚部が接合し得ない。いずれも良好に残存するが、杯部口端部はほとんどを欠くようで、本来は倒置して使用されていたことを思わせる。しかし、杯部口縁部付近のみが黒色化していて、これは倒置した場合にはありえない変色であろう。8は柱状部が完周する。法量・形状は7に似る。9は底部が完存、口縁部の1/2ほどが残存する鉢で、これも口端部が本来の形状を留めているか不安がある。器表は荒れている。

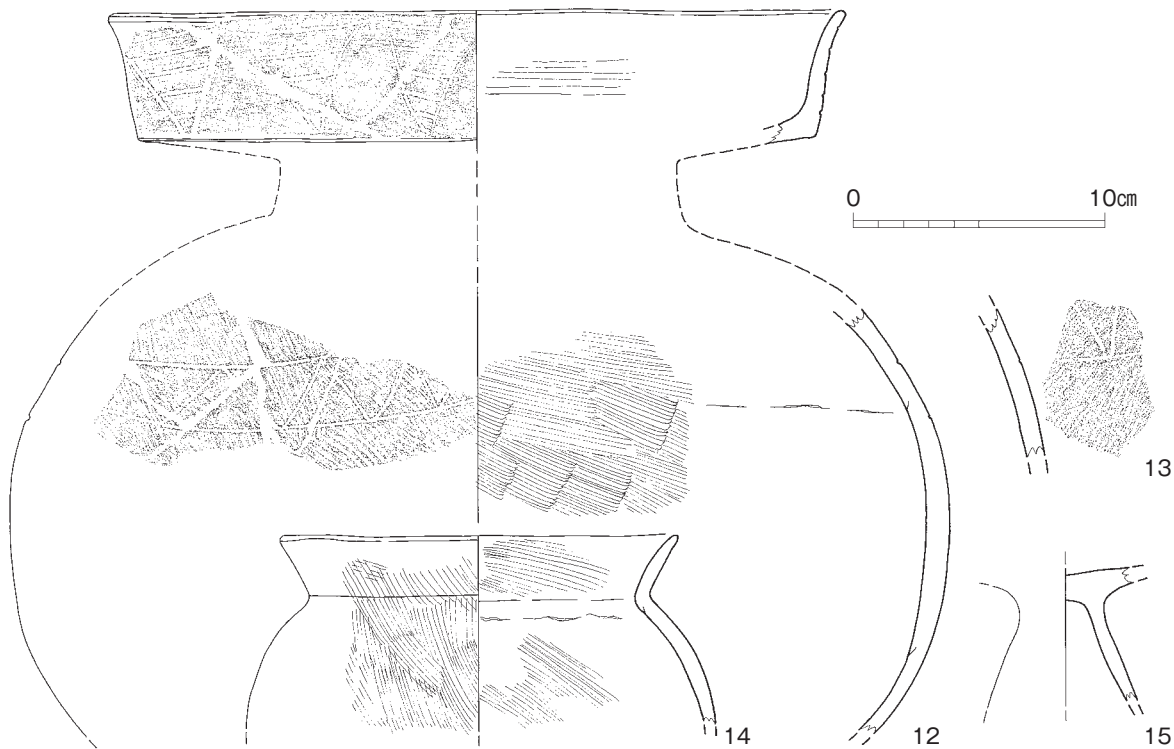
10・11は甑片。10は体部から口縁部まで直線的に広がって変化を加えないもので器表が荒れている。11は口端部を断面方形とする。





第55図 20号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

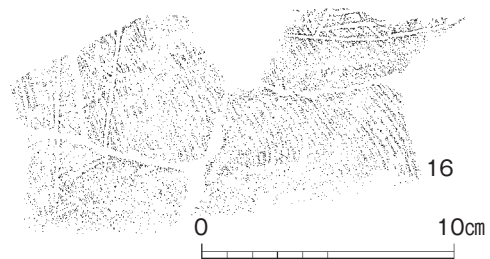
12～16は「下層」出土と注記される。12・13・16は古式土師器で接合しないが同一個体であろう。二重口縁壺で、口縁部外面に篋描の複線鋸歯文を連続して刻む。肩部にも2条の沈線間を山形文で埋めるが、16では肩部に複線鋸歯文があって、縦方向に平行線文+山形文を配している。胎土や調整技法に特別なものは見られない。13は胎土良好、丁寧に作られた甕小片で内外面のほとんどを刷毛目で仕上げる。15は高杯脚部片で、よく焼けて赤変する。



第56図 20号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

21号竪穴住居跡 (図版13・14、第58図)

20号竪穴住居跡の南に近接するが、後述する21号竪穴住居跡が両者の間にあつて、直接の切り合いは不明である。また、西側には弧状溝や27号竪穴住居跡なども重複していて、南西辺ははっきりしなかった。22号竪穴住居跡のカマドは21号竪穴住居跡に切られた状況で検出しているため、22号住居跡との先後関係は問えない。



第57図 20号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

断面に示した柱穴が支柱穴の2本としてよいと思うが、残る2本は確認できなかった。

南東辺中央付近に幅、長さともに1.5mほどの方形に粘土の分布がみられた。断ち割って土層をみると上層のみに茶褐色土を交えた灰白色粘土が水平とってよい堆積状況を示していて、自然堆積ではないようである。用途を示すような痕跡はなかった。

また、北東辺中央には真砂土・焼土が分布していて、それは22号竪穴住居跡の内部まで連続していた。支脚・袖を確認できなかったが、真砂土は焼けて部分的に赤変し、焼土・炭などを交えて10cmほどの厚さで堆積していた。これをカマドの残骸とした場合は21号竪穴住居跡のラインを間違えたあるいはさらに1軒の別の住居跡が重複していたことになるが、東南隅は確実なので気付かない住居跡が1軒あった可能性が高いのであろう。以下に紹介する遺物は少ないが、1に図示した須恵器杯蓋が他の須恵器に比べてかなり廻る型式であり、22号住居跡で紹介する「カマドの残骸」出土の土器との併行関係は評価が困難であるが、時期的に古い須恵器を伴う住居跡が存在した可能性がある。

## 出土遺物

土器（第59図1～5） いずれも埋土中からの出土であるが、4に示した最も新しい様相の須恵器は「J（住居跡）21付近」との注記があって、直接この住居跡に伴うものとはいえないようである。

1～4は須恵器。1は天井部・口縁部界の稜がしっかりしていて、口端部の面がやや甘い。外面の篋削りは丁寧になされるが、内面の横撫では雑である。内面に同心円文当て具痕が残る。2は1/3が残存し、図で見る以上に天井部は平坦化する感があって、天井部から内彎しつつ口縁部にいたる器形となる。内面の調整はとても丁寧になされ、復元口径は13cmを測る。3は口縁部付近の1/4が残存する杯身で、胎土は良好だが焼成が甘く、灰白色となる。4は平底となる杯身で、器高が高い。返りはこの種の形態としては末期的な様相となり、内面の調整は丁寧だが、外底面は篋切り未調整のようである。底部・口縁部の1/2～1/3が残存。

5は土師器甕の小片で、器表が荒れている。

## 22号竪穴住居跡（図版14、第58図）

先述したように20号竪穴住居跡を切り、21号竪穴住居跡に切られる。北東辺での規模は3.5mほどである。カマドは北西辺で一部を検出したのみ。床面検出の柱穴はいずれも深さ0.1m内外のも



第58図 21・22号竪穴住居跡実測図（1/60）

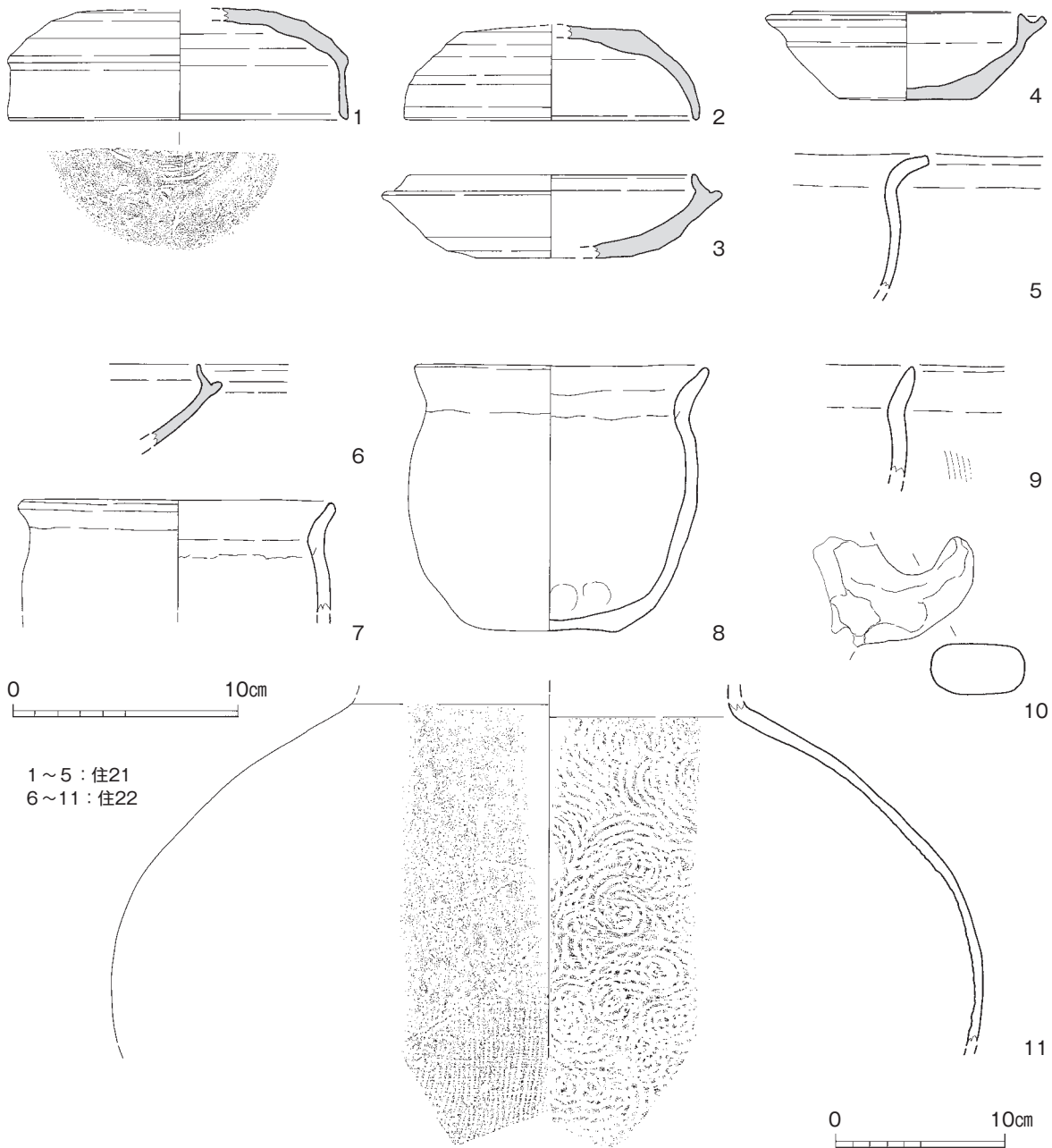
ので、支柱穴には相応しくない。

### 出土遺物

鉄製品（図版44、第8図5） 全長6cm、幅1.5cmほどの板状鉄製品である。図右端は丸く、左は直線的または小さくくぼんでいる。図左寄りに大きく膨らむ部分があって、あるいは鋳が付されているものかと考えたが、X線撮影では単なる錆であった。したがって、刀子の茎としてよかろう。

土器（図版38、第59図6～11） 21・22号竪穴住居跡にまたがって広がる「真砂土・焼土」に埋もれていた土師器甕（8）・須恵器甕片（11）は、先述したようにこの住居跡とは別の遺構の遺物である可能性が高いがここで紹介する。

6・11は須恵器。6は小片だが、胎土良好で調整も丁寧な杯身。7は1/2が残存する土師器甕で、



第59図 21・22号竪穴住居跡出土土器実測図（11は1/4、他は1/3）

焼けて赤変し、器表が荒れる。なお、口縁部内面は黒色化している。8は土師器甕で底部付近が完存、口縁部付近は1/2が残存する。平底で体部は張りが弱く、楕円形に近く歪む口縁部は弱く外反する。よく焼けて赤変し、体部下半では大きく剥離する部分が2ヶ所ある。また、内面に黒色の付着物が見られる。9は口縁部の外反が弱い甕の小片で、器表が荒れている。11は須恵器甕で、外面に濃緑色の自然釉が掛かる。

### 23号竪穴住居跡（図版14、第60図）

20号竪穴住居跡の北西に近接して位置する。長辺は6.6m、短辺で6.1mを測り、深さは最大で0.7mほどとなる。新しい時期の溝に切られている。

支柱穴は4本で、中央部から北西に偏して焼土の広がりが見られたが、炉跡といえる掘り込みは確認できなかった。

屋内土坑は他の相前後する時期の住居跡と同様、北西辺中央付近に位置し、これは形状がやや不整である。なお、ベッド状遺構は確認できておらず、少なくとも当地域で一般的な削り出しのものはなかった。

### 出土遺物

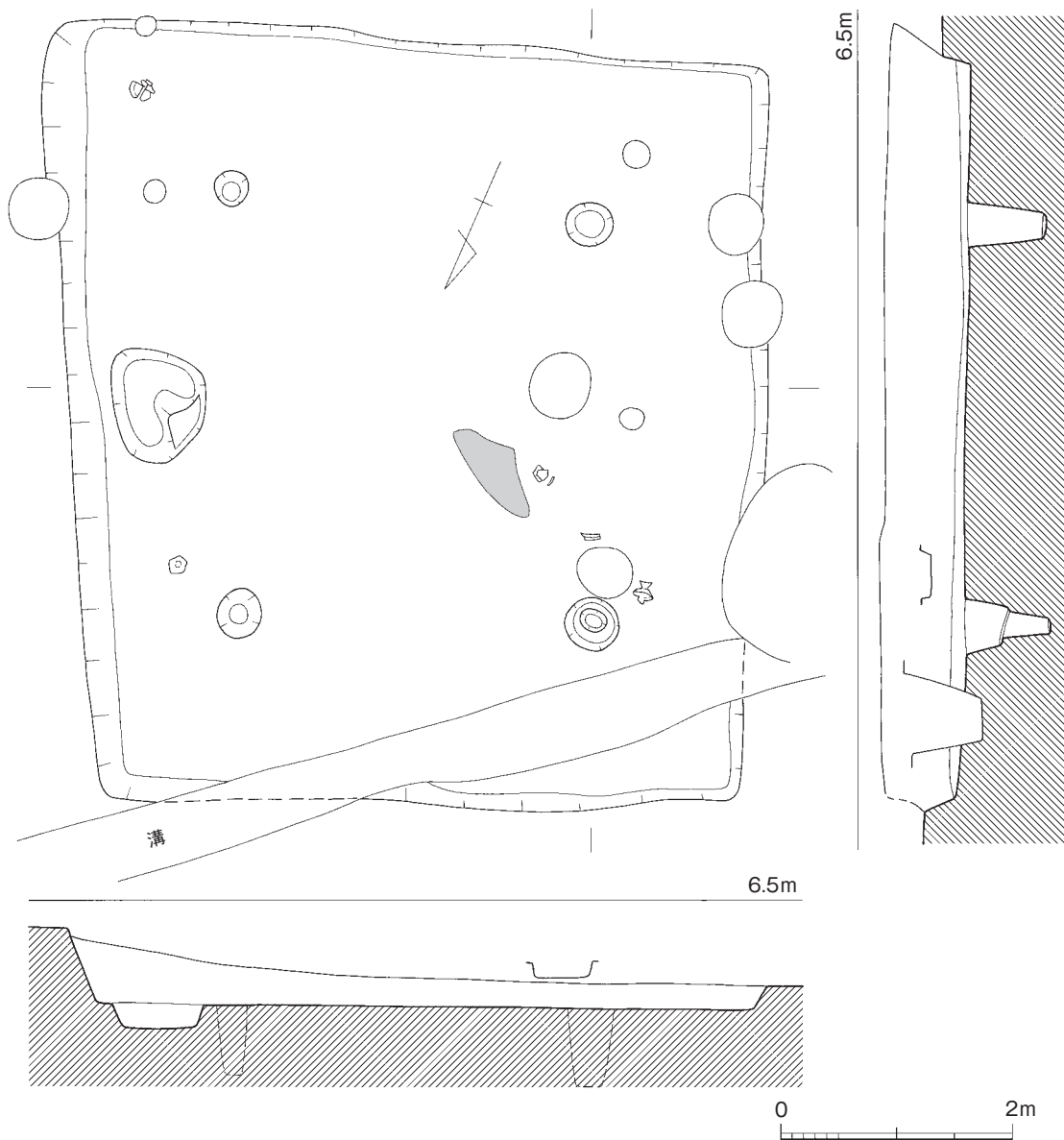
土器（第61・62図） 表土掘削時は東辺が見えたのみでその付近から西側は包含層に覆われていたため、四周のラインを検出するために包含層を除去した。以下では、床面等から出土した遺物（1～7）、住居跡埋土から出土した遺物（8～32）、包含層除去の過程で出土した遺物（33～42）に分けて紹介する。

1は屋内土坑から出土した甕小片で、強く外反する口縁部の外面に煤が付着する。2は口縁部が直線的に高く伸びて端部を外方へつまみ出す甕で、口縁部付近の1/3が残存する。胎土は良好で、体部外面には細かな刷毛目を施す。3は頸部付近で1/3が残存する。口縁部は高く外彎し、端部を丸く収める。体部外面では縦刷毛の後に部分的に横刷毛を施し、内面は丁寧な篋削りで仕上げている。

4～7は高杯で、いずれも口縁部が外彎気味に高く伸びる。4は大部分が残存する。杯部が深く、口縁部が緩く外彎して伸びて端部を丸く収める。屈曲部の稜は甘い。脚部も柱状部が直線的に開いて、端部は小さく外反する。これは器表が荒れている。5は杯部の深さが浅くなるが、器形は4に似る。6は口縁部が直線的に伸びて端部を小さく外折するもので、胎土良好で丁寧に造作されるが、器表が荒れている。7も器表が荒れる。

8～10は須恵器で、いずれも1/4に満たない小片である。8は天井部・口縁部界の稜が残存、口端部の面も意識されている。これは胎土良好で調整も丁寧である。9・10は口縁部が短く内傾し、端部を丸く収めるもの。

11～32は土師器。11は体部が完存する小型壺で、やや偏球形の体部に直線的に高く立ち上がる口縁部が付く。調整は丁寧になされるようである。12は鉢あるいは甕で、口縁部付近の1/3が残存。体部外面は篋削りで仕上げる。13は平底の底部付近の1/3が残存する手捏ね風の体部である。14は鉢の小片で器表が荒れる。15は縦方向に1/4ほどが残存する鉢であるが、復元形状にやや不安がある。全体に焼けて赤変する。16は小片。17は壺としてもよいような形状となる1/2の残片で、暗灰白色となり、器表が荒れる。体部内面は篋削りで仕上げる。18は小片で、これは赤く焼き上がる。19は1/3の残片で、外面は荒れているが、体部内面は篋削りで仕上げる。20も小片。

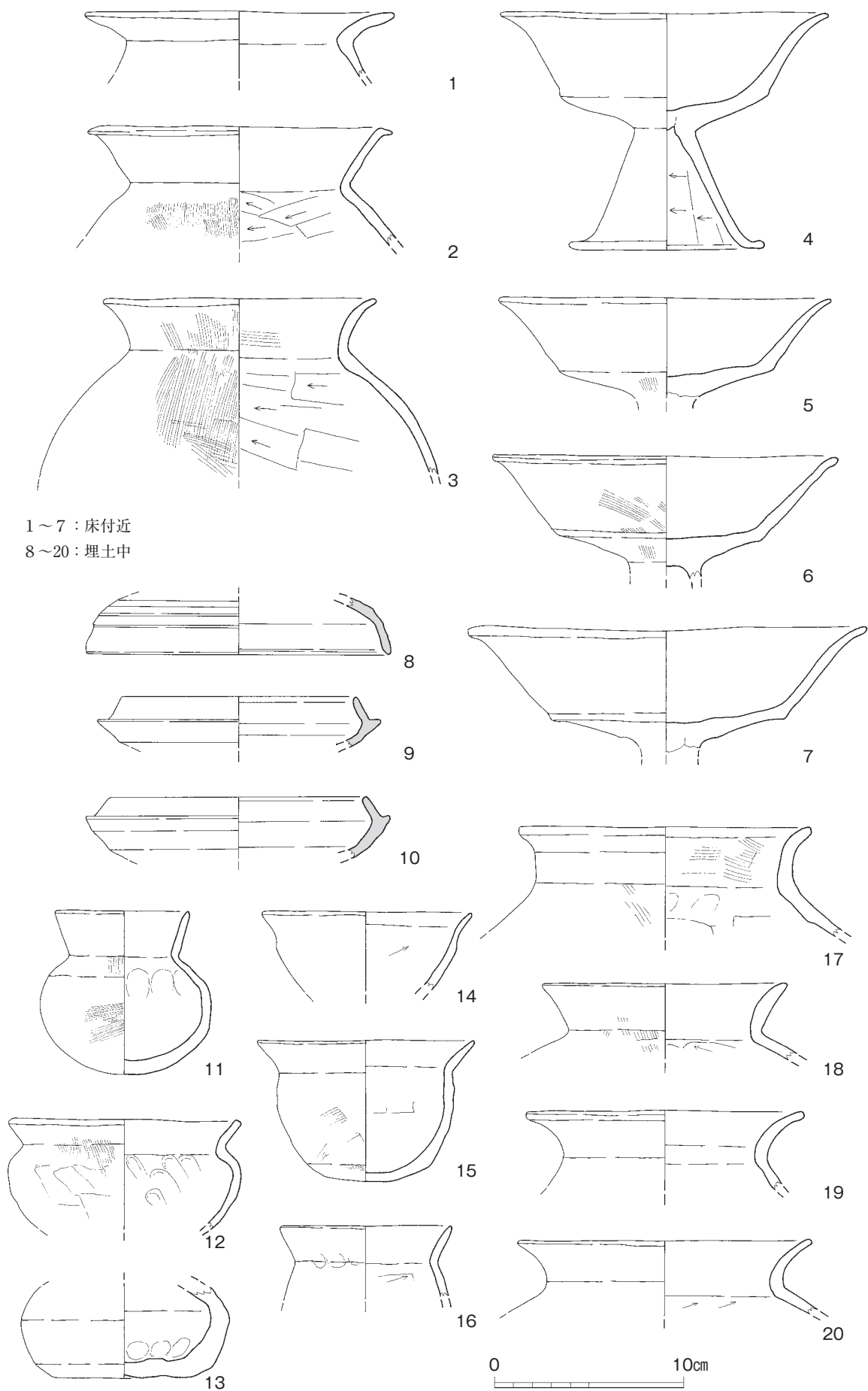


第60図 23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

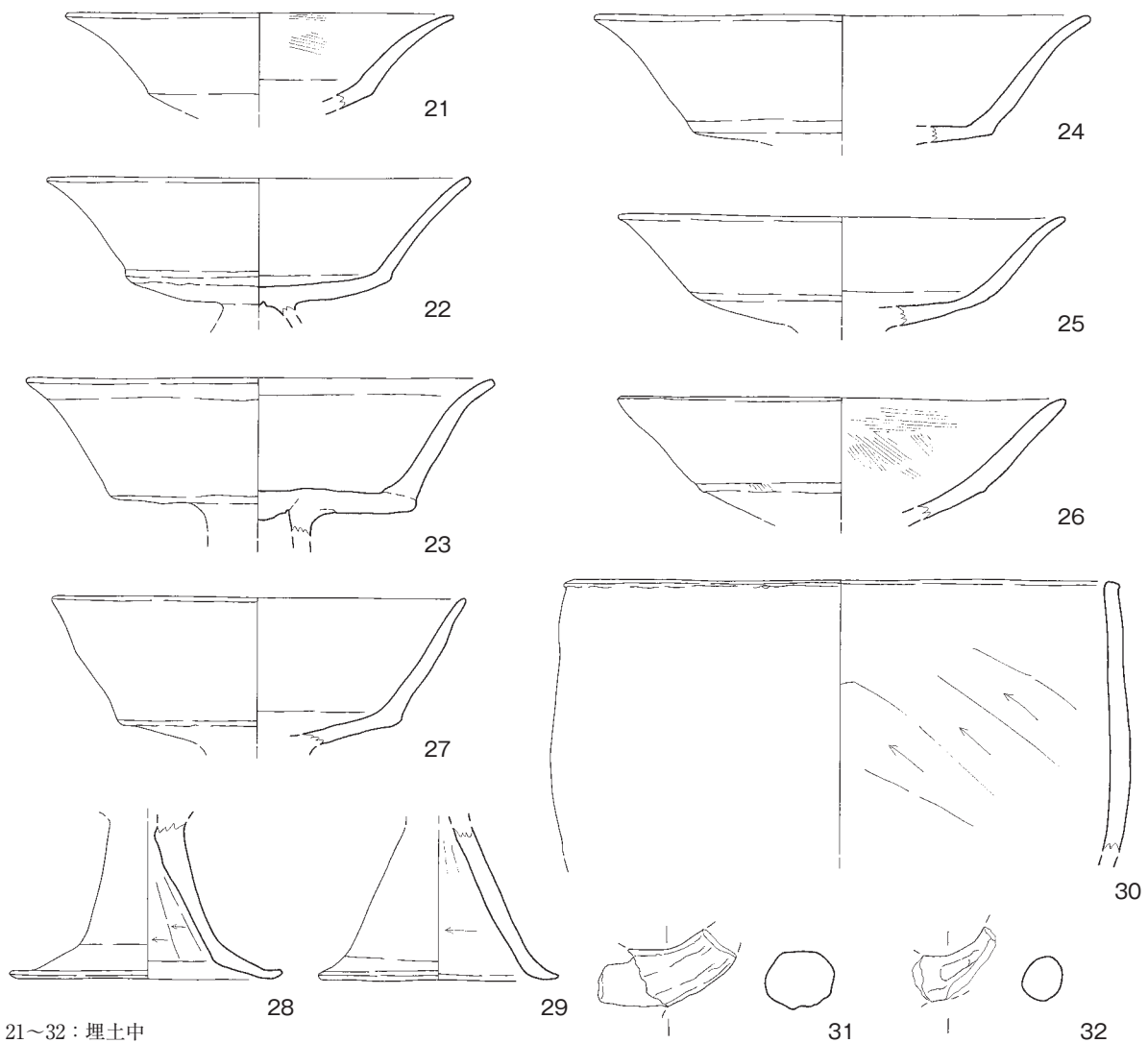
21～29は高杯。21～24は口縁部が外彎しつつ立ち上がるもので、下端の稜線がおおむねしっかりしたものである。21は1/4の残片で器表が荒れている。22は図示部がほぼ完存する。全体に丁寧な横撫でで調整し、稜線は突帯状となる。23は2/3が、24は1/4残存、これらも器表がとても荒れている。25は上記の杯部に比して浅くなり、稜線もごく弱いものとなる。これも器表が荒れる2/3の残片。26は肉厚で、稜線が不整な突帯状となる1/3の残片。灰白色である。27は杯部上半がやや膨らみをもつもので、焼けて灰赤色～灰黒色に変色する。1/3の残片。28・29の脚部も器表が荒れている。29は脚端部が欠失するように見えるが、これが本来の姿のようである。

30は甑であろうか。体部から口縁部にかけて直線的で、端部に面をもつ。把手の痕跡は見えないが、1/3ほどが残存する。31・32は把手であるが、通常の甑の把手とは形状が異なって断面が円形に近い。

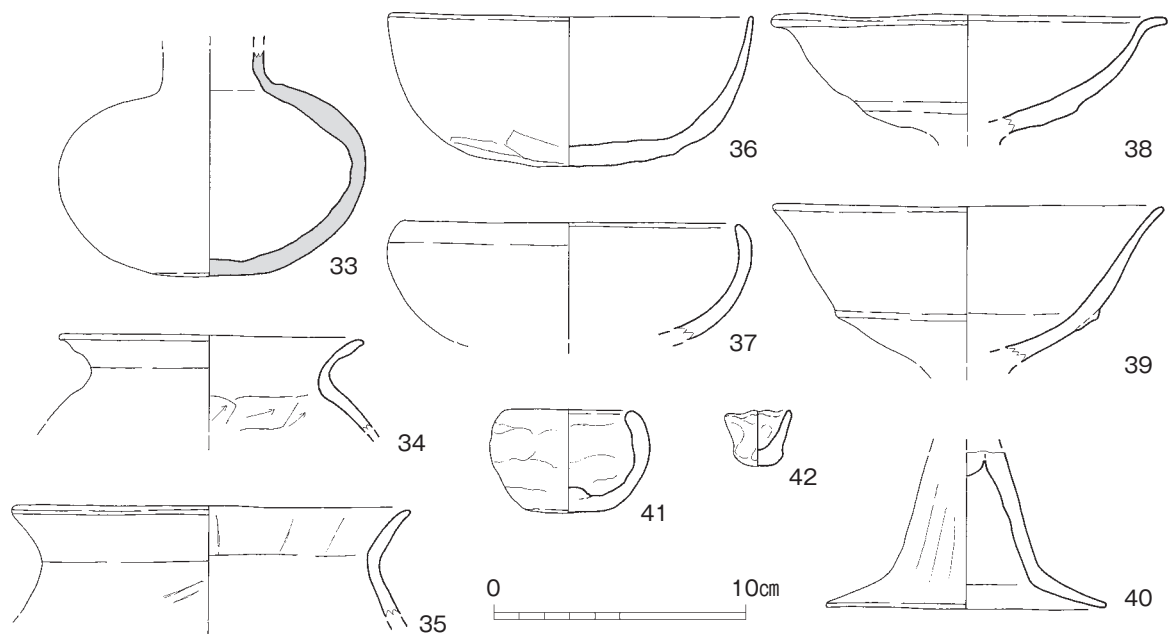
33は偏球形の体部をもつ須恵器壺で、体部の3/4が残存する。胎土精良で、丁寧に横撫でを施す。外面に灰を被る。34は小片、35は1/3が残存する甕で、後者は体部外面を叩き、内面を篋削りで仕上げるようである。36は椀で、口縁部は直立、底部は外面を不定方向の篋削りで丸底とする。器表



第61图 23号竖穴住居迹出土土器实测图1 (1/3)



21~32：埋土中  
33~42：上層



第62图 23号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)



が荒れる1/4の残片。37は体部が内彎し、口縁部が内傾する小片。

38～40は高杯。38は口縁部を水平に近く折り曲げるもので、稜は形状不整で形骸化する。1/3の残片。39は口縁部が直線的に高く立ち上がる。焼けて赤変する1/4の残片。

41・42は手捏ねの小型土器。41は胎土良好で、42は丁寧に作られる。

#### 24号竪穴住居跡（図版15、第63・64図）

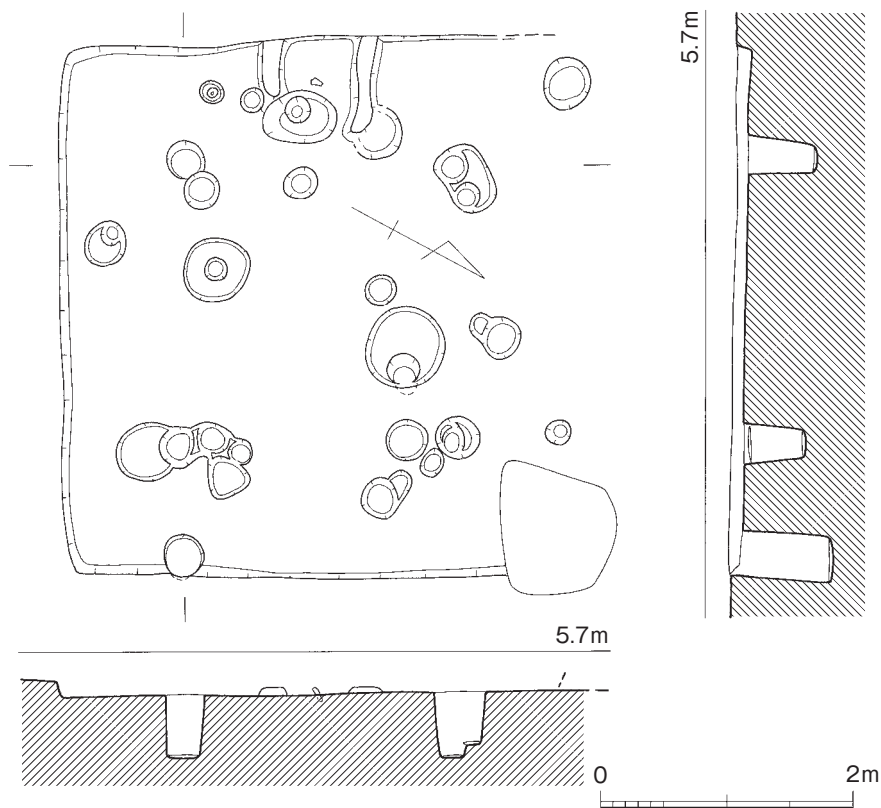
23号竪穴住居跡の南西部に位置する。表土掘削直後に南西辺とカマドは見えしたが、他の辺は包含層に覆われてまったく見えなかった。包含層を少しずつ掘り下げてプランを確認したときは、すでに深さは0.1mに満たないものとなっていた。また、北西辺は発掘開始当初に開けたトレンチが掘り割って失われた。

カマドは南西辺にあって、焼土を交えた灰白色粘土を袖に用いるが、袖内面に焼けた痕跡は見えなかった。前面に柱穴があって、火床も残っていない。カマド内には他の住居跡のように土器群はなく、石製支脚の他は数点の土器片が出土したのみである。左袖の外側に接して破損した石製勾玉の出土をみたが、所在不明で紹介できない。

#### 出土遺物

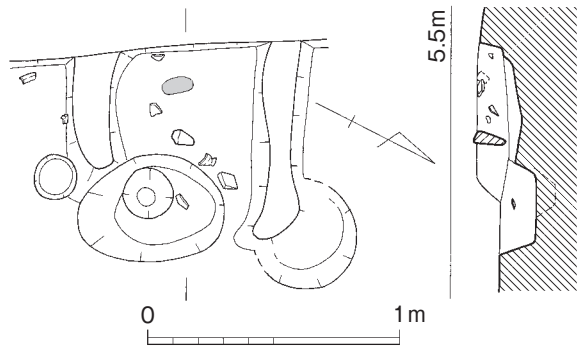
土器（図版38、第65図） いずれも埋土中からのもので、良好な状態で出土したものはない。

1～10は須恵器、ほかは土師器である。須恵器はいずれも胎土良好で、調整も丁寧になされている。杯蓋は完存するものはないが、復元値で口径14.0～15.0cmを測る。天井部・口縁部界は弱い凹線で画するが、2のように連続して移行するものもある。口端部は匙面状とするもののほかに沈線を刻むもの（5）もある。1は1/4の残片。2は天井部が扁平で器肉が薄い1/2の残片。3は1/4の残片。

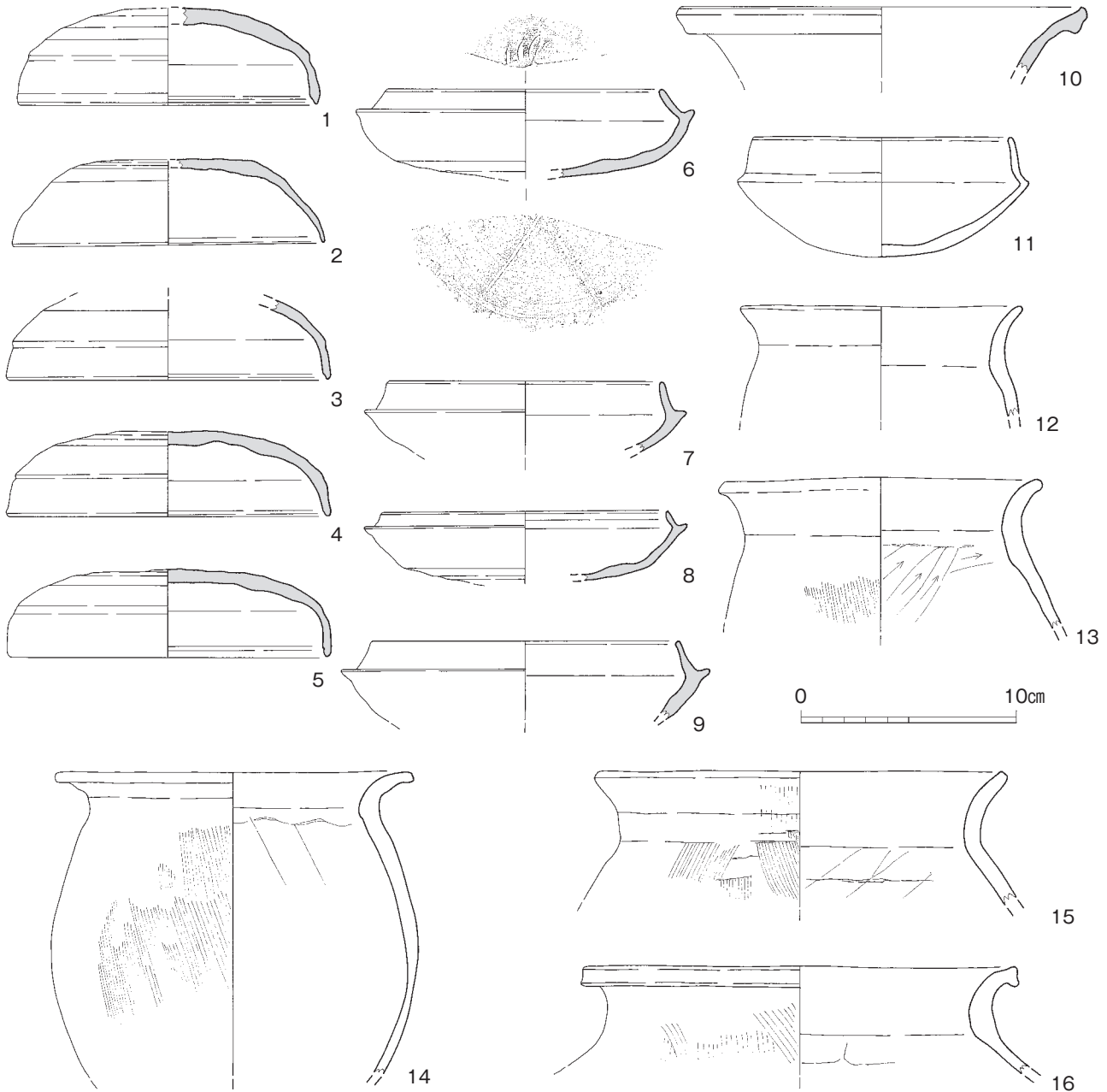


第63図 24号竪穴住居跡実測図（1/60）

4・5は小片で、5は口縁部外面の一部に刷毛目状の痕跡が残る。杯身もいずれも残片で、口径は12.6～14.0cmに復元できる。立ち上がりは8に示したものがほかと異なって短いが、いずれも端部を丸く収めるものである。6は1/3が残存し、内面に同心円文当て具痕が残るとともに外面に籠記号が刻まれる。7は外面に灰を被り、焼け歪む。8も外面に灰を被る。これは器肉が薄く、2の蓋とセットになるものか。10の壺口縁部片は焼成不良で、灰黄色～灰色となる。



第64図 24号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30)



第65図 24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

部は完存、口縁部付近は1/2が残る。器肉が薄く、赤く焼き上がって器表が荒れる。12は小片で、口縁部内面中位以下に焦げ付きが見られる。器表は荒れている。13は頸部付近が完周。灰黄白色となり、体部内面は甑のような雑な篋削りを施す。14は1/4ほどが残存するが焼けて赤変、器表が荒れている。体部内面は篋削りのようである。15は1/3の残片で、口縁部は形状不整である。16は口縁部を肥厚させて下方につまみ出す。体部内面は篋削りで仕上げ、灰黄色～灰白色となる。これは混入であろう。

## 25号竪穴住居跡（図版15～17、第66・67図）

検出時には3基の住居跡が重複するものと考えていた。しかし、旧27号竪穴住居跡としたものは検出時に平面プランを確認できたものと考えていたが、掘り下げた結果、確実にこれに伴う床面遺構を確認できなかったため、欠番とする。

25号竪穴住居跡は内側の4.7×4.4mの規模を想定している。床面中央からやや北西に偏して焼土が覆う柱穴様の落ち込みがある。炉跡としては通常と形状が異なるが、北東に重複する小土坑を炉と想定できよう。ただ、これに伴う柱穴は不明である。南東辺に接して、東に偏して位置する土坑がいわゆる屋内土坑と思われる。

土器の出土状態を図示したが、これを見ると大部分の土器が25号竪穴住居跡としたものの範囲に収まることから、この住居跡が後出するのであろう。

### 出土遺物

鉄製品（図版44、第8図3） 柳葉形の鉄鏃で、残存長3.8cmほどである。両面ともに扁平で鏃は見えない。刃は先端から膨らむ部分までで、図下半の側縁は面をもつようである。

石製品（図版46・47、第147図10・13） 10は灰黄色～灰黒色粘板岩製の砥石。図示した面は全面に斜位の条痕様の筋が入るが、これは砥石として使用され痕跡ではない。使用の前段階の加工であろうか。図背面が最も使用されていて、右側面も小さな凹部が多く残っていて使用されている。左側面は凸部の一部が磨れている。13は黄白色～灰白色の地に黒色・褐色の大小の斑が多く入る粘板岩の砥石。図下端が折損し、図上部が欠損するが、4面と上面がよく使用されて平滑化する。図示した面に幅2mmのしっかりした条線が入る。

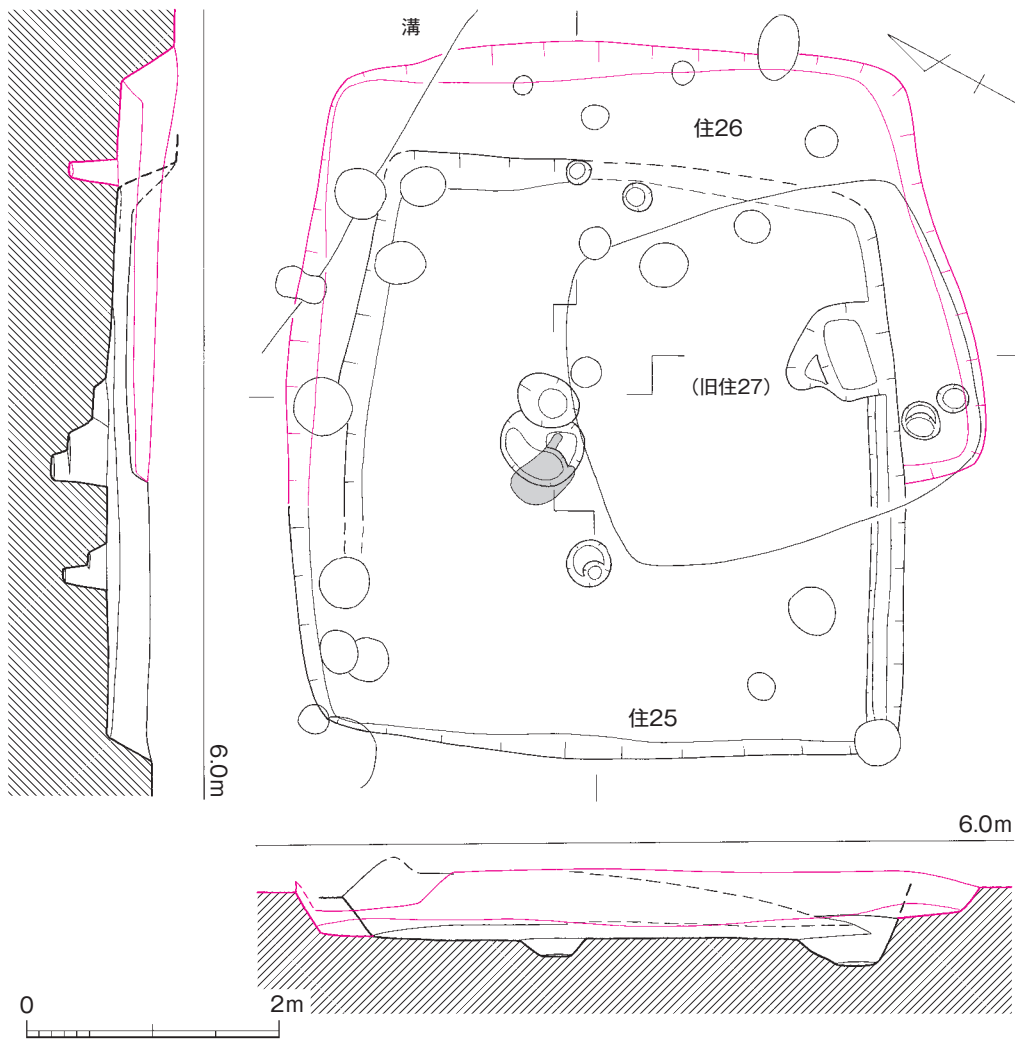
土器（図版39・40、第68～74図） 第67図のような状態で多くの土器が出土した。出土時に全体が残っていても、器肉の薄い土器は取り上げ時に細片化、復元不可なものもあった。図示した中に「北壁」と注記のあるものがある（19・35・58・60・69）。注記を区別した経緯を記憶していないのであるが、「北壁」付近は厳密には25号ではなく26号竪穴住居跡に属するものであるが、確証がないのでここに置いておく。また、「(旧)27号竪穴住居跡出土土器」がいくらかあるが、これらの大部分が25号竪穴住居跡に伴い、一部が26号竪穴住居跡に伴うものと思われるが、遺構検出時の出土土器とともにこの末尾で紹介する。

1は頸が籬状に突出する二重口縁壺で、口縁部中位でさらに外折するような形となり、肩部に弱い断面三角突帯を巡らせている。器表が荒れているが頸部上方に指撫が見える。2は口縁部がやや長い壺で、底部を欠くが図示部はほとんどが残存する。肉厚で、口端部がつままれる。これは赤く焼き上げられたようである。3～5も外傾の度合いに差があるが、口縁部が長く伸びる壺。3は頸部の1/2が残存し、口縁部内外が非常に荒れている。口縁部は直線的に伸び、端部を丸く収めている。

4は頸部の2/3が残存、口縁部の中位がやや膨らみ、端部が小さく外反する。5も同じような口縁部をもつもので、頸部付近が焼けて赤変する。器表が荒れるが、肩部外面に横方向の刷毛目、内面は篋削りのようである。6は二重口縁壺小片。8は肉厚の小片で器表が荒れる。

8～11は小型の壺あるいは甕である。8は口縁部の1/2を欠くほかは完存し、器表が荒れている。底部は板状の平滑なものに押しつけて平底にしたように見える。9は口縁部が内彎気味に高く立ち上がり、胎土良好で調整も丁寧になされる。口縁部の1/3が残存。10はほぼ完存するが、体部最大径付近のやや下位に石膏で一部を塞いでいるが直径5cmほどの不整円形に穿孔がなされたようである。剥離面から見て焼成後に内面から叩いている。これと45度違えたほぼ同じような高さの部分にも内側からたたいた穿孔と思われるものがあるが、これは途中で止めたものか形状不整となる。

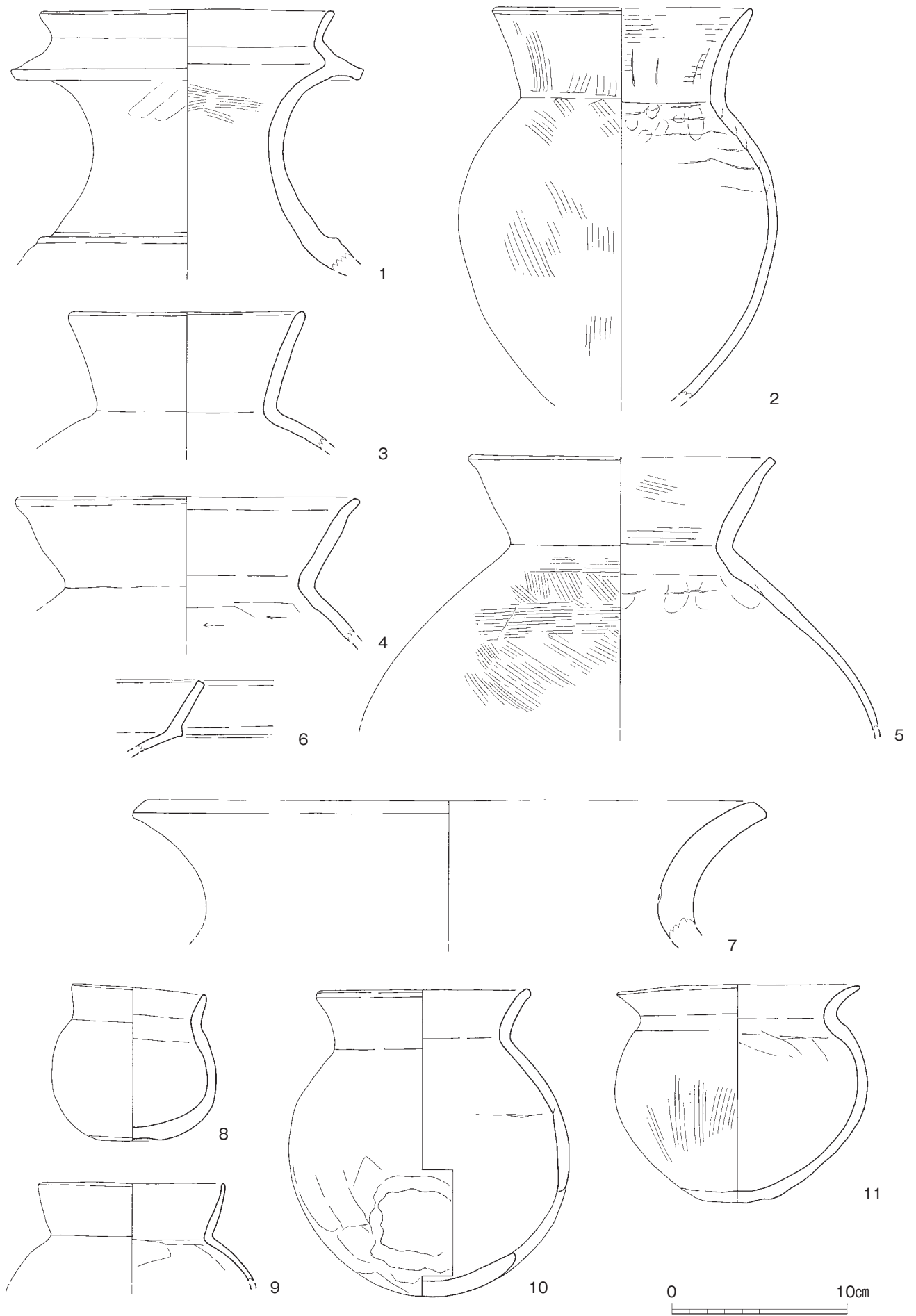
12は体部が扁平で、口縁部が大きく開き有脚であるかも知れない。これは小片。13は口縁部が強く短く外反し、図示部はほぼ完存する。頸部内面はしっかりした稜をなし、体部外面は丁寧な、内面は雑な篋削りで仕上げる。14は口縁部が大きく開くもので、口縁部付近の2/3が残存。底部が非常に厚くなる。13は口縁部が完周、体部の3/4以上が残存する。肩部に小さな段が生じるほどに頸部を強く横撫でしている。器表が荒れていて、底部は不整な平底となる。15は脚付甕で、図示部はほぼ完存。丁寧に作られた土器で、口縁部付近は部分的に赤変する。



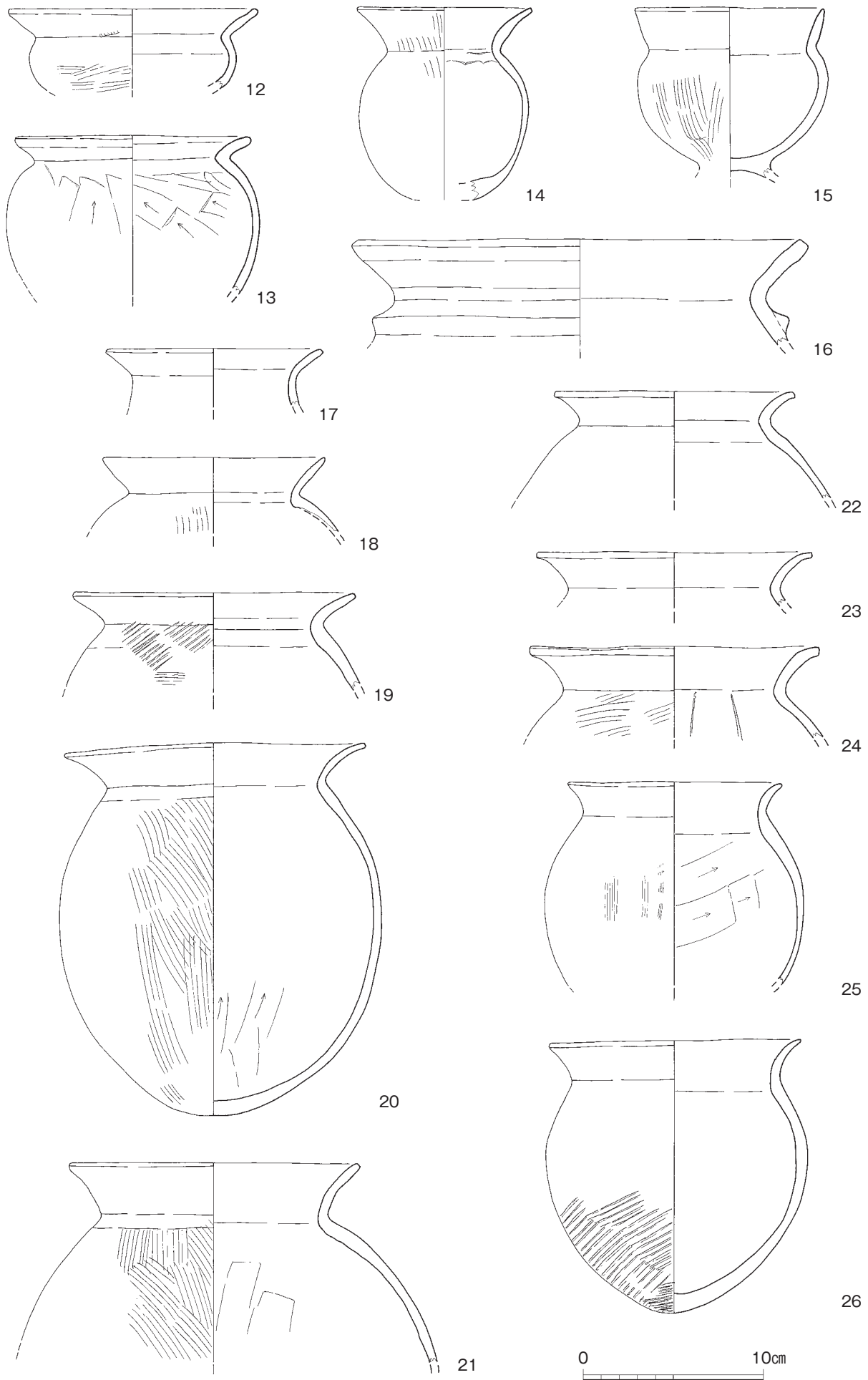
第66図 25・26号竖穴住居跡実測図 (1/60)



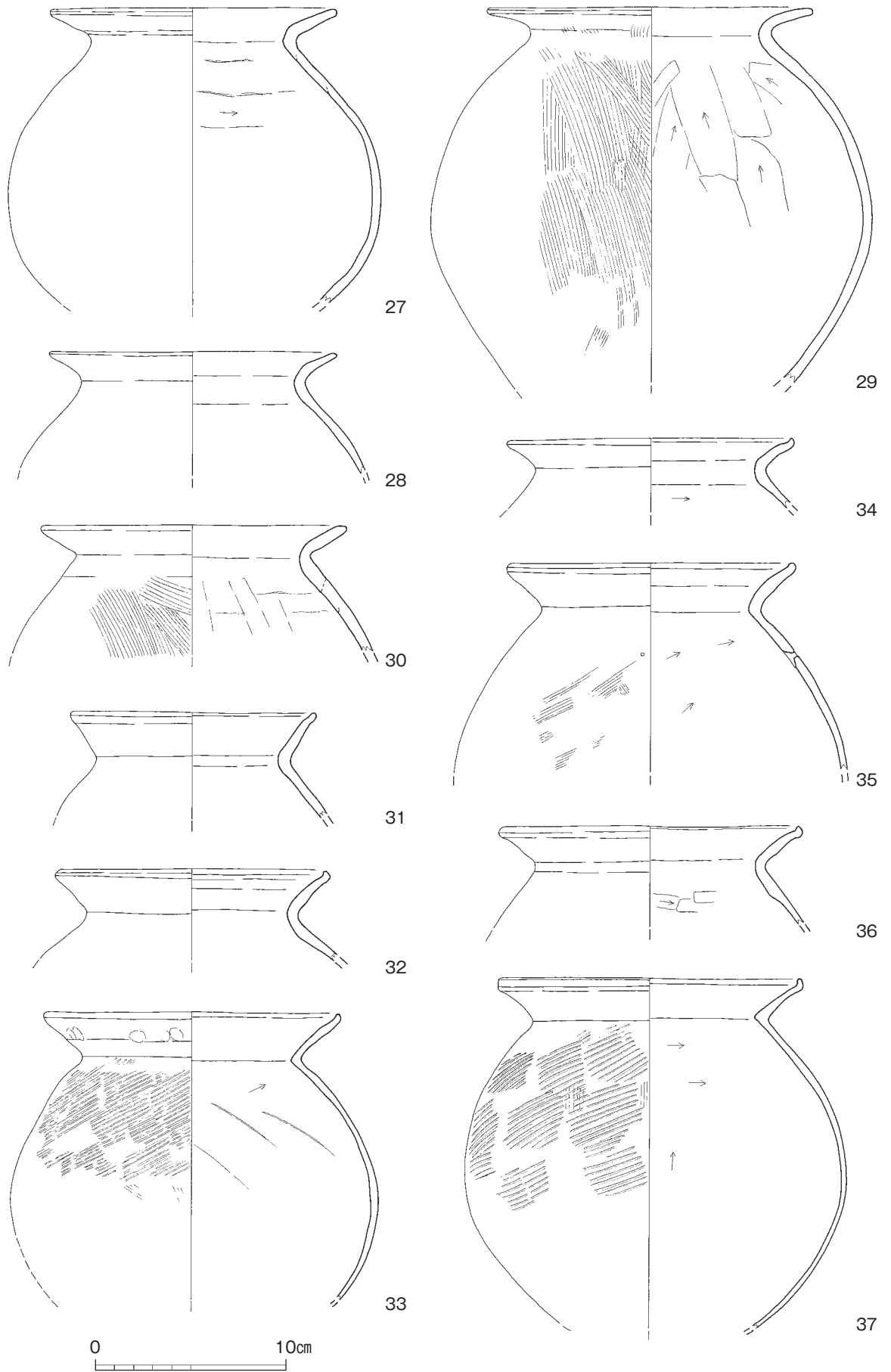
第67図 25・26号竖穴住居跡遺物出土状態実測図 (1/30)



第68图 25号竖穴住居迹出土土器实测图1 (1/3)

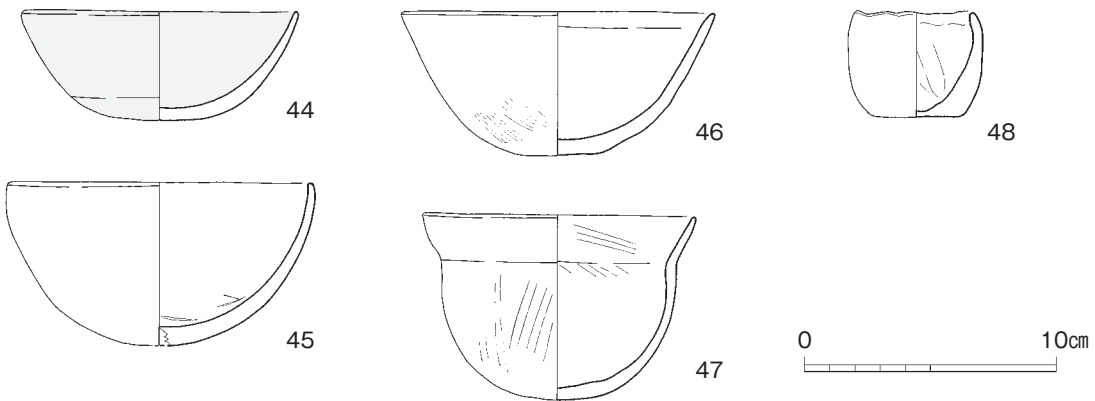
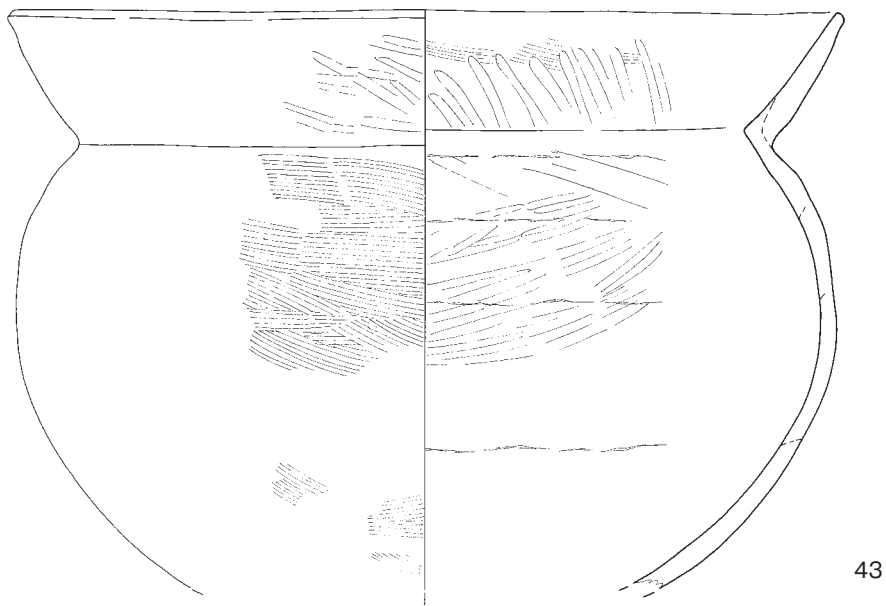
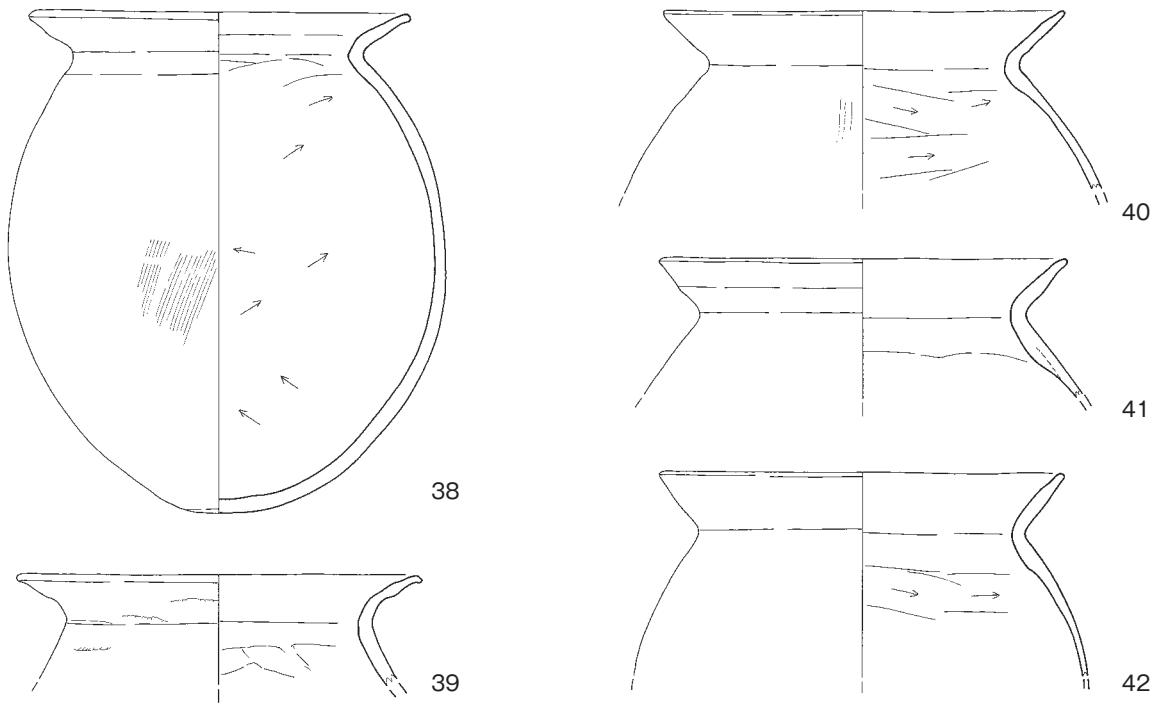


第69图 25号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)



第70图 25号竖穴住居跡出土土器实测图3 (1/3)





第71图 25号竖穴住居跡出土土器実測图4 (1/3)

16は頸部下に断面三角突帯を巡らせ、器表は焼けて荒れる。17は体部の張りが弱い甕小片。18は体部の張りが強いもので胎土良好、調整も丁寧である。これは頸部付近の3/4が残存。19は口縁部付近の1/4が残存、体部外面に平行叩きが残るが、肩部付近では横刷毛も見える。同内面は指撫でのようである。20は全体が復元できるもので、頸部から底部までが焼けて赤変、口縁部外面は煤けている。体部外面は疎らな刷毛目、内面は丁寧な篋削りで仕上げる。21は頸部が緩く外彎して立ち上がるもので、頸部以下は完存。体部下半の叩きが残る付近には煤が付着、それ以上は焼けて赤変するとともに器表がとても荒れている。内面に篋削りは見えない。22は体部が張るもので、壺と呼ぶべきか。丁寧に作られている。23・24はいずれも頸部付近の1/3が残存、口端部上面が水平に近くなる。いずれも器表が荒れるが、24の肩部には平行叩きが見え、同内面は刷毛目原体の痕跡が残る。25は小片といってよく、口端部のほとんどを欠失していて本来の形状を残すものか定かでない。26は口縁部付近が完周する。器表が荒れていて、全体に火熱を受けているようである。

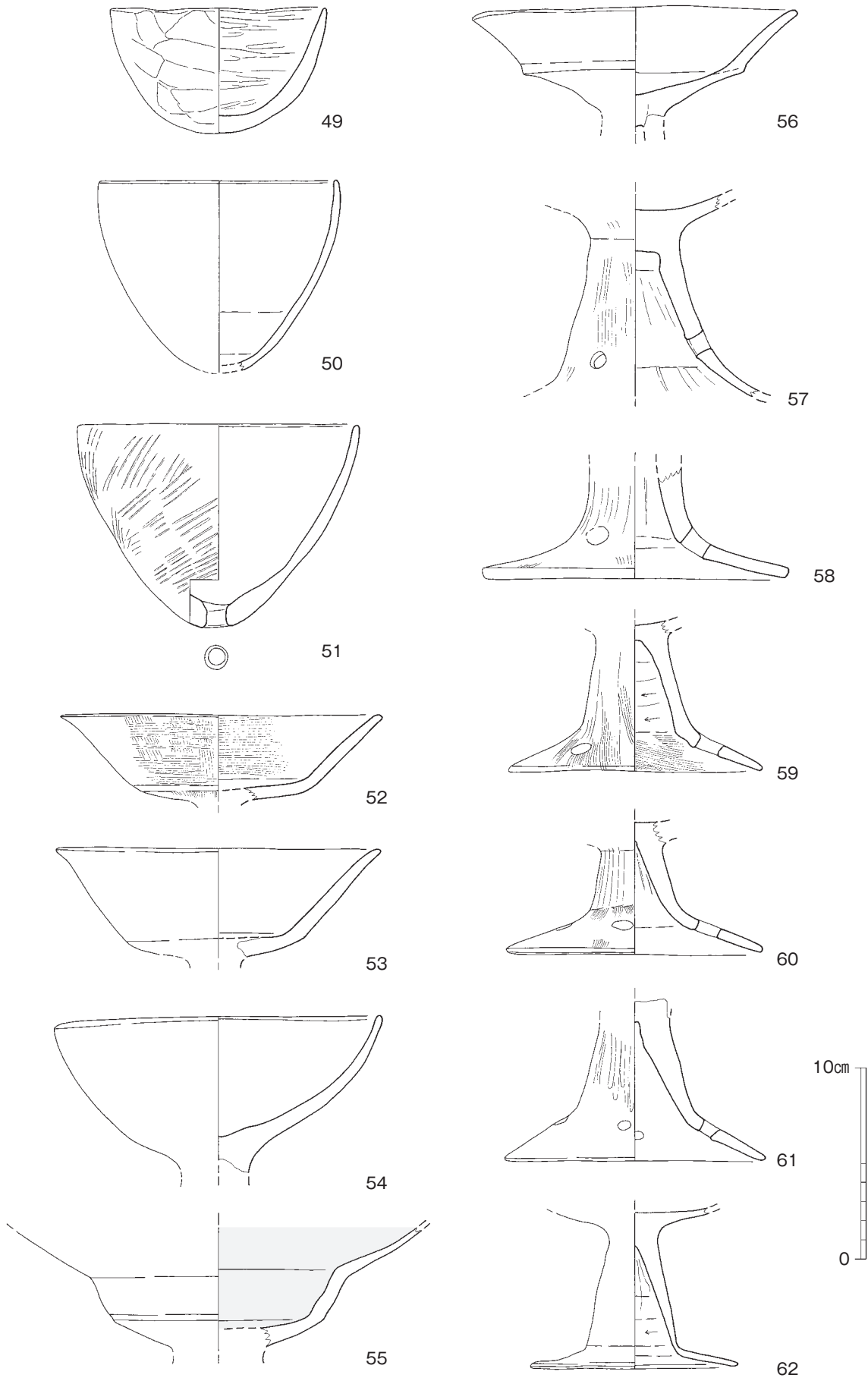
27～29は口縁部が急角度で外反し、浅く開くもので、非在地系甕といってよからう。ただ、胎土・調整等に顕著な特徴は見られない。27は全体を丁寧に撫でて仕上げている。28は頸部の1/2ほどが残存するが、これも器表が荒れている。29は口縁部付近の1/2ほどが残存するが、底部付近は焼けて赤変、内面は器表が荒れている。30は口頸部の形状が似るが、器肉が厚くなる。体部外面は叩きの後に刷毛目を施し、内面は丁寧な篋削りで仕上げるが、粘土紐の継ぎ目が見える。

31～37はいわゆる庄内型甕あるいはそれに近いもので、口縁部がく字形に外彎しつつ強く外反し、口端部を上方へつまむものである。31は上記を逸脱する部分があるが、口端部をつまむ点を重視した。これは器表が荒れる小片。32・34～36は頸部内面が曲線を描く。32は小片で、本来は黄白色のようだが焼けて赤変、器表が荒れる。34は黄白色となる小片。35は口縁部の1/4が残存する。体部外面は細かい刷毛目で、内面は篋削りで仕上げる。肩部付近に焼成後に開けた直径2mmの穿孔が見られる。灰黄色といってよからう。36は灰白色の小片。

33・37は頸部内面に鋭い稜が走るもので、体部がきわめて薄くなる。33は図示部がほぼ完存する。体部外面下半が荒れているが、上半は平行叩きが施され、残存部下端付近には縦優位の刷毛目残り、内面は丁寧な篋削りで調整される。肩部以下の外面には煤が付着する。角閃石が目立ち、灰褐色となる。搬入品であろう。37も図示部の大部分が残存する。33に比して角閃石が少なく、叩きの幅が広がるが、これも灰茶褐色の搬入品と思われるものである。

38～42は外来土器の影響を受けて口縁部に変化を加える甕。38は体部の張りが弱く、頸部外面を強く横撫でするために曲線を描くとともに、口縁部も微妙な曲線を描く。外面に叩き痕は見えず、内底面付近には指頭痕が見える。灰黄褐色となり、ほぼ完存。39は口縁部に変化を加える小片で、これも外面は刷毛目が見えるのみである。40は外面が煤け、器表が荒れているが叩き痕は見えない。1/2の残片。41は1/4の残片で、器表が荒れている。42も熱を受けて赤黒く変色して器表が荒れる。1/3が残存する。

43は甕というより鉢と呼ぶべきか。復元口径は33cmを測り、1/2ほどが残存する。体部外面を刷毛目で仕上げるほかは、口縁部内外面及び体部内面は篋磨きで仕上げる。44～46は碗としておくが、鉢と呼んでもよいような形態となる。44は胎土良好、丁寧に作られたもので、底部は平底傾向となる。器表が荒れるが、内外全面に赤色顔料が塗布される。45は底部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がるもので、丁寧に作られているが器表が荒れている。46は平底で、口縁部が直線的に伸び



第72图 25号竖穴住居跡出土土器実測图5 (1/3)

る。これも器表が荒れる。

47は短い外反口縁をもつ小型鉢で、大部分が残存する。外面は間隔の広い刷毛目で丁寧仕上げ、内面は器表のほとんどが剥落する。

48は手捏ね土器で、底部が非常に薄くなる。

49は外面はほぼ手捏ねだが部分的に篋削りあるいは撫で痕が残り、内面は全体を篋磨きで仕上げる。底部付近は完存し、口縁部付近の2/3が残る。

50・51は砲弾形となる鉢。50は底部付近を欠くので穿孔の有無はわからないが、51に比して器肉が薄い。これも器表が荒れている。51は底部に1孔を穿つ。外面は全体を平行叩きで仕上げるが、特に下半部で大きく剥離する。内面は非常に荒れている。

52～62は高杯。52は口縁部の1/2が残存し、下部の屈曲が強調されていない。外面は縦刷毛の後に横撫で、内面は上半が丁寧な横刷毛、底面は篋磨きで仕上げる。53も口縁部の1/4が残存、これも焼けて赤変する。54は椀形の杯部をもつもので、口縁部の形状が正円でなく歪み、器表が荒れる。55は口縁部が強く外反するもので、胎土は精良といってよい。器表が荒れているが内面には赤色顔料が多く残り、外面にはほとんど見られない。56は図示部がほぼ完存、焼けて器表が荒れていて、これは混入したものであるかも知れない。

57は図示部が完存、脚部基部が太く、やや高い位置に円孔を3ヶ所に配する。58は脚端部が大きく浅く開き、端部を断面方形とする。59は3ヶ所、60・61は4ヶ所に透孔を置く。62は脚裾が強く外折するもので、これは器肉が薄く、透孔はないようである。

63は小型器台で、受部は浅く脚部が高い。脚部に円孔を3個配しているようである。64～66は小型の脚部で、66は3方に円孔を穿つ。

67・68は鼓形器台である。67は器肉が厚く突帯が退化していて、内面は上下ともに丁寧な篋削りで仕上げてある。68は器肉が薄く、突帯もしっかりしたものとなる。内面は上半を篋削りで仕上げ、下半は撫でのようである。なお、口縁部が部分的に火を受けて変色する。

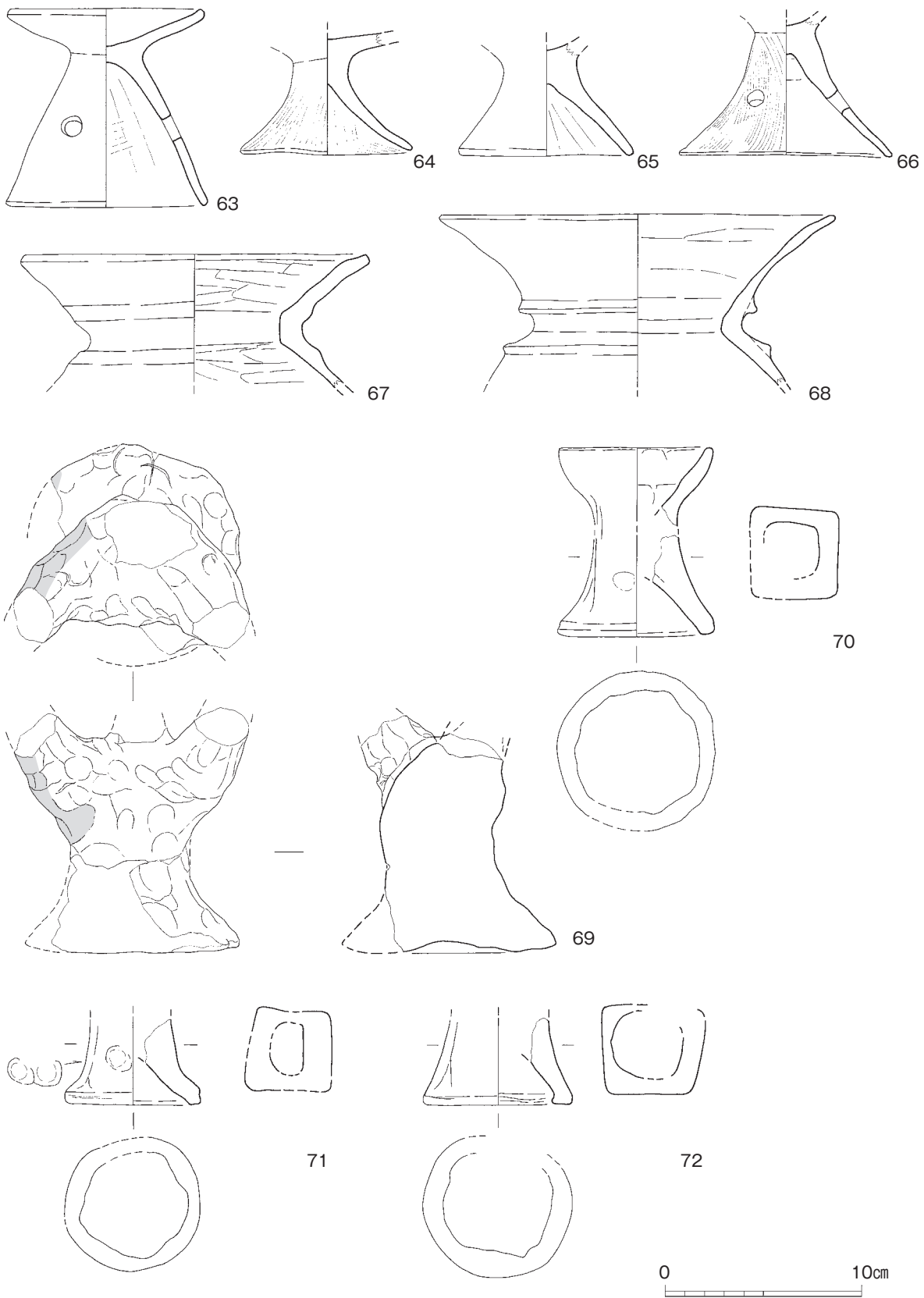
69は手捏ねの支脚で、斜め上方に向けて3本の突起を付すが、その中のほぼ平行に作られた2本で器を受け、残りの1本は把手として使用したのであろう。特に焼けたと思われる部分は見えず、黒色化するところがあるがこれは黒斑のようにも見える。胎土は粗く、非常に重量感がある。70～72は上下両端が断面円形、中央部付近が同方形中実となる特殊な器台で、胎土は普通である。これらも特に一部がよく焼けているというものではない。71では連続して2ヶ所押圧してくぼませる部分があるが、把手とするには浅い。

第73図73～87は「(旧)住27」の注記のある土器。73～75はそれぞれ形態の異なる二重口縁壺。73は口縁屈曲部付近の3/4が残存し、器表が荒れる。74は屈曲部が非常に甘く、これも調整痕は見えない。75は頸部が高く、C字形に開く小片。

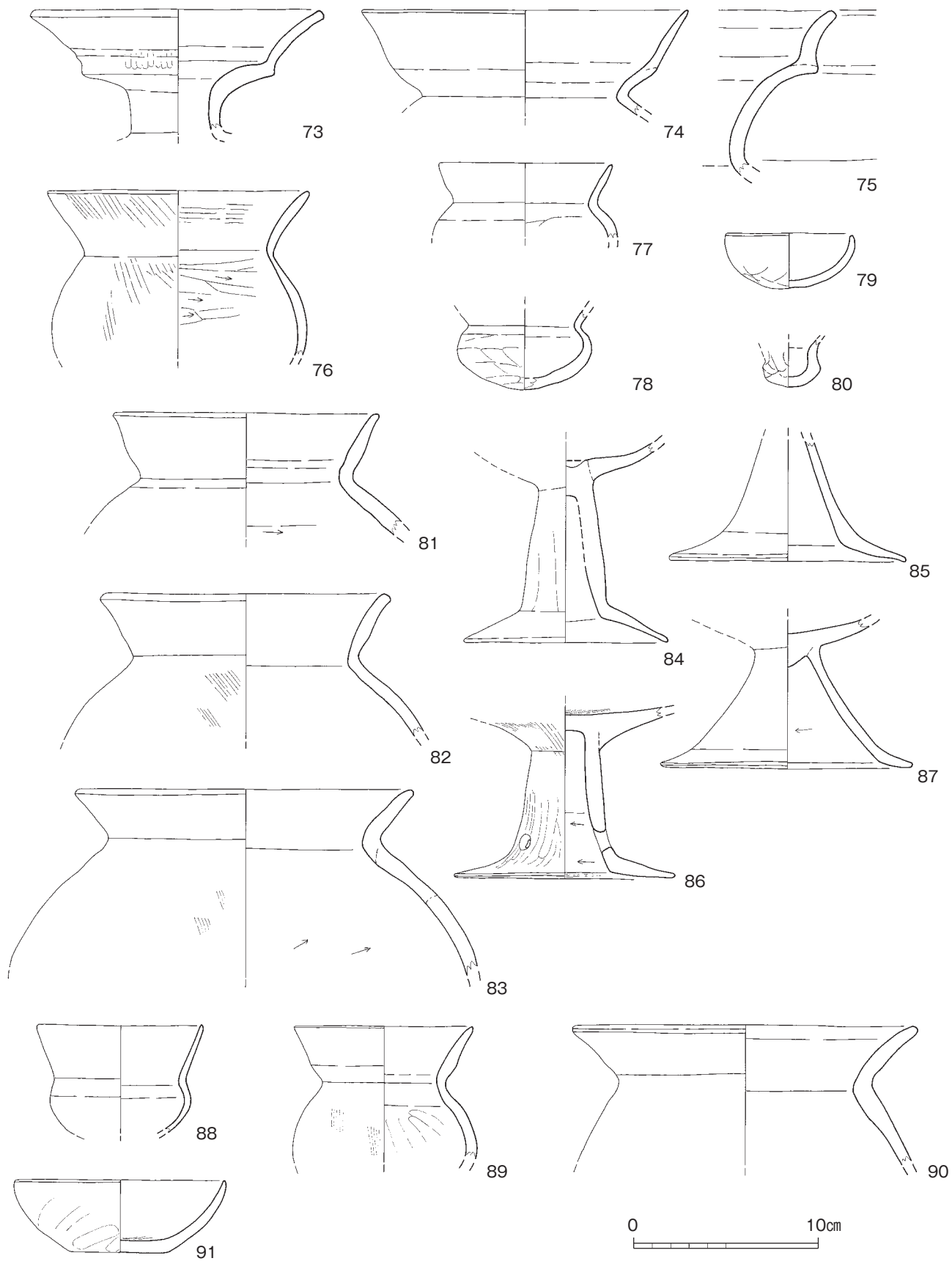
76は口縁部の1/4が残存し、胎土良好で丁寧に作られる。77は小型壺で、これは焼けて器表が荒れる。78は偏球形の体部をもつ小型壺で、頸部付近の1/2が残存。体部外面は指撫での後に篋磨きを施すようである。胎土精良で、作りも丁寧である。

79・80はミニチュア土器。78は胎土良好で丁寧に作られるが、器表が荒れて調整痕はよく見えない。79は手捏ねだが、これも作りは丁寧である。

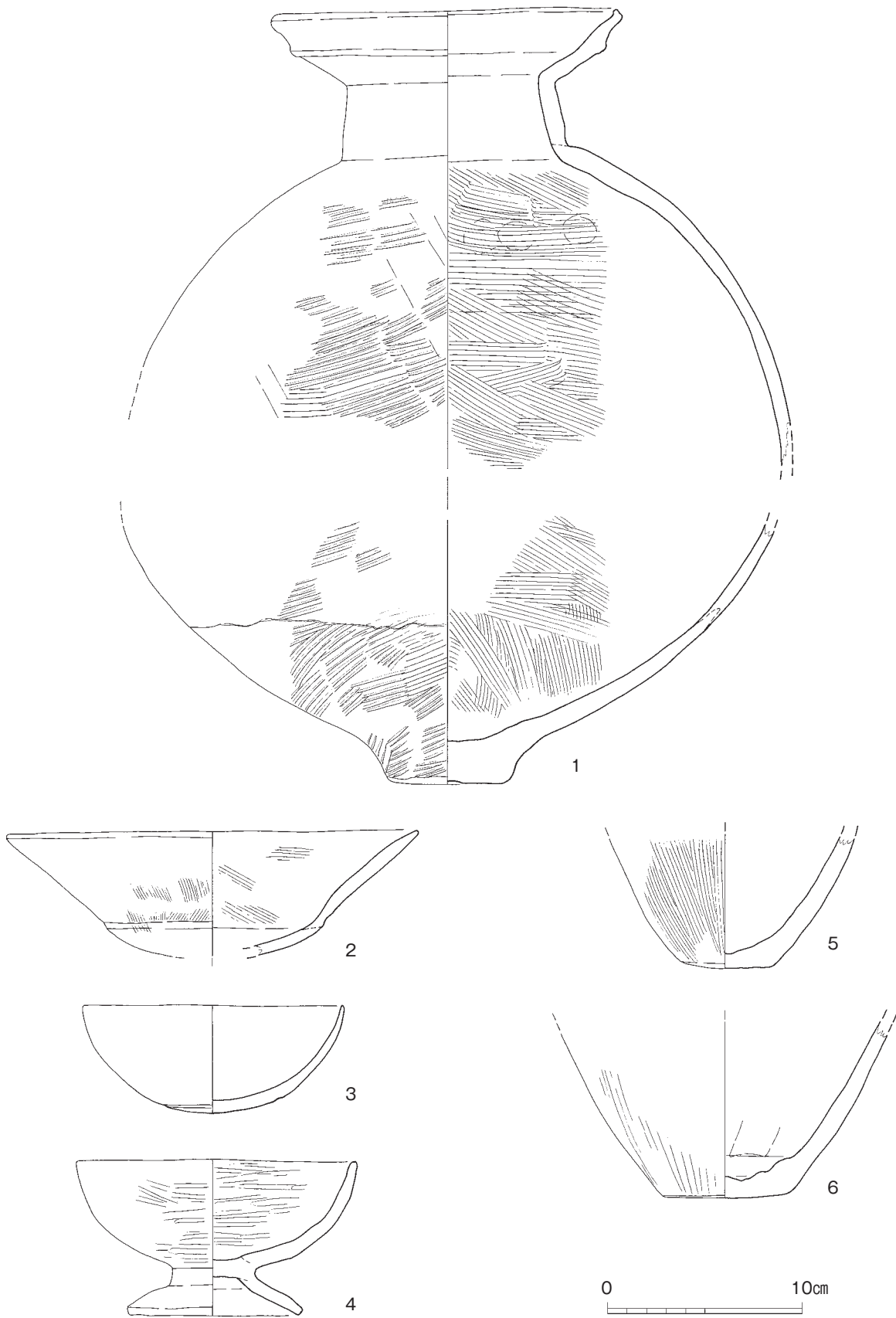
81～83は甕。81は口縁部中位付近を膨らませて端部を外反させるとともに、頸部内面を小さく



第73图 25号竖穴住居跡出土土器実測图6 (1/3)



第74图 25号竖穴住居跡出土土器实测图7 (1/3)



第75图 26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

くぼませる。胎土は良好だが、二次的に焼けて器表が荒れる。82は口縁部の形状は81に似るが、端部の整形が異なる。これは胎土が粗く、器表が荒れる。83は口縁部に変化を加えておらず、肉厚となる。これも器表が荒れている。

84～87は高杯脚部。84は上下で口径差が小さな筒状部は完存するが、端部は小片。脚端部が外折して踏ん張る。85は筒状部上下の口径差が大きく、脚端部もより大きく開くが、屈曲部の位置が高い。86は形状が84に似るが、脚端部の反転部が低い位置になる。また、4点の中でこれのみが三方に円孔を配する。87は筒状部から脚端部へかけて連続的に大きく開き、端部をわずかに外反させるもので、これも器表が荒れている。

第74図88～91は25号竪穴住居跡付近での検出作業中に出土したものである。25・26号竪穴住居跡の双方の遺物が混入していると思われるが、ここで紹介する。

88は口縁部付近の1/4が残存するいわゆる小型丸底壺で、器肉が薄い。灰黄白～灰白色となり、器表が荒れている。89は小型壺。これも1と同様な色調で、胎土良好、丁寧に作られる。体部内面は撫でで仕上げる。90は器表が荒れる甕の小片。91は平底の底部が完周する椀形のもので、外面は指撫でで丁寧に調整するようである。内面は摩滅する。

## 26号竪穴住居跡（図版15～17、第66・67図）

25号竪穴住居跡の北東及び南東部に張り出す形の住居跡を26号竪穴住居跡としたが、これも炉跡や支柱穴などは不明である。

### 出土遺物

石製品（図版44、第144図4） 淡灰色の姫島産黒曜石を用いた石匙で、幅7.5cm、高さ5.3cm、最大厚1.4cm、重量は34.9gである。つまみは節理の方向に沿って作り出している。外縁は丁寧に大きめの剥離を施すが、表裏とも中央付近には手を加えていない。

土器（図版40、第75図） 25・26号竪穴住居跡の出土状態を図示した（第67図）が、そのうちで25号竪穴住居跡の外側、26号竪穴住居跡内から出土したものを図示する。

1～3は住居跡南東隅付近でまとまって出土した。1は接合しえないがほぼ全体が窺える二重口縁壺で、丸く大きく張った体部に比して口頸部は小振りとなる。口縁部付近は完周し、外形は二重口縁となるが内面は段を有さず、口端部を断面方形として内側上方へつまみ出している。頸部はやや内傾する筒状を呈している。頸部から口縁部にかけては丁寧な撫で調整を行う。体部は最大径が中位より下方にあるようで、底部は小さく厚い平底となる。体部は16号竪穴住居跡出土品と同様に3分割で成形されたようで、下位の継ぎ目は明瞭に残されている。上位の継ぎ目は残存する最大径付近の破面で、ここは擬口縁となる。体部外面はほとんどを細かい平行叩きで仕上げているが、肩部付近では斜位の篋削りで部分的に、頸部直下では丁寧な横撫ですべての叩き痕が消されている。なお胎土は粗く、口縁部内面に部分的に煤が付着する。2は杯部下半が内彎気味となり、口縁部が大きく広がる高杯で、在地系といえる。口縁部は完周するが、器表内外の多くが剥落する。3は底部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる椀で、丁寧に作られているが外底面に粘土紐接合痕が見える。口縁部付近の1/3が残存。

4～6は先の土器群と離れて、住居跡北東隅付近から出土したものである。4は肉厚の脚付椀で、椀下半部以下が完存、口縁部付近の1/2が残存する。椀部は内外全面を篋磨きで仕上げるが、部分



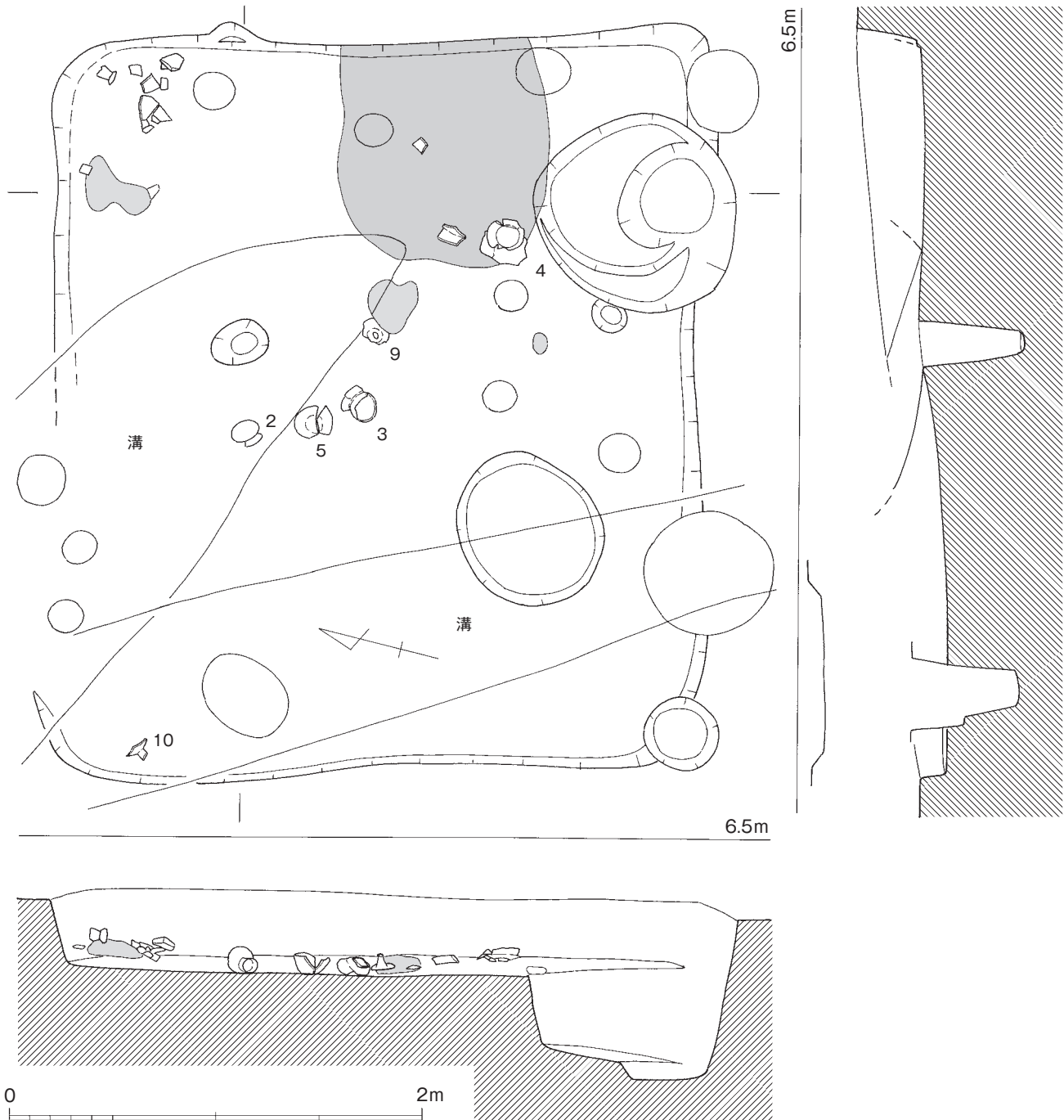
的に先行する窠削りの痕跡が見える。5・6は平底の甕底部。

### 27号竪穴住居跡 (図版17、第76図)

21号竪穴住居跡の西側にあつて重複し、21号竪穴住居跡や古墳後期の溝に切られる。東西長5.3mほど、南北長は5m弱の規模である。深さは最大で0.3mほどが残存する。

東辺中央付近から南にかけて1m四方ほどの規模で細片化した焼土や炭が広がり、また径0.1～0.3mほどの粘土塊が3ヶ所で見られた。

また、南東隅付近の円形土坑は住居跡からはみ出ているが、内部から住居跡と同形の高杯脚部が



第76図 27号竪穴住居跡実測図 (1/30)

出土していて、同時に存在した可能性がある。

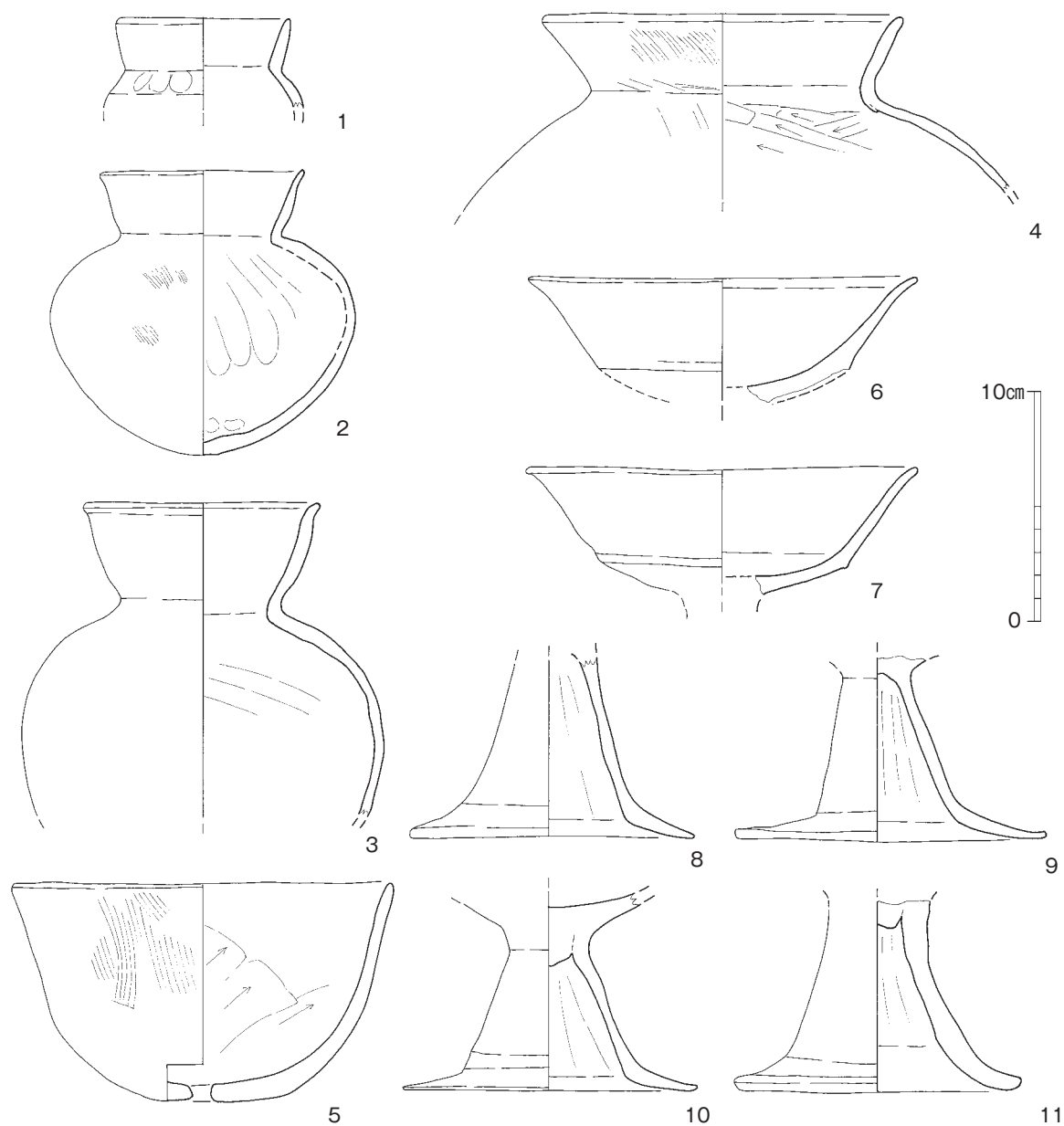
### 出土遺物

土器（図版40、第77図） 図示したようにほぼ床面から数点の土器が出土、中には完形に近いものもあるが、まとまりはない。8・11が南東隅付近の土坑から出土したものである。

1は口縁部の1/4が残存する小型壺片。2は横転して出土した完形の壺。頸部は縮まり、口端部付近が小さく外反する。特に体部下半の器表が荒れているが、外面は篋磨き、内面は撫でて仕上げられるようである。3は口縁部付近がほぼ完存する。これも口端部を小さく外反させる点で2に似るが、体部内面は篋削りで仕上げている。4も図示部はほぼ完周、体部が薄い甕である。

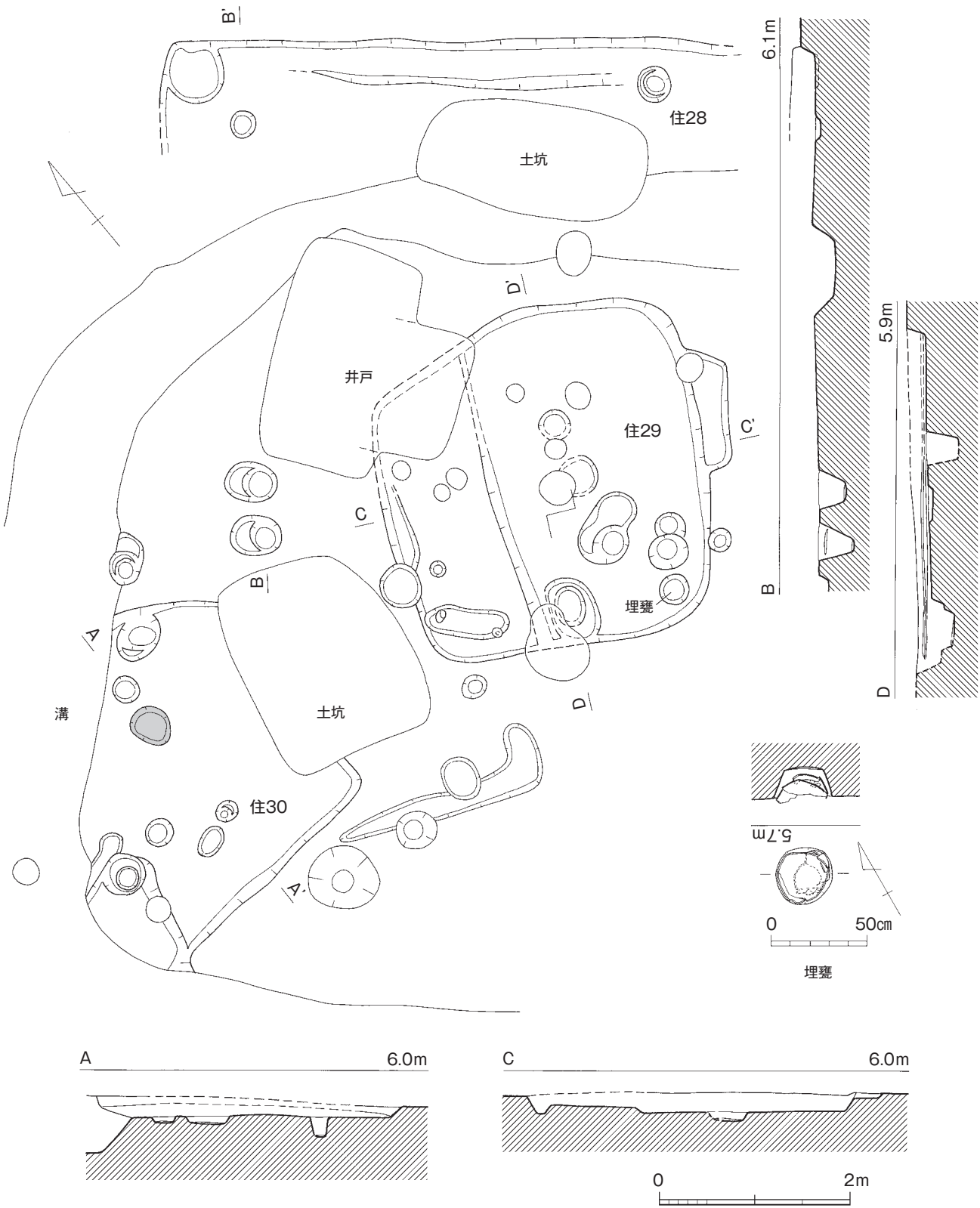
5は正置した状態で出土した鉢であるが、底部のやや偏した位置に穿孔がある。底部は平底に近く、口縁部はやや外彎しつつ直線的に高く開く。内面は丁寧な篋削りで仕上げている。

6～11は高杯。6は杯部下半がすべて剥がれ落ち、焼けて赤変、器表が荒れている。7も6に



第77図 27号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

よく似る器形で、これは図示部が完周する。杯部中位の突帯はしっかりしていて、器表はとても荒れている。なお、口端部内面が黒色化している。8～10は脚端部の形状がわずかに異なるが、大きさやプロポーションはよく似ている。11はそれらと異なって器肉が厚く、脚裾も屈曲しない。



第78図 28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

### 28号竪穴住居跡（図版18、第78図）

概要で記したように、3区では重機を再投入して包含層を掘削した。28号竪穴住居跡の東辺の北隅は掘削以前にすでに見えていて住居跡の存在を想定していたが、結果的には支柱穴は不明、炉跡・カマドも確認できなかったので住居跡との確信はない。

#### 出土遺物

鉄滓（第8図8）全体が茶色く錆に覆われたようになって、地肌は見えない。17.5gを測り、磁石には反応しない。

土器（第79図1・2）埋土のほとんどを重機で除去したために出土遺物は乏しい。1は須恵器杯蓋小片で、天井部・口縁部界はシャープな段を付すが、口縁部は丸く終わる。2はコップ形の土師器で、底部は1/2が残存、口端部を欠く。器表は非常に荒れている。

### 29号竪穴住居跡（図版18、第78図）

28号竪穴住居跡とした遺構と重複する位置にあって、北隅付近を古代の井戸にも破壊されている。また、方形周溝の内部にある。

一辺長3.5m前後の方形プランであるが、平面形状は不整で、深さは最大で0.2mほどである。北西辺に幅1mほどのベッド状遺構を設けるが、その高さも0.05mほどに過ぎない。中央付近に炉跡を置くが、支柱穴ははっきりしない。

南東辺の東寄りに出入り口と思われる、床から0.15mほどの段を付す。

#### 出土遺物

土器（図版40、第79図）南東隅の柱穴に土器を重ねて納めていた（11・12）。また、南西隅付近では床上から手捏ね土器（7）が正置された状態で出土した。

いずれも土師器である。3は二重口縁壺の小片で、胎土に異質なものはない。4は底部付近が完存するが、口縁部付近は小片で底部と接合できない。底部は焼けて赤変し、全体に調整痕ははっきりしない。5は平底で、体部から口縁部にかけて強く内彎する椀。胎土良好、丁寧に作られる。6は口縁部を小さく外反させる椀の小片。胎土精良で丁寧に作られていて、外面に赤色顔料が塗られている。7はほぼ完存する手捏ね状の鉢だが、外面は雑な篋磨きで、内面は篋削りの後に撫でて仕上げるようである。外底面は篋削りか。胎土も良好である。8は二次的に熱を受けた甕の小片。9は高杯の小片。10は高杯脚部の上半。

11は縦方向でほぼ1/2が残存するが、これを下に、12を上にして出土した。口縁部に特別な変化を加えていないが、プロポーシオンは整っていて底部は丸みをもつ。体部外面は細密な刷毛目を施し、叩き痕は見えない。同内面は篋削りを施して器肉が薄くなっている。12も外面は細かな刷毛目で仕上げる。内面の調整痕は荒れてよく見えないが、器肉は薄い。

### 30号竪穴住居跡（図版18・19、第78図）

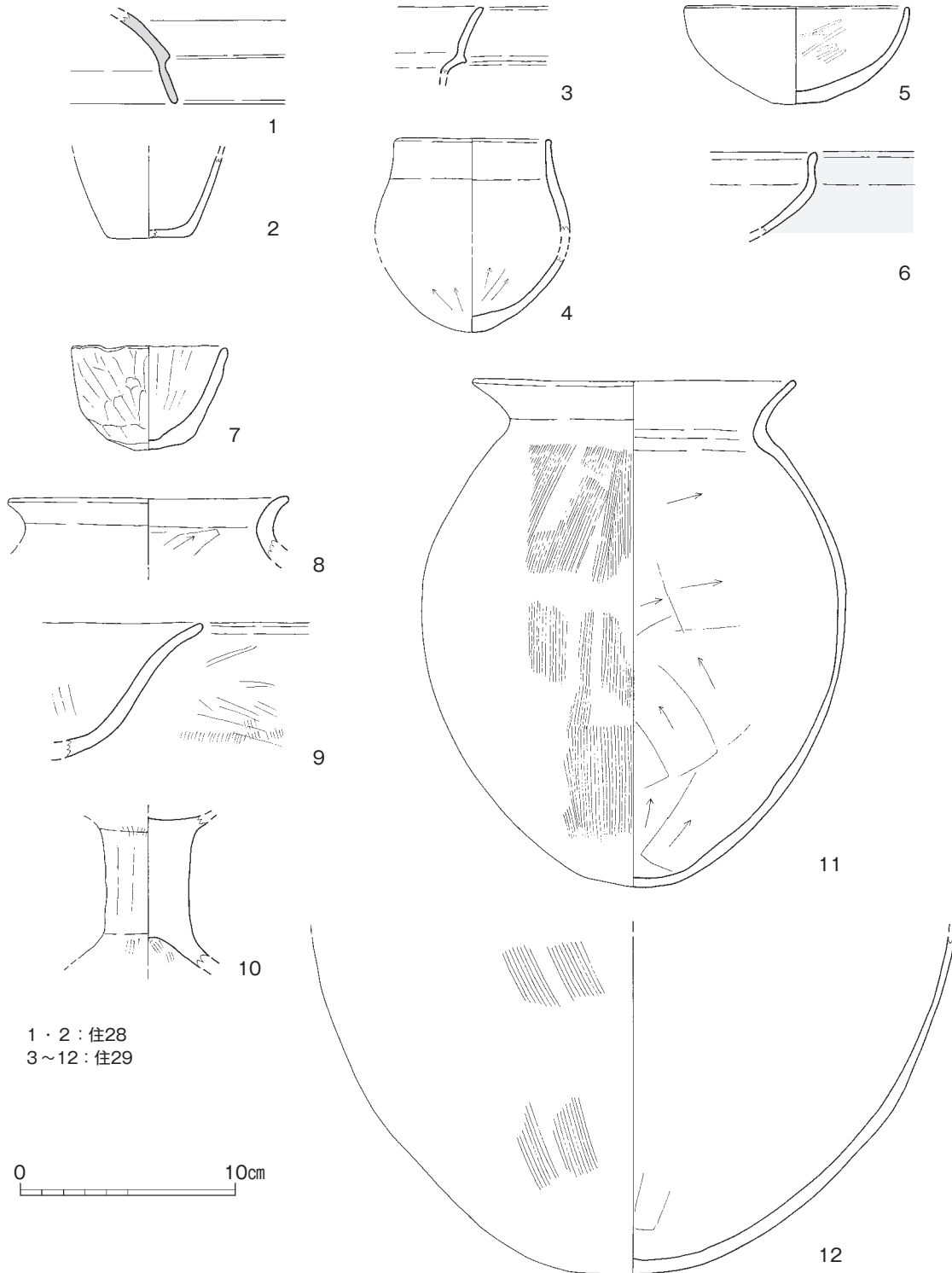
29号竪穴住居跡の西に近接し、これは方形周溝及び土坑から切られていると判断された。

検出時は床一面に土器が投棄されていたが、それを除去後に炉跡が現れた。なお、南辺は直線的であるが、北辺は緩く弧を描き、平面形は歪なものとなる。支柱穴は不明。

出土遺物

石製品（図版45～47、第145図10・第146図5・第147図16） 第145図10は灰黒色の地に灰色の斑が入る石庖丁で、これもいわゆる立岩産であろう。図示した面では背に縦方向の、刃部付近には横方向の擦痕が見られるが、背面では全面に横方向の擦痕が見える。

第146図5は灰色粘板岩製砥石で、図示した面及び右側面がよく使用されている。図上側面も一



第79図 28・29号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

部がよく使用されていて、破面である背面もかなりの凹凸があるものの凸部は磨られている。第147図16は花崗岩質砂岩製で、図示した面の中央付近がほかのどこよりも滑らかになっていて、使用されているようである。使用された部分は灰白色に近く、ほかの部位は茶褐色となる。ただ、通常の砥石とは異質である。

土器（図版40、第80～84図） 図版に見るようにほぼ全面無造作に廃棄された土器が敷き詰められたような状況で出土した。原形を留めるものはほとんどないため、出土状態は図化していない。

1は接合できないがほぼ全体の様子を窺える大型壺である。体部から「く」字形に外反する頸部をもつ二重口縁壺で、肩部に断面台形となる突帯、体部中位に低い幅広の突帯を巡らせる。全体に刷毛目で仕上げるようだが、小さな平底となる底部及び体部下端付近は篋削りのままで終わっている。2も小さな平底をもつ壺で、これは体部に張りがある。頸部下端に篋描の刻み目をもつ突帯を巡らせるが、突帯上部の頸部にも同様の篋描文が部分的に見られる。両者が連続的でないことから、突帯上と頸部は別個に刻まれたものと思われる。これも全体に刷毛目を多用する。3は1と同様、低く幅広の突帯をもつ体部片。

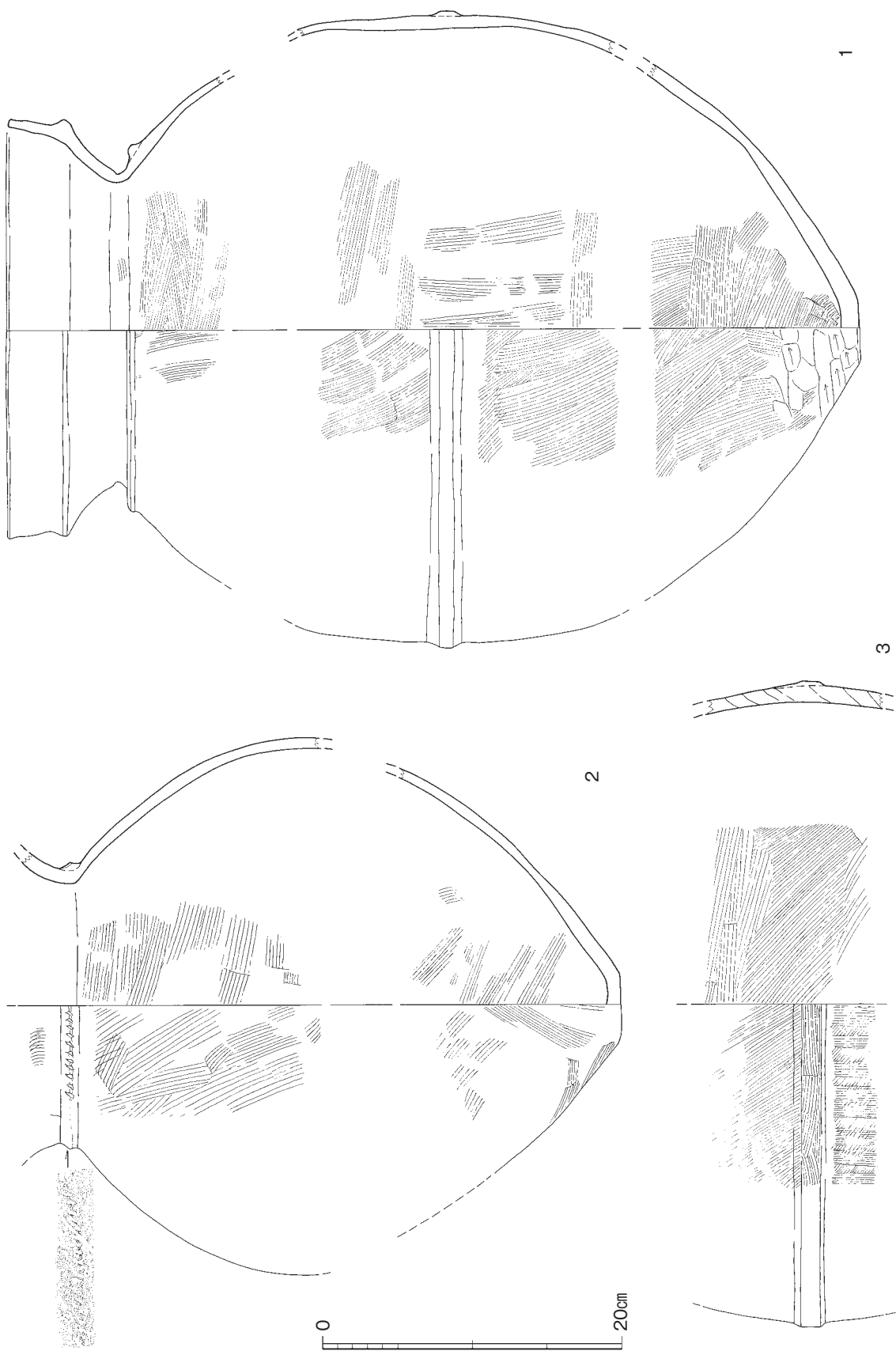
4は口頸部が短いC字形となる壺の小片。5～7は頸部の長さが異なるが、1と同様の二重口縁壺。5は胎土良好、作りも丁寧で器表もよく遺存している。口頸部は全体に横撫でで、体部内面は篋削りで仕上げています。頸部の突帯は幅広で、篋状工具を用いて深い沈線を刻む。6は器表が荒れるが、体部内面は細かい刷毛目のようである。7は頸部の外彎が弱いもので、胎土・作りともに良好である。8は頸部が高く外彎し、口縁部界が籬状に突出する在地系の二重口縁壺で、口縁部付近はほぼ完周する。頸部に小さな突帯を巡らせて、その上面には細くてシャープな「×」印を篋描きする。また、肩部外面には平行叩きが見える。9・10は小片。いずれも頸部に「×」印を刻む突帯を巡らせるが、10は刷毛目原体を用いる。11は口縁部を欠くが、頸部に篋状工具で刻んだ刻みを付す突帯を巡らせる。

12は図示部の1/2ほどが残存し、13に形状が似るが内外面ともに器表が荒れている。13は体部の張りが強い壺で図示部は完存、口頸部は全く残らない。体部外面は、最大径部以下を篋削りの後に刷毛目で、以上は篋削りの後に粗雑な篋磨きで仕上げる。内面は全体に撫でのようである。底部付近には平底を意図したものか、平行叩きが見られる。14は1・3と同様の低平な突帯に篋状工具で線刻したもの。

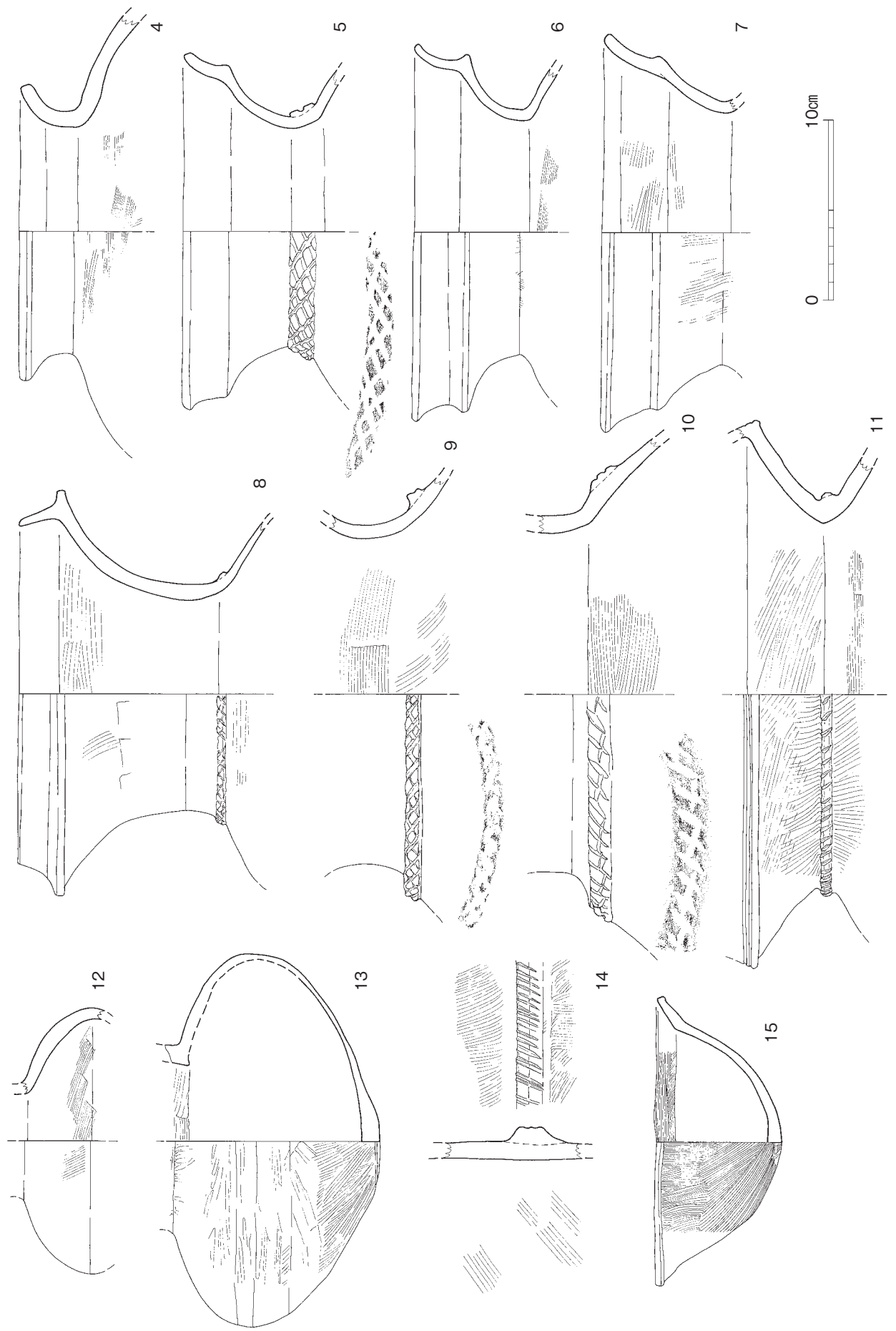
15は浅く開く口縁部をもつ鉢で、胎土良好。外面は全体を細かい刷毛目で、内面は撫でで仕上げるようである。

16～27は甕で、残存率がよくないが、口頸部の外反・外彎が弱く、体部の張りも弱い傾向がある。16は脚付となるもので、口縁部は不整だがやや内傾気味に直行し、口端部に変化を加えない。器表が荒れるが、体部外面上半に平行叩きが見えるほかは刷毛目で仕上げる。体部の3/4が残存。17・18は口縁部付近部がほぼ完存する。17の体部内面の横刷毛は丁寧である。18は口縁部が不整で、体部外面の一部に平行叩きが見える。同内面は篋削りで仕上げています。19・20は小片。21は口縁部の1/2が残存。これは体部外面を篋削りで、同内面を刷毛目で仕上げる。口縁部内面は刷毛目を施した後に横撫でで終わるようである。22は焼けて赤変する1/2の残片。23は口縁部の外反が強いが、頸部は丸く、口端部にも変化を加えない。24は残存部から見ると体部が張って壺のような形状となるようである。これは口縁部が完周。25は強く外反して頸部内面に稜をもつ小片。26・27も小片。

28～38は高杯で、これら以外にも筒状部が完周する脚部片が数点ある。28は杯部が浅く大きく

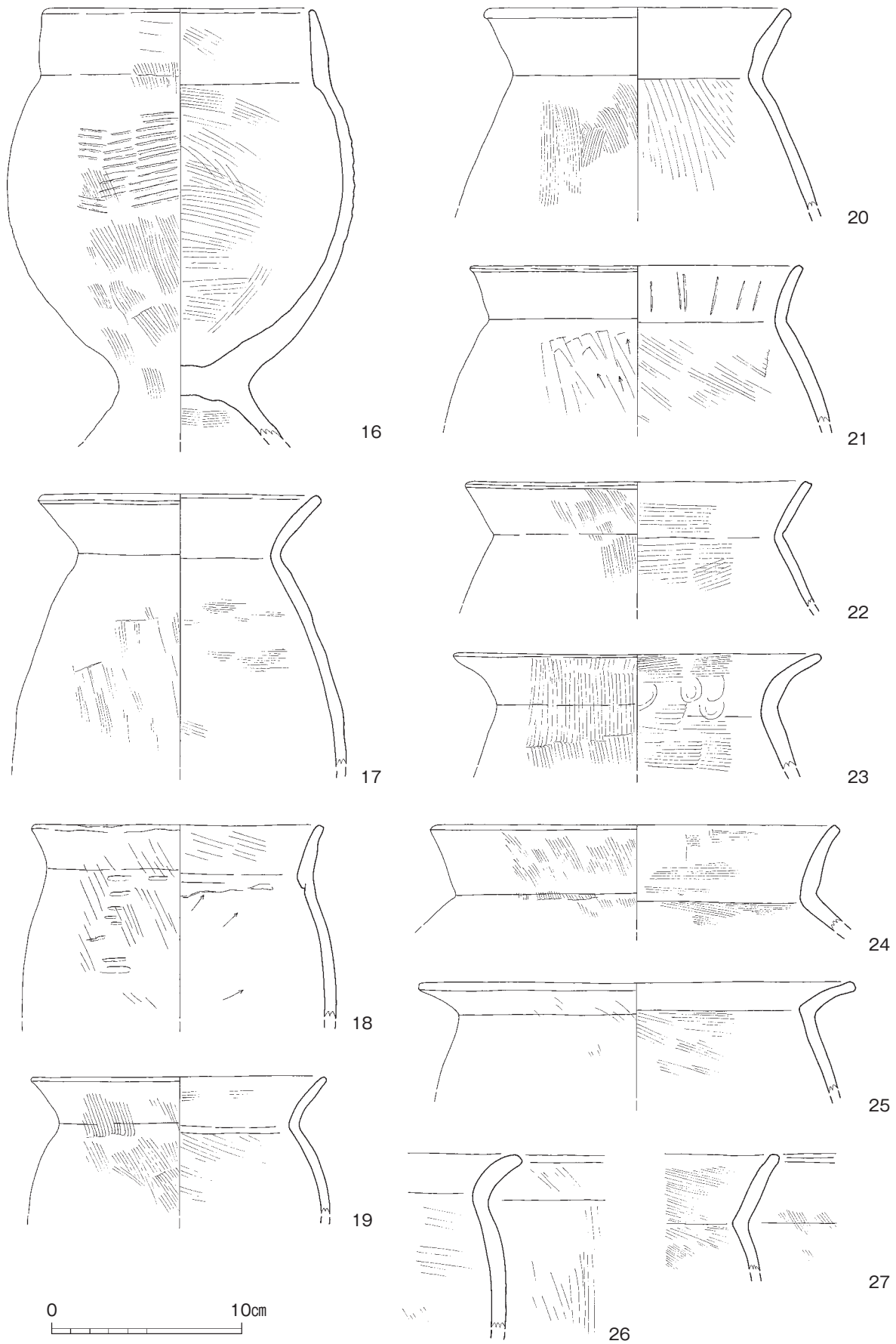


第80图 30号竖穴住居跡出土土器集测图 1 (1/4)

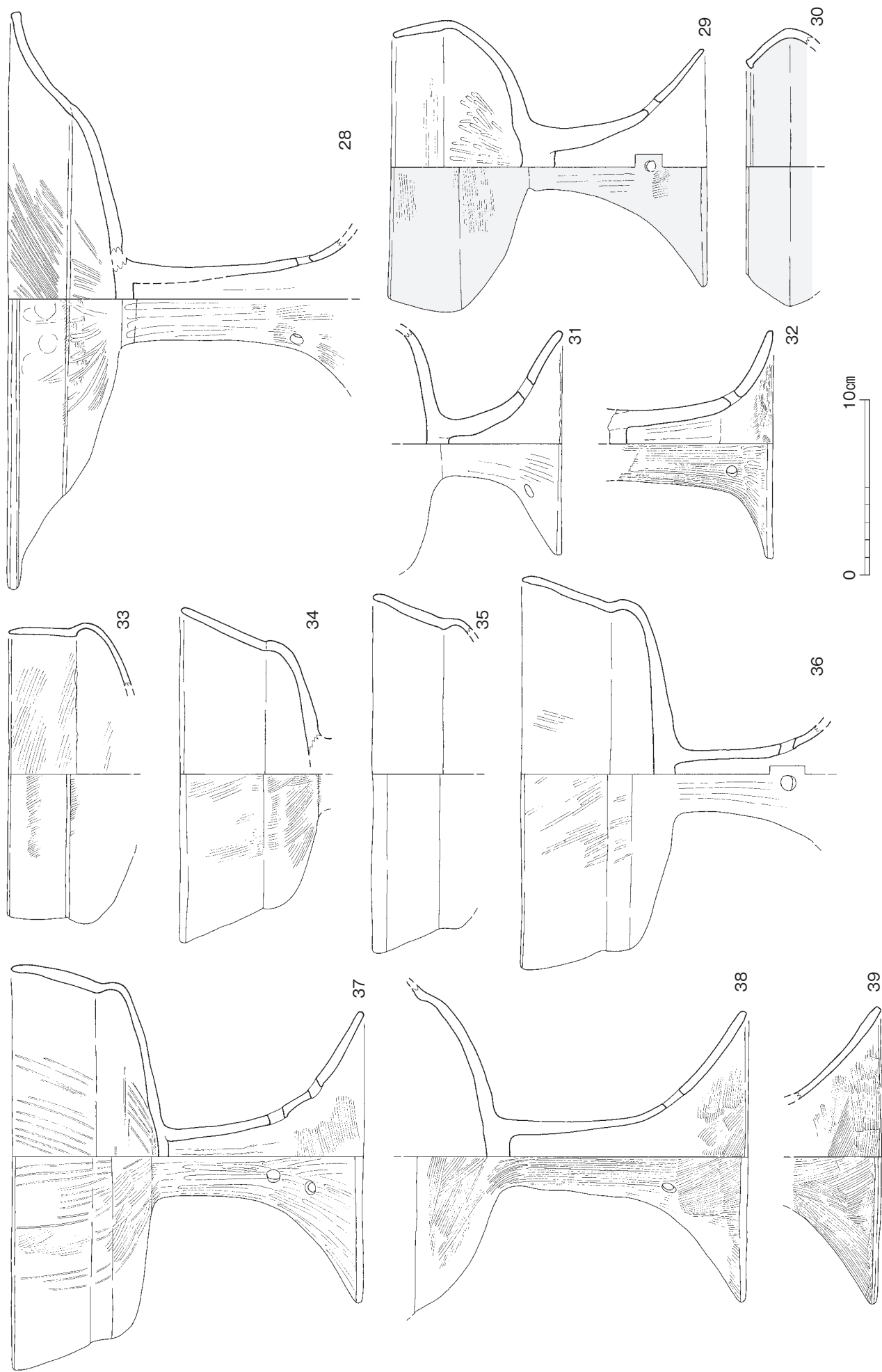


第81图 30号竖穴居迹出土土器实测图2 (1/3)



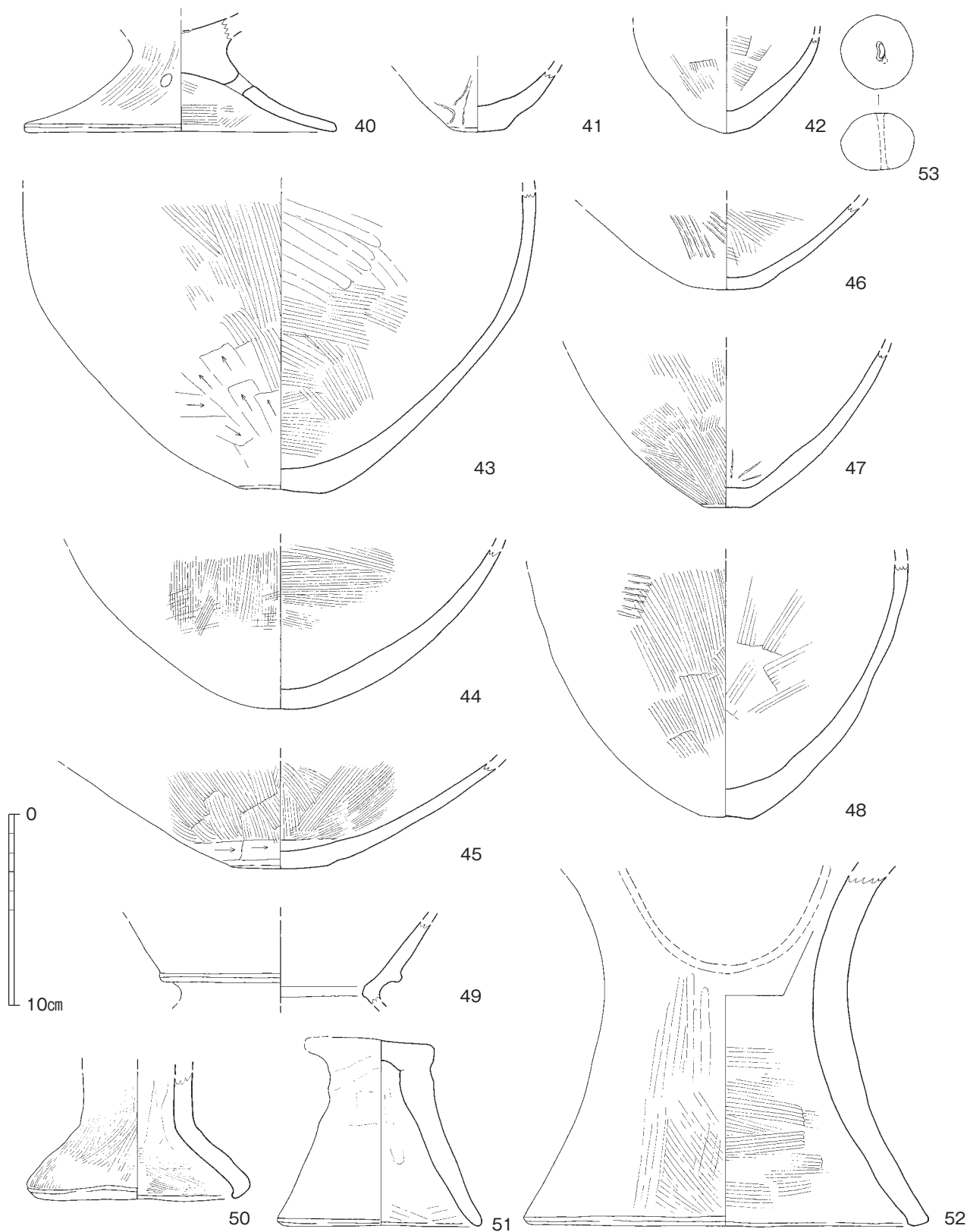


第82图 30号竖穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)



第83图 30号竖穴住居跡出土土器実測图4 (1/3)

開くもので、杯部はほぼ完存する。杯部内外面は部分的に刷毛目が残るものの、ほぼ全面を縦方向の篋磨きで仕上げる。29は椀形の杯部となるもので、脚端部付近を除いてほぼ完存する。これは器



第84図 30号竪穴住居跡出土土器実測図5 (1/3)

表が荒れているが、杯部内面には篋磨きが見え、外面には赤色顔料が残存する。透孔を4方向に穿つ。30も高杯であろう。これも器表が荒れるが、内外全面に赤色顔料が塗布されたようである。29と異なって、口端部に変化を加える。31は杯部下位が内彎するもので、その形状から33以下の形に復元できるのであろう。器表が荒れている。32は脚端部の1/3が残存外面は丁寧に篋磨きが施され、透孔は3方ようである。

33～37は杯下半部が浅い椀形となり、直線的に高く伸びる口縁部を付す同形態の高杯。33は口縁部が直立する薄手のもので、これは主として刷毛目で仕上げる。34は口縁部が斜め上方へ直線的に伸びる。これも器表が荒れていて、篋磨きは確認できない。35～36は34に似るが、口端部をわずかに内側へ曲げている。35・36は器表が荒れるが、36では杯部内外面で縦方向の篋磨きを観察できる。また、36が口縁部が薄く、杯部下半が肉厚となるのに対して、35・37は器肉の厚みが逆となっている。37は3方向2段に配された透孔から杯部下半までがほぼ完存する。杯部内外面には縦方向の暗文が施され、その下位に刷毛目が見える。38は残存する形状から28のように大きく浅く開く杯部をもつものと思われる。杯部内面はよく見えないが、外面は主として細かな刷毛目を使用している。39は38に似ることから高杯脚部と思われるが、透孔は残存しない。

40は脚台で、円形透孔が3方に配されるようである。

41～48は底部片。41は図示部が完存する平底の底部で、体部外面は篋削りで仕上げるようである。内面も丁寧な調整がなされる。42は尖底状の丸底で、内外面には刷毛目が見える。43は底部外面を篋削りで平底とし、体部下端付近も篋削りで仕上げていく。それ以上は刷毛目で仕上げるが、部分的に篋磨きが施されるようである。内面は刷毛目と撫でて調整する。44は丸底となる。器表が荒れるが、外面では平行叩きの後で細かい刷毛目を施す。内面は刷毛目。45も43と同様に底部及びその付近を篋削りで仕上げて平底とし、それ以上は内外面ともに刷毛目である。46も底部付近を篋削りで調整、これは外面に平行叩き痕が残る。47・48は小さな平底をもつが、その付近は撫でて調整している。48は外面に平行叩きが見える。

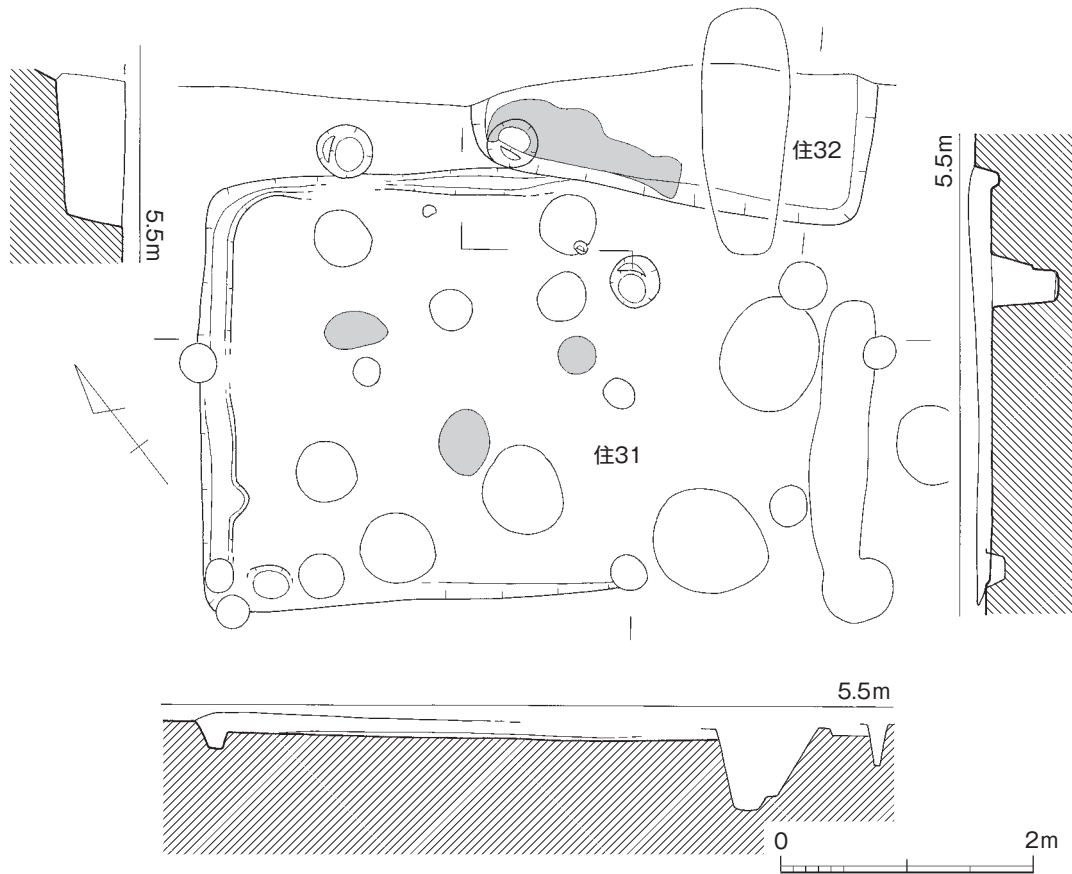
49は鼓形器台小片で、特別に変わった点はない。50は支脚か。脚端部が踏ん張る形となる。51は頂部の一端をつまみ出す形のもので、つまみ出された部分は欠損する。つまみ出された反対側が基部から上端まで焼けて赤変することから、これは「把手」として意識されたものと思われる。52は上端を大きくえぐる器台で、特別に火熱を受けた部分は見えない。

53は直径3.8cm、高さ3cm、重量37.7gの大型土錘で、やや歪な形ではあるがおおむね丁寧に作られた感がある。胎土も微砂粒が多く見えるが、良好といってもよいようである。平面形に図示した孔は穿孔の際に穿孔器具が動いたようで、反対側は小さくシャープな孔となっている。その場合図上面側から穿孔したと考える方が妥当であろう。

### 31号竪穴住居跡（図版18・19、第85図）

方形周溝の南西に位置し、32号竪穴住居跡に切られていると判断された。南東辺は不明である。北東辺と南西辺の幅は3.4mほどの規模で、深さは最大で0.15mほどである。

柱穴はほとんどが後世のもので、床面で検出したものは2基に過ぎない。また、焼けて赤く変色した部分が3ヶ所にあったが、南の2ヶ所は埋土中で、床面の変色域は北側の1ヶ所だけである。出土遺物から見て、カマドではなく炉跡が想定されるが、この変色位置は偏している。



第85図 31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

#### 出土遺物

土器(第87図1~3) 1は図示部がほぼ完存、これは床から浮いて底部を上に向けて出土した。器表が荒れているが丁寧に作られている。2も図示部がほぼ残存する。肉厚となる平底をもつ甕で、内外面を丁寧な刷毛目で仕上げる。胎土も良好。3は小型の脚台で、これも丁寧に作られる。

#### 32号竪穴住居跡(図版18・19、第85図)

31号竪穴住居跡の南東にあって、31号竪穴住居跡を切っていた。方形周溝に切られるように図示しているが、存在に気付いたときはすでに方形周溝を掘り下げた後だった。

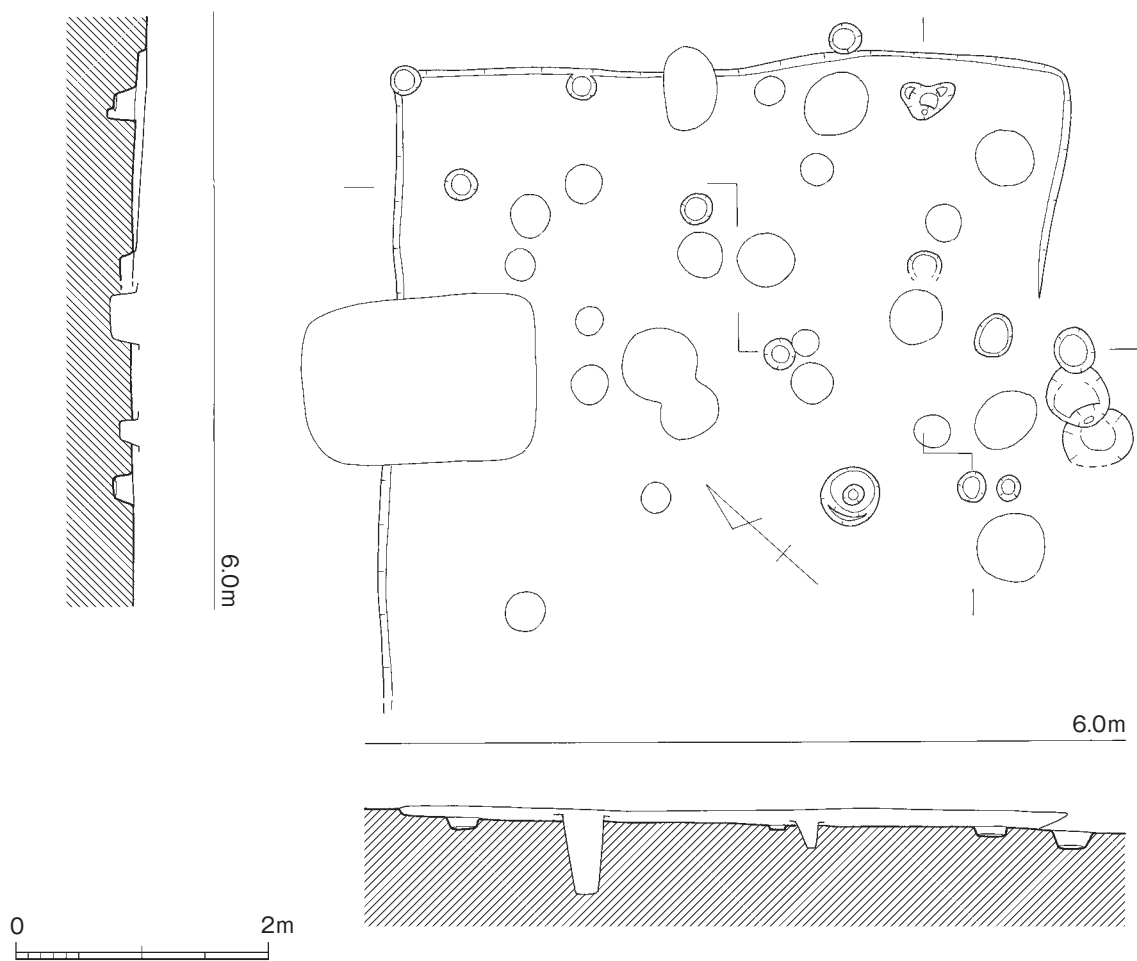
検出した二辺から見て、方形プランの住居跡であれば方形周溝の内側に北西辺が現れるはずであるが、認めていない。規模が小さいこともあり、住居跡とすべきでないのかも知れない。

#### 出土遺物

土器 小片のみであるが円形透孔をもつ高杯脚部片やレンズ状の丸みをもつ底部片などがあることから、弥生時代末~古墳時代初頭頃に属する住居跡といえよう。

#### 33号竪穴住居跡(図版18・20、第86図)

31号竪穴住居跡の北西に近接し、土坑に切られる。南西辺は不明であるが、北西辺と南東辺の幅は5~5.3mを測る。ただ、深さは最大で0.1mほどに過ぎない。



第86図 33号竪穴住居跡実測図 (1/60)

これも図示した柱穴のほとんどは上層から掘り込まれたもので、主柱穴は不明である。炉跡・カマドの痕跡も認められなかった。

#### 出土遺物

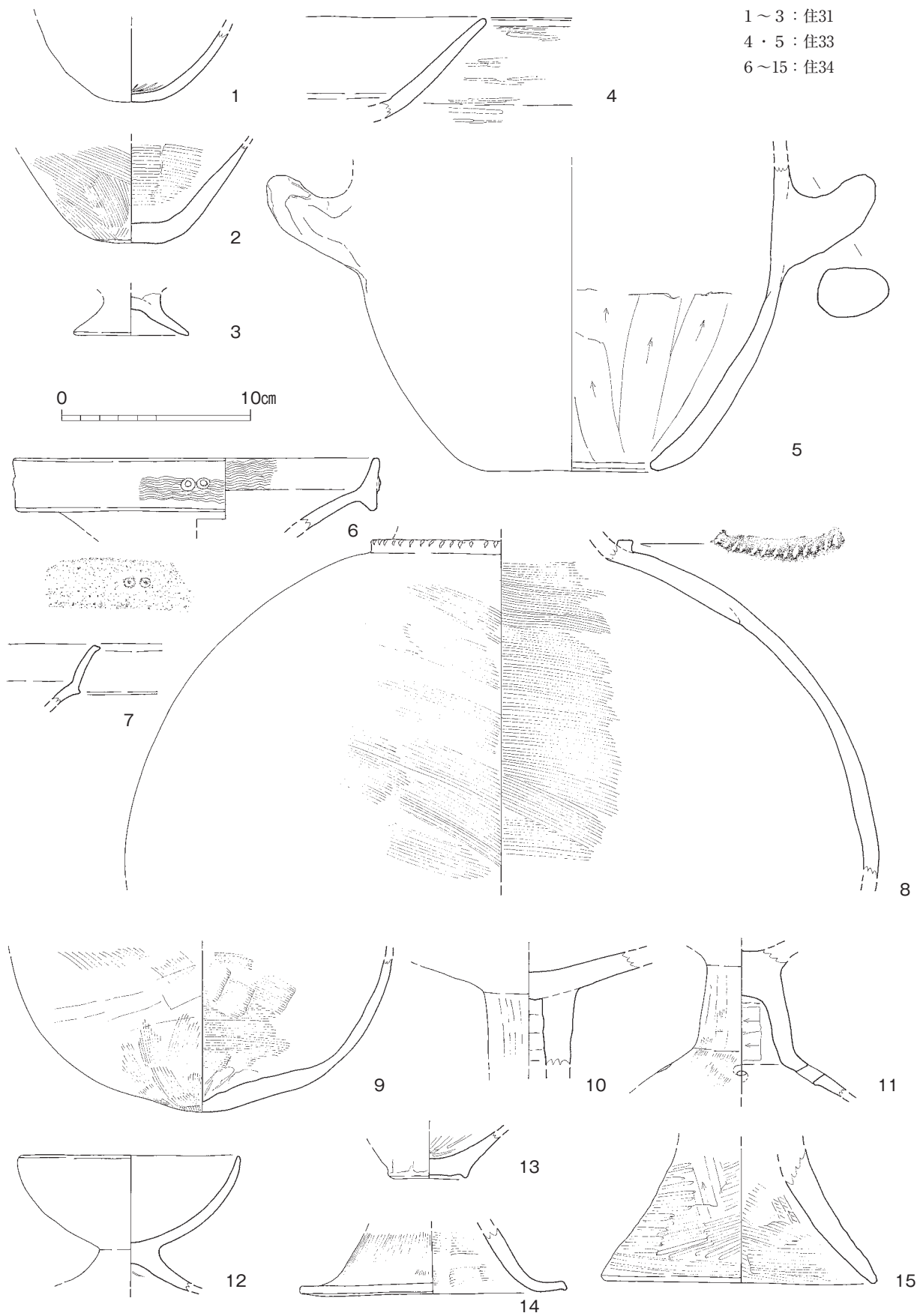
石製品（図版44、第144図1） 出土状態を確認できていないが、灰緑色の滑石を用いた模造鏡である。直径4.5～4.9cmのやや歪な円形となり、外縁の厚さは0.7cmほど、鈕の部分は最大1.7cmの厚さとなる。全体によく磨かれているが、その際の細かな条線がよく残る。重量は41.0g。紐孔は両口ともに2mmで整っている。

土器（第87図4・5） いずれも埋土からの出土。4は高杯小片で、器肉が厚い。胎土は良好だが、外面が煤けている。5は底部付近がほぼ完存する甑片。底部の孔が大きく、体部が曲線を描く。内面の篋削りは丁寧に施される。

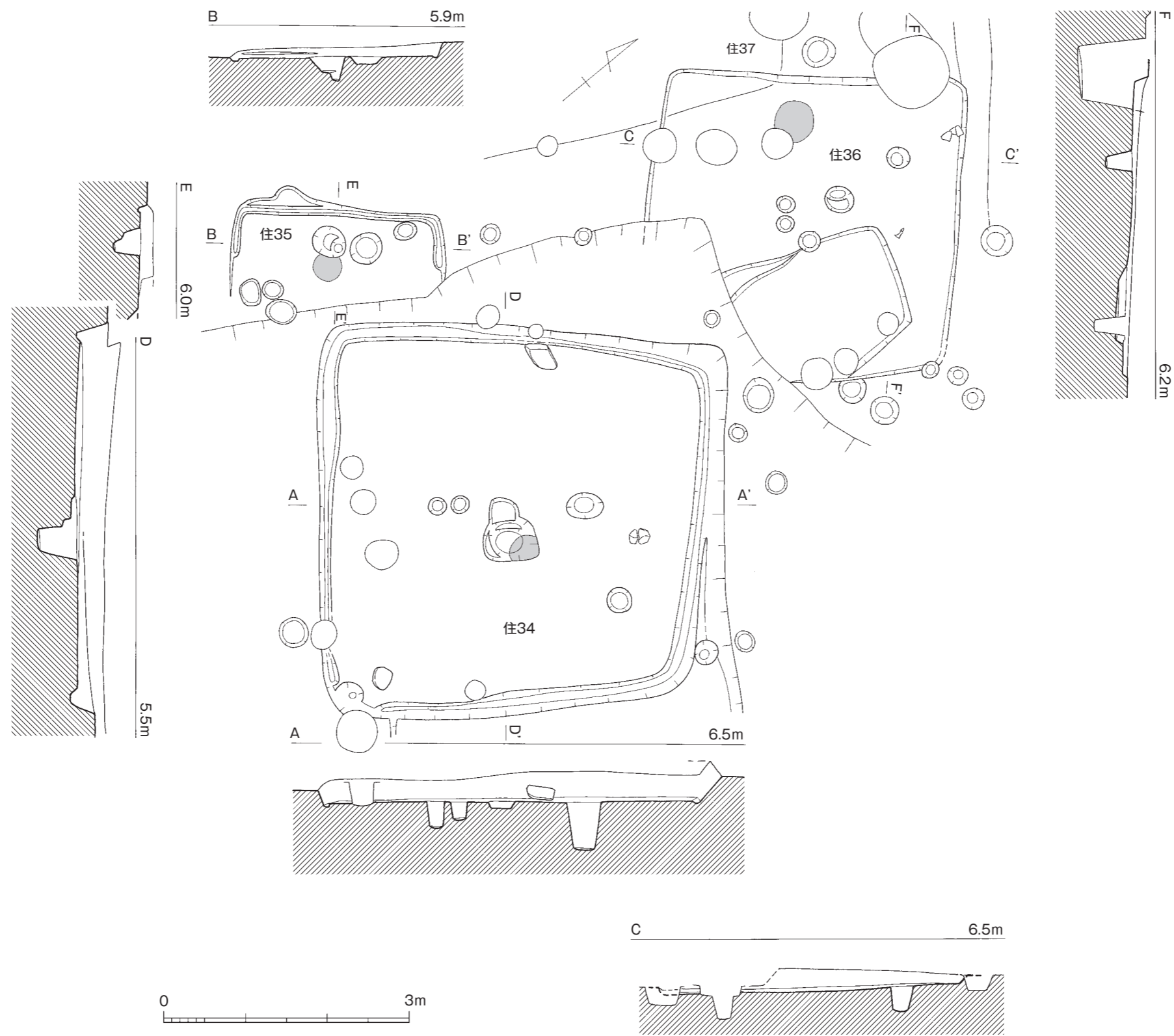
#### 34号竪穴住居跡（図版18・20、第88図）

方形周溝の北西に近接する。一辺4.7～5mのほぼ正方形の整ったプランをもち、北隅付近での最大の深さは0.5m、最も浅い南西辺付近では0.15mほどとなる。

四周に深さ5cm前後の周壁溝が巡るが、南隅付近では途切れて、隅に深さ0.3mほどの柱穴が配



第87图 31·33·34号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第88図 34～36号竪穴住居跡実測図 (1/60)



される。中央付近に炉跡があり、軸をずらして2本の支柱穴を配するものと思われるが、支柱穴の規模が揃わない。

#### 出土遺物

鉄滓（第8図7） 図示した面は上半付近は土や砂が混在し、下半は左右に弧を描いて黒色に近い地肌が露出する。下面は錆が吹いたような茶褐色となる。重量は15.3gで、磁石には反応しない。

石製品（図版45、第145図11） 暗灰色片岩製の石庖丁で、唯一背が丸くなる。ただ、背の両端付近では刃部としてよいような形状となっていて、本来は背が刃部であったものが改変された可能性も考えられる。孔は両面から穿孔されているが、敲打痕が目立つ。今回紹介する石庖丁では唯一の例である。

土器（図版40、第87図6～13） いずれも埋土中からの出土。6は口端部を上下両側に肥厚させてほぼ直立する面を作る二重口縁壺で、内外面を非常に繊細な櫛描波状文で飾り、外面には竹管文を押し付けた浮文を2個1セットで置く。器表が荒れて、色調は黄白色～赤味帯びる黄白色となるが、一見して特徴あるものではない。7も二重口縁壺小片。8は1/4ほどが残存、頸部にシャープな篋描の刻みを付す突帯を巡らせる。器表が荒れているが、内外面ともに細かい刷毛目を使用している。なお、外面に縦方向ではあるが、斜位に篋描の線が1条走る。

9は図示部が完周する底部片、底部が肉厚で形状も不整となる。これも内外面ともに細かい刷毛目を多用するが、外面では部分的に篋削りが観察できる。

10は器表が荒れる高杯片。11も器表が荒れているが、これには円形透孔が4個残る。12は浅く、大きく開く脚をもつ椀形で、これも器表が荒れる。

13は平底の甕底部。14は脚部片であるが、類例をあまりみない。15は器台片で、外面は全面を平行叩きで調整した後に部分的に篋削りを行う。胎土は良好といってよい。

#### 35号竪穴住居跡（図版20～22、第88図）

34号竪穴住居跡の西、切り合う位置にあるが、先述したように34号竪穴住居跡付近から南西側は重機を用いて掘り下げたために段が生じ、南西辺が失われて切り合い関係は確認できなかった。

判明する規模は一辺長2.6mの小型の遺構であるが、周壁溝を巡らせ、床面には被熱赤変した部分があって炉の痕跡としてよいものと思われる。支柱穴は不明であるが、小型住居であり通常と異なる構造を考える必要があろう。

#### 出土遺物

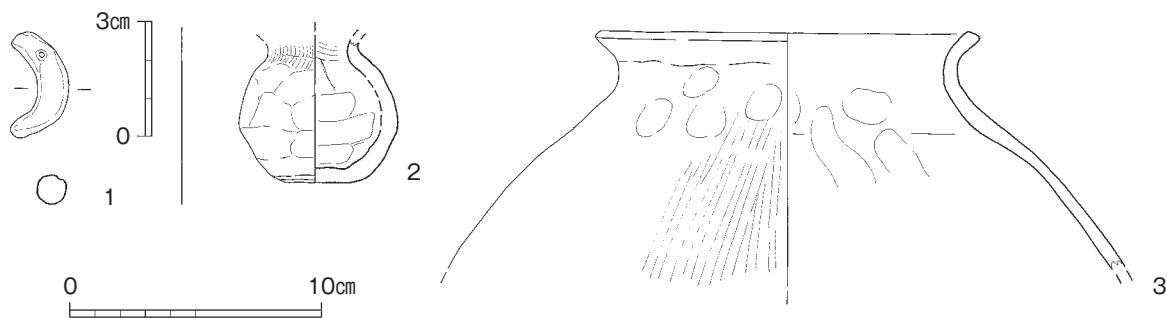
土器 これも良好なものがないが、小さなレンズ状底部の土器片があり、一つの指標とできよう。

#### 36号竪穴住居跡（図版21・22、第88図）

34号竪穴住居跡の北、これも一部が切り合う位置にあるが、段のために切り合い関係は確認できなかった。また、西隅付近は後述する37号竪穴住居跡を切っている。

一辺3.7mの方形プランを有し、深さは0.2mほどが残る。床面レベルが北西から南東に向かって傾斜しているのは掘り過ぎであろう。

支柱穴は断面に示したものを含む4本柱であろうが、2本を確認したのみである。北西辺から少し離れた床面が赤く焼けていたことからカマドがあったことを想定できる。発掘時に袖には気付か



第89図 36号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3、1/2）

なかった。

南東辺に接して長方形に近い0.1m内外の大型の浅い掘り込みがあるが、住居跡と辺がまったく揃っていないことから無関係の遺構と思われる。

#### 出土遺物

土器（図版40・47、第89図） 出土遺物は少ない。1は勾玉形土製品で、注記「J（住居跡）301北の遺構上面」からこの住居跡に伴うものとして扱うが、若干の不安がある、長さ2.7cmの細身のもので、表面が荒れている。2は口縁部を除いて完存する平底の小型壺で、体部中位に一周する甘い稜線が入り、上下にいくつかの面が見える。板状の原体を押しつけて成形したものようである。内面は指撫でで仕上げている。3は口縁部の1/4ほどが残存する甕で、器表が荒れる。

#### 37号竪穴住居跡（図版21～23、第90図）

36号竪穴住居跡の西にあって、同住居跡に一部が切られていた。また、中央付近から南西辺にかけては真新しい攪乱坑で大きく破壊されている。一辺長5mほどの方形プランを有し、深さは最大で0.3mほどである。北隅付近に2条の小溝があるが、北側の溝は重複する住居跡のもので、南側のそれは深さ0.1mに満たない浅いものである。

須恵器を含む出土遺物からみて、カマドが設置されたはずで、北西辺の中央ではないが、先の小溝の横にある赤変した部分がカマドの火床であろう。また、住居跡中央付近から北東に偏して焼土が広がっていた。

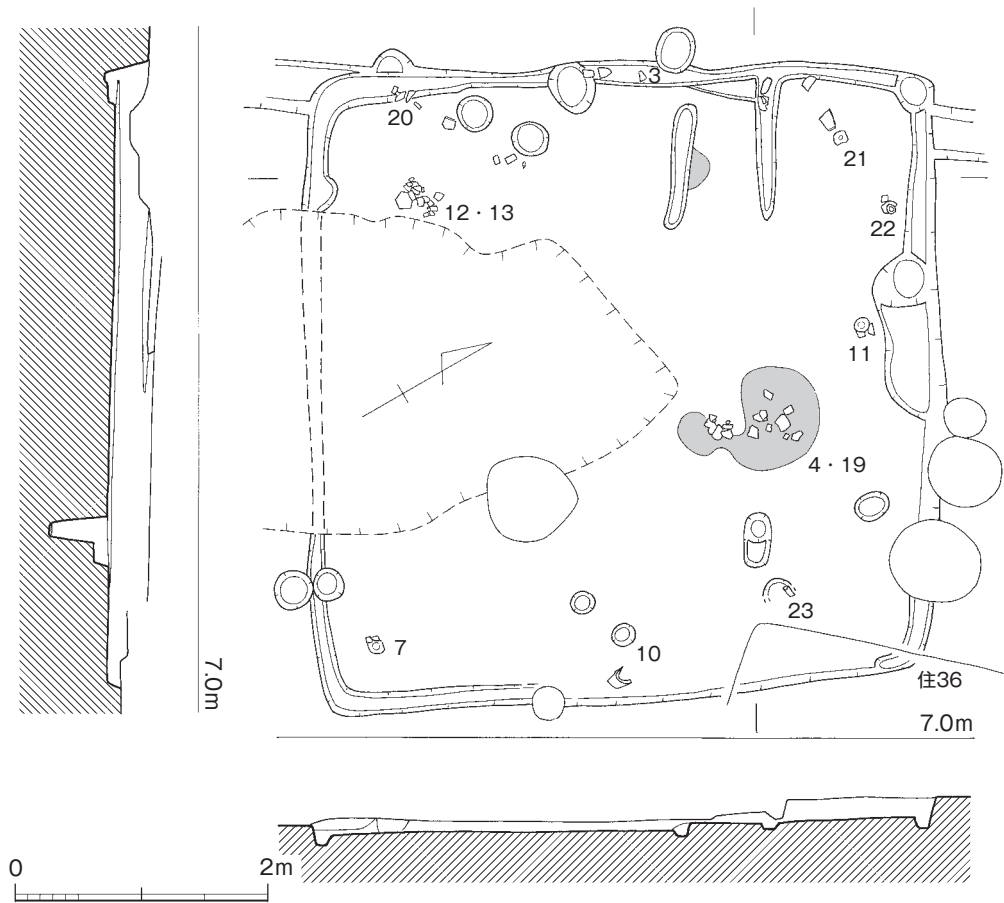
周壁溝は完周せず、支柱穴はすべてを検出できなかった。

#### 出土遺物

石製品（図版44、第144図10） 同図9と同一母岩で、玉作に関わる資料である。碧玉製で、2.89gを測る。楔状に素材を固定して、平坦面を打面として剥片剥離を行っている。明確な素材剥離面を確認できないが、対向する平坦打面の両極に剥離が認められるため、ここでは楔形石器としておく。

土器（図版41、第91・92図） 1～3は須恵器、ほかは土師器である。1・2は「南半」、3は北西辺周壁溝中からの出土であるが、位置的には隣接する40号竪穴住居跡の遺物としてもよいレベルから出土している。1は焼成の甘い天井部片で、杯蓋とする根拠はない。天井部の篋削りは雑である。2は杯身小片で、口端部に面をもつ。3は1段透孔の高杯片で、脚部の1/3が残存する。胎土良好で丁寧に作られる。外面は全面に灰を被る。

4はミニチュアで、手捏ねに近いが胎土良好で器面も丁寧に調整されている。これは北辺土坑か



第90図 37号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ら出土したもの。5は小片、6は焼けて赤変する。7は縦方向にほぼ1/2が残存する直口壺で、口縁部が内彎気味に高く立ち上がり、体部は偏球形となる。器表は荒れている。8も縦方向に1/2が残る。器形は須恵器に似るが、体部内面には篋削りや指頭痕が見えるので、器形を模倣したのであろう。

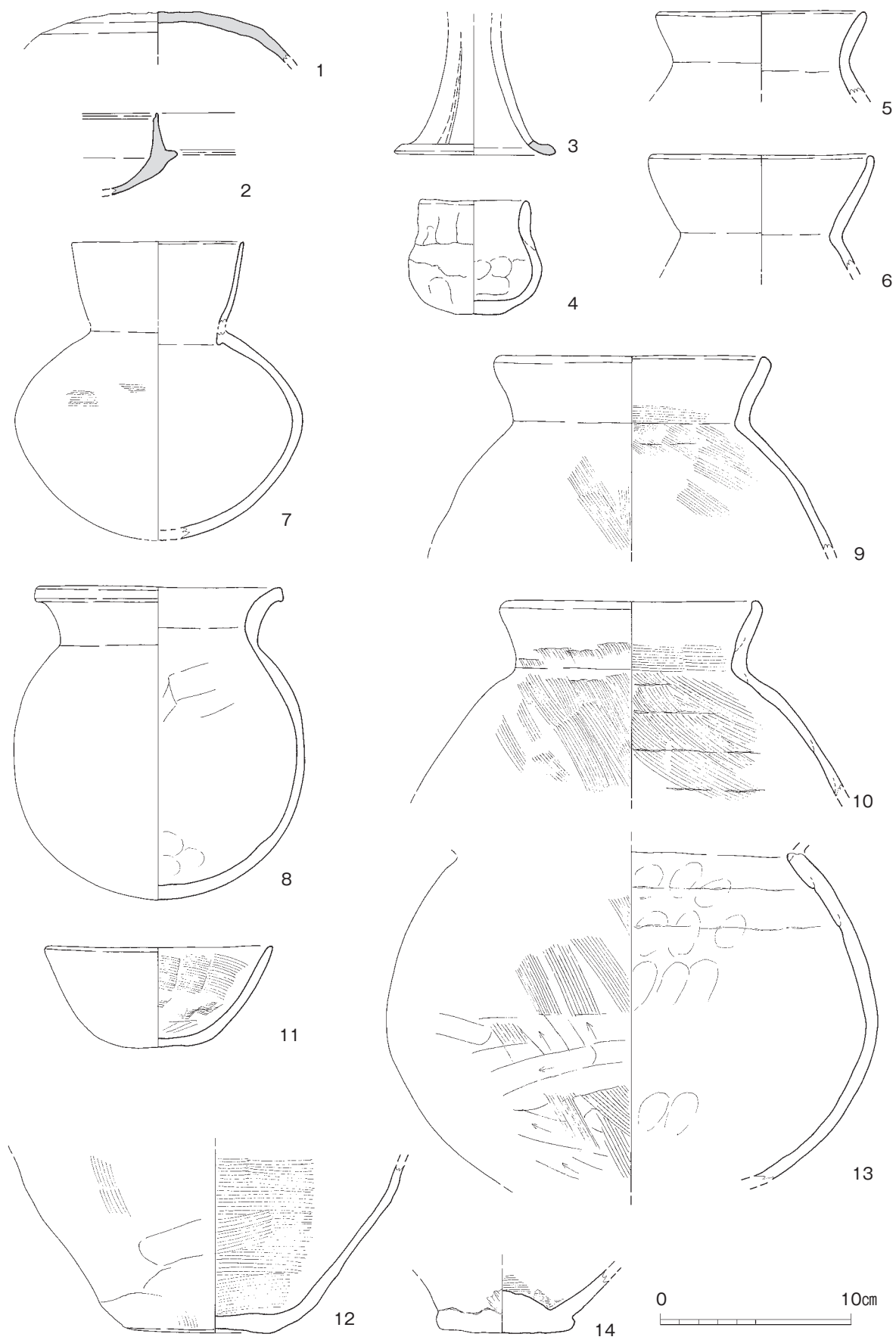
9・10は口縁部付近の1/3・2/3が残存する甕で、口縁部が高く直線的に立ち上がって、端部を内側へつまむ癖が共通する。9は大部分が焼けて赤変する。

11は大部分が残存する鉢で、これも焼けて赤変し器表が荒れる。

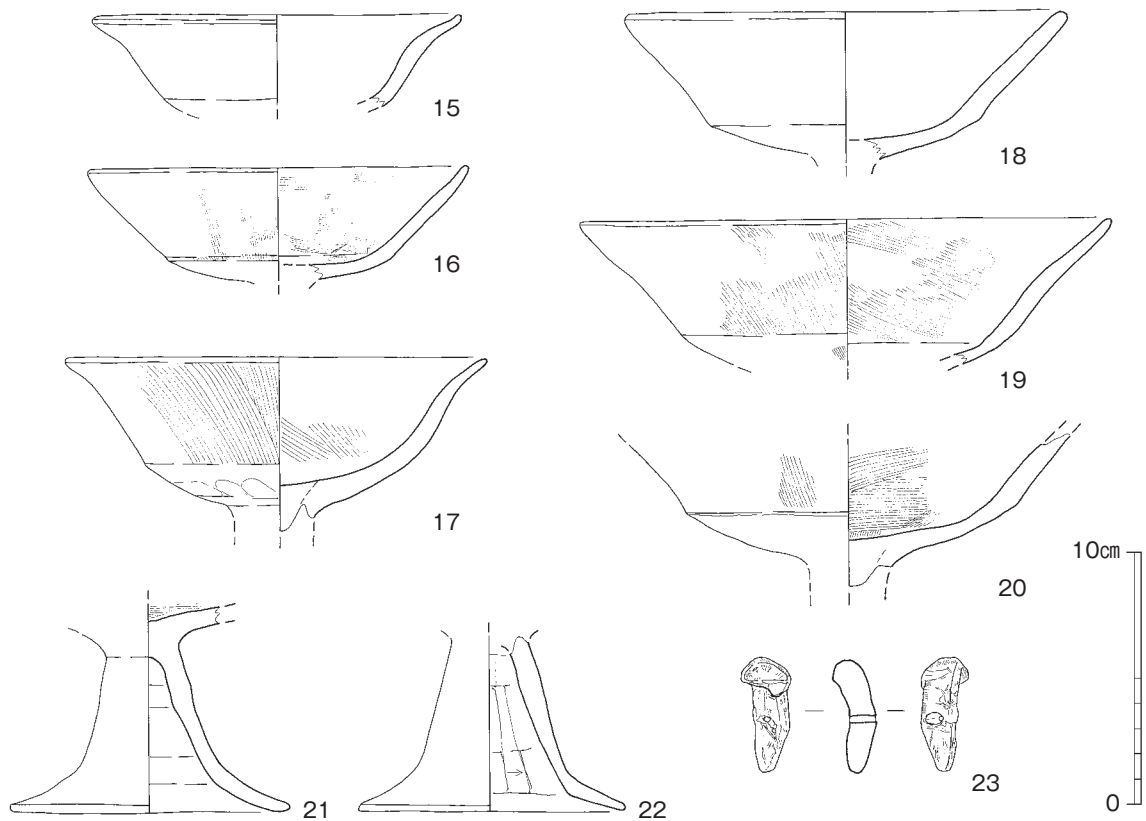
12は大きな平底をもつ底部で、2/3ほどが残存する。体部下半外面は撫でて仕上げるようで、全体に煤けている。13は球形の体部片で、復元径には不安がある。14は平底の底部片で、胎土は良好であるが調整が雑である。

14～23は高杯。14は小片で、口縁部が強く外彎し、端部をつまむ。15は1/4ほどが残存、杯屈曲部はミミズ腫れ状の弱い稜線を付す。16は3/4が残存、縦方向に1/2ほどがよく焼けて赤変し、支脚として使用されたものであるかも知れない。17も器表が荒れ、これは肉厚となる。18・19は16に似た器形となりそうである。いずれも杯屈曲部の稜が甘く、刷毛目を多用する。20は脚部が曲線的に開くもので、これは赤く焼き上げられたようである。21は縦方向に半分強が非常によく焼けている。16と同一個体であるかも知れない。

22は灰赤色に焼かれた土製品で、全長4.5cmほどの大きさである。図下端は丸くなって終わり、上端は折り返した部分を棒状工具で押し潰して一部を破損するが、何かを造形したようには見えない。孔は穿孔時にぶれたようで、斜めに入って側縁が膨らんでいるが、それも整形の手を加えてい



第91图 37号竖穴住居跡出土土器実測图1 (1/3)



第92図 37号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

ない。左側に図示した凹部よりも凸部のほうがより丁寧に撫でているようである。微砂粒を含むが、通常の土器に比して胎土はより良好といえる。

### 38号竪穴住居跡

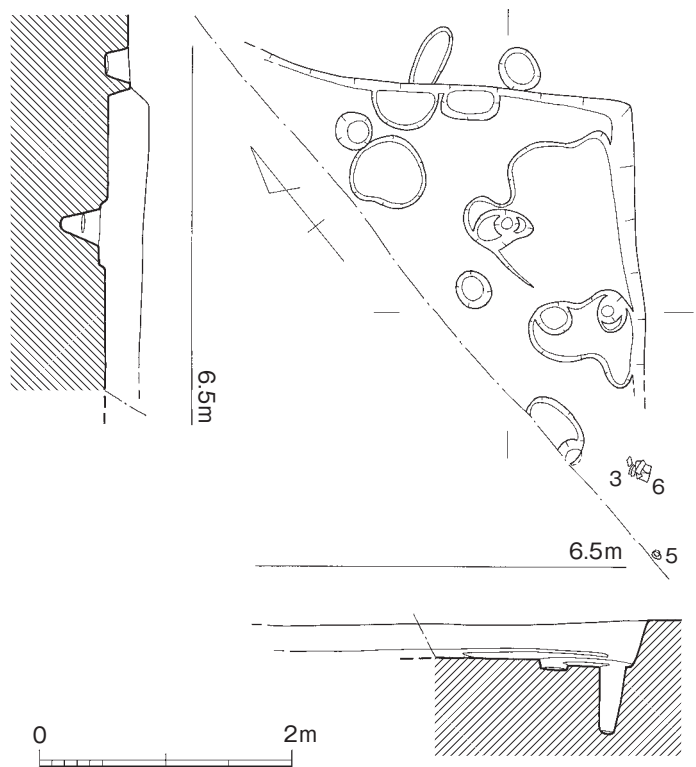
(図版21～23、第93図)

37号竪穴住居跡の南西にあり、半分ほどを検出したのみである。調査区境であり、かつ包含層中で検出したこともあって、一部不明瞭なところがある。一辺長は3.5m以上、深さは最大で0.3mほどである。

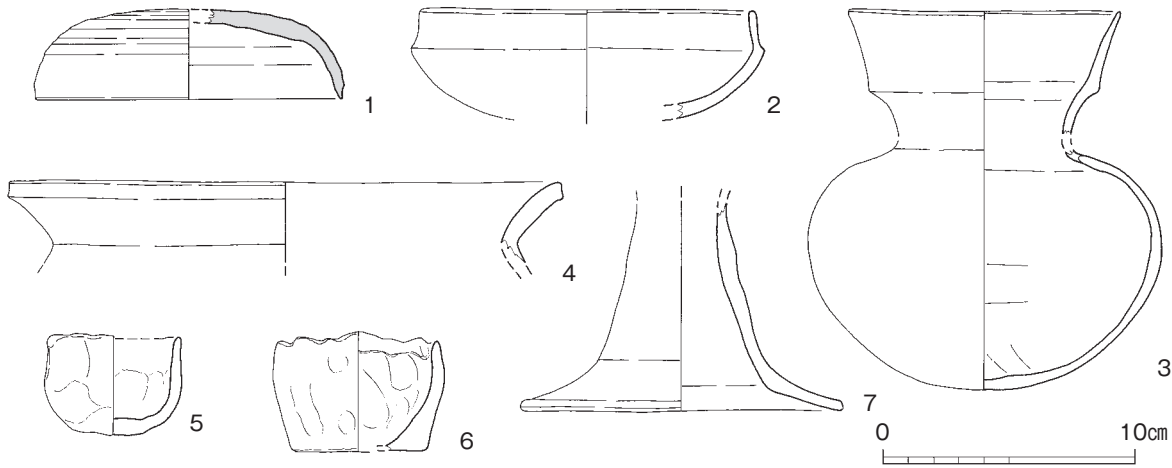
カマド・炉は調査区内になく、支柱穴も断定できない。

### 出土遺物

土器(図版41、第94図) 3・5・6は遺構図に示したように、住居跡に伴うものか微妙な位置から出土したものであるが、ここで報告してお



第93図 38号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第94図 38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

く。

1は器肉の厚い須恵器杯蓋で、1/2の残片。天井部から口縁部にかけて丸く移行し、胎土・作りは良好で、外面は全体に灰を被る。

2は須恵器杯身の器形を模倣した土師器で、胎土良好だが器表が荒れる小片。3も須恵器を模倣したものであろう。しっかりとした二重口縁をもち、張りの強い偏球形の体部をもつ。体部内面は篋削りで仕上げるようで、器肉が薄くなる。これも胎土良好で丁寧に作られているが、焼けて器表が荒れている。口縁部の1/2、体部は1/3ほどが残存。

4は1/4ほどが残る甕口縁部。5・6は手捏ねの小型土器。7は高杯脚部で、これもよく焼かれて器表が荒れている。

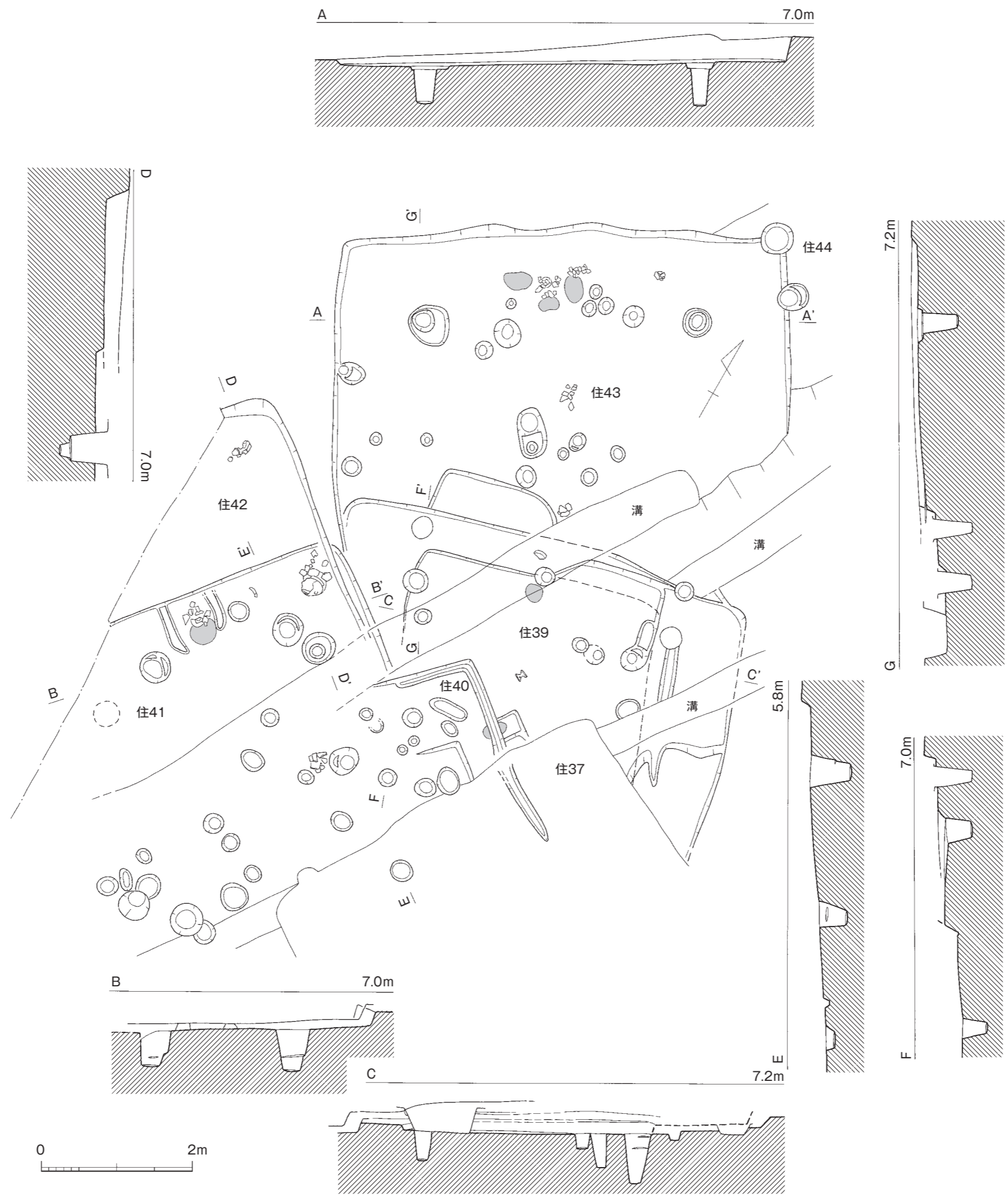
### 39号竪穴住居跡 (図版21・22、第95図)

このあたりは厚い包含層が堆積していて、それを除去する過程で包含層中で中世の溝を検出、包含層を除去して複数の切り合う住居跡を検出した。

39号竪穴住居跡は43号竪穴住居跡を発掘後に存在に気付いたもので、43号竪穴住居跡の支柱穴が39号竪穴住居跡を切っていることから先後関係は間違いない。また、41号竪穴住居跡はその43号竪穴住居跡を切っている。さらに、検出時の所見では37・40号竪穴住居跡にも切られていて、重複するすべての住居跡に切られる、最も古い遺構と思われる。

西辺には幅1m、高さ0.1mほどのベッド状遺構があって、北辺に続くがそこでは幅0.5mとなる。これは後世の溝で途切れ、溝の東ではベッド状遺構がなくなっているが、これは発掘のミスである。東辺も残存部の中央付近に後世の溝が走っていて、発掘時には気付いていなかったのであるが、東南部の不整形の高まりの西端と支柱穴東の低い段を結ぶラインでベッド状遺構を推測できる。そのすぐ東の小溝は先後関係を確認できていない。ベッド状遺構の裾に溝を伴うことがあるが、ここでは支柱穴とベッド状遺構との通有の位置関係、東南の不整形の高まりと支柱穴東の小さな段を重要視して、上記のように復原したが、ベッド状遺構の幅が異なっていることでいささか不安もある。

以上の復原を前提として、東西長は最大で5.5mほどの規模となろう。南北長も同程度とすれば、40号竪穴住居跡の北東辺周壁溝に切られた赤変部が炉の痕跡といえそうである。南東部支柱穴・屋内土坑は確認できなかった。



第95図 39～43号竖穴住居跡実測図 (1/60)

なお、調査時はベッド状遺構との確信が持てなかったために、ベッド上を39号竪穴住居跡中段、ベッド内を同下段とし、北辺の張り出し部を同上段としていた。この上段は東端が後世の溝に破壊されているが、幅1.6m前後、奥行き0.5m強で、現状の深さは0.1mほどの規模である。出入口であろうか。

#### 出土遺物

土器（図版41、第96図） いずれも「下層」出土の土師器高杯2点を図示した。1は口縁部付近をすべて失うが、以下はほぼ完存する。杯部下半は椀というよりは文字通り浅い杯状となり、その内面中央部がくぼんでいる。脚部は曲線を描いて開き、孔は3方向。焼けて器表が荒れている。2は作りが雑で、外表が平滑化していない。これは混入であろう。

#### 40号竪穴住居跡（図版21・22、第95図）

37号竪穴住居跡の北西にあり、北隅付近の周壁溝の一部を検出したのみである。中世の溝状遺構に切られ、かつ壁体が残存しないことなどもあって不明瞭なままで終わった。一辺長は2.7m以上、深さは最大で0.3mほどである。39号竪穴住居跡の炉跡と思われる赤変部を切っていることから、それに後出すると思われる。

周壁溝に平行して高さ0.06mほどの浅い段が検出されている。北西辺では周壁溝との幅が約1m、北東辺では同幅0.5mほどとなるが、ベッド状遺構の痕跡であるかも知れない。カマド・炉跡は確認できず、支柱穴もはっきりしない。

#### 出土遺物

石製品（図版47、第147図17） 図示した面が滑らかになっているので砥石として報告するが、通常イメージする砥石のような平滑なものではなく、隣接して未使用の部分もある。花崗岩質砂岩であろう。

土器（第96図3～8） 3～6は須恵器、ほかは土師器。3は口縁部付近の1/4弱が残存する杯身で、胎土は精良といってよかろう。肉薄で、外底面の回転篋削りは丁寧であるが内面の横撫では凹凸が目立つ。4は小片からの復元で、口径に不安がある。3に比べて肉厚で、これも胎土良好で、調整も丁寧である。5・6は小片で、5の杯蓋は焼成が甘いようで胎土に締まりがない。

7は口縁部が小さく外彎する椀の小片で、胎土は良好。赤く焼き上がる。8は甑片で、器表が荒れている。

#### 41号竪穴住居跡（図版21～24、第95・97図）

39号竪穴住居跡の西にあって、わずかな部分での重複であるが、39号竪穴住居跡を切っていると判断された。40・42号竪穴住居跡とも切り合い関係にある。図では40号竪穴住居跡に切られるように表現しているが、40号竪穴住居跡がベッド状遺構を有しているものであれば41号竪穴住居跡が後出することになる。42号竪穴住居跡には切られていると判断された。

西隅付近は調査区外となり、北西辺が3.3mほど、北東辺は2mほど残存する。北西辺に接してカマドが設置されていて、それを中心として折り返せば北西辺の規模は4.2mほどとなる。深さは北隅付近で最大0.2mほどが残存、42号竪穴住居跡の床面とは0.1mほどの差がある。

検出時のカマドは平面方形に近い形で黄褐色土に覆われていた。最終的には赤く焼けた火床と、

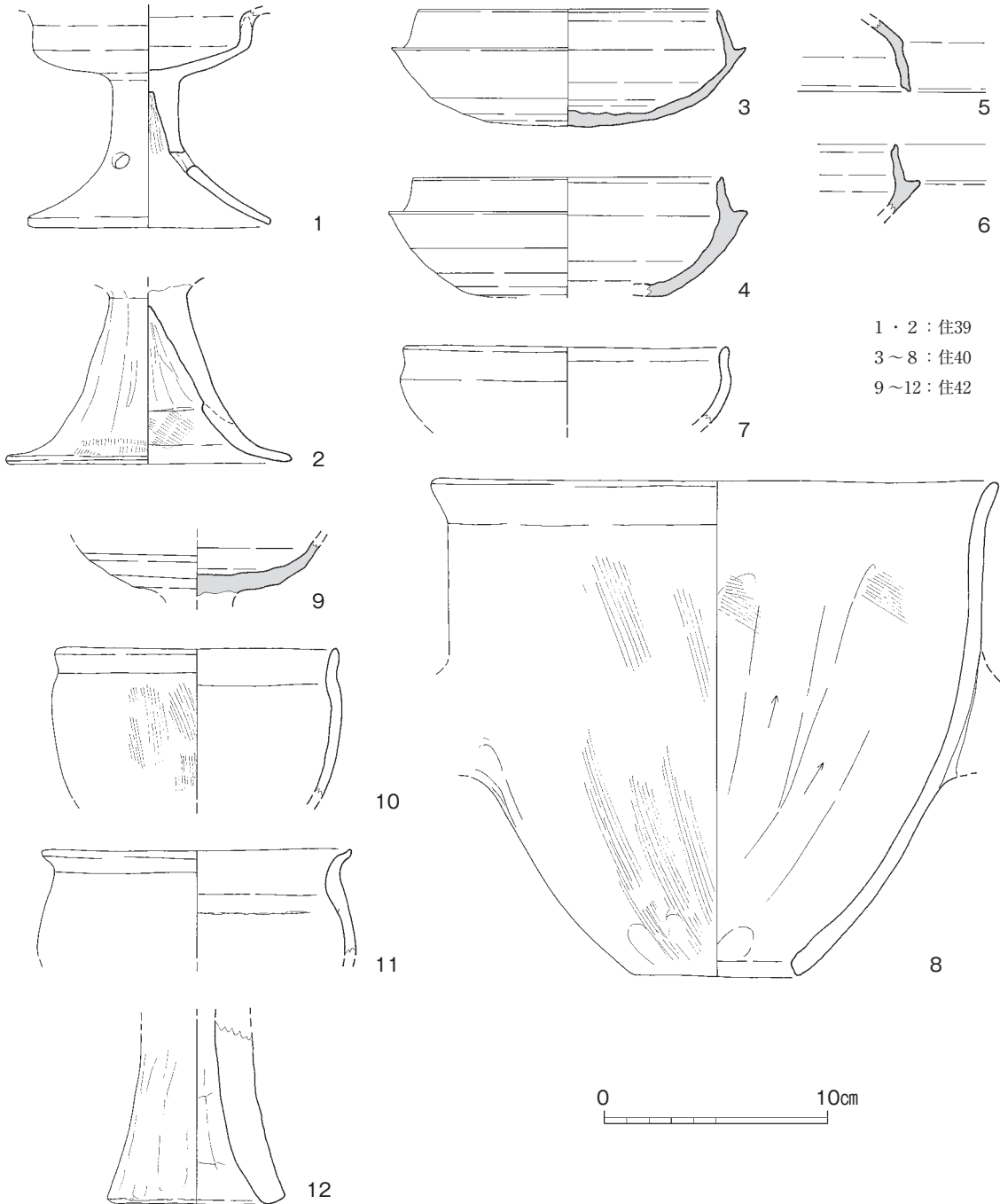


土師器高杯を伏せて支脚として使用したものなどが黄褐色土の下から出土したことから、カマド内部の片付けをしないまま、塞いだといった表現が相応しく思える。

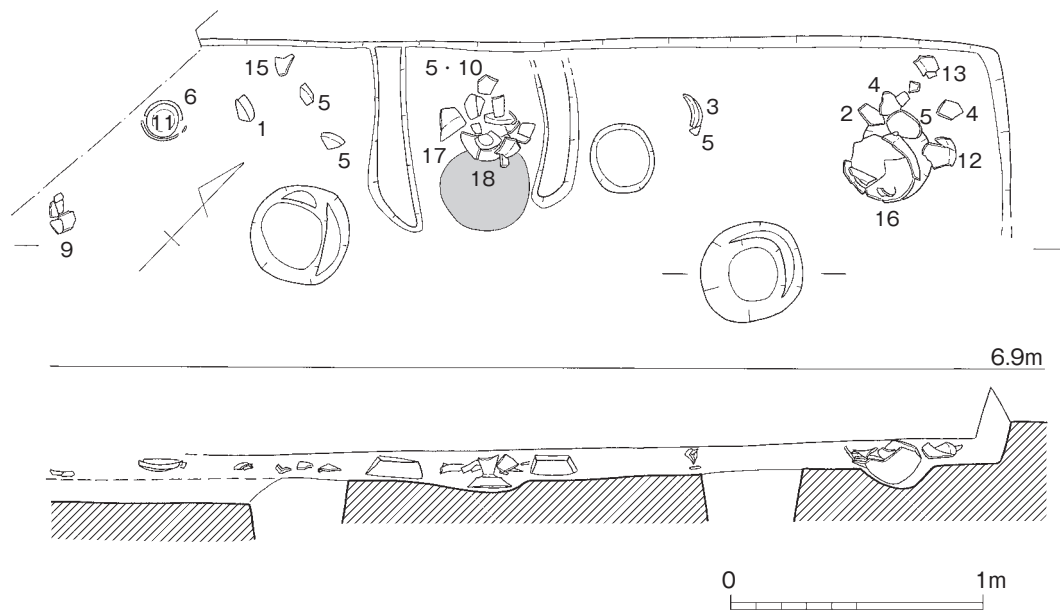
主柱穴と考えられる柱穴として、北側ではしっかりした2基の柱穴があるが、1基は埋土上で検出していることからこの住居跡に伴うものではない可能性がある。東のそれは小振りで浅いために不安がある。西の主柱穴は、図版で見ると空中写真にはそれと思われる柱穴があるので、図化を失念したようである。

出土遺物

土器（図版41、第98図） カマド周辺及び内部から土器が出土したが、5に示した土師器杯はカ



第96図 39・40・42号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第97図 41号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30)

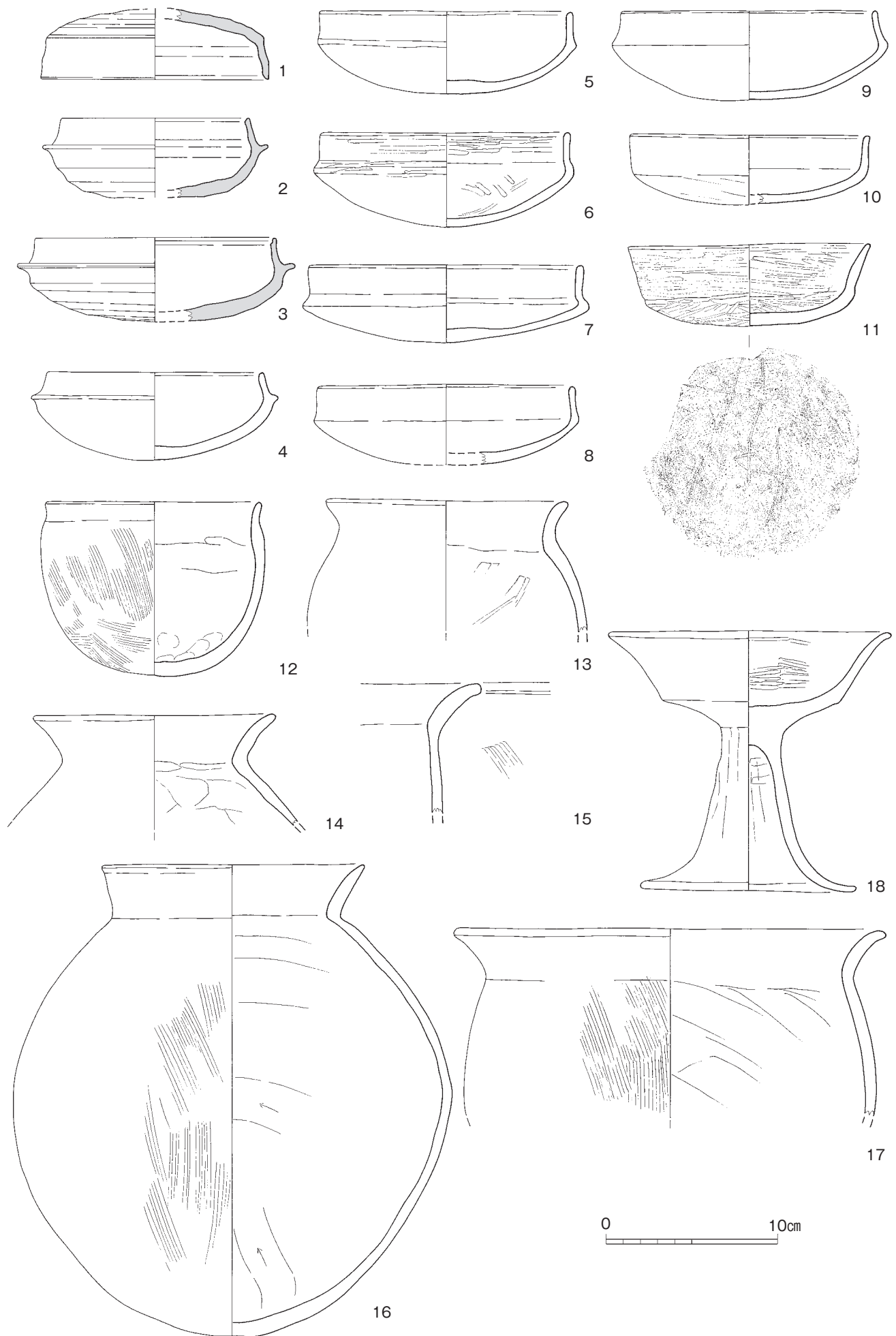
マド左側に一部があって、半分ほどは北隅の土師器甕などとともに出土するなど、偶然ではあり得ないようなあり方を示していた。また、北隅に置かれた土師器甕の内部からは、ごく微細な骨片が若干認められた。灰白色を呈し、焼かれたもののように思われた。

1～3は須恵器。1は口縁部付近の1/4ほどが残存、胎土は粗く、天井部の篋削りも雑に見える。口縁部との境は突出せず、やや甘い稜線で画するが、この稜線まで篋削りが及ぶ。内面の横撫では丁寧といえる。2も口縁部の1/4ほどが残存、これは焼成が甘く、淡灰色となる。胎土は良好といってよいが、これも篋削りは粗い。3は底部と口縁部の一部を欠くが完形に近い杯身で、これは焼成甘く淡灰色となる。また胎土が粗く、篋削りも粗い。

4～11は土師器杯である。須恵器杯によく似るもの(6)、受け部を小さく突出させるもの(7～9)、受け部の表現が単なる稜線となるもの(8～10)には口縁部が内傾するものと直立するものがある。4は口縁部の1/2を欠くほかはほぼ完存する。器表が荒れて調整痕は明瞭でないが、体部外面には篋削りを施したような砂粒の動きがかすかに見える。灰黄褐色～灰赤褐色の普通土師質に焼かれる。5はカマドの左右に分散して出土したもので、ほぼ完存。器表が荒れる。6は11と重ねられていたもので、完存するが調整痕はよく見えない。口縁部から体部にかけて1/3ほどが焼けて赤変する。7は体部の1/3ほどが残存するが口縁部は小片で、やはり器表が荒れている。8～10も調整痕はよく見えない。

上記の杯類に比して、11は肉厚で非常に残存状態がよい。口縁部から底部界にかけて器表の1/4ほどが大きく剥離しているが、その他の部位では全面に篋磨きが施されていて、胎土にもほとんど砂粒を含まない。また、外底面に繊細な刻線で、1匹の魚が仕掛け(罟)に入ると解釈できそうな絵が描かれている。

12は口縁部の外反がとても弱く鉢といってよいような器形で、口縁部付近の1/3ほどが残存。器表が荒れるが、まだ繊細な刷毛目が見える。13は外面が焼けて赤変、内面は口端部まで黒色化している。これは胎土が粗い。14は器表が荒れるが、焼けた様子は見えない。15は口縁部が長い甕で、これも胎土粗く器表が荒れる。16は骨粉が入っていた甕で、口縁部の1/3ほどを欠くが体部



第98图 41号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

はほぼ完存する。体部下半には器表が弾けているところがいくつか見られる。17は1/4ほどの残片で、焼けて赤変し、器表が荒れている。

18はカマド内に伏せ置かれた高杯で、完存する。胎土良好であるが器表が荒れる。時に脚部は真赤となる。

#### 42号竪穴住居跡（図版21・22、第95図）

41号竪穴住居跡の北西にあって重複するが、埋土の状況から42号竪穴住居跡が後出すると考えている。北隅と北東辺の一部を検出したもので、北東辺は3.6mまで確認している。北隅付近で若干の土器を出土したが、カマドは調査区外で、支柱穴も上手く見つけれなかった。

#### 出土遺物

石製品（図版43、第99図1） 灰白色透明感のある滑石製白玉で、直径5mmほどの大きさである。図背面は欠損する。出土状況は不明。

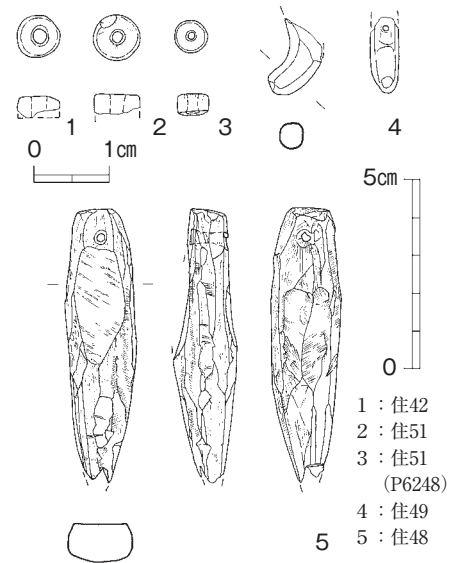
土器（第96図9～12） 9は調整がやや雑な感のする須恵器高杯片、ほかは土師器である。10は口縁部の変化が小さい鉢で、1/4ほどが残存する。11も口縁部が小振りな甕の小片で、これは赤変する。12も小片だが、口縁部外面に粘土紐の継ぎ目が残る。13は支脚片で、図示部はほぼ完存する。よく焼けていて、特に図下半付近は白色化している。鞆羽口として使用されたものかも知れない。

#### 43号竪穴住居跡（図版21・22・24、第95・100図）

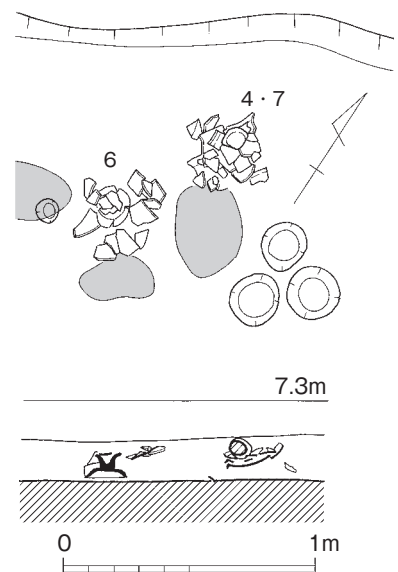
42号竪穴住居跡の北にある。そのさらに北東にある44号竪穴住居跡を切っていて、41号竪穴住居跡に切られる。北西辺長は6mを測り、深さは最大で0.3m。南東辺は確認できなかった。

北西辺中央付近で壁際に灰白色粘土を交えた異質な埋土が認められたが、カマド全体を覆うといった広がりを持つものではなかった。ただ、位置的にはカマドの存在が考えられたために、サブトレンチを入れたが、やはりカマドの袖は確認できなかった。その後、埋土のすべてを除去して支脚に使用された高杯などを検出、その前面などで焼けて赤変した火床なども確認した。この住居跡も41号竪穴住居跡のようにカマドを塞いだといえるが、支脚を残してカマド全体を壊したようである。支脚北側で潰れた土師器甕の上に小さな自然石が置かれていたことも示唆的である。

またこの住居跡では倒置された土師器高杯の奥側を除く3方が広く焼けて硬化していた。その右側で出土した石が置かれた甕の下にはやはり支脚として使用されたと思われる



第99図 竪穴住居跡出土玉類等実測図 (1/1、1/2)



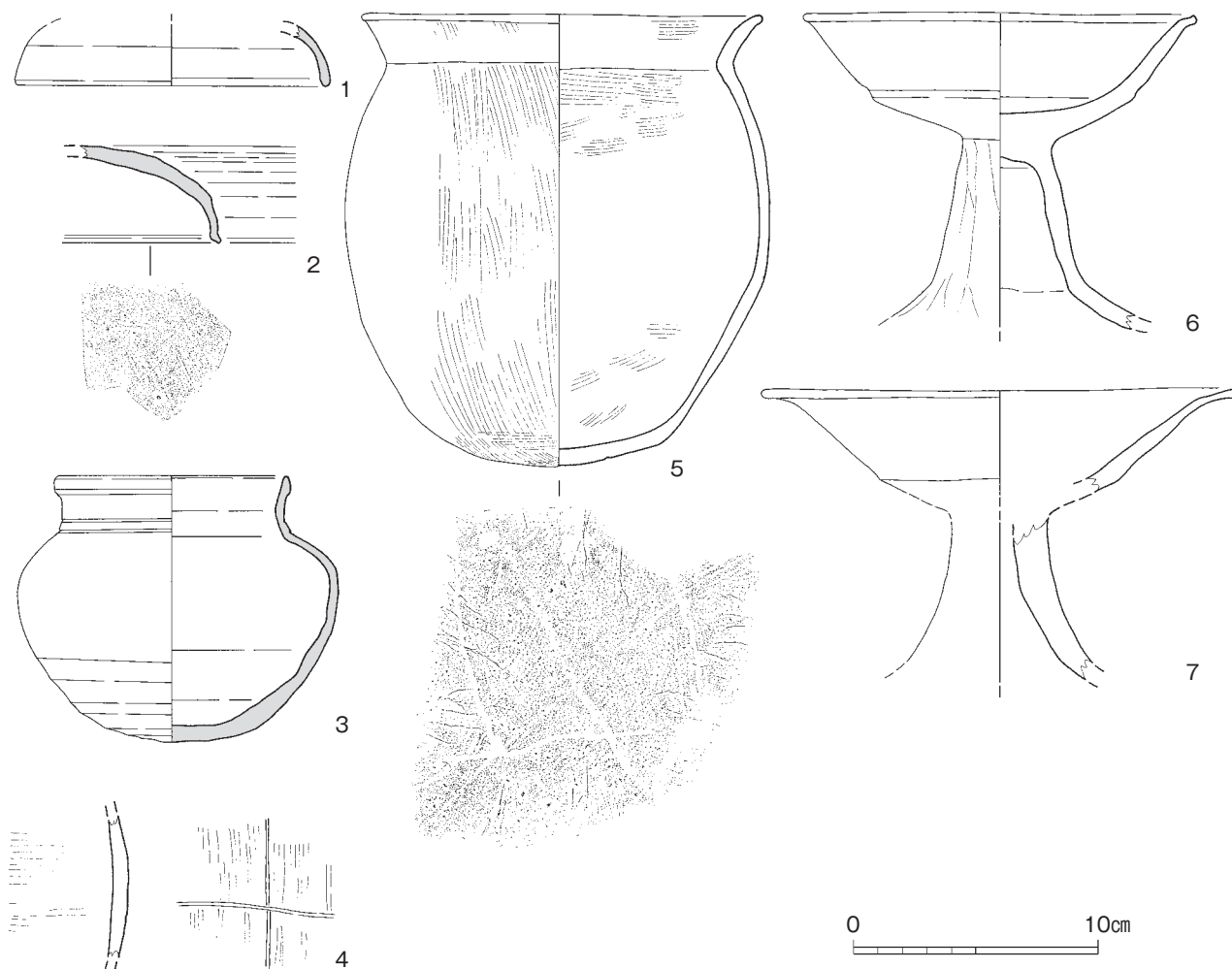
第100図 43号竪穴住居跡カマド周辺実測図 (1/30)

る高杯があって、その出土状態の詳細を記録していないが、これは古いカマドであった可能性がある。ただ、カマドを移動したと考えた場合に、古い支脚が袖の付近に位置することから、袖の中に埋め込まれたことも考えられるが、あまり類例を聞かないので断定は控えておく。

石製品（図版44、第144図2） 灰黒色といったような色相の滑石製紡錘車で、背面の1/4ほどを欠損し、残存重量は22gである。直径3.5～4.0cm、高さは1cmを測る。図上面及び側縁には磨り痕がよく残るが、図背面はほとんど見えない。

土器（図版41・42、第101図） 1・2は埋土中、3はカマド右側から出土した須恵器で、ほかは土師器である。須恵器杯蓋はいずれも天井部から口縁部にかけて明瞭な区別をつけない小片で、2は口端部に面を付す。また、2は内面に繊細な篋記号をもつ。3は体部下半が完存、口縁部付近は1/2が残存する。口縁部は直立して玉縁状に肥厚するが、作りは甘い。頸部の2条の沈線も甘いものである。胎土は良好であるが、全体に雑な造作である。

4は甕体部片であるが、どの辺りの部位にあたるか不明である。十字に篋記号が刻まれている。5はカマド右側で潰れ、上に白い石が置かれていた甕である。頸部の締まりが弱く、口縁部が短く小さく外反する。器表が荒れているが、底部外面に4と同じような十字の線刻がある。これは交点が底部の中心付近にある。



第101図 43号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

6は支脚として倒置された状態で出土したもので、杯屈曲部は明瞭、口端部を強く外反させている。これも焼けているが、さほどでもない。7は5の甕の下で潰れた状態で出土したもので、これは非常によく焼けていて、杯部と脚部が接合できない。

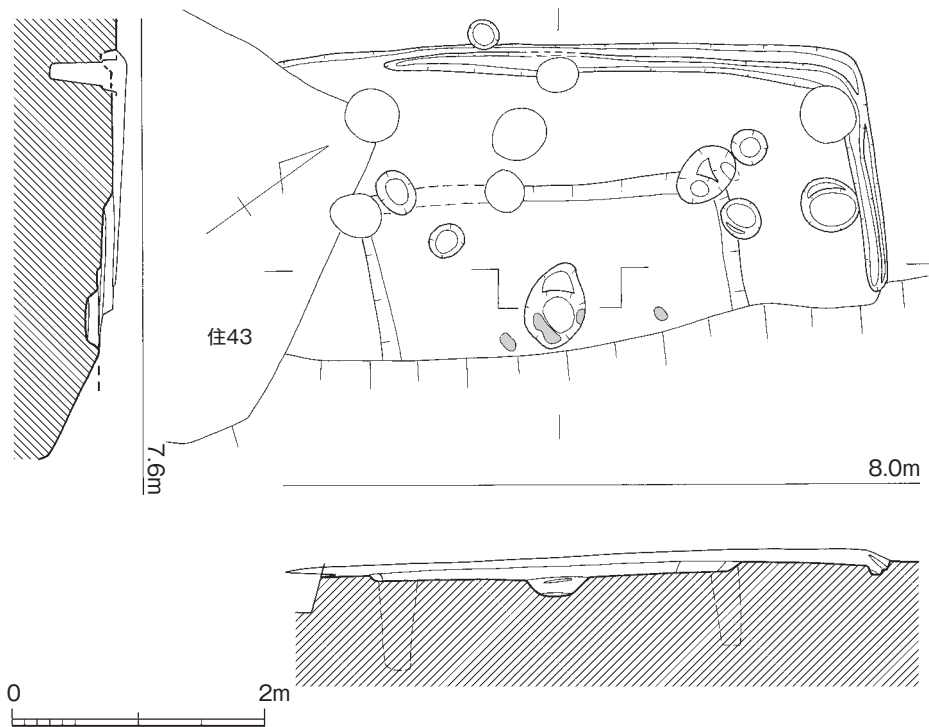
#### 44号竪穴住居跡（図版21・22、第102図）

43号竪穴住居跡の北東にあって、それに一部を破壊される。また、南東側は崖面となっていて、ここでも半分ほどを失っている。北西辺は4.6mほどが残存するが、炉跡を中心として復元すれば5.2mほどの規模となる。壁の立ち上がりは0.1m以下であった。北東辺から北西辺にかけては完周しないが幅0.2m弱の周壁溝が巡る。

壁から0.8mほどの幅のベッド状遺構が設置されている。残存する2辺ではその幅が同じで、中央部床面との差はやはり0.05mほどと非常に低い。

ベッド状遺構の隅に近い柱穴が支柱穴と考えられ、その場合は4本柱となる。床面中央付近に炉跡があって、その壁の一部が焼けて赤く変色していた。

時期を云々できるような出土遺物はない。



第102図 44号竪穴住居跡実測図（1/60）

#### 45号竪穴住居跡（図版21・22・24・25、第103・104図）

43号竪穴住居跡の西にあって、大部分が調査区外へ続く。北隅で土坑と重複していたりして、上手く調査できなかったが、北東辺で4m弱を検出した。北西辺は3mまで検出したが、カマドが中央に敷設されたとすれば同辺は4.5mほどに復元できる。

調査を進める中で、南西隅付近で比較的土器がまとまっていたことから、カマドがあるのではないかと注意しながら掘り下げたものの、カマドの袖を確認したのは検出面から0.2mほど掘り下げ

てからである。カマド内部には支脚として使用された土師器高杯が押し潰されながらも原位置を保ち、その上には土師器甕が乗っていた。カマドを破棄したとすれば、その状態で塞いだこととなる。ただ、この調査区では全般にカマドの袖があまり焼けておらず、特殊な土を用いて袖を構築していなければ、カマド自体を認識することが困難な状況であった。この住居跡の場合も見落としていただけであるかも知れない。

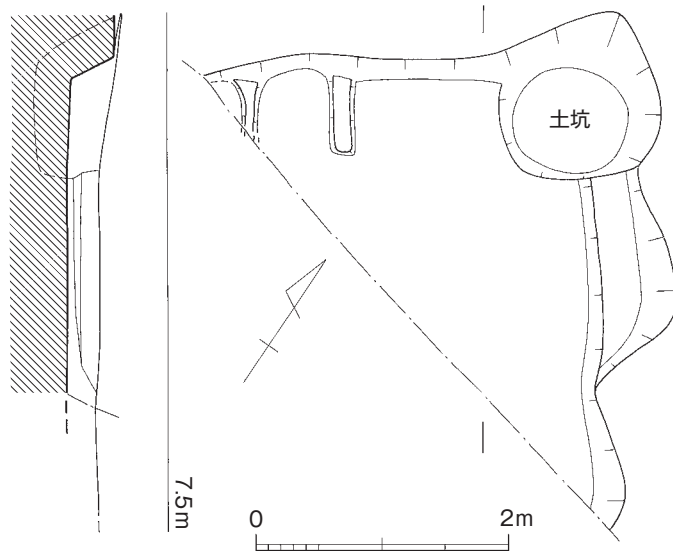
なお、床面では柱穴を確認できなかった。

#### 出土遺物

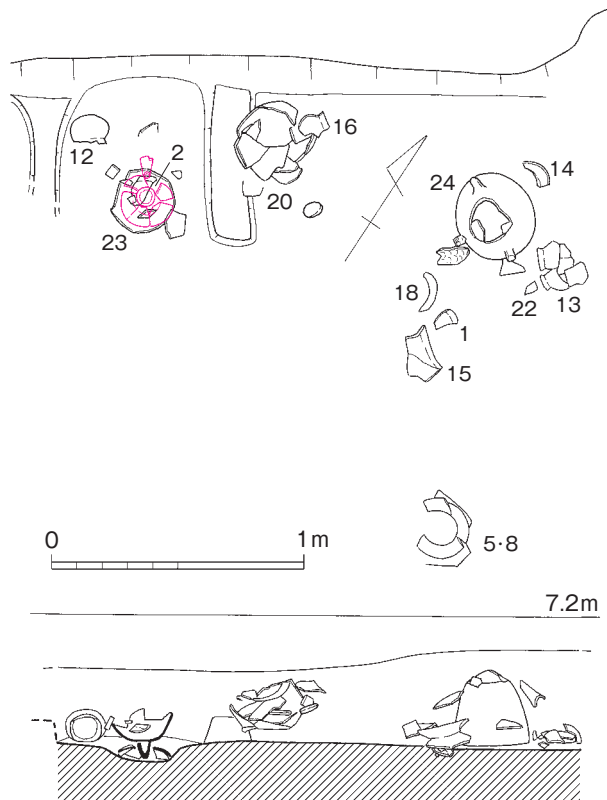
土器（図版42、第105・106図） カマド内及びその周辺で比較的まとまった土器群が出土した。1～8は須恵器、そのほかは土師器である

1は短い口縁部に高い天井と大きなつまみが付く蓋で、器肉がとても薄く、セピア系の色調となる。胎土精良で、天井部外面は丁寧なカキ目、内面は横撫で仕上げている。また、天井部外面には図のような篋描の鋸歯文が、シャープに刻まれている。2はカマド内、支脚の上に乗った甕の内部から出土した杯蓋で、器肉が厚い。天井部・口縁部界は凹線で画し、口端部は明瞭な面をもたない。天井部外面は不定方向の篋削りで調整する。なお、焼成が甘く灰白色となるが、内面では破面に至るまで煤が付着するようである。

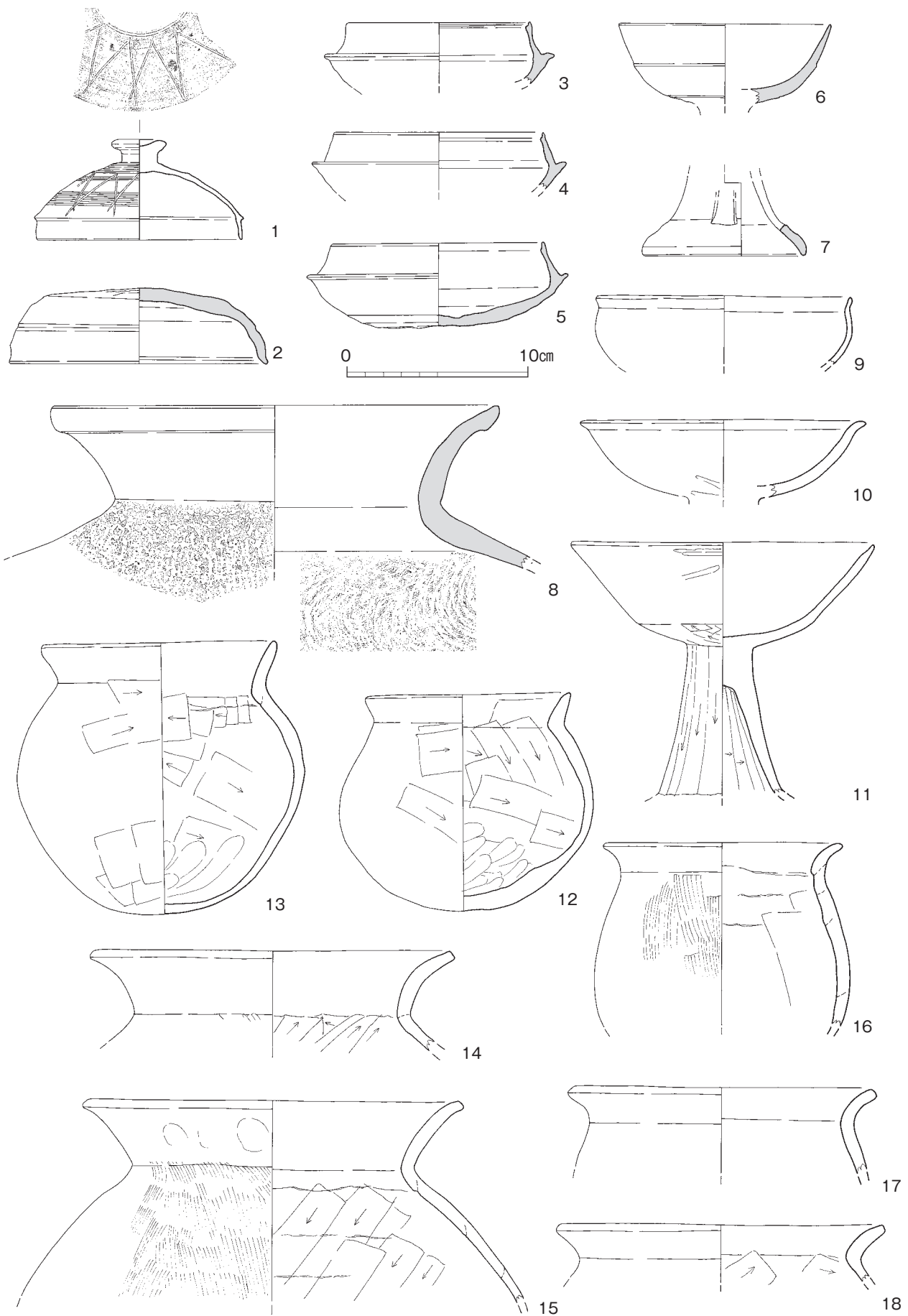
3・4は胎土良好、丁寧に作られた杯身。3は口頸10cmに復元でき、1/4が残存。4は同11.4cmに復元したが、これは小片である。5は復元口径11.6cmを測る焼成甘い土器で、胎土粗く、調整も雑である。6は無蓋高杯で、口縁部が直線的に伸びる。口縁部下位の稜はシャープで、底部との境を意識したものか、沈線が入る。これも胎土良好、調整も丁寧で外面は全面に灰を被る。7は1段透孔の高杯であろう。脚端部にほとんど変化を加えていない。胎土良好で、焼成が甘い。8は3/4が



第103図 45号竪穴住居跡実測図（1/60）

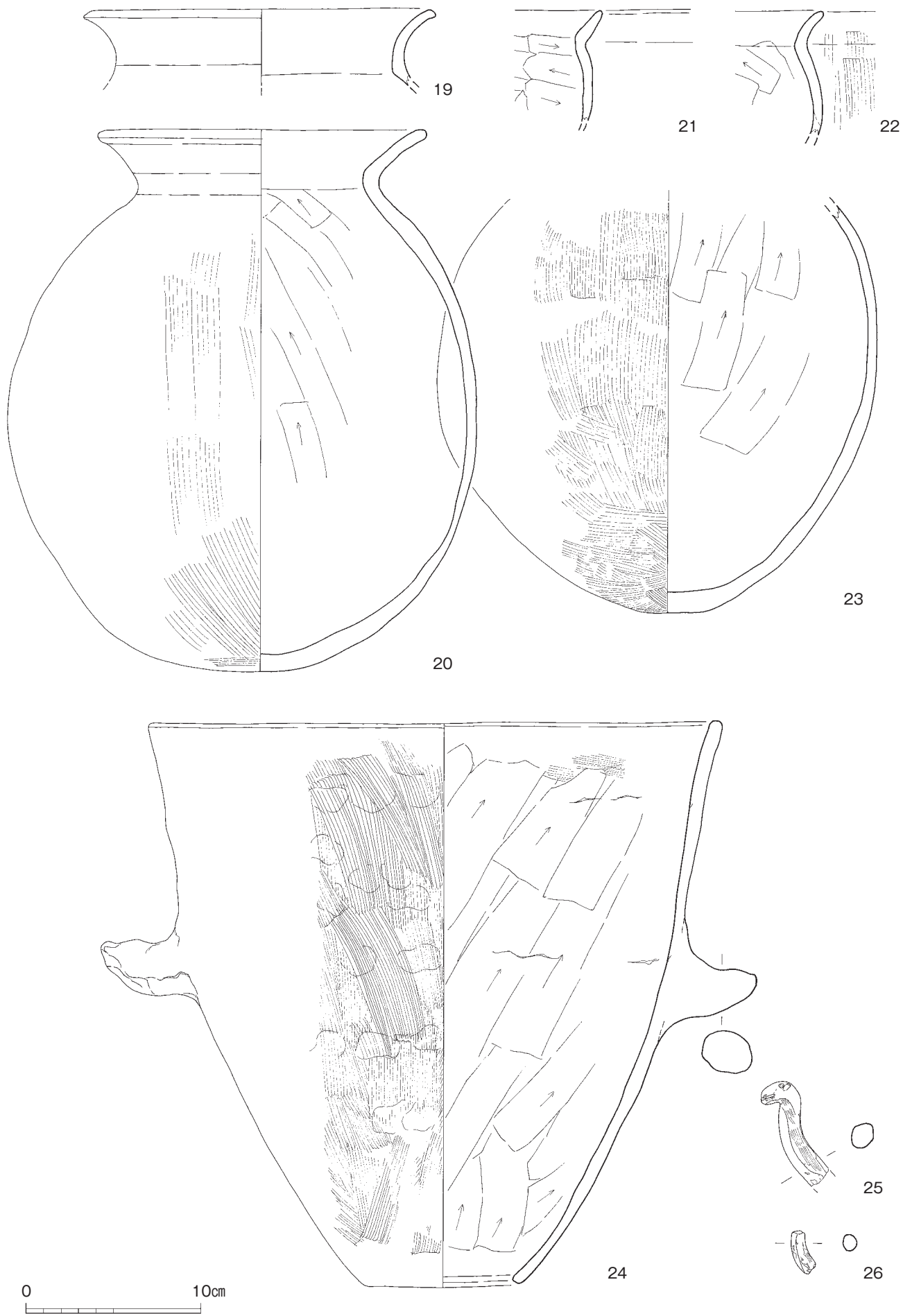


第104図 45号竪穴住居跡カマド周辺実測図（1/30）



第105图 45号竖穴住居跡出土土器実測图1 (1/3)





第106图 45号竖穴住居跡出土土器实测图2 (1/3)

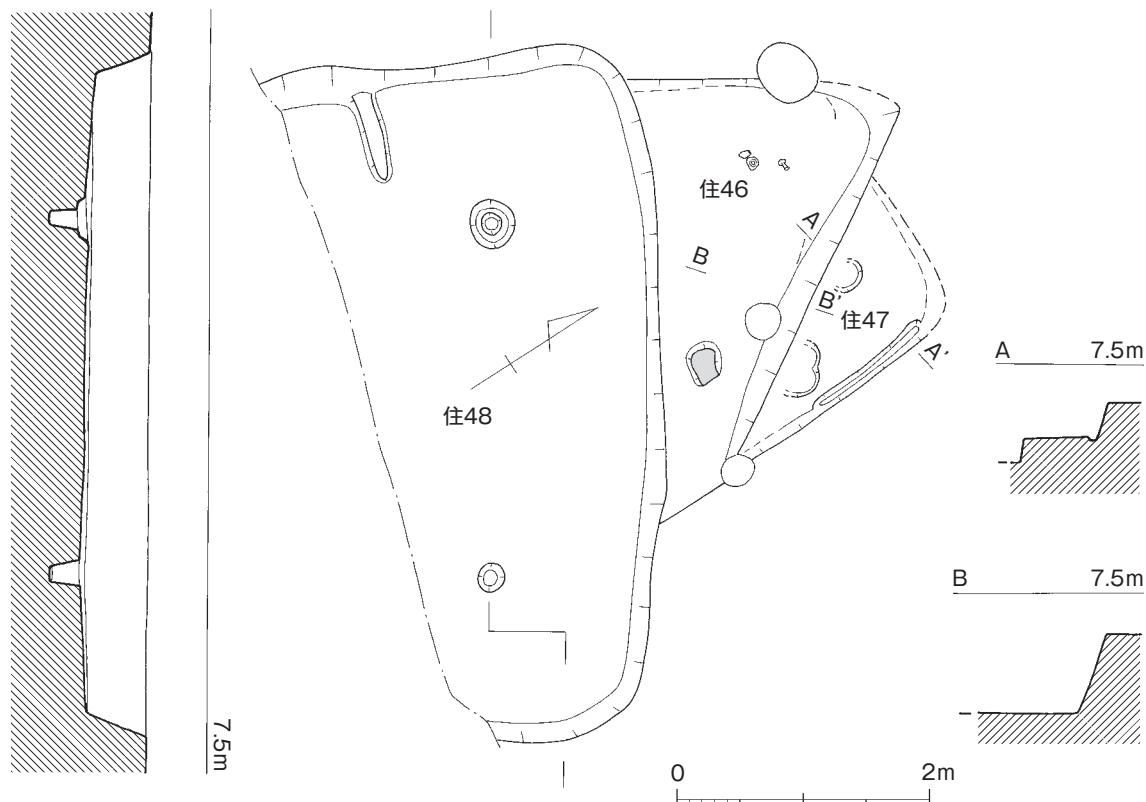
残存、これも口縁部にあまり変化を加えていない。外面に暗濃緑色～灰黒色の自然釉を厚く被る。

9は口端部を小さく外反させる椀で、器肉が薄い。器表は荒れる。10は椀形の高杯杯部であろう。器肉が厚く、表面は焼けて荒れている。11は支脚に使用されていた高杯で、これはあまり焼けていないように見える。杯部上半が高く伸び、その端部をわずかに外方へつまむ。その外面は篋削りの後に篋磨きのように、内面は撫でて仕上げる。脚部外面は縦方向に篋削りを行う。

12はカマド内奥部に横転していた肉厚の甕で、口縁部付近が赤黒く変色している。体部外面は荒れていて、内面は雑な篋削りで仕上げる。13はカマド右側、伏せてあった甕の横で潰れていた甕である。底部付近が煤け、最大径部付近が焼けて赤変する。14・15はいずれも1/3ほどの残片で、15の口縁部外面には指頭痕が残る。16はカマド右側に近接して出土した甕で、これも焼けて赤変する。内面では下半が灰黄色、上半が灰黒色となる。17は小片、18は非常によく焼けている。19・21・22は小片。20はカマド右袖に接して置かれていた甕で、体部下半は完存、上半は多くを欠失する。23はカマド内支脚の上に置かれていた甕で、図示部はほぼ完存。この2点も器表が荒れている。

24は伏せ置かれていた甕でほぼ完存。外面に指頭痕が目立つ。また、器表の中、半分が荒れていて、半分が比較的遺存状態がよいのであるが、それはおおむね把手を境とするようである。使用時の前後を示すのであろう。

25は残存長6cmあまりの動物形須恵器である。正面から見ると首は右へ小さく曲がり、頭部もわずかに右側へ振る。首が長く、目は大きく深く、鼻は小さく浅く刺突して表現する。口は一旦切り開いた後に再度上下を合わせたようで、上下の顎がわずかにずれている。また、耳は小さな粘土紐を貼り付けるが、上部が欠損する。調整は全体に丁寧に撫でて仕上げ、胎土はごく精良である。なお、



第107図 46～48号竪穴住居跡実測図 (1/60)

正面から左即縁部にかけてがよく火が回って明灰色、残余が黒色系となる。26は直径1cm弱の土師質の棒状品であるが、曲線を描く。胎土良好で、黒色となる。

#### 46号竪穴住居跡

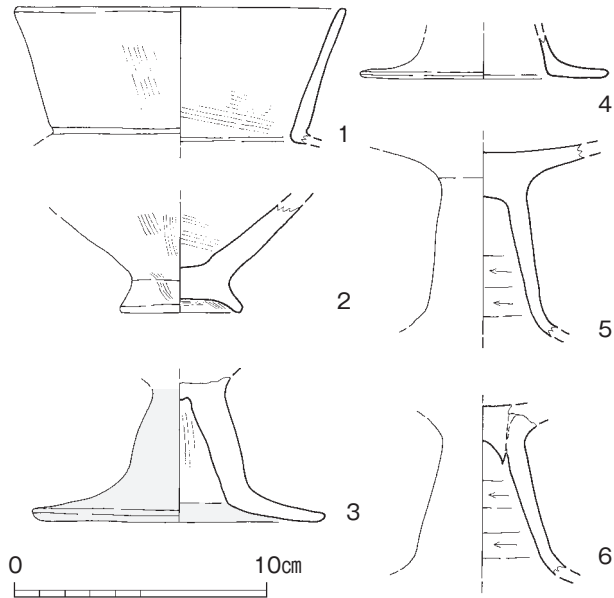
(図版21・22・25、第108図)

45号竪穴住居跡の北西に隣接する。47号竪穴住居跡を切り、48号竪穴住居跡に切られる遺構として設定したものであるが、上手く発掘できなかつた。カマドや炉跡、支柱穴といった住居跡に伴う主要な遺構は不明である。

深さは0.6m強である。

#### 出土遺物

土器(第107図) 出土遺物はいずれも土師器で多くはない。1は直口壺口縁で、小片。内外面に刷毛目が見える。2は脚付き鉢であろうか。図示部はほぼ完存するが、脚端部は小さく欠損しているかも知れない。これは器表が荒れている。3～6は高杯片。3は胎土良好で、丁寧に作られる。外面及び内面の一部に赤色顔料が塗布されるようである。4は脚下半部が広く接地するように屈曲するもので、焼けて赤変し器表が荒れる。5も焼けて器表が荒れている。6は丁寧に作られている。



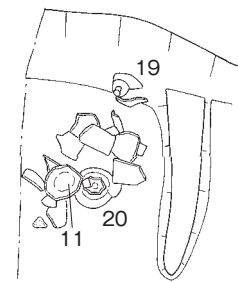
第108図 46号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

#### 47号竪穴住居跡(図版25、第107図)

46号竪穴住居跡に切られて、北東隅の付近の一部を検出したものである。深さは0.2m強が残存し、東辺では部分的に周壁溝が認められた。2基の柱穴様の遺構を図示しているが、1基は深さ0.2mに満たず、他方はシミ状のごく浅いものであって、主要な付属遺構は不明である。

#### 出土遺物

土器 図示に堪えるようなものはないが、須恵器甕・杯の小片などがあって、帰属時期を大まかに示している。

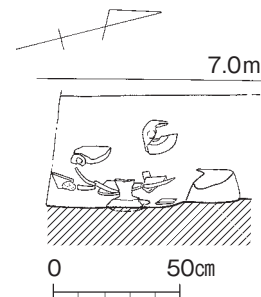


#### 48号竪穴住居跡(図版21・22・25、第107・109図)

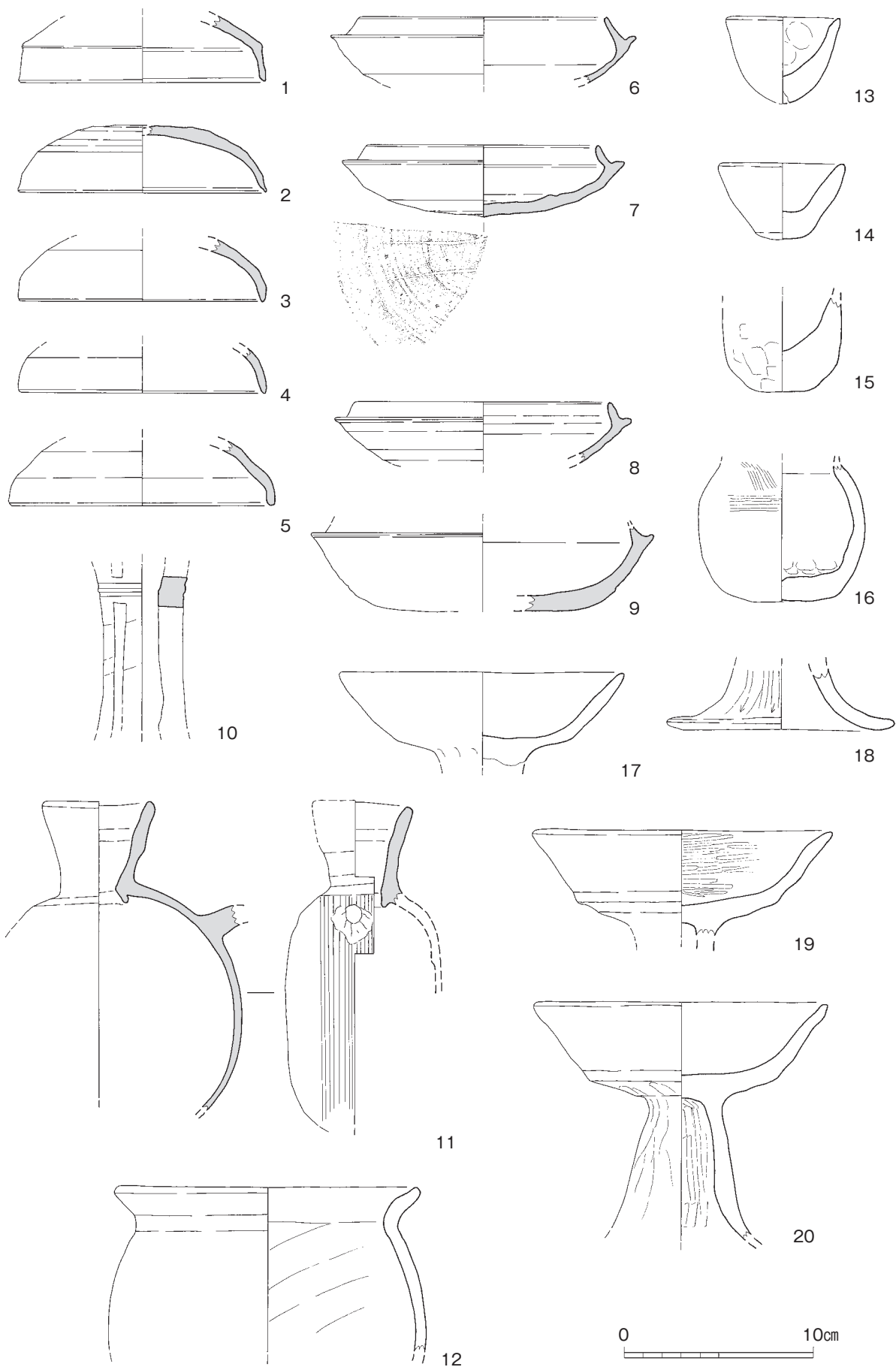
46・47号竪穴住居跡を切り、住居跡の北東部の1/2ほどを調査した。

北東辺は約5mを測り、北西辺は2.7mまで確認した。これもカマドが中央部に設置されたとすれば、辺長4.8mほどに復元でき、ほぼ一辺長5mの方形プランを有していたと思われる。深さは最大で0.5mほどであった。

カマドはやはり検出面から0.2mほど掘り下げてようやく袖を確認できた。検出時の袖は上面を5cmほどの厚さで青灰色粘土で覆ってい



第109図 48号竪穴住居跡カマド周辺実測図(1/30)



第110图 48号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)

たが、それ以下は褐色の特段変哲のない土を用いていた。確認できたレベルが支脚の上端付近であることから、カマド本来はさらに数10cmの高さを有したはずであり、気付かなかった部分では同様に変化の乏しい土を用いていたのであろう。

主柱穴を2基検出しているが、これは小型で0.3mの深さを有する、比較的浅く小規模であった。

#### 出土遺物

石製品（図版43・45、第99図5・第145図4） 第99図5は先端部を欠損するが、残存長7.2cmの滑石製垂飾で、研磨は不十分に見える。長軸方向に大小無数の面が残り、これで完成としたものかいささか疑問がある。頂部は磨いて平坦面となる。左側に図示した面で、孔の直下に大きな凹面を表現しているが、この部分の色相が他の部分と異なっていてあるいは発掘時の損傷であるかも知れない。なお、石材は暗灰色の地に灰黄色の斑が入っている。重量は27.4gである。

第145図4は典型的な小豆色の立岩産石庖丁で、白色の斑が入る。刃部の両側縁は比較的よく残るが、中央付近は大きく折損し、しかも部分的に刃を潰すような研磨を加えている。一方、背の方は両面から打ち欠いて、決して鋭いとはいえないが刃を作り出したようで、大きな変更を加えている。潰れた刃を研ぎ直して使用を続けるのが通常のあり方であり、珍しい使用例といえる。また、背面には成形時の敲打したような部分もある。

土器（第110・111図） 土師器高杯（20）を用いた支脚は脚端部を除いてそのままの状態に残り、周辺に土師器甕片・須恵器提瓶（11）が遺棄されていた。カマドで須恵器を使用することは考えられず、提瓶は意図的に置かれたものと思われる。また、カマド上方から土師器高杯片（19）が出土したが、他の遺物は埋土中からのものである。

1～11は須恵器。1は口縁部が1/4ほど残存するが、天井部外面に灰を被り調整痕等は見えない。残存する天井部は直線的で、口縁部界の稜はしっかりしている。胎土精良で、丁寧に作られた土器である。2は天井部が丸くなり、連続的に口縁部へ続く新しい形態であるが、口端部には面をもつ。これは口縁部の1/3が残存、丁寧に作られている。3も図示部の1/3ほどが残存、これは作りが粗雑な感を受ける。4・5は小片で、これらも丁寧に造作されている。3～5は天井部が丸く、口縁部へと連続的に移行、口端部が丸くなる。

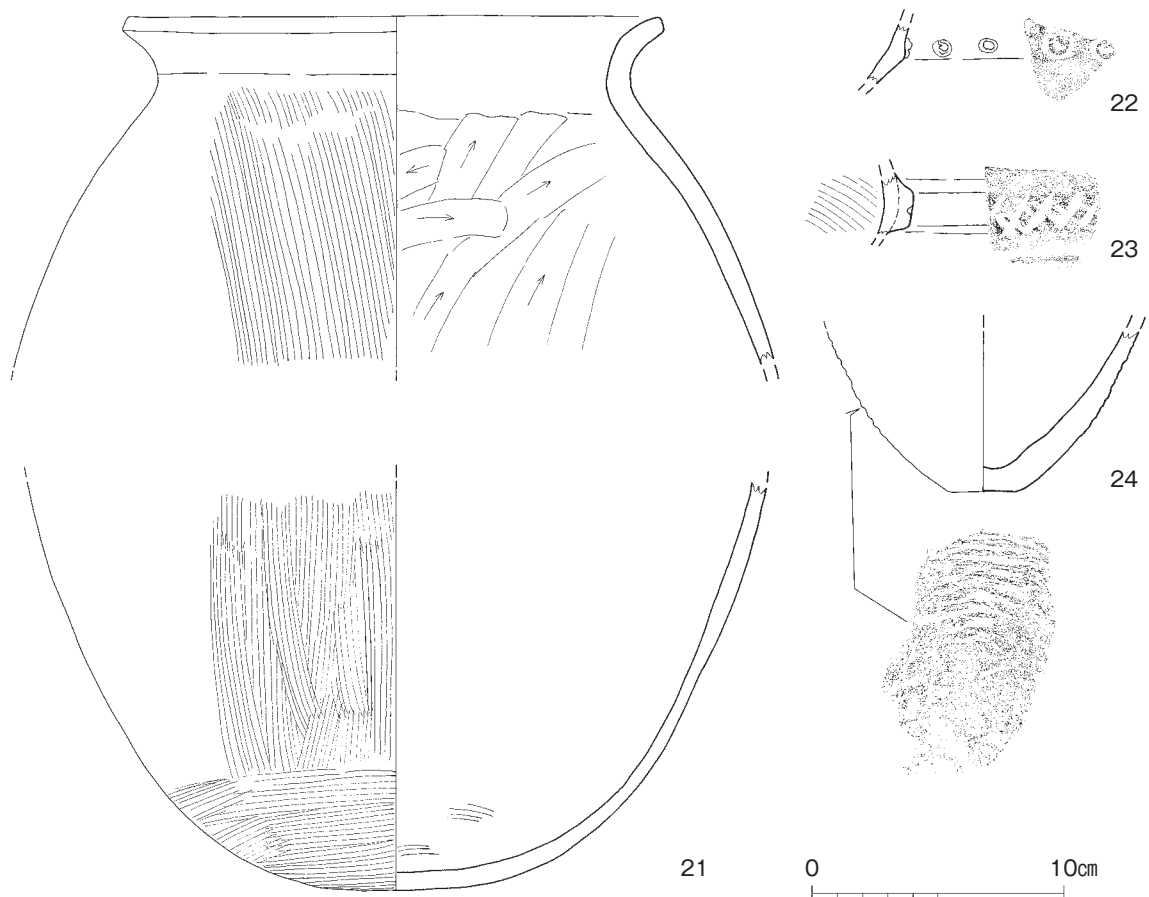
6は小片、7は1/4ほどが残存。この2点は胎土良好、作りも丁寧である。7は外底面にシャープな篋記号が刻まれる。8も1/4の残片で、これは作りが雑である。9は焼成が甘く、器表が荒れるが、外面に篋削りは見えない。また同じ理由から口端部が本来の形状を示すものか、復元口径についても不安がある。器肉が厚い点、特徴的である。

10は3方2段透孔の高杯片。11は提瓶で、口頸部が肉厚となり、焼け歪む。残存する体部外面には窯土片などが多く付着する。

12は焼けて赤変する甕で、口縁部付近の1/4が残存する、器表は荒れている。

13～15はそれぞれ形状の異なる手捏ねミニチュア土器で、いずれも肉厚である。15は胎土良好で、丁寧に作られている。これらは、出土地点を特定できないが、カマド内の土器を図化する際は現れてなかった。16は平底となる小型壺で、これも器肉が厚い点も含めて手捏ね土器に近いといえよう。体部上半にはかすかに刷毛目が見えるが、全体に器表は荒れている。

17は1/4が残存するが、器表が荒れて部分的に剥離する。18は赤く焼かれた脚部で、外面は幅広く丁寧に篋削りで仕上げるようである。19は図示部がほぼ完存し、口端部付近は全体に灰黒色化、



第111図 48号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

杯部の半分ほどが特に赤く焼けている。また、外面器表が荒れているのに比して、内面では篋磨きなどの遺存状態が良好であることから、支脚として使用されていたものであろう。20はカマド内に伏せ置かれていた高杯で、これは器表全面が荒れ、脚部は歪んでいる。19・20は口端部の形状が外反・内彎とわずかに異なるが、器肉が厚い点や器形はよく似る。

21はカマド内から出土した甕で、底部付近で1/2が残存するがその他は多くを欠損する。体部下半では内面が非常に荒れているが、外面はよい状況で残っている。

22以下は混入である。22は二重口縁壺小片で、竹管文を押した浮文を2個配する。23は体部に大振りの突帯を付すもの、24は叩きで仕上げられた平底底部の甕である。

#### 49号竪穴住居跡 (図版21・22・26、第112図)

45号竪穴住居跡の北にあり、50号竪穴住居跡と重複、それを切っている。50号竪穴住居跡と重複する付近では中世の溝が南北に走る。南東隅付近では長方形土坑及びそれを切る円形土坑に切られているが、北東隅付近に位置する長方形土坑との関係は出土遺物を検討していないので未確認である。

住居跡は南北長5m強、東西長4m強のわずかに長方形プランとなり、深さは0.2m強に過ぎない。南東隅付近を除いて周壁溝を巡らせる。なお、北西隅付近の床面には一部焼土が見られた。

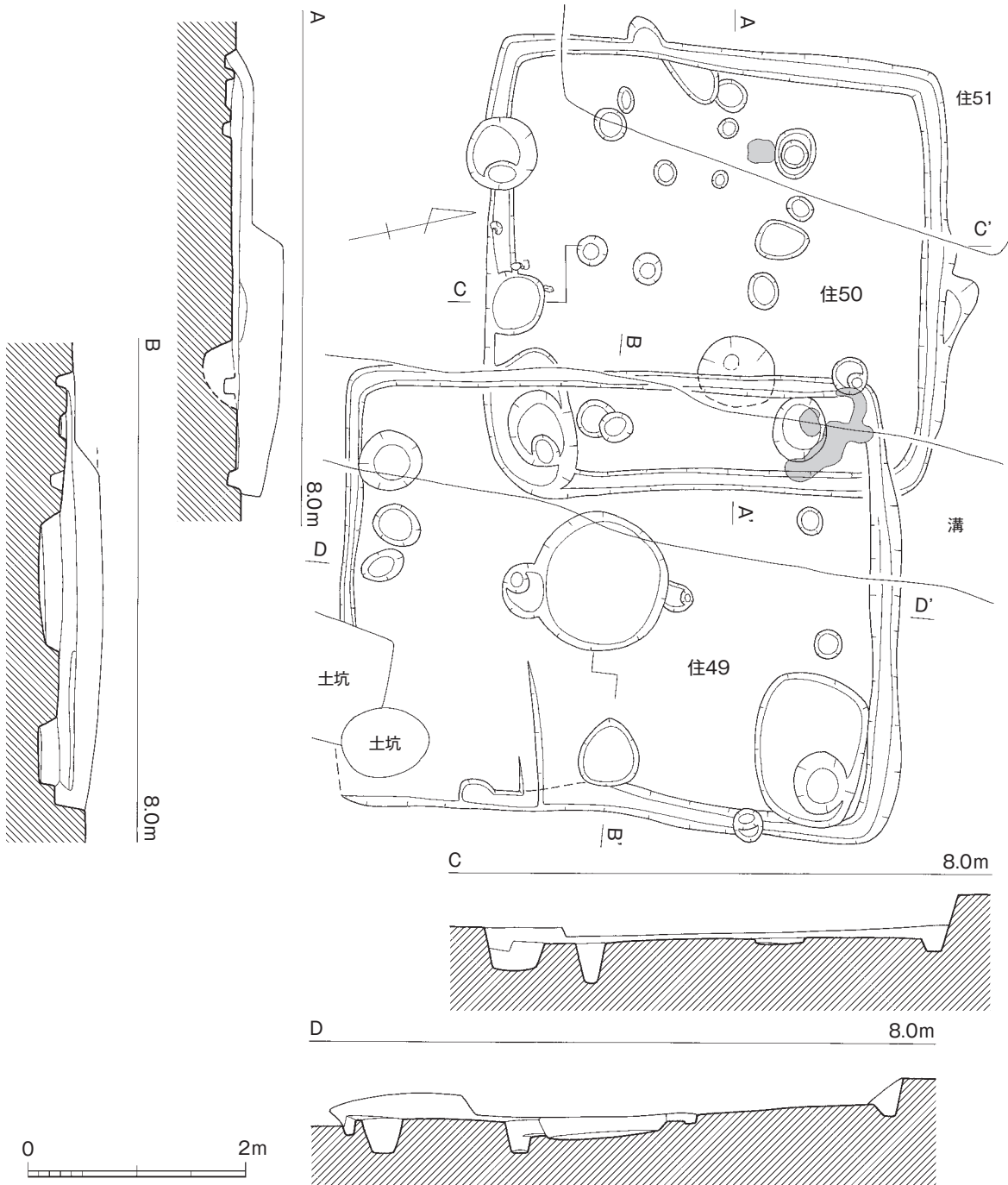
中央に直径1.2mほど、深さ0.2mほどの大型円形土坑を配し、その南北に接する柱穴が主柱穴と

なると思われるが、北側のそれは非常に浅いものである。この土坑内に炭や焼土といったものは認められなかった。東辺中央に接して小型の土坑が設けられ、その南に高さ0.05mほどの浅い段が一部で認められた。本来はベッド状遺構が設置されていたようであり、その場合は東辺中央の土坑はいわゆる屋内土坑とみることができる。

### 出土遺物

石製品（図版43、第99図4）東辺周壁溝から出土した滑石製勾玉片で、暗灰色を呈する。東部を欠損しているが、残存部上端付近に穿孔が見られ、この状態でなお使用されたようである。

土器（第113図） 土坑ほか出土場所ごとに図示している。須恵器（18）は明らかに混入であり、



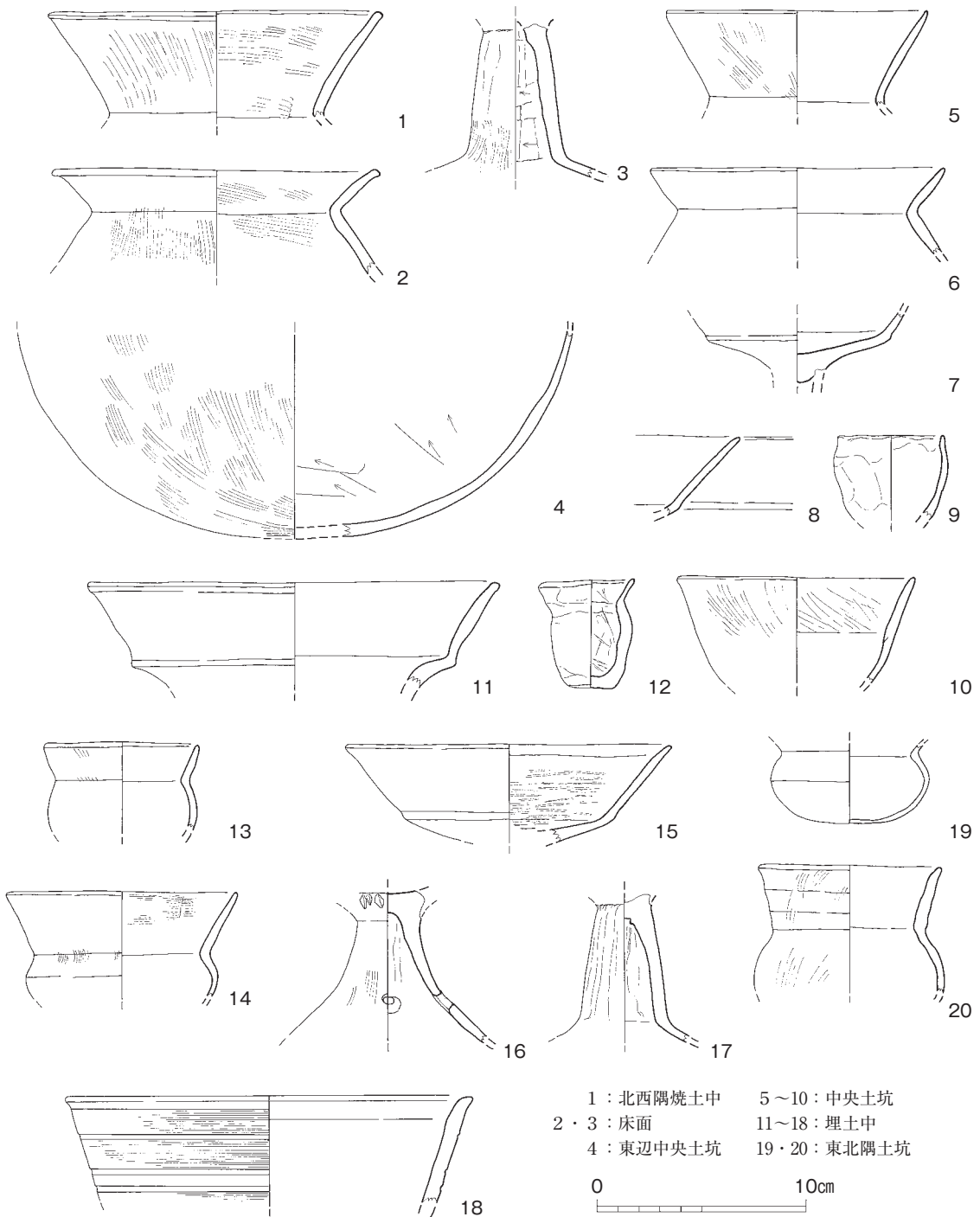
第112図 49・50号竪穴住居跡実測図（1/60）

北東隅土坑はこの住居跡に伴う遺構か否か確認できていないがここで紹介する（19・20）。

1は北西隅付近の床上に広がっていた焼土の中から出土した壺で、1/4が残存する。口端部を断面方形とするが、あまり変化を加えていない。2は「く」字形に鋭く外反する甕で、1/3の残片。口端部を小さく外方へつまむ。体部内面は上端付近が刷毛目で、以下を篋削りで仕上げる。3は図示部がほぼ完存する高杯片で、この2点は出土地点を図化をしていないが、図版を参照されたい。

4は東辺中央の屋内土坑出土の底部片で、傾きや復元径には不安がある。

5～10は中央の土坑から出土したものである。5は直口壺口縁部の1/3ほどの残片で、これは口



第113図 49号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



端部が丸く終わる。6は器表が荒れる甕、7も同様の高杯片である。8は高杯口縁部小片、9は手捏ね土器で、外面が大きく弾けている。

11～18は埋土からの出土。11は二重口縁壺で、頸部外面が弾けている。これは内外面とも灰黒色となる。12は手捏ね土器で、形状が不整となる。13は小型壺で、口縁部は未発達。14は口縁部が発達する小型壺で、細かい刷毛目が見える。体部の1/2が残存。15は内面に丁寧な篋磨きが見えるが外面は荒れている。16は脚裾が大きく開く高杯片で、透孔は2個残存する。17は筒状部が縮まり、脚裾で屈曲するもので、これら2点は外表が荒れている。

18は須恵器小片。外面は凹線とカキ目で調整され、器表が多く弾けている。

19は丁寧に作られた小型壺片で、1/4が残存。20も小型の壺であるが、これは肉厚で作りが雑となる。頸部付近の1/3が残存する。

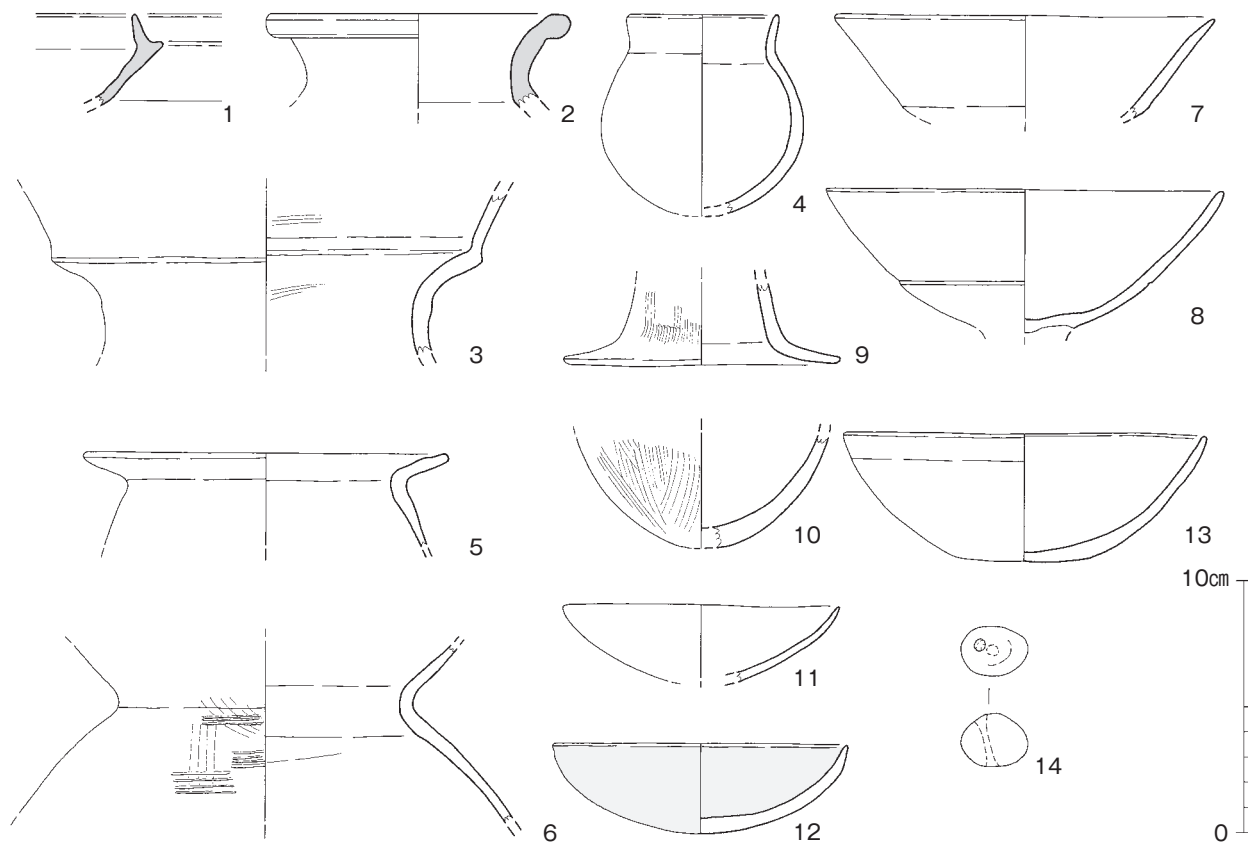
### 50号竪穴住居跡（図版21・22・26、第112図）

東を49号、西を51号竪穴住居跡に切られる。一辺長4m前後のやや歪な方形プランを有し、深さは最大で0.4mを測る。これは四周に周壁溝を巡らしている。南辺中央に配された土坑がいわゆる屋内土坑であろうと思われるが、南東隅の土坑が住居跡に伴うものかどうかは未確認である。

床面中央から東に偏して直径0.7mほど、深さ0.3mほどの円形土坑があるが、炉跡との確信は得られていない。また、支柱穴も不明である。

### 出土遺物

石製品（図版44、第145図6） 片岩製の石庖丁片で、灰緑色といったような色相となる。図左に



第114図 50号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

示した面では刃部から2cmほどの間が研ぎ直されたようで、使用痕が見えない。研ぎ直した部分から上方は背近くが研磨されるだけで、その間は研磨が見えない。右に図示した面では研ぎ直しが刃部付近にとどまって、それ以外は全面に擦痕が残る。刃部は非常に鋭く、背は面をもつ。これも両面穿孔。

土器（図版42、第114図） 10～13の椀がいずれも南辺に沿う周壁溝（10・12・13）、そして屋内土坑（11）から出土した。ほかは埋土中からの出土である。

1・2は須恵器の小片で、混入したものであろう。

3は二重口縁壺片で、これも小片としてよいほどの残片である。4は体部の1/3ほどが残存する。口縁部が直立、短く直行し、体部は球形に近い。器表が荒れているが、丁寧に作られているようである。

5は甕小片で、復元口径に不安がある。これも器表が荒れる。6も小片で器表が荒れるが、体部外面に叩き痕が見える。

7は口縁部が直線的に伸びて、端部付近を小さく外反させる高杯片。8は杯部下位の稜線が沈線状に退化したもので、これらも器表が荒れている。

10は身が深い椀で胎土は粗く、外面を疎らな刷毛目で、内面を撫でて仕上げる。11・12は浅い椀。11も胎土は粗いがこれは肉薄となる。12は胎土良好で、丁寧に作られていて、内外面に赤色顔料が塗布されたようである。13はほぼ完存するもので、これも赤色顔料が塗布されていたようにも思えるが、器表が荒れて断定できない。

14は土錘で、上面観は歪み、孔も偏している。径2～2.7cmで、重量は9.41gである。

#### 51号竪穴住居跡（図版21・22・26・27、第115図）

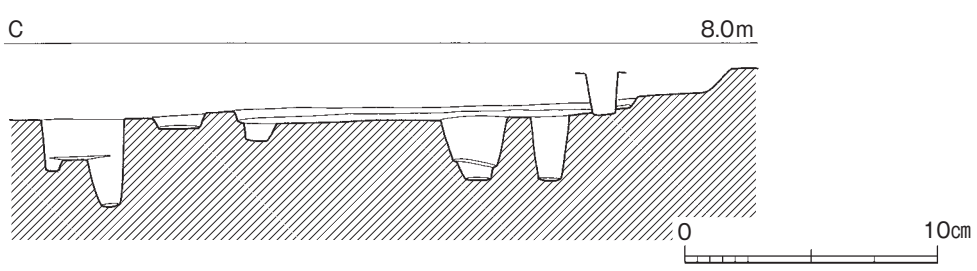
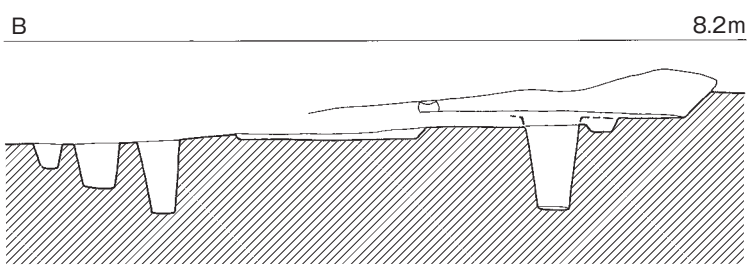
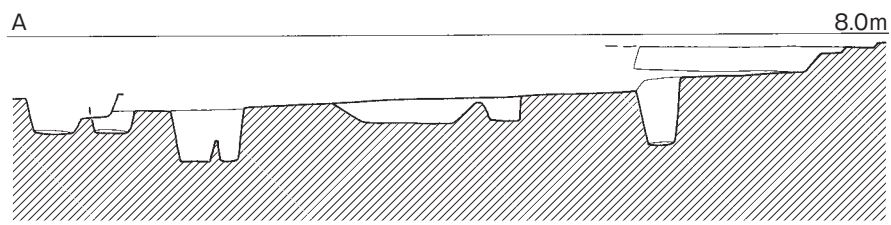
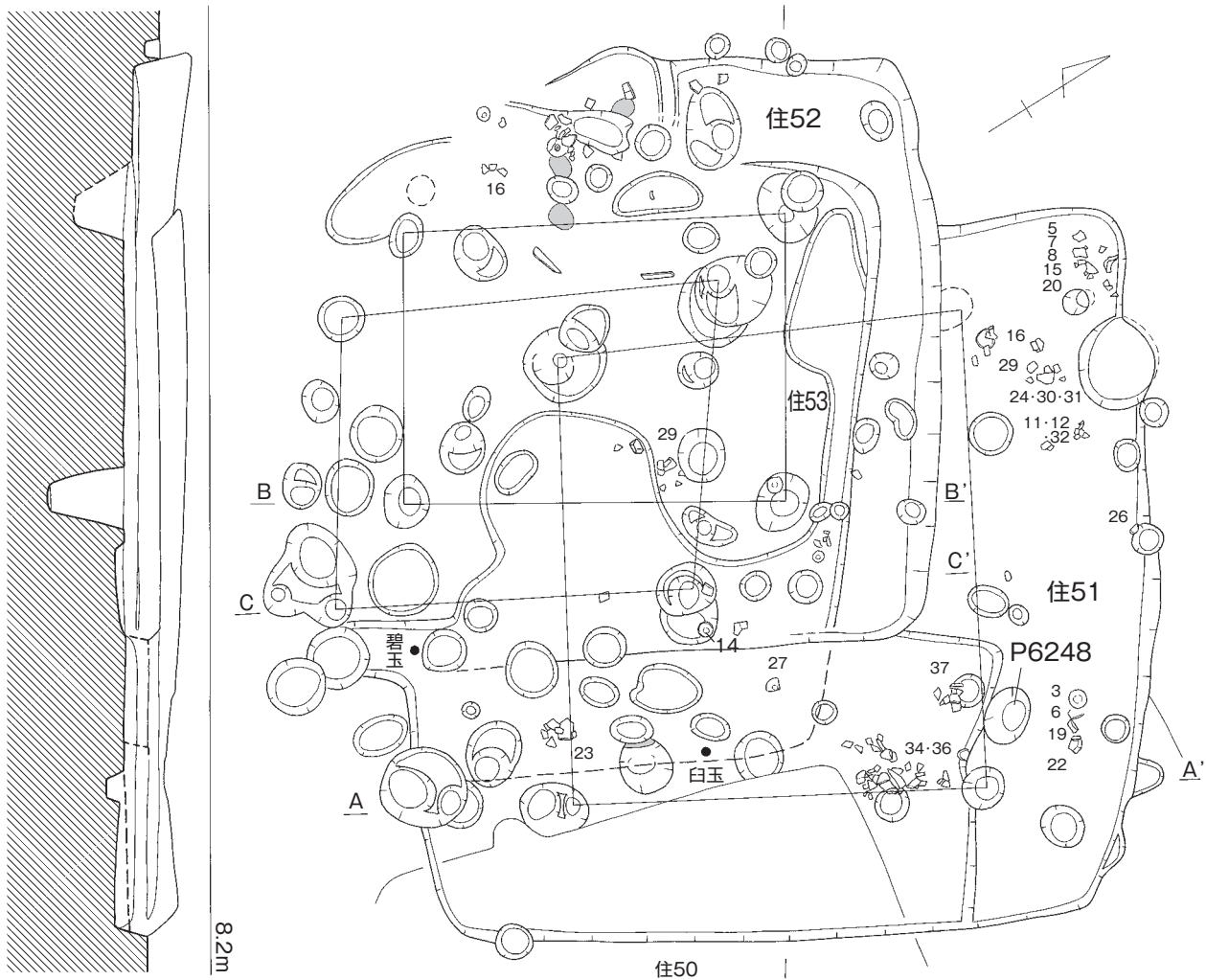
50号竪穴住居跡の西にある。遺構検出時は50号竪穴住居跡を切って、52号竪穴住居跡に切られていると判断したが、両住居跡を発掘する過程で、結果的には気付いていなかった第3あるいは第4の住居跡を連続して掘り下げてしまった。

北東辺及び南東辺の全体を、他の辺はその一部を検出した。一辺長6mほどを測り、深さは最大で0.2m強であった。支柱穴の中、破線で示した北に位置する柱穴は図示を失念しているが、空中写真を参考にして大体の位置を書き込んだものである。カマドの痕跡を確認していないことは、52号竪穴住居跡が後出、カマドを破壊したことを示すものと考えられる。

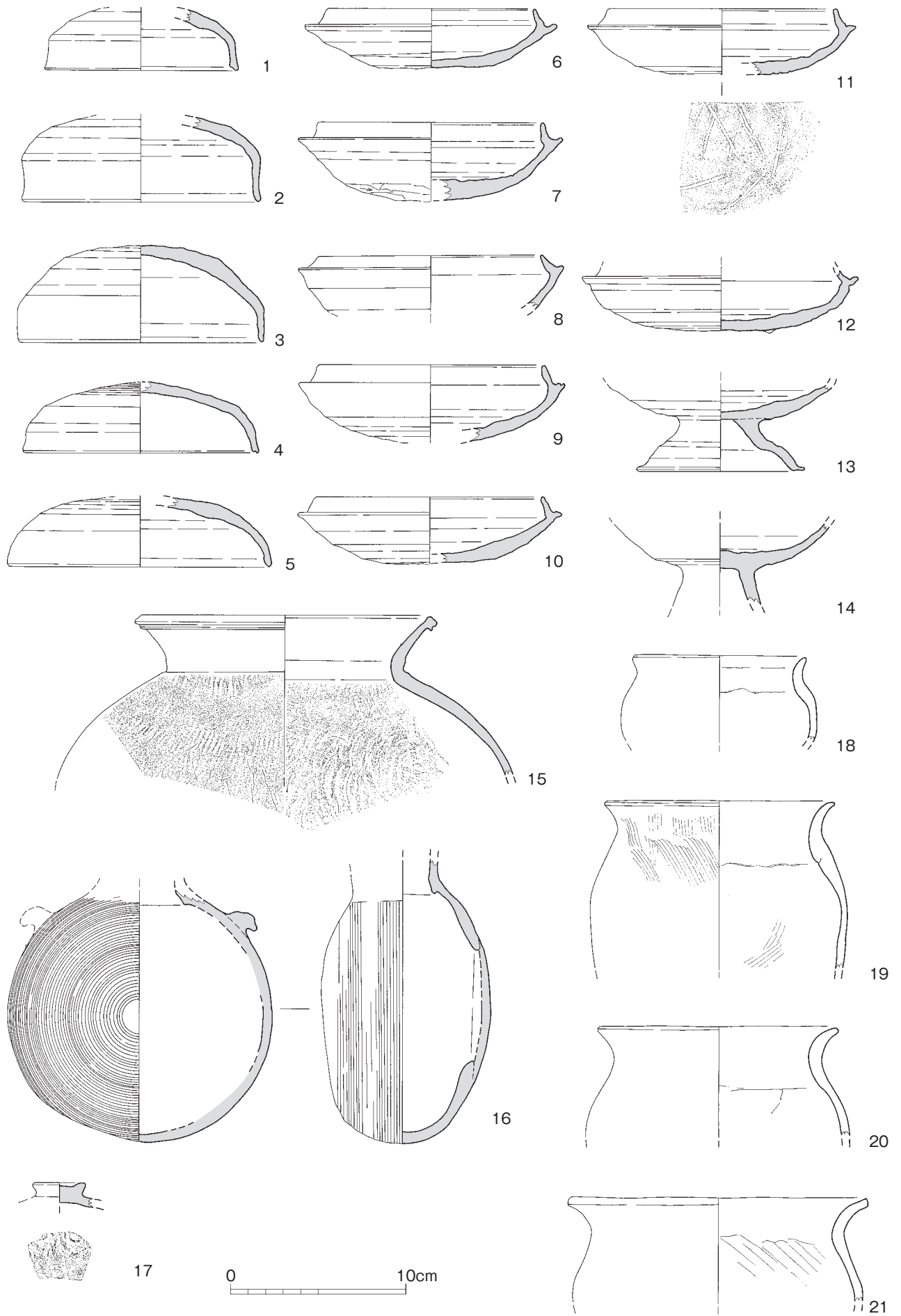
#### 出土遺物

石製品（図版43・47、第99図2・3・第147図14） 第99図2は遺構検出時に図示した付近から出土したもので、確実に住居跡に伴うことを確認したものではない。42号竪穴住居跡出土品によく似た滑石で、直径6mm、図背面は欠損するようである。同3はP6248とした柱穴からの出土で、これも柱穴が必ずしも住居跡に伴うと確認できるものではないことから、厳密には帰属ははっきりしない。先の2点と石材が異なっていて、透明感のない灰色の滑石を用いる。直径は4mm、高さは3mmである。

第147図14は破面が灰白色であるが、全体に灰黄褐色に黄ばんだ砂岩製砥石で、図上下両端を除く側縁を使用して変六角形となっている。使用面はおおむね平滑化するが、なお触れるとなおザラザラとする。



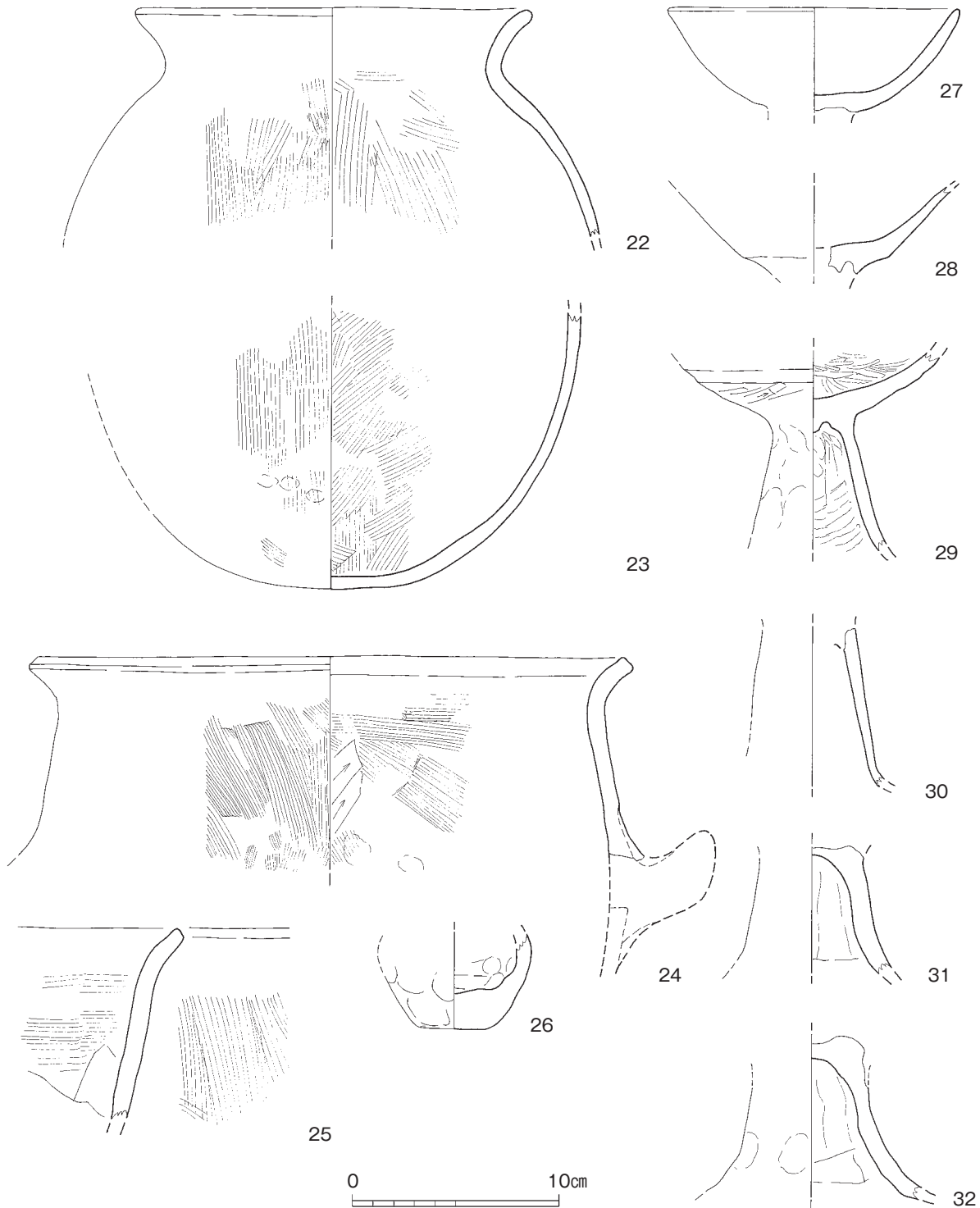
第115图 51 ~ 53号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第116图 51号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)

土器（図版42・43、第116～118図） 1～32はこの住居跡に伴う遺物としてよいものと思われる。33～38は明らかに古い時期のもので、これらは「下層」として取り上げている。

1～17が須恵器で、ほかは土師器である。1・2は口縁部がほぼ直立し、天井が扁平になる蓋で、杯蓋ではなく壺蓋であろう。1は胎土は普通であるが作りが丁寧で、口端部に面をもつ。外面に灰を被る1/4ほどの残片。2は口縁部付近の1/3が残存、口端部は丸く終わるが、小さく外反する。3はやはり天井部が高くなって、口縁部が直立するがこれは作りが雑である。4・5は天井部が低く、

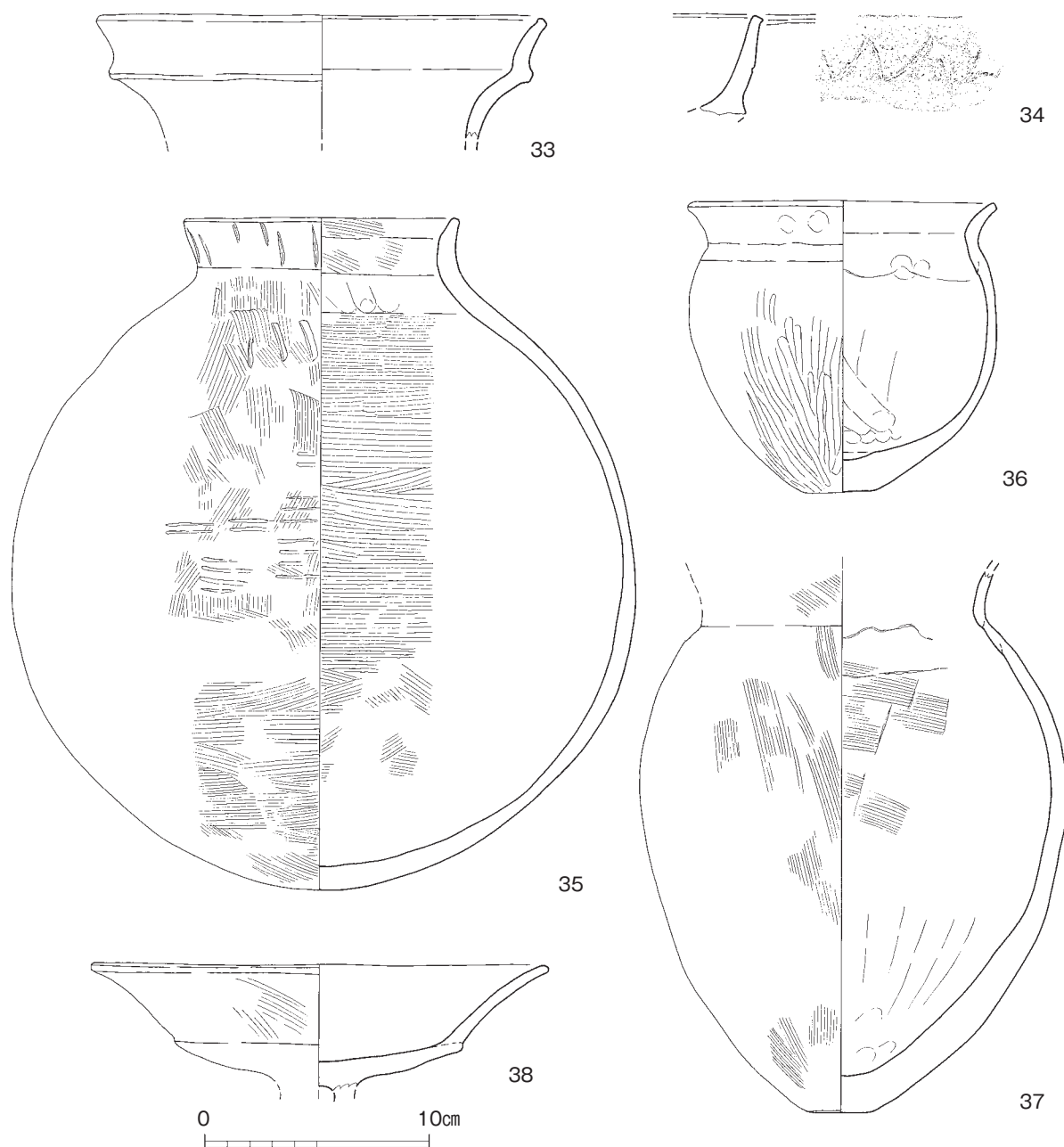


第117図 51号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

口縁部にかけて丸くならだらかに移行するもので、4は口端部に面をもつ。また、4は天井部中心付近にカキ目を施している。この2点は焼成が甘く、4は灰白色となる。5は胎土・作りともに雑である。これらはいずれも1/4～1/3ほどが残存する。

杯身は口径11.7～13cmを測り、器高が低く丸みをもつ。これらは1/4以上の残存率があるので、復元口径はほぼ信頼できるであろう。7は胎土良好で丁寧に作られていて、外底面を不定方向の篋削りで仕上げる点で个性的である。11も同様に丁寧に作られていて、これは外底面に複雑な篋記号が刻まれる。12は特に身が浅くなり、外面に灰を被る。

13は脚部が完存し、大きく屈曲して段をもつことから壺になるのであろうか。接地面を肥厚させている。14もこの時期の高杯としては脚部径が大きいようで、特殊な器形となる可能性がある。この2点は胎土良好である。



第118図 51号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

15は口端部を複雑に変形させる甕で、1/2が残存。胎土良好で、丁寧に作られる。16は提瓶で、頸部以下がほぼ完存する。外面は灰被りがひどく、把手が剥離した部分まで及んでいる。

17は蓋のつまみであるが、内面に同心円文当て具痕が残る。

18～21は小型甕で、18・19は小片、20・21はそれぞれ口縁部付近の1/4、1/3が残存する。19以外は焼けて赤変、器表が荒れている。22は復元口径19cmとなるが、残片が小さいために不安がある。23は別個体である。

24・25は甕。25は小片のために外傾して図化するが、器形が似ていることから24のように内傾するものであるかも知れない。因みに把手は少なくとも3点出土している。26は手捏ね土器で、胎土は良好。

29～32は高杯片で、すべて赤く焼き上がっている。27は口縁部の1/3が残存、肉厚で杯部が椀状となる。内面では器表のはほとんどが剥落している。28も器表が荒れている。29・30は細身の、31・32は太身の脚部片である。

33以下の土器群はこの住居跡に伴う土器群ではない。遺構実測図で大体の出土位置を書き込んだが、51号竪穴住居跡の床面下から出土したものである。これらに関連する掘り込みとしては土器群の北から東にかけて0.1mほどの浅い矩形をなすラインが検出されていて、その全体を窺う材料を欠くが、さらに別の住居跡が重複していたのであろう。33は無文二重口縁壺片で、口端部を内側に小さくつまむ。34も二重口縁壺片で、山形文が連続するが、部分的に2条となっていて原体は単純な篋状工具とは違うようである。

34は口縁部が短く直立する短頸壺で、口縁部外面に甘い篋描き直線文が不規則に刻まれている。同様の刻みは肩部にも見えるが、これも規則性は窺えない。体部外面は全体に刷毛目で仕上げるが、部分的に叩き目が見える。

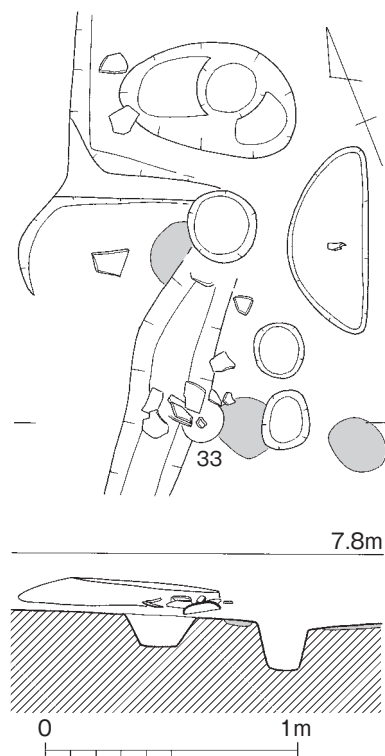
36は体部下半がほぼ完存する甕で、底部は完全な平底となる。外面は縦方向の粗い篋磨き、内面は指撫でを主体とするようである。37は小さな平底をもち、図示部はほぼ完存する。肉厚となり、外面は細かい刷毛目、内面は指撫でと刷毛目で仕上げる。

37は浅く大きく開く高杯片。器表が荒れている。

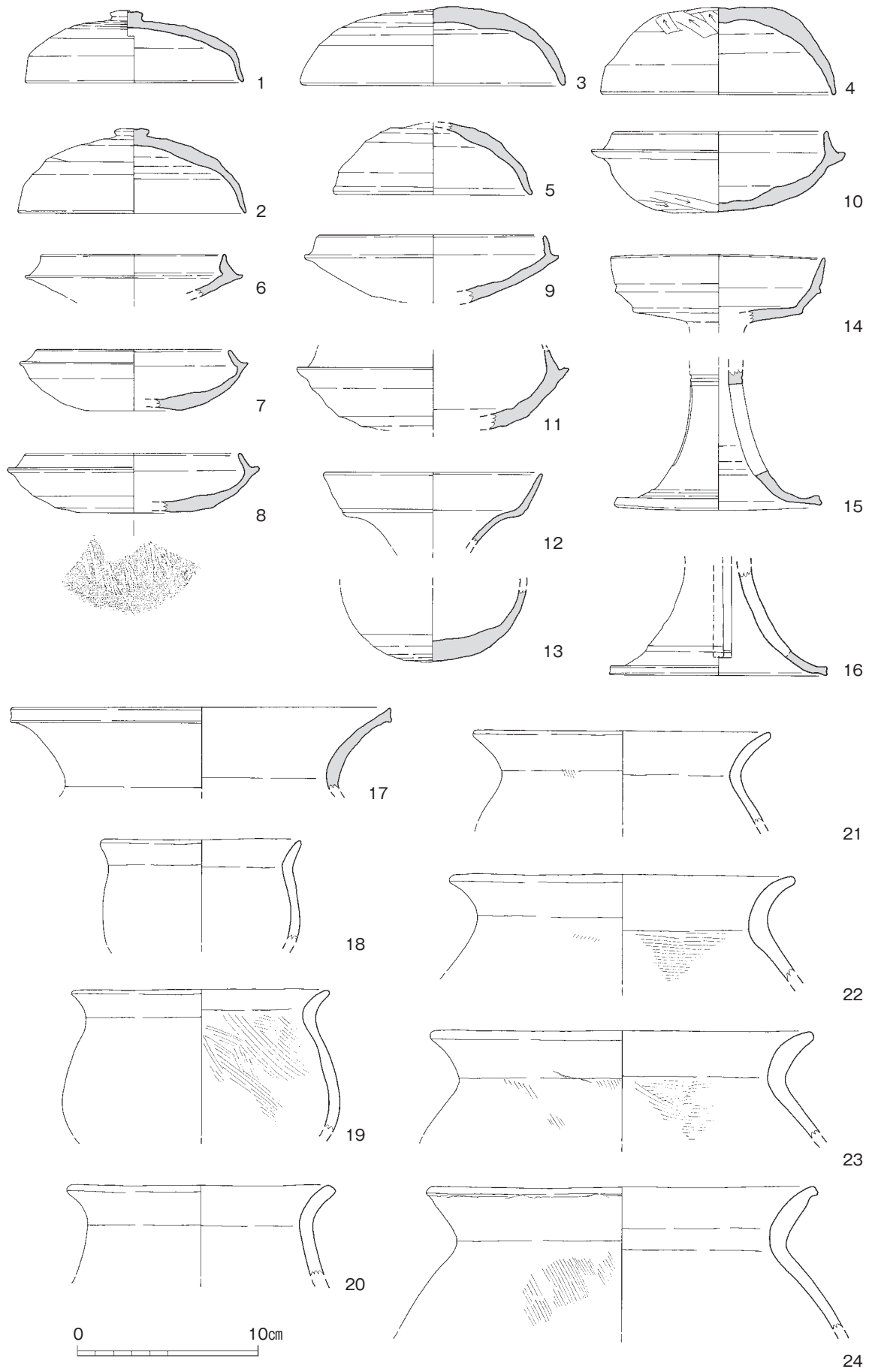
#### 52号竪穴住居跡（図版21・22・26、第115・119図）

51号竪穴住居跡の西にあって、それを切る。南西半は削平されていて、全体を確認できたのは北東辺だけで、その規模は4.8mを測る。以下で詳述するが北西辺にカマドの痕跡があり、それが中央に置かれたとすれば、その辺長はやはり4.8mに復元できる。

カマド付近では、遺構検出時に袖に用いられた灰黄色粘土を交えた土がのぞき、支脚に用いられた土師器高杯の杯部も



第119図 52・53号竪穴住居跡カマド周辺実測図（1/30）



第120图 52号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



見えていた。結果的には、カマド左袖はすでに失われていて、右袖のみが残存していたが、支脚との距離が通常のものよりかなり離れている。一方、床面を見ると火床と見られる痕跡が支脚の南東部に2ヶ所、そして袖に近接してその南側で検出されている。袖に近い赤変部は小溝で破壊されているが、支脚に使用された高杯はその小溝の上に乗っていた。従って、袖と支脚は明らかに先後関係を有する別個のカマドであることがわかった。カマド右袖上面は土師器高杯が置かれた床面より0.1mほど高い位置にあることがいささか問題であるが、位置関係から見ると、袖と半截された火床がこの52号竪穴住居跡に伴うものと考えられる。

## 出土遺物

鉄滓（第8図9） 流れ出て固化したような状況を示し、凹凸が甚だしい。19.2gを測り、磁石には反応しない。

石製品（図版44・47、第144図5・7・9・第147図12） 第144図5は製品とはいえないが、灰黄色の軽石である。加工痕といったものは見えない。重量は19.6gである。

同7も石製品とは言い難いが、図で示したように敲打痕があって小さくくぼんでいる。また、背面は平らかな面がないものの球状にくぼんだ部分があってこれも使用されたものであろう。他の部位は自然面のようで、積極的に剥離面と認める部分はない。石材は灰緑色の滑石である。同9は碧玉製の二次加工剥片である。楔状に石核素材を固定して分割面や平坦面を剥離しており、結果として多面体となる。正面右下部では剥離面に二次加工を施す。また、裏面には2ヶ所の微細剥離がある。直接素材にはなりえないが、おそらく弥生終末の玉作に関わる資料と考えられる。重さ9.98gで、同図10とは同一母岩であろう。風化面は茶褐色に近く、破面は濃緑色で白い斑が入る。

第147図12は褐色の汚れが染みているが本来は灰白色の石英斑岩製の砥石で、表面に1mmほどの凹部が無数に見られる。4面が使用される。

土器（図版43、第120・121図） 出土状態は必ずしも良好ではなかった。1～17は須恵器で、ほかは土師器である。また、8・12に示した須恵器杯身は出土状態を図示していないが、カマド周辺からの出土である。

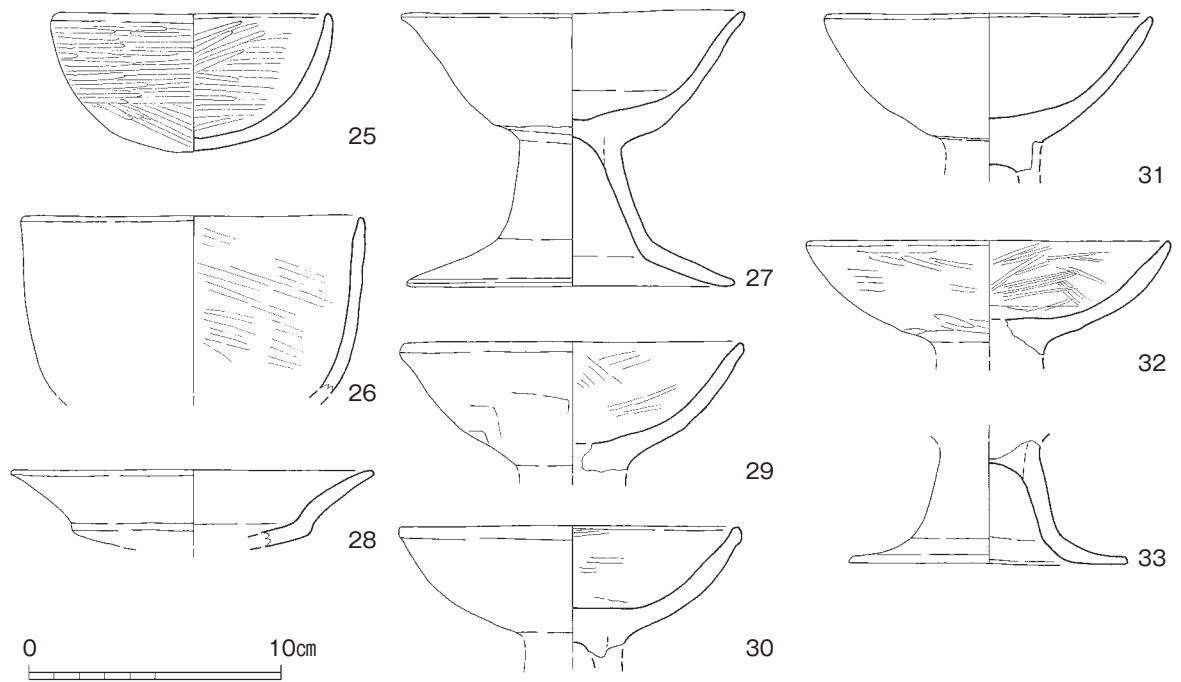
1・2は高杯の蓋であろう。いずれも天井部付近の1/2が残存し、胎土精良で丁寧に作られている。1は天井部から口縁部にかけて丸く連続的に移行して口縁部が小さく外反する。2は天井部・口縁部との間を強く横撫でしてくぼませ、口縁部は直線的に開く。口径は12・12.6cmと近い。

3は天井部が丸く高くなり、上面を不定方向の雑な篋削りで仕上げる。胎土も粗い。4は瓦質といってよいほどに焼成が甘く、器表が摩滅する。5は小片であるが復元口径が小さく、それに比して器高が高い。壺の蓋であろうか。

6・7は小片で、7の外底面は未調整のようである。8は口縁部付近の1/3が残存し、外底面にスタレ状の圧痕が付く。これは胎土良好、丁寧に作られる。9も丁寧に作られていて、外面に灰を被る。10は身が深く、外底面に不定方向の篋削りが施される。4とセットとなるものであろう。11は肉厚で、白色砂粒が目立つ。

12は脛の口縁部片で、口縁部下端に沈線を刻む。13は底部片で、やや粗い篋削りで仕上げる。

14は高杯片で、2条の稜線はとてもシャープに造作される。15は図示部が完存する脚部で、透孔は2段2方向となる。透孔間の沈線はしっかりしたものであるが、脚裾のそれは螺旋状になるようである。16は小片。



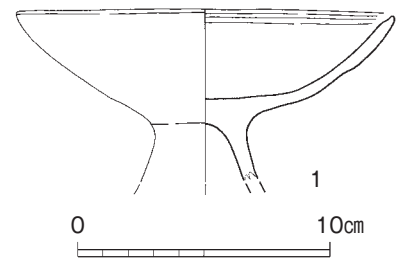
第121図 52号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

17は胎土良好、丁寧に作られた甕口縁部。内面に灰を被り、外面は黒化する。

18は口縁部の1/3が残存する体部の張りが弱い甕。外面が黒色、内面が灰黄色となり器表が荒れる。19は焼けて器表が荒れ、頸部付近から下位の内面が黒化する。20～24も器表が荒れる。

25は身が深い椀でほぼ完存する。胎土は普通であるが、調整はほぼ全面に丁寧な篋磨きを施す。26は口縁部の1/4が残存する鉢で、内面は疎らな浅い刷毛目で仕上げる。外面は器表が荒れる。

27は杯部の1/2が残存、脚端部は小片となっている。杯部は身が深く、焼かれて赤変、器表が荒れている。脚部は短く、大きく開く。28は浅く、大きく開く杯部片で、これも焼かれて器表が荒れる。29～32は椀形の杯部をもつもので、内面の調整痕を確認できるものはいずれも篋磨きで、肉厚となる傾向がある。

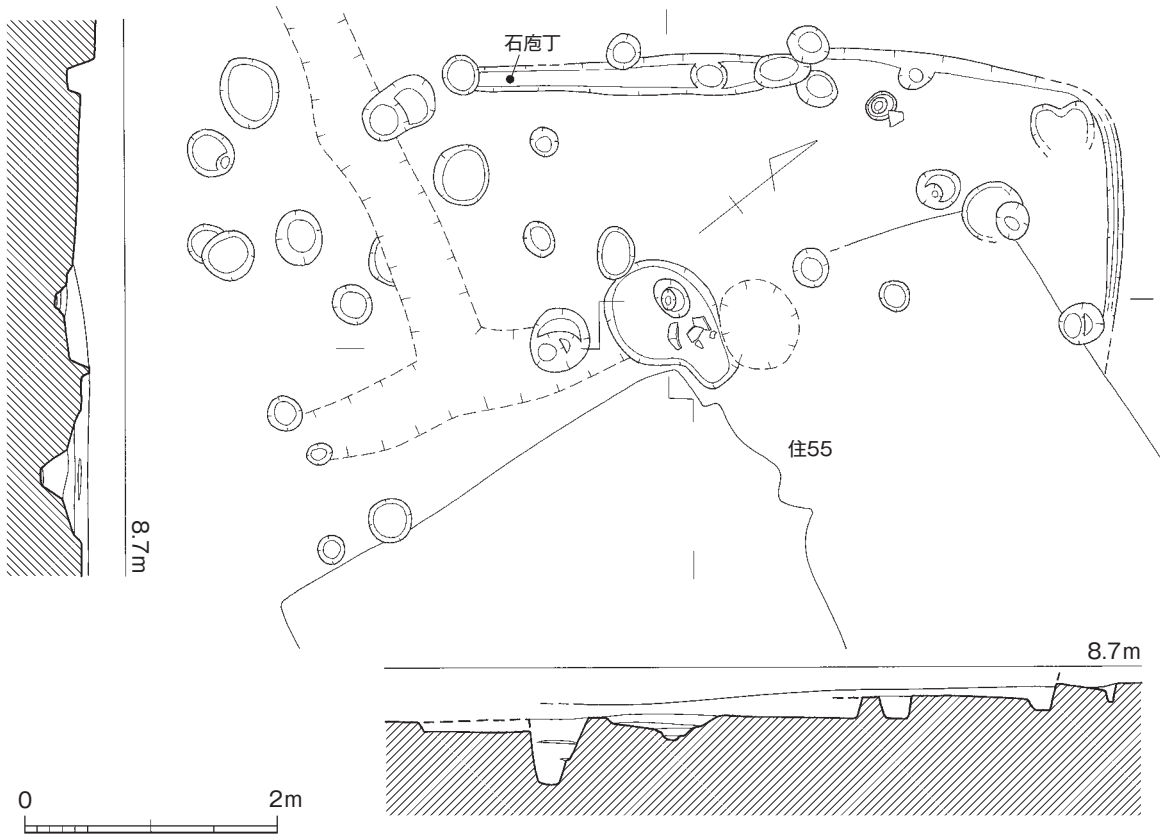


第122図 53号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 53号竪穴住居跡 (図版21・22・27、第115・122図)

上記したように、平面プランを当初から確認したものではないが、結果的に3基の住居跡の中でもっとも後出することが判明した。北東辺及び北西辺の一部を確認したが、南東辺は図化を失念しているため、空中写真から復元して破線で示した。北東辺もすべてを確認したものではないが、カマドが北東辺に接するとしておよそ一辺長5.6mほどに復元できる。

カマドは52号竪穴住居跡の項で記したように支脚として用いられた土師器高杯と火床が残存するのみであった。



第123図 54号竪穴住居跡実測図 (1/60)

### 出土遺物

石製品 (図版46、第146図6) 青みを帯びる暗灰色粘板岩製の砥石で、図下端は石斧状に尖っている。2面を使用し、ほかの部位は破面となる。

土器 (第122図) カマドの支脚に転用されていた土師器高杯で、図示部は完存する。形状は52号竪穴住居跡の出土高杯に似るが、これは器肉が薄く、浅く開く点でやや異なる。口縁部付近の1/4ほどが特に赤変する。

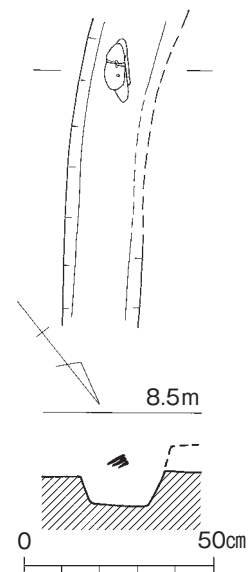
### 54号竪穴住居跡 (図版21・22・27、第123図)

51～53号竪穴住居跡の北、10mほどの距離をもって検出された。削平されて、壁体の立ち上がりはなく、周壁溝と炉跡から想定したものであるが、住宅の下にあたり、攪乱もいくつか入っていた。

周壁溝は幅広いところで0.3mほど、深さは0.1mほどに過ぎない。南西から北東方向に5mほどの長さを確認し、そこで直角に曲がって2mほど伸びて55号竪穴住居跡と重複して消える。

内部に直径0.8m、最大の深さ0.4m強の比較的大型の土坑があって、炭が出土していることから炉跡を想定しているが、赤変は認められなかった。

炉跡のすぐ南東に支柱穴と思われるしっかりした柱穴がある。炉跡を挟んで反対側には住宅の攪乱が入っていて柱穴を確認できなかった。ほかに、支柱穴に相応しい柱穴が見あたらないことから、炉跡を挟む2本の支柱穴を想定している。屋内土坑も不明である。

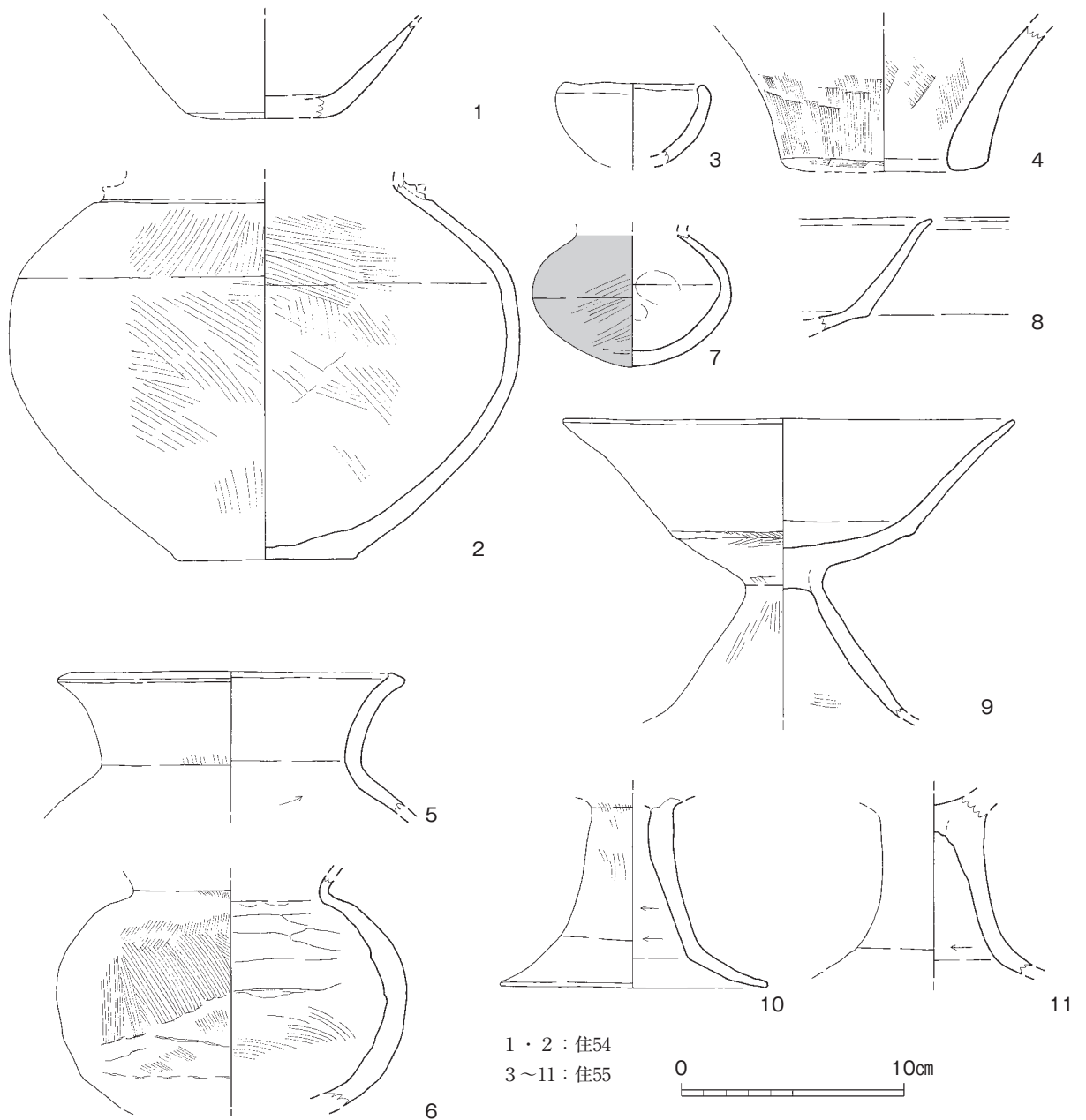


第124図 54号竪穴住居跡石庖丁出土状態実測図 (1/20)

出土遺物

石製品(図版45、第145図1～3) 周壁溝南西端付近で3枚の石庖丁が重ねられた状態で出土した。1は図左上端の一部を欠くほかは完存する。全体によく磨かれていて、右端は折損した後に研ぎ直している。穿孔は両面から行うが、斜めに入る。全体に暗灰色を呈し、図右上から左下にかけて節理が走る片岩製。2は風化して灰白色に近い色であるが、破面は灰黒色に近くなる安山岩製。背は一部が原形を留めるものの大部分を失い、刃部はよく残る。図示した面の右半分ほどは整形時に凹面となったようで、研磨が及んでいない。これも両面穿孔である。3はいわゆる立岩産で、赤みを帯びる暗灰色を基調とするが中に灰黄色・灰黒色の斑が入る。折損部を除いて全体によく研磨され、刃部もよく残る。両面穿孔である。

土器(第125図1・2) 1は炉跡出土の甕で図示部の1/3が残存するが、器表がとても荒れている。

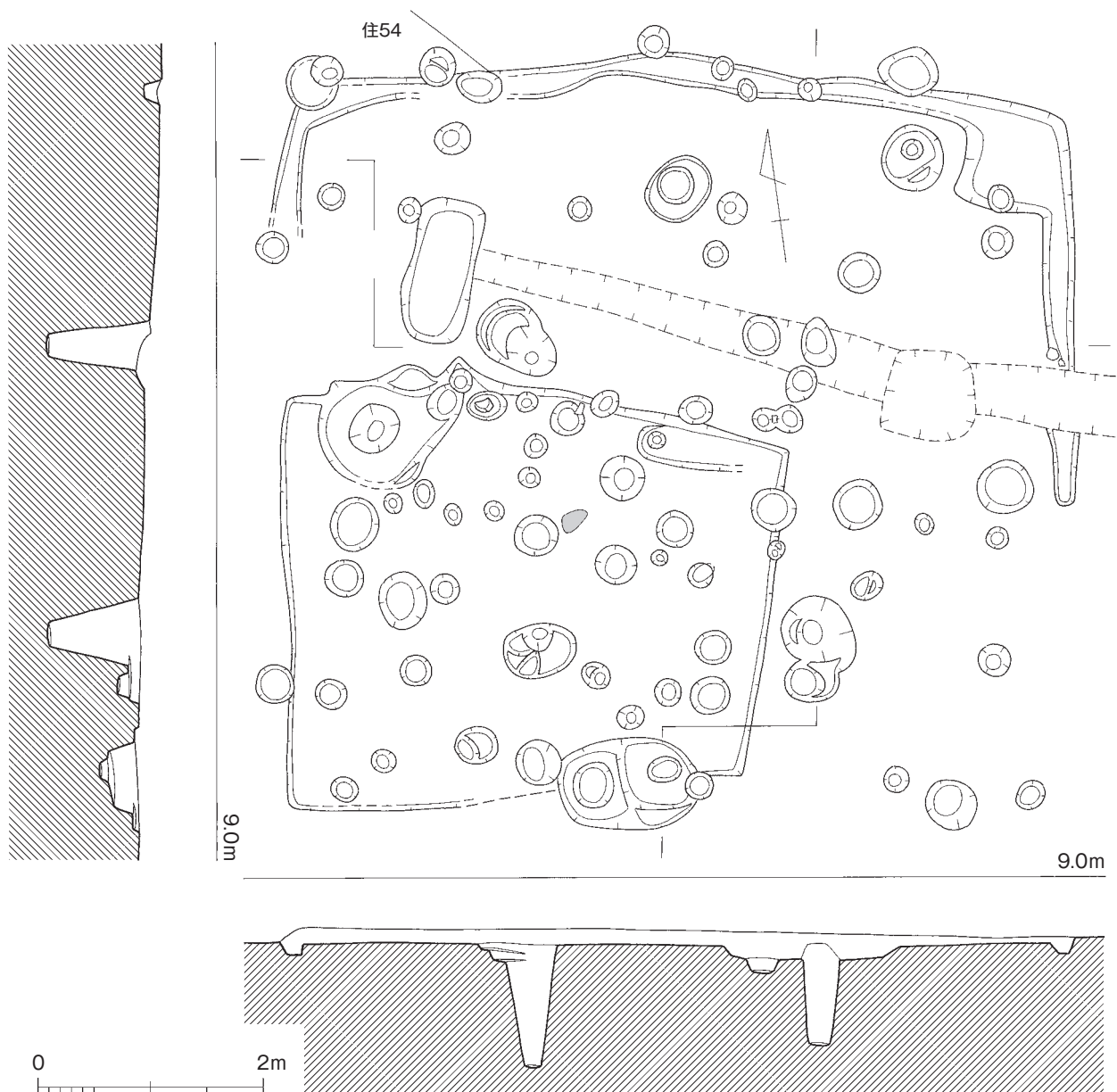


第125図 54・55号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

底部は平底であるが、体部へは丸みをもって移行する。2は埋土中出土の壺で、底部の1/2が残存。しっかりした平底で、体部外面上半を細かい刷毛目で、下半及び内面は間隔の広い刷毛目で仕上げる。

### 55号竪穴住居跡（図版21・22、第126図）

54号竪穴住居跡の南東に位置し、切り合い関係にあるが、先後は確認できていない。ただ、出土土器から見ればこの住居跡が新しい。これも壁体は残らず、周壁溝から想定したものである。住居跡はほぼ方位に乗っていて、北辺東西長は約7mを測る。その南西部に一辺長4mほど、深さが0.1mに満たない浅い方形の落ち込みがある。調査時はこれを「(旧)601号竪穴住居跡」、その外側を「(旧)602号竪穴住居跡」としていたが、この落ち込みの南辺と北辺周壁溝までの距離は北辺東西長とほぼ同じであり、北辺周壁溝の西端の屈曲部の延長に落ち込みの西辺が位置することから、関連する遺構でこの部分がベッド状遺構である可能性も考えた。しかし、出土遺物からみて古墳時代中期に



第126図 55号竪穴住居跡実測図（1/60）

属する住居跡であることからベッド状遺構をもつ時期ではない。従って、方形の落ち込みは誤認である可能性が高いといえる。

なお、明確な炉・カマド跡は確認できていないが、主柱穴とした柱穴内の西端付近で赤変した部分が認められ、炉跡を想定できるかも知れない。浅い方形落ち込みの南辺からはみ出して位置する土坑がいわゆる屋内土坑で、多くの土器が入っていたが、平面図作成後に雨で崩れたために図は省略している。

### 出土遺物

土器（第125図） いずれも土師器で、3・4は埋土中から、5～11はいずれも屋内土坑からの出土である。

1は手捏ねミニチュア土器で、胎土良好で丁寧に作られている。2は異形の土器で、傾きに不安がある。内外面から接地面までが刷毛目で調整されている。

5は広口壺で、口端部を内側へ小さく突出させる。6は肉厚の壺で、底部に近い付近が非常に赤くなる。体部外面上半は丁寧であるが、下半は雑な刷毛目で仕上げ、最大径やや下位から上方は煤けている。内面は指撫でで終わるようである。7は小型精製壺で、外面に赤色顔料が塗布される。胎土精良で、丁寧に作られている。8は二重口縁壺小片。

9は杯部上半が高く大きく開く高杯で、脚部がラッパ状に大きく開く。脚端部を欠失するが、わずかに反転するのであろう。器表が荒れているが、赤く焼き上がる。10は図示部が完存、脚端部が大きく開く。11も相似た器形であるが、脚裾内面が丸くなる。

### 56号竪穴住居跡（第128図）

7区南端に位置するが、この付近は56～59号竪穴住居跡が大きく重複し、60号竪穴住居跡も一部が切り合っていた。その中で最上層に位置するのがこの住居跡である。東辺及び南辺の一部を確認したものであるが、南北長は5.6m以上を測る。深さは0.1mほどであった。

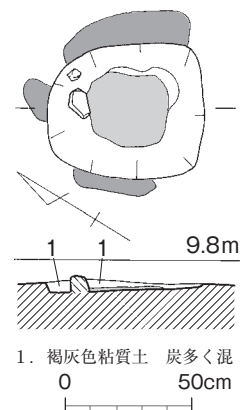
カマド・主柱穴ははっきりしない。後述する57号竪穴住居跡カマドの東に近接する柱穴が、住居跡床面から0.5mの深さがある、位置的にも主柱穴である可能性が高いが、この柱穴に気付いたのは下層の住居跡発掘後である。

### 出土遺物

土器（第129図1～6） 1～3は須恵器で、壺（2）が1/4の残片のほかは小片である。1は肉厚となる杯身で、立ち上がり、受け部ともに小型化する。胎土は良好であるが調整は雑で、外底面に篋記号の一部が1条の線として残る。2は口縁部を折り返して丸く終わるもので、焼成が甘い。3は臙口縁部の小片。口縁部下の稜線はしっかりと刻む。

4は口縁部付近の1/3が残存、体部内外面を細かい刷毛目で仕上げる。また、体部外面の全面が焼けて赤変、器表が剥離した部分が多い。5は小片で、径1cmほどの砂粒が見える。器表が荒れるが、体部内面は雑な篋削りで仕上げる。

6は肉厚となる高杯で、内面は全面が黒褐色となる。外面調整は刷毛目である。

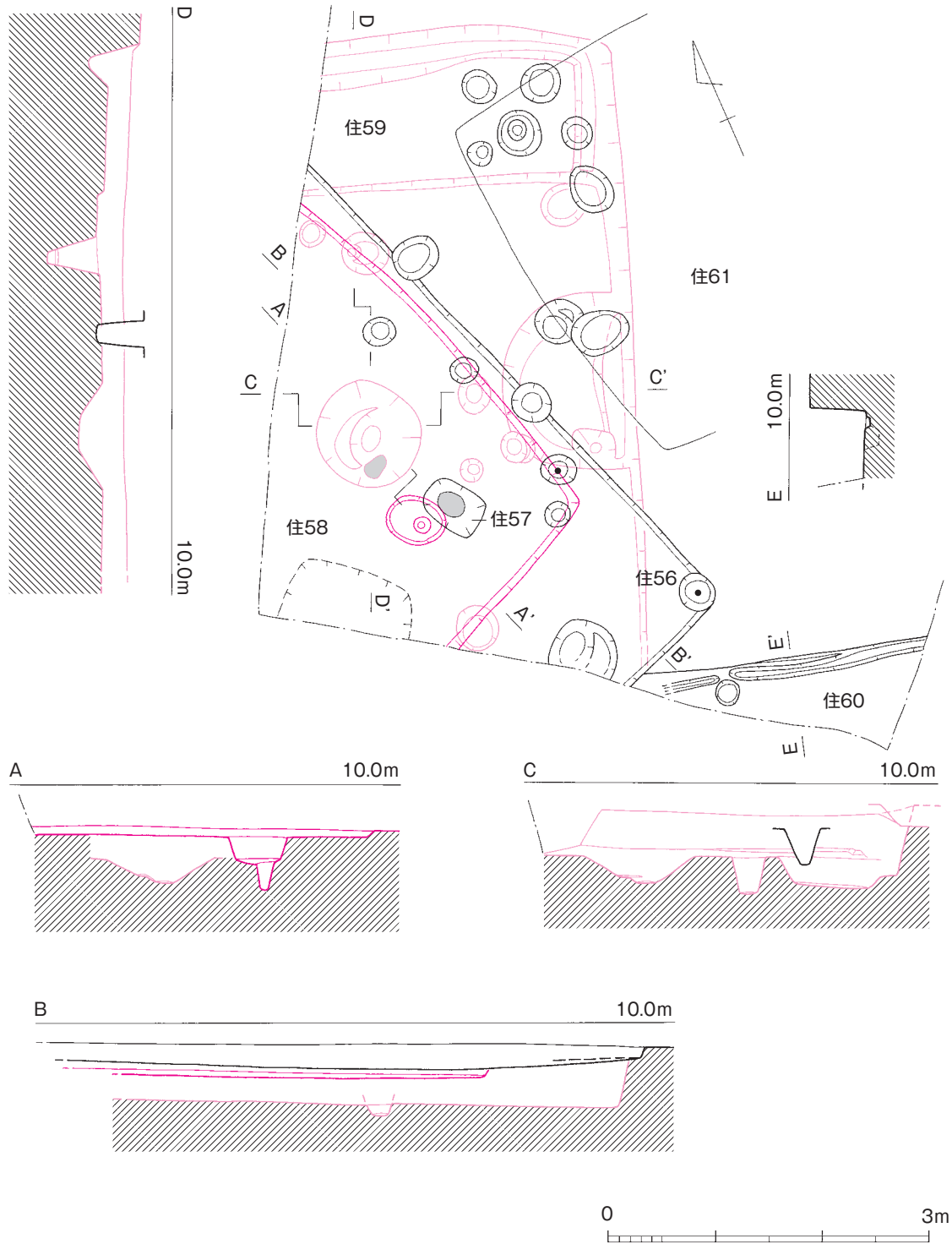


第127図 57号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

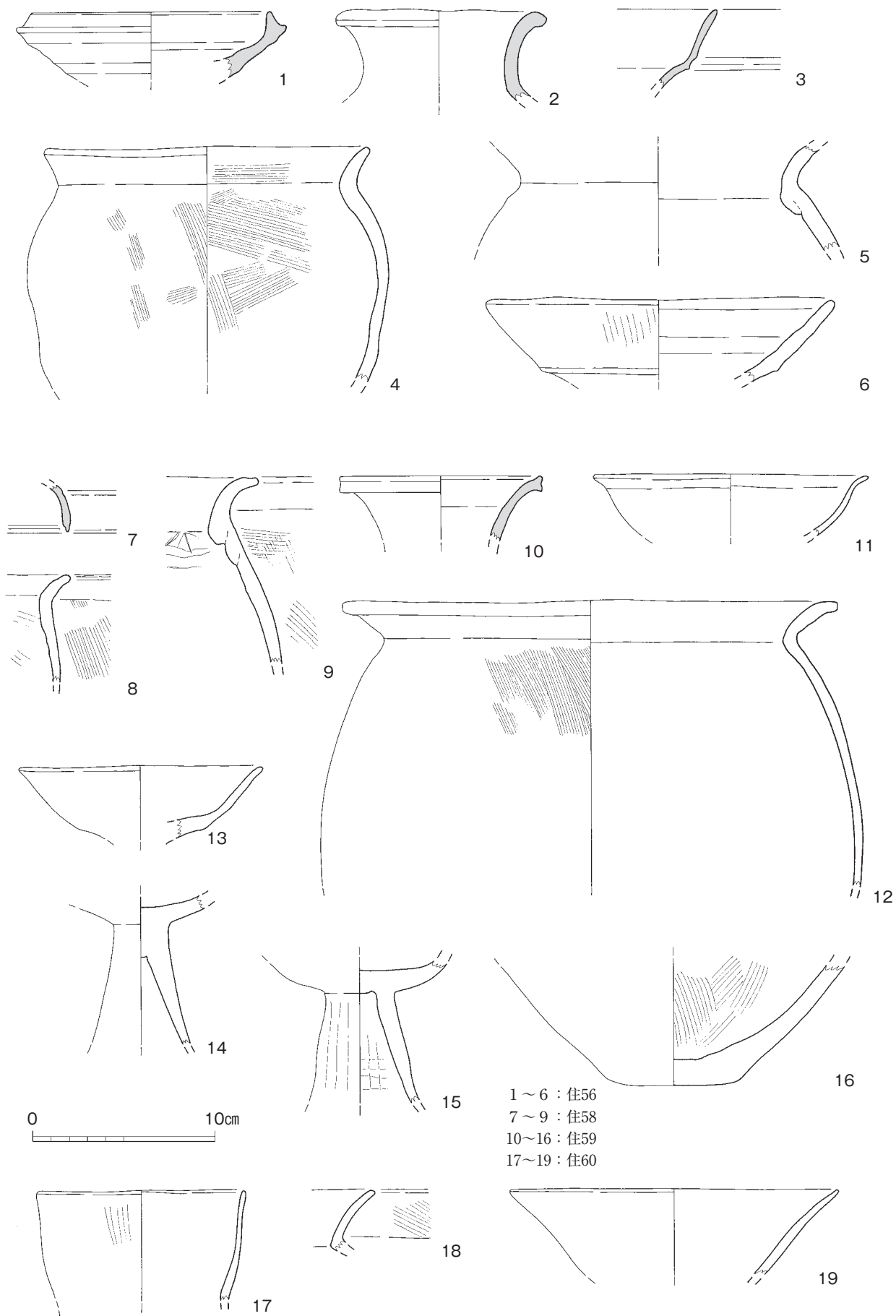
57号竪穴住居跡（図版28、第127図）

57号竪穴住居跡とした遺構は56号竪穴住居跡の床面で検出したもので、灰黄色砂質土を用いたカマドの袖の痕跡及びその内部が確認され、住居跡の壁体は全く残存しなかった。

カマドの袖は両袖及び奥壁側でごく薄く残存していた。カマドの規模は内法で奥行き0.6m、幅0.5mほどである。奥に寄った位置に柱状の小型石材を用いた支脚が残存、その前面が赤く変色し、硬化していた。通常の支脚の位置と異なって、随分奥寄りである点で、やや疑問がある。



第128図 56～60号竪穴住居跡実測図（1/60）



第129图 56·58~60号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



周辺の柱穴を見てみると、図で●印をつけた2基が遺構検出面から0.6mほどの深さを有していて、位置的にも一見して支柱穴かと思われたが、住居跡のラインが見えない。同様に、これが住居跡の北辺に設置されたカマドすれば、59・60号堅穴住居跡の間にこの住居跡のライン見えて当然なのであるが、それが見えないことは住居跡に伴う通常のカマドではなく、特殊な性格を有していたものかも知れない。

出土遺物はない。

#### 58号堅穴住居跡（図版28、第128図）

56・57号堅穴住居跡の下層で一部を検出したもので、北東辺は4mほど、南東辺は1.8mほどを確認した。深さは0.05mほどに過ぎない。

支柱穴と思われる柱穴を1基検出していて、床面からの深さは0.5mほどであった。

#### 出土遺物

土器（第129図7～9） 7は須恵器杯蓋だが小片である。天井部・口縁部界に甘い凹線を刻み、口端部は凹面となる。

8は体部内外面を刷毛目で仕上げる甕片、9は内面が荒れて調整痕が見えない。

#### 59号堅穴住居跡（図版29、第128図）

重複する中でもっとも古い住居跡である。南北長は約6mを、東西長は2.6mまで確認した。東辺に接する屋内土坑が中央に配置されているとすれば南北長は6.6mほどに復元できる。炉跡が中央であれば同7.2mとなる。深さは北辺ベッド状遺構の上面までで0.3mほどである。

北辺では辺に平行して幅1.2mほど、高さ0.1mの地山を削り出したベッド状遺構、深さ0.1mほどの周壁溝が認められたが、南辺では確認できなかった。屋内土坑で折り返した位置まで調査を行っているが、炉跡で折り返した部分は調査区境付近となることから、南辺にはベッド状遺構が設置されていなかったというよりは、屋内土坑がやや偏っていて、炉跡が中央に置かれたと考える方が妥当であるように思われる。

炉跡は直径1mほどの円形を呈し、北西半に緩いテラスが付されていた。上層から順に黒褐色土、灰黄褐色土、焼土や炭を少々交えた黒褐色土が堆積し、南側では壁面が赤く変色した部分も見られた。断面を図示した柱穴が床面から0.5mほどの深さを有していて支柱穴かと思われるが、その場合は2本柱の構造となる。

東辺に置かれた屋内土坑もしっかりとした形状である。埋土に特別なものは見られなかった。

#### 出土遺物

土器（第129図10～16） 遺構から見れば弥生後期～終末頃の住居跡であるが、図示した遺物は新しい時期のものを含んでいて上層遺構の発掘が不十分であったようである。11・14・15は上層遺構を含む旨の注記があり、12は東辺に置かれた屋内土坑から、116は「下層」から出土したものである。

10は須恵器壺口縁部小片。

11は口縁部を強く折り返した椀で、肉薄である。器表が荒れている。12は口縁部を強く外反させて、さらに口端部を折り曲げる甕で、1/2が残存する。全体に器表が荒れていて、外面には煤が付着する。

13～15は高杯片で、これらも器表が荒れている。16は図示部が完周する平底の底部で、外面は荒れているが内面にはしっかり刷毛目が残る。

### 60号竪穴住居跡（図版29、第128図）

56号竪穴住居跡に切られて、一部を検出したのみである。深さが0.5mほどのしっかりしたもので、深さ0.05mほどの幅狭い周壁溝を伴う。

ある程度の土器が出土するが、図示に堪えるものはない。須恵器甕などがあって、多くはそれに相応するものようである。

### 61号竪穴住居跡（図版29、第130図）

59号竪穴住居跡の東に位置する。サブトレンチで南東隅付近を壊したために一部が未確認であるが、重複する住居跡の中ではもっとも後出するものである。南北長3.8m、東西長は北辺が幅広くて4.5m、南辺は幅が狭くなっている。深さは0.1mほどに過ぎない。



第130図 61・62号竪穴住居跡実測図（1/60）

北辺中央にカマドが敷設されるが、残存状態が悪く、柱穴が重複するなどして火床は確認できなかった。東袖の背面に赤く変色した部分があったが、これは位置的に下層の62号竪穴住居跡のカマドに関連するものであるかも知れない。袖にはオレンジ色に近い砂質土を使用していた。

#### 出土遺物

鉄製品等（図版44、第8図10） 図示していないが、辺長2cmほどの不整形の鉄片がある。本来の形状は不明。鉄滓は図左側縁から背面にかけてが本来の表面を保ち、図上面は破面の状況となる。52.9gで、磁石には反応しない。

石製品（図版44、第144図3） 緑色片岩で、穿孔を試みたような箇所が少なくとも3ヶ所ほど認められる。また、図右側縁の一部が磨られたように平滑な面となっていて、意図的に加工されたものと思われるが、何を意図したものかはわからない。それら以外の部分では積極的に加工痕といえるものは確認できない。

土器（第131図1～5） 出土遺物は少ない。図示した中で2は「付近」出土の注記があって、住居跡の固有の遺物とは断じがたいものである。

1～3は須恵器。1は立ち上がりを受け部よりも小型化するもので、1/3が残存。外面に灰を被るが、その中心部付近は未調整のようである。2は1/4の残片で、立ち上がりの先端はほとんどが失われていて、図が本来の形状であるか不安がある。外面中心付近は篋削りで仕上げ、肉厚となるのは火膨れのためである。3も1/3が残存する薄手の杯身で、胎土良好で丁寧に作られている。

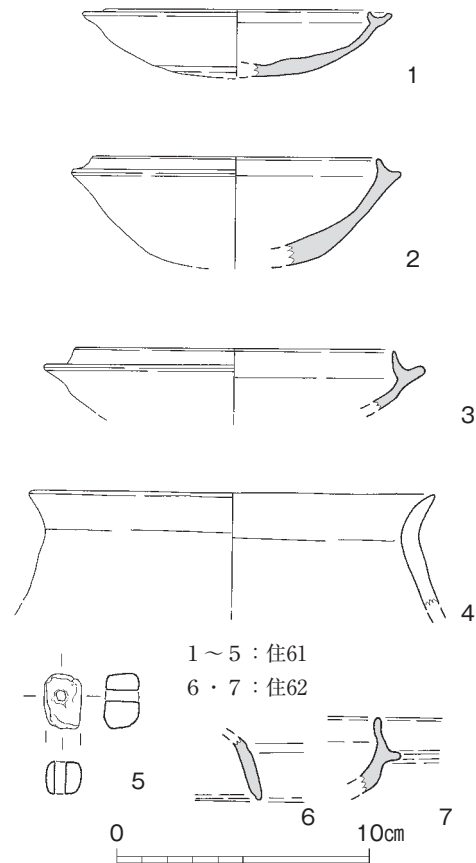
4は口縁部の2/3が残存する土師器甕で、器表が荒れていて内面全体が焦げて灰黒色～暗褐色となる。これは「カマド付近」出土との注記がある。

5は灰黄褐色の土師質に焼かれた有孔土錘で、上部は削って成形、下部は欠損する。胎土精良である。

#### 62号竪穴住居跡（図版32、第130図）

61号竪穴住居跡の北東でコ字状に検出したが、61号竪穴住居跡に切られる。北東辺は3.3mほどの規模であった。61号竪穴住居跡の南半で下層遺構のラインが見えたが、62号竪穴住居跡の北東辺とは平行せず、距離も4m以上離れている。ほかにも長方形であったり、辺が歪む住居跡は皆無ではないが、ここではこの両辺は無関係であるように思われる。隣接する国道201号行橋インター関連の調査区で、61号竪穴住居跡のカマドのすぐ北付近で別の住居跡のコーナーを検出しているようで、それとの関連があるのかも知れない。

61号竪穴住居跡カマド東側の赤変部がこの住居跡のカマドの痕跡であるかも知れないことは前に



第131図 61・62号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

触れた。その場合は断面に示したものが支柱穴として相応しいが、深さが不揃いである。発掘ミスであるかも知れない。

#### 出土遺物

土器（第131図6・7） これも遺物は乏しく、須恵器小片2点を図示した。6は杯蓋で、天井部・口縁部界に甘い凹線を、口端部内側にも沈線を刻む。7は灰白色に近い生焼けの杯身で、肉厚となる。

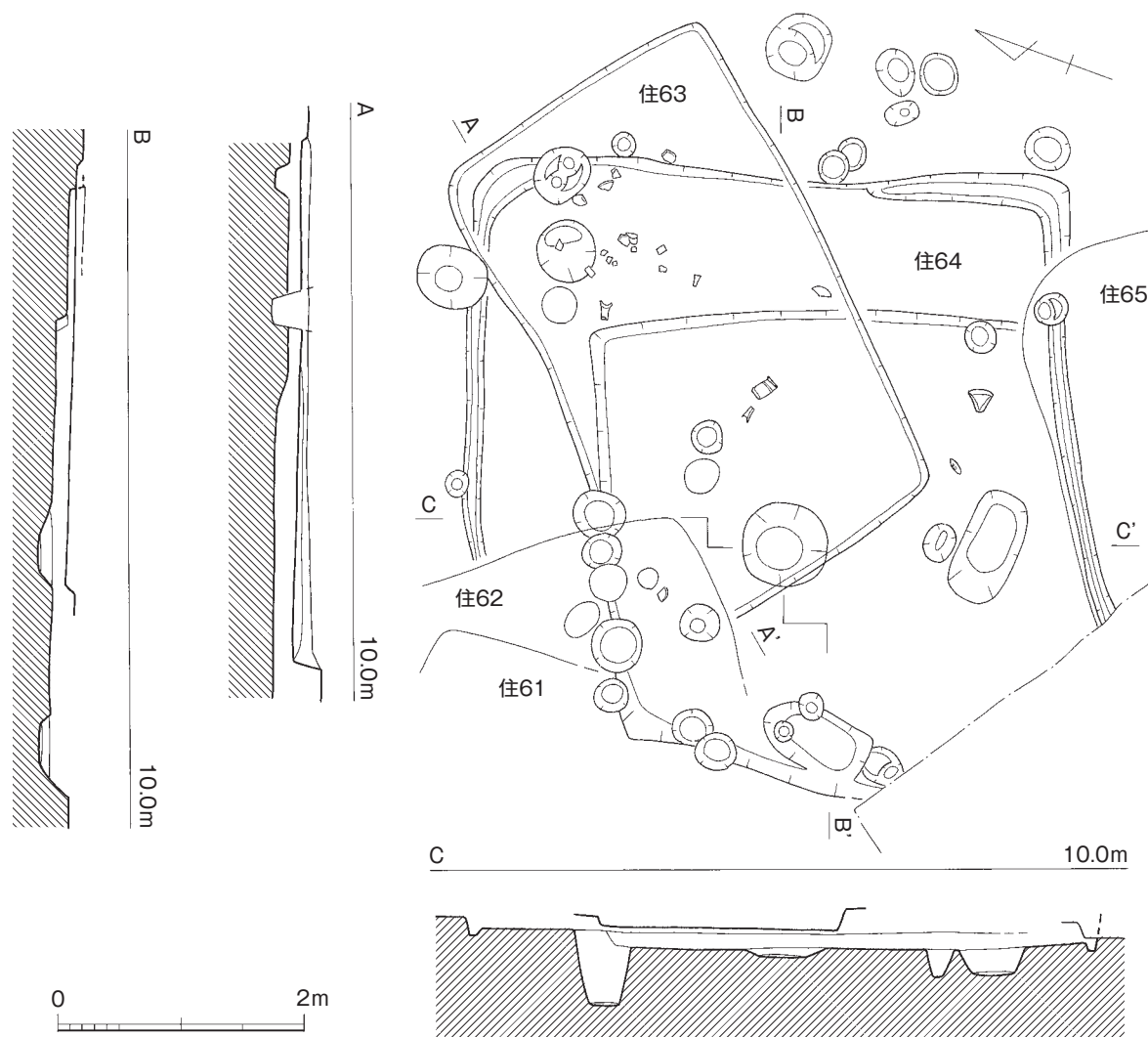
#### 63号竪穴住居跡（図版29、第132図）

南隅付近を62号竪穴住居跡に切られ、大部分が64号竪穴住居跡の上になっている。4.2×2.6mほどの極端な長方形平面となり、深さは0.1mに満たない浅いものであった。

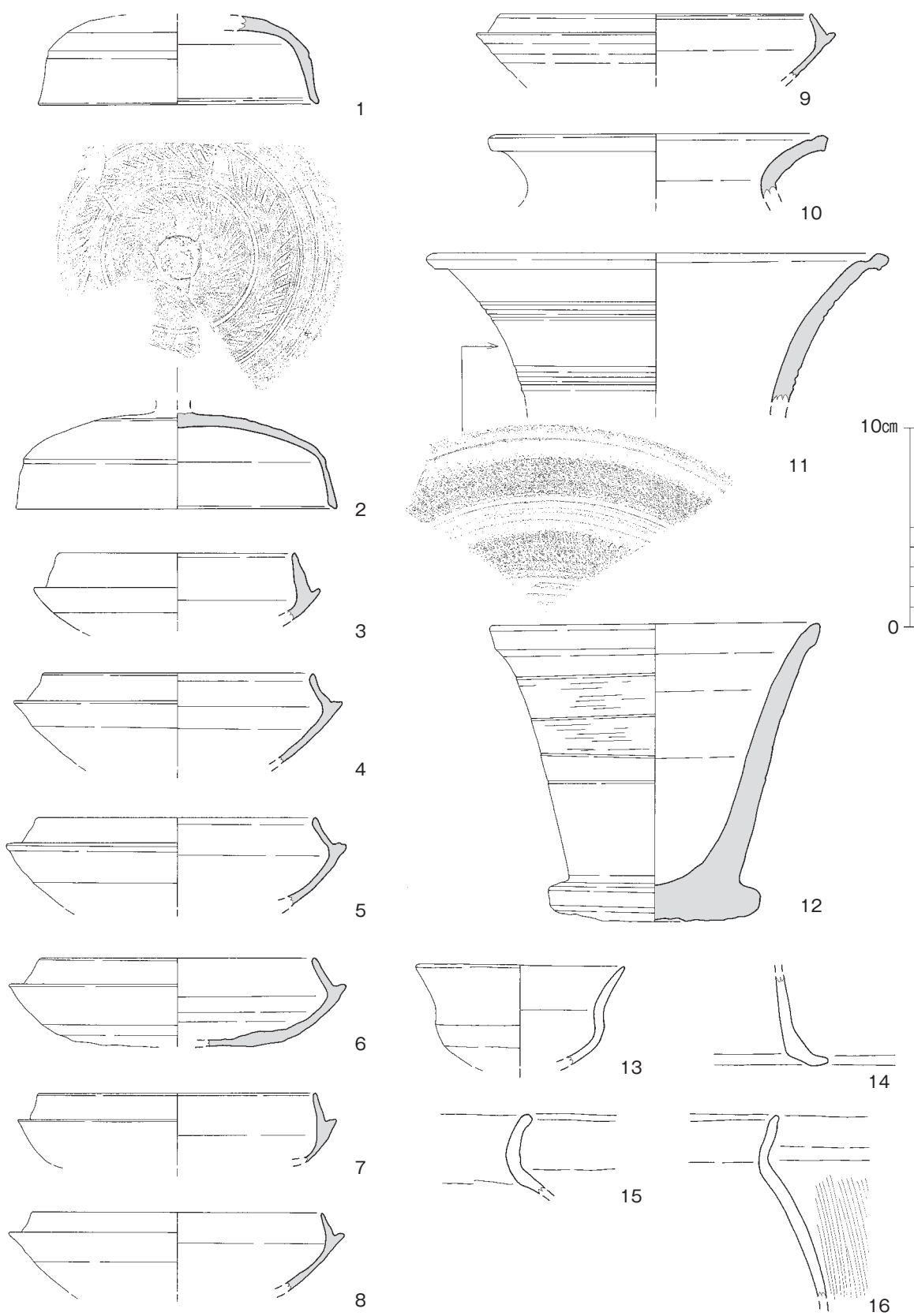
炉跡やカマド、支柱穴といった主要な遺構は不明である。

#### 出土遺物

土器（図版43、第133図） 深さが浅かったために、一部で下層の64号竪穴住居跡（旧709号竪穴住居跡）を掘り込んでいたり、あるいは64号竪穴住居跡から須恵器が出土したりしているが、両住居跡の時期差は明らかであり。両者から出土した須恵器をすべて63号竪穴住居跡、古式土師器を64



第132図 63・64号竪穴住居跡実測図（1/60）



第133图 63号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

号竪穴住居跡に帰属するものとして報告する。

1～12は須恵器。1は唯一の杯蓋で、口縁部付近の1/2が残存する。天井部・口縁部界の稜はシャープで、口端部に内傾する面を付す。胎土精良で、丁寧に作られている。2は高杯の蓋であろう。つまみを欠くが、天井部に櫛描刺突文を刻む。作りは粗雑な感を受ける。

3～9は杯身で、口径に従って図示したがかなりの時期幅があるようである。いずれも1/3～1/4が残存する。3は肉厚で粗雑な作りとなる。4・5は法量・器形いずれもともによく似ていて、胎土良好でおおむね丁寧に作られている。6も上記2点に似るが、これは口端部が丸く終わる。7・8は肉薄である。9は胎土精良で、とても丁寧に作られている。

10は図示部の3/4が残存する壺口縁部片で、胎土・作りともに良好である。口縁部はわずかに変化を加えるが、これも細部はシャープに仕上がる。11はとても繊細な櫛描波状文で施文された壺片で、残存部全面を黒色の自然釉が覆う。胎土精良、調整も丁寧である。

12は口縁部付近の1/2が、底部付近のすべてが残存する摺鉢で、口縁部は断面三角形に近く成形する。外面の全面が灰を被るが、灰が飛んだ部分ではカキ目が見える。底部内面は摺られていて、同外面は窯土などが付着するものの、正置の状態安定する。

13は小型壺で、焼けて赤変、器表が荒れている。これは下層住居に伴うものであろう。14は高杯脚部小片。15・16は甕小片である。

#### 64号竪穴住居跡（図版30、第132図）

62・63・65号竪穴住居跡などに切られていて、重複する住居跡の中でもっとも遡る遺構である。北西辺長は4.8mを測り、対する南西辺は一部を確認したのみでしかも歪なラインを描いているが、両辺間は5m弱を隔てることから、一辺長4.8mの方形プランと見てよいと思われる。

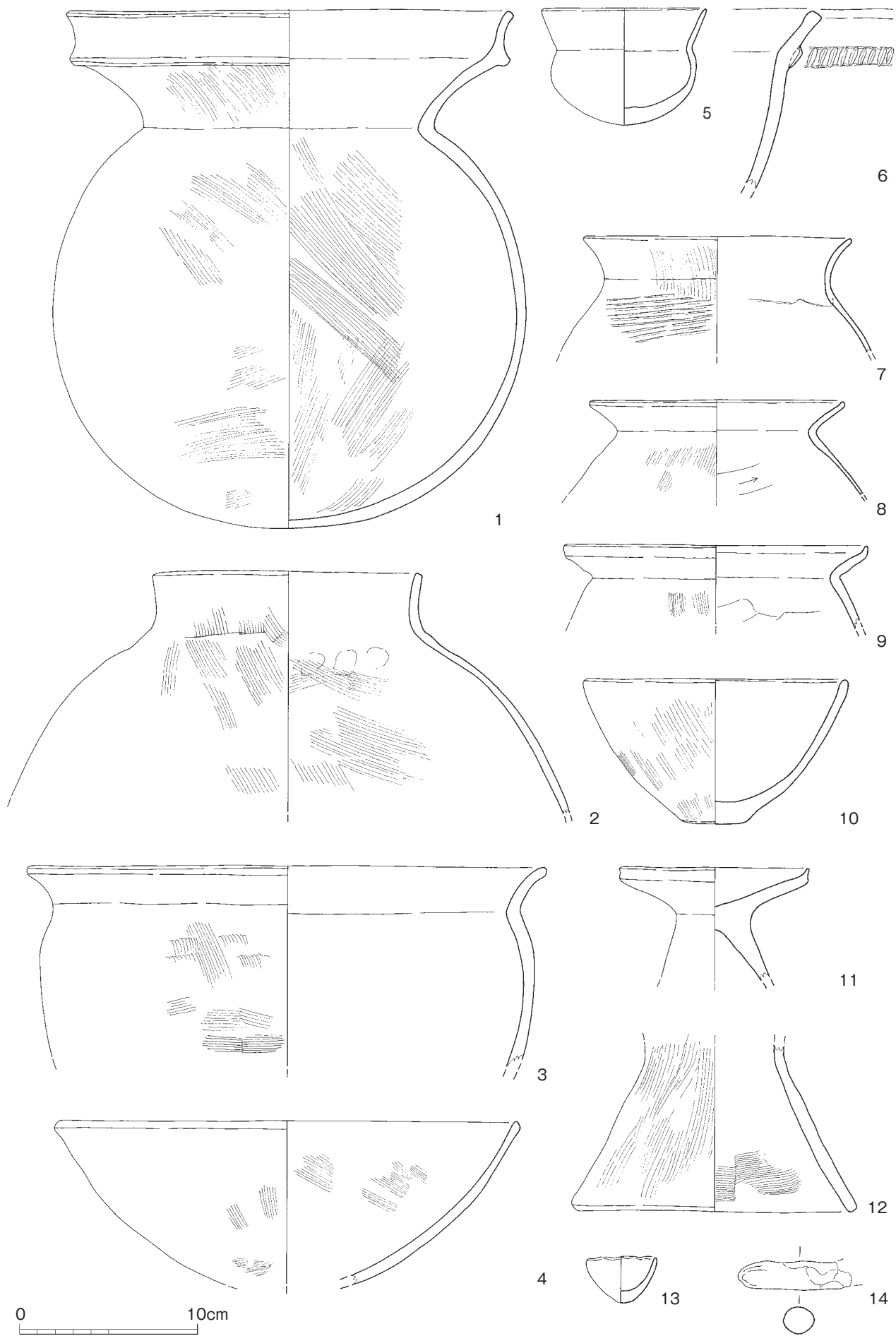
北西辺及び南西辺の2辺で幅1～1.2mのベッド状遺構が認められた。遺構検出面からベッド状遺構までの深さは最大で0.2mほど、ベッド状遺構の高さは0.1mに過ぎない。ベッド状遺構からの深さ0.05cmほどの周壁溝が巡らされているが、北西辺中央付近で途切れ、南東辺では認められなかった。完周していなかったようである。

ベッド状遺構を含めた住居跡の中心に直径0.6m、深さ0.1mの浅い円形の炉跡があり、それを挟む2本の支柱穴を想定できる。北東側支柱穴と炉を挟んで直線的な位置にある柱穴は深さが0.2mほどと浅いため、その北西に接する深い柱穴を対になるものと想定した。

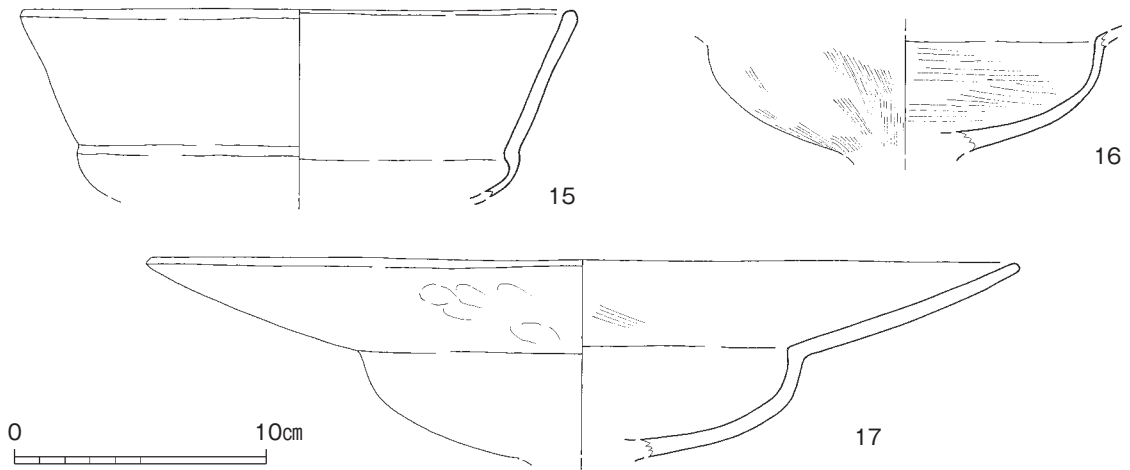
#### 出土遺物

石製品（図版45、第145図12） 灰色となる頁岩製石庖丁で、背は丸く、刃部も鋭利さを欠く。左に示した面の右半分及び背面の大部分は表面が薄く剥落しているようで、原状を残す面はよく研磨されている。孔は片面穿孔であろう、孔径が一定している。

土器（第134・135図） いずれも土師器である。1は球形の体部に、不釣り合いな大きな口頸部を付す二重口縁壺。体部の1/3が残存、口縁部は小片で、刷毛目を多用している。2は直口縁となる壺で、これは1/2ほどが残存。器表が荒れているが、細かい刷毛目が残る。3は鉢であろうか。体部の張りが弱く、口縁部が「く」字形に外彎する。これも器表が荒れるが、かすかに刷毛目が見える。4は大型の浅い鉢で、口縁部付近の内外面が非常によく焼けてピンク色となる。また、内面中位のやや下方に黒色に変色した部分が帯状に見られる。



第134图 64号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第135図 64号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

5は小型壺で、これも焼けて赤変、器表が荒れる。口端部が原形を留めているか不安がある。

6は頸部に篋状工具による刻みをもつ突帯を付す在地系の甕片で、これも焼けている。8は口頸部が「C」字形に高く伸びる肉薄の甕で、外面には叩きが見えるが、内面は荒れている。8も肉薄の甕で、頸部内面は丸く移行し、口端部は内側上方へ小さくつまむ。9は口端部のつまみ上げが極端な甕で、これも体部内面は篋削りで仕上げているが肉厚となる。

10は底部付近が完存する鉢で、胎土良好。内面はとても丁寧に仕上げられていて、篋磨きが施されているかも知れない。

11は小型器台で、図示部はほぼ完存する。口端部は直立する面をもち。これも器表が荒れているが篋磨きが多用されるようである。12は通常の器台片であるが、胎土は比較的良好で、肉薄である。また、大きな抉りが入るようである。

13は手捏ねのミニチュアで、胎土良好、肉薄となる。14は直径1.5cmほどの棒状土製品。図右側で折れている。

15～17は高杯。15は口縁部が高く直線的に伸び、先端部が肥厚する。下半は扁平な椀形となる。これも器表が荒れる。16は杯下部が深い椀形となり、口縁部が大きく開くのであろう。内外面は刷毛目で仕上げているようである。17は杯部の形状が窺える資料であるが、これも器表は荒れる。

### 65号竪穴住居跡 (図版30、第136図)

64号竪穴住居跡を切り、67号竪穴住居跡に切られている。各辺は5mほどの辺長を有するが、正方形とはならず北西辺長が0.2mほど長くなっている。深さは0.2mほどであった。カマドの右側、及び南西辺を除いて深さ0.05mほどの周壁溝が見られた。ただ、南西辺は64号竪穴住居跡の周壁溝と重複する位置にあるため、あるいは見落としているかも知れない。

北西辺に沿って不整形帯状に灰黄色粘質土が広がっていて、その中に埋もれた土器がのぞいていた。北東隅付近での土層観察では、壁に接する部分が0.05mほどと最も厚くなる黒褐色土が下層にあって、その上を灰黄色粘質土が覆うといった状況であり、いわゆるオンドル状のカマド跡に一見似ている。しかし、すべての住居跡の整理・検討が終わっていないが、この丘陵ではほとんど例がなく、内部に土器が一定数埋められていた状況から見てそうした遺構とは考えていない。



カマドは北西辺中央に設置されていて、支脚に使用された小振りの石が粘土で固定された状態で検出された。袖には北西辺付近で広く見られた灰黄色粘質土を主として使用している。

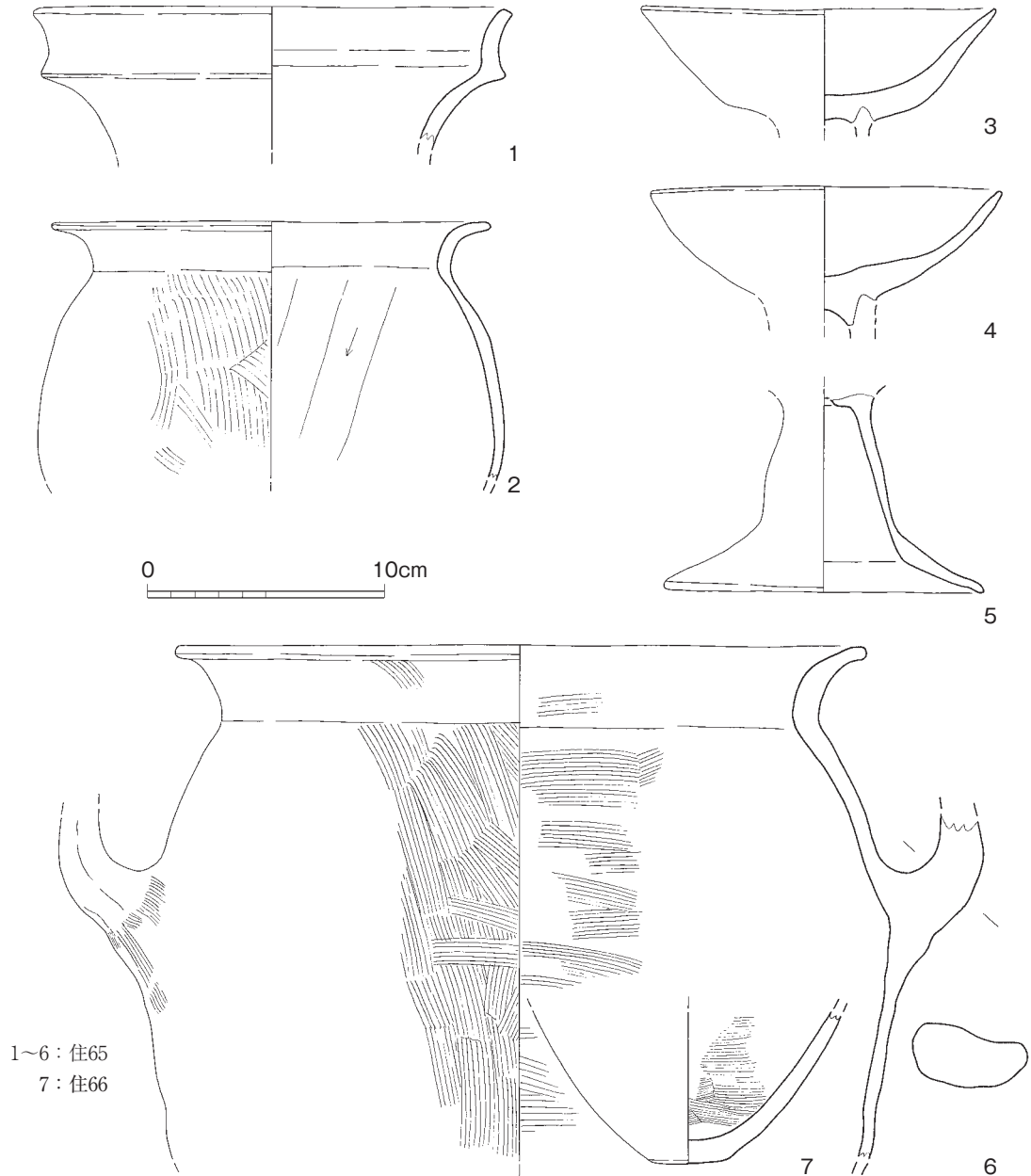
この住居跡の主柱穴は、いずれも大きくしっかりしたものであった。

出土遺物

土器（第137図1～6） カマドが設置された北辺近くで数点の土器が出土した。2・6は北西隅



第136図 65～67号竪穴住居跡実測図（1/60）



第137図 65・66号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

付近、3はカマド西袖の西側、4はカマド西袖の先端、5はカマド東袖東側の壁付近から出土したものである。

1は二重口縁壺小片で、混入であろう。器表が荒れている。2は口縁部の1/3ほどが残存する甕で、口縁部が強く反転する。胎土良好で、調整も丁寧になされている。体部の一部が焼けて赤変するが、本来赤く焼かれていたようである。

3は口縁部が外彎気味に、4は内彎して立ち上がるなど形状はやや異なるが、法量はよく似ている。3は焼けて部分的に赤変・黒変し、4は赤変する。5は図示部が完存し、器表は荒れるが焼けた様子は見られない。

6は口縁部が甕のように強く外反する甑で、これもあまり焼けた痕跡は見えない。体部内面では図下端付近とそれ以上とは毛目原体を替えている。

### 66号竪穴住居跡（図版31、第136図）

65号竪穴住居跡と重複して、調査区の隅で一部を検出したもので、厳密に言えば性格は不明である。重複する住居跡との先後関係も確認できなかった。深さは0.1mに満たない。

#### 出土遺物

土器（第137図7） 土器底部1点を図示した。平底であるが、体部への移行は若干丸みをもつ。外面は荒れて調整不明である。ほかに砲弾形の底部片などもある。

### 67号竪穴住居跡（図版31、第136図）

65号竪穴住居跡を切っていて、68号竪穴住居跡に切られていた。北西辺は5m余りの規模を持ち、カマドを中心に折り返した南西辺もほぼ同じ数値となることから、規模を復元できる。深さは最大で0.15mである。

北辺にカマド袖を思わせる粘質土が認められたが、細部ははっきりしなかった。ただ、その間に支脚痕跡と思われる小穴があり、さらにその前面には赤く変色した硬化部分があることから、ここ



第138図 68～70号竪穴住居跡実測図（1/60）

にカマドが設置されていたことは間違いないのであろう。

主柱穴は断面に記した深いものが相応しいが、対応する柱穴を確認できていない。

#### 出土遺物

調査時の「706号住居跡」は2軒あって、新たに67号・72号住居跡としたものである。したがって、出土遺物の帰属はいかんともしがたい。「706号住居跡」からはすくなくならずの土器が出土するが、図示に堪えるものはない。中に須恵器片が含まれている。

#### 68号竪穴住居跡（第138図）

67号竪穴住居跡の東で一部を検出した。深さは0.1mに満たず、69号竪穴住居跡に切られている。

#### 出土遺物

土器須恵器を含む土器小片が少々ある。

#### 69号竪穴住居跡（図版32、第138図）

67号竪穴住居跡の北東に位置し、一部がその住居跡を切っている。また、68・70号竪穴住居跡も切っていた。北辺で東西長は4.2mを測る。南北長は3.8mを測るが、南辺に幅0.5mほどの段があり、そこまでの長さは3.3mほどである。南辺の段は検出面から0.1mの深さにあって、同じく0.1mほどの高さを持つ。通常のベッド状遺構にしては幅狭く、またカマドを有することからベッド状遺構ではあり得ない。

北辺中央付近にカマドが置かれ、その位置は南辺の段も含めて中央となることからこの段も意味を持つのであろうが、あまり例を見ない。通常主柱穴が置かれる位置に柱穴が3基まで認められるが、深さが浅く揃わない。

#### 出土遺物

鉄製品（図版44、第8図2） 刀子片である。残存長7cmあまりで、鋸がわずかに銹着して残る。

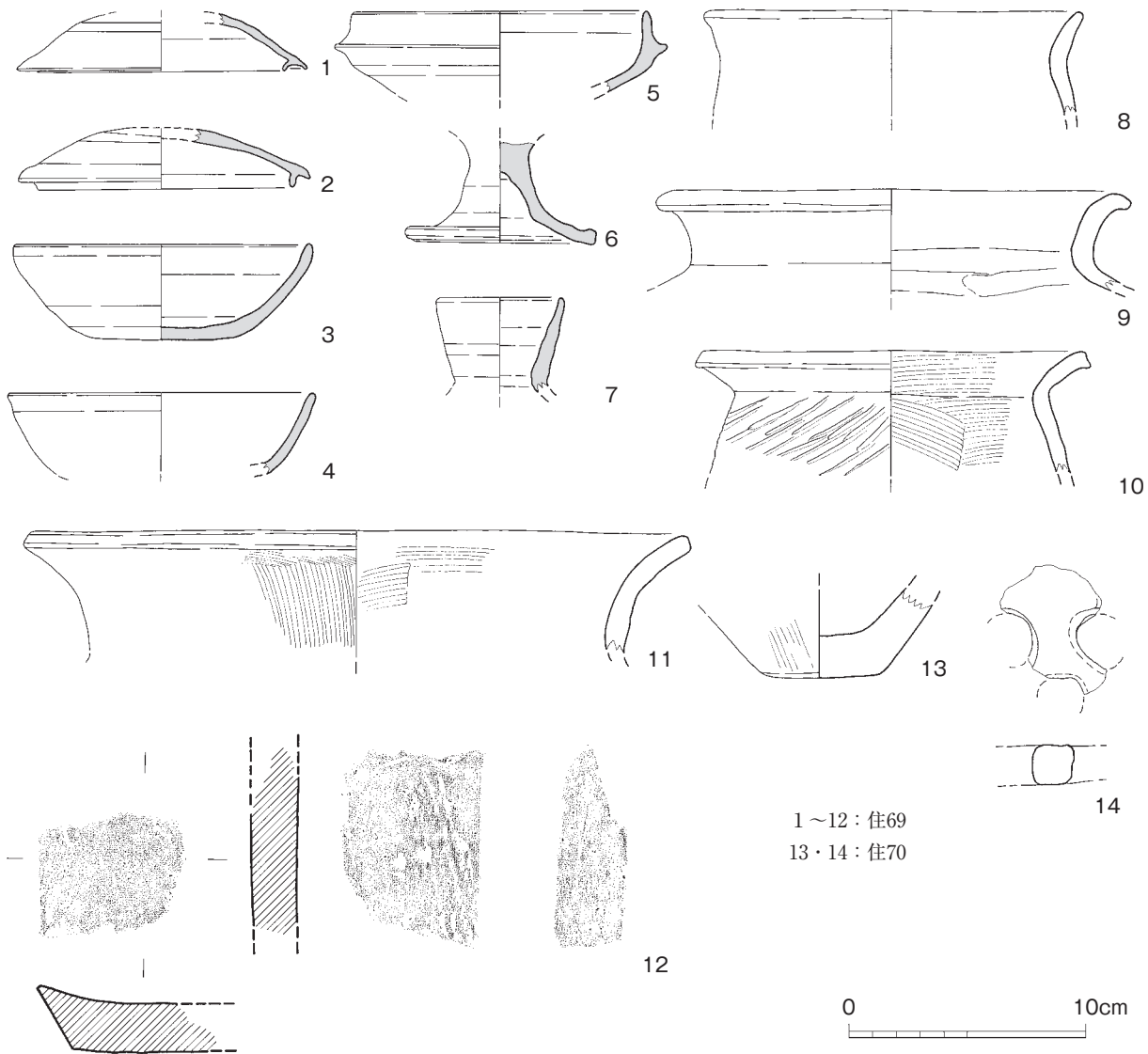
石製品（図版45、第145図8） 粘板岩製石庖丁片で暗灰色である。孔径がほとんど変わらないことから片面穿孔と思われる。

土器（図版43、第139図1～12） 1～7は須恵器、8～11は土師器、12は瓦である。

1・2は返りの形状がやや異なるが、復元口径10～11cm、同器高2.5cmと法量的にはよく似るもので、セット関係となると思われ、3・4の形態から見て蓋としてよいと思われる。1は1/4が残存し、胎土は粗いが丁寧に作られている。2は1/2が残存。これは胎土良好で作りも丁寧である。3・4は口端部の形状が微妙に異なるものの、これも法量的には近い。いずれも1/4が残存し、胎土・作りともによい。3の外底面に篋削りは見えず、丁寧に撫でて仕上げているようである。5は1/4が残存する肉厚の杯身で、胎土・作りは良好、焼成は甘い。6は短脚の高杯。7は提瓶の口縁部であらう。

8は口縁部の外反が弱い甕の小片で、口縁部内面の中位から下位に焦げ付きが見られる。9は須恵器を模倣したものであろうか。赤く焼き上がるが、体部内面は篋削りで仕上げている。10は外面を叩きで調整するもので、明らかに混入である。11も小片で、甗であらうか。

12は平瓦片である。外面は縄蓆文叩き、凹面に布目は見えず撫でのようである。胎土は良好で、全体に赤く焼かれる。



第139図 69・70号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 70号竪穴住居跡 (第138図)

69号竪穴住居跡の北東にあって、それに切られる。北西辺は2.7m、北東辺は2.9mほど検出したが、調査区外へ続く。深さは0.1mに満たない浅いもので、炉跡や主柱穴も確認できなかった。断面に示した2基の柱穴が主柱穴だとすれば、この遺構はベッド状遺構が削平されたものである可能性がある。

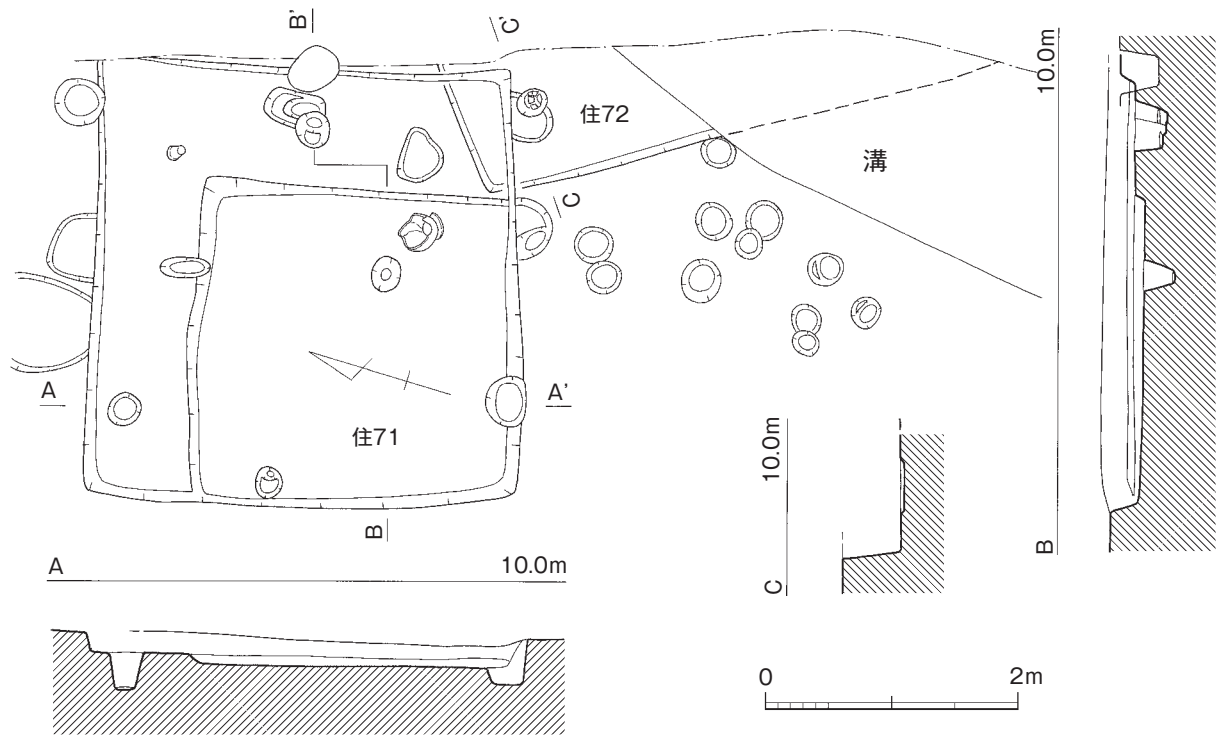
### 出土遺物

土器 (第139図13・14) これも遺物は少ない。13は平底の完周する底部であるが、立ち上がりの部分は丸みをもつ。肉厚で、赤変が著しい。14は多孔式の甑片。

### 71号竪穴住居跡 (図版32、第140図)

70号竪穴住居跡の北東にあって、72号竪穴住居跡を切っている。平面形は一辺長3.4m方形である。これも北辺・西辺の2辺にL字状のベッド状遺構が設置されている。ベッド状遺構の検出面からの深さは最大で0.15m、その高さは0.1mほどである。

住居跡のほぼ全体を調査したが、炉跡や主柱穴は検出できなかった。



第140図 71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60)

### 出土遺物

土器 (第141図) 須恵器甕片が混入するが、大部分は図示したような時期の土器である。

1は頸部が箍状に突出するタイプの二重口縁壺小片で、口端部を内側につまむ。器表は荒れている。2は体部の張りが弱い広口壺で、図示部の体部はほぼ完周、口縁部も1/3ほどが残存する。体部外面は焼けて赤変、同内面は灰黒色となる。

3・4は甕小片。いずれも体部の張りが弱く、口縁部が「く」字状に外反するもので、4は長くなる。5は底部付近の残片で、体部の傾きに不安がある。底部は丸みをもつが、まだ平底である。6は平底の底部である。

7・8は口縁部が外彎して大きく開く高杯で、7は器表が荒れているが内面に放射状の暗文が施されるようである。8は外彎が弱く、高く開く。

9～11は脚部で、いずれも小片とってよい。

12は上面の一部を突出させるタイプの支脚で、突出部を欠く。13も同様に器形であるが、これは突出が小さい。14は筒型器台で、外面に叩き痕、内面に篋削りの痕跡が残る。

### 72号竪穴住居跡 (第142図)

71号竪穴住居跡の北東に位置し、それに切られる。また、溝状遺構にも切られていて、一部を検出したのみである。深さは0.1mに満たない。

### 出土遺物

67号住居跡の項で記したように、遺構番号が重複している。

### 73号竪穴住居跡 (第142図)

調査区東端で一部を検出したもので、溝状遺構にも切られている。調査範囲が狭く、北西隅が確

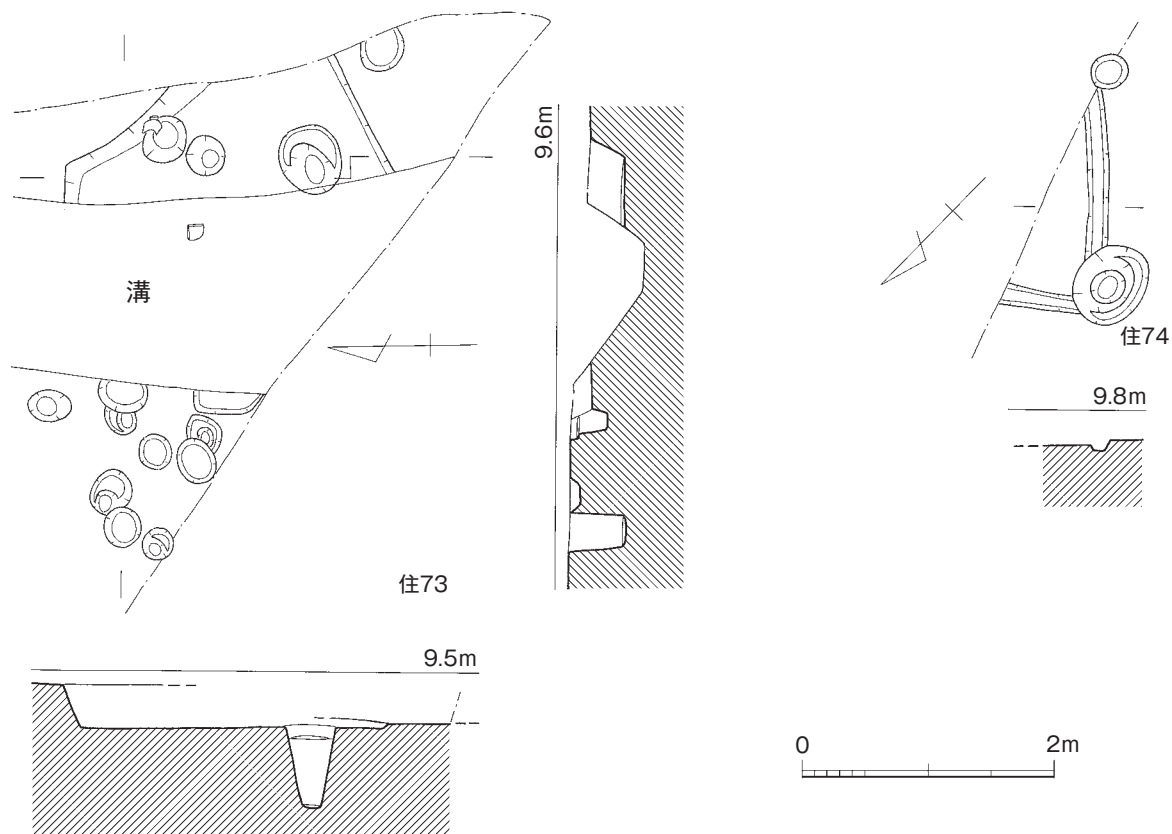


第141图 71号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

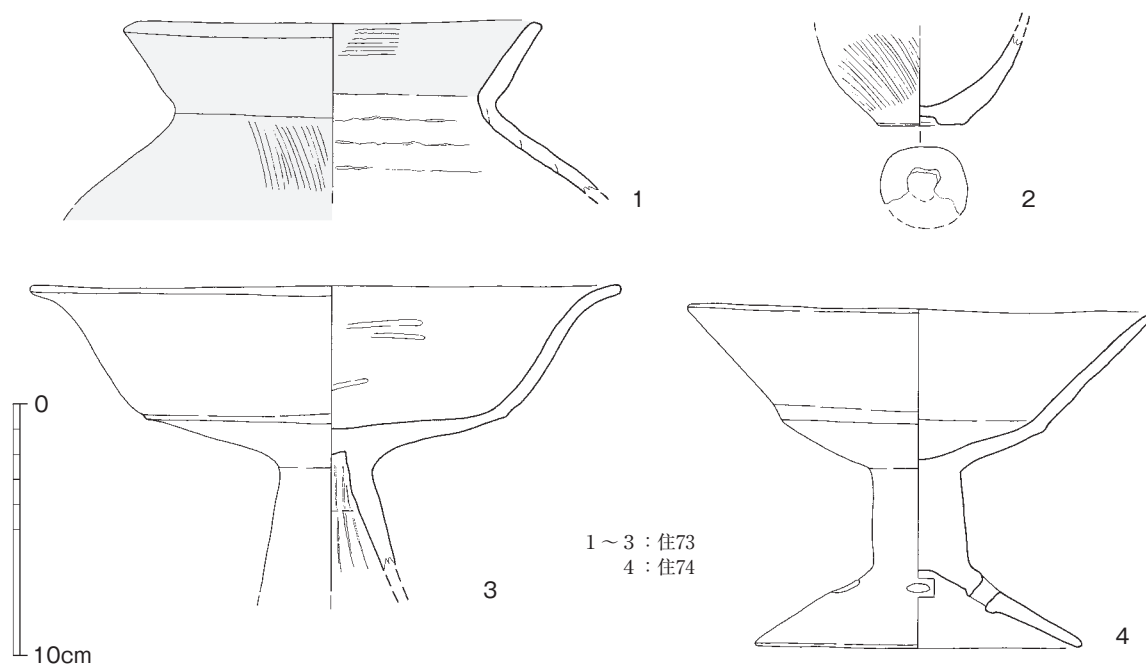
かであれば住居跡としては小さすぎるので住居跡ではないかも知れない。深さは0.3mほどを測る。

出土遺物

土器（第143図） 1は口縁部が「く」字形に外反する土器で、頸部が締まる。外面及び口縁部内面に赤色顔料が塗布されたようである。2は底部が平底輪台状となる底部片で、外面は刷毛目で仕



第142図 73・74号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第143図 73・74号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



上げる。

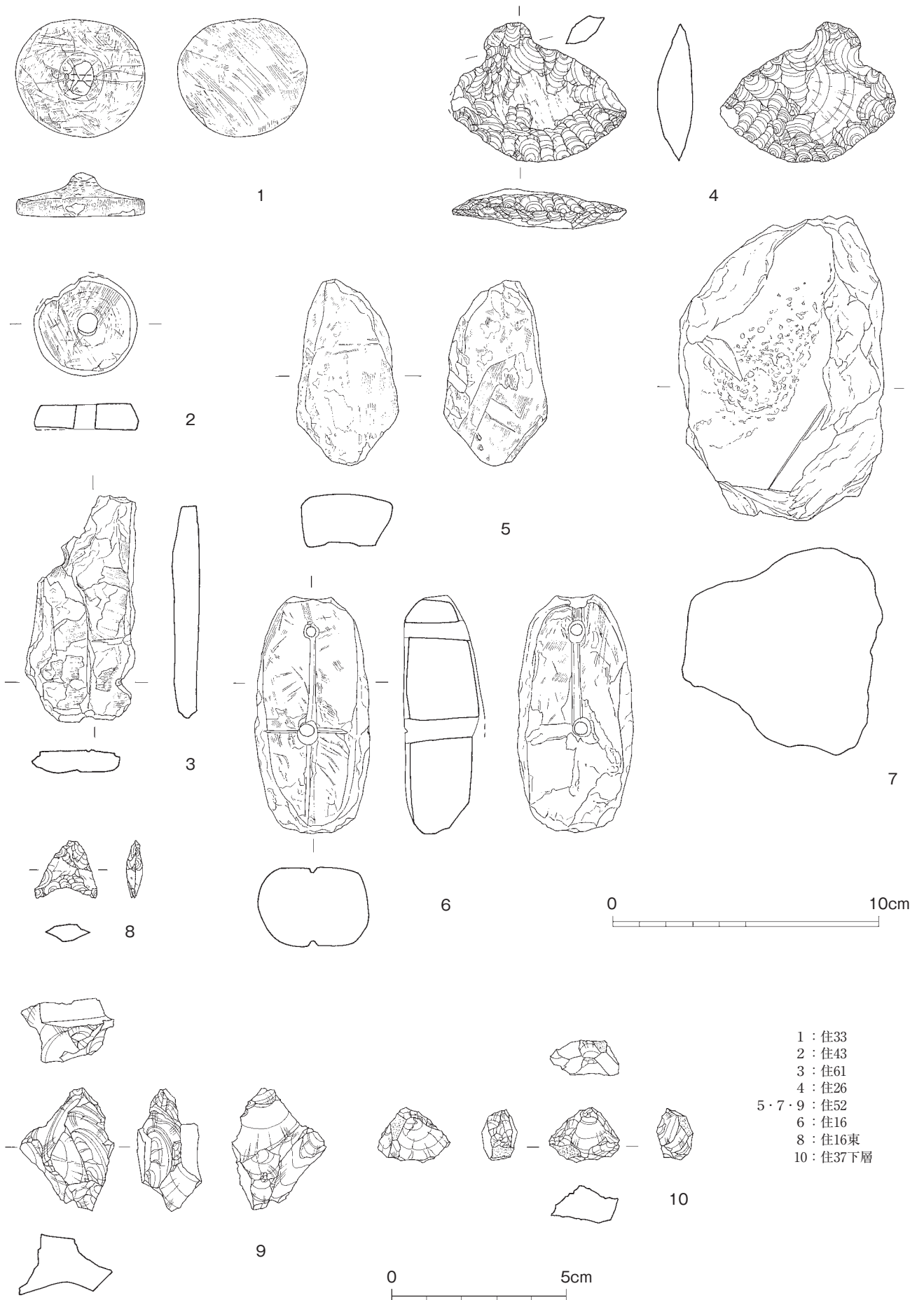
3は特異な形状の高杯。杯部下半は水平に伸び、口縁部は高く開いて端部を強く外反させる。法量に比して肉薄となっている。内面は部分的に篋磨きが見える。

#### 74号竪穴住居跡（第142図）

71号竪穴住居跡の西側で、幅0.2m、深さ0.05mほどの周壁溝の一部を検出したものである。

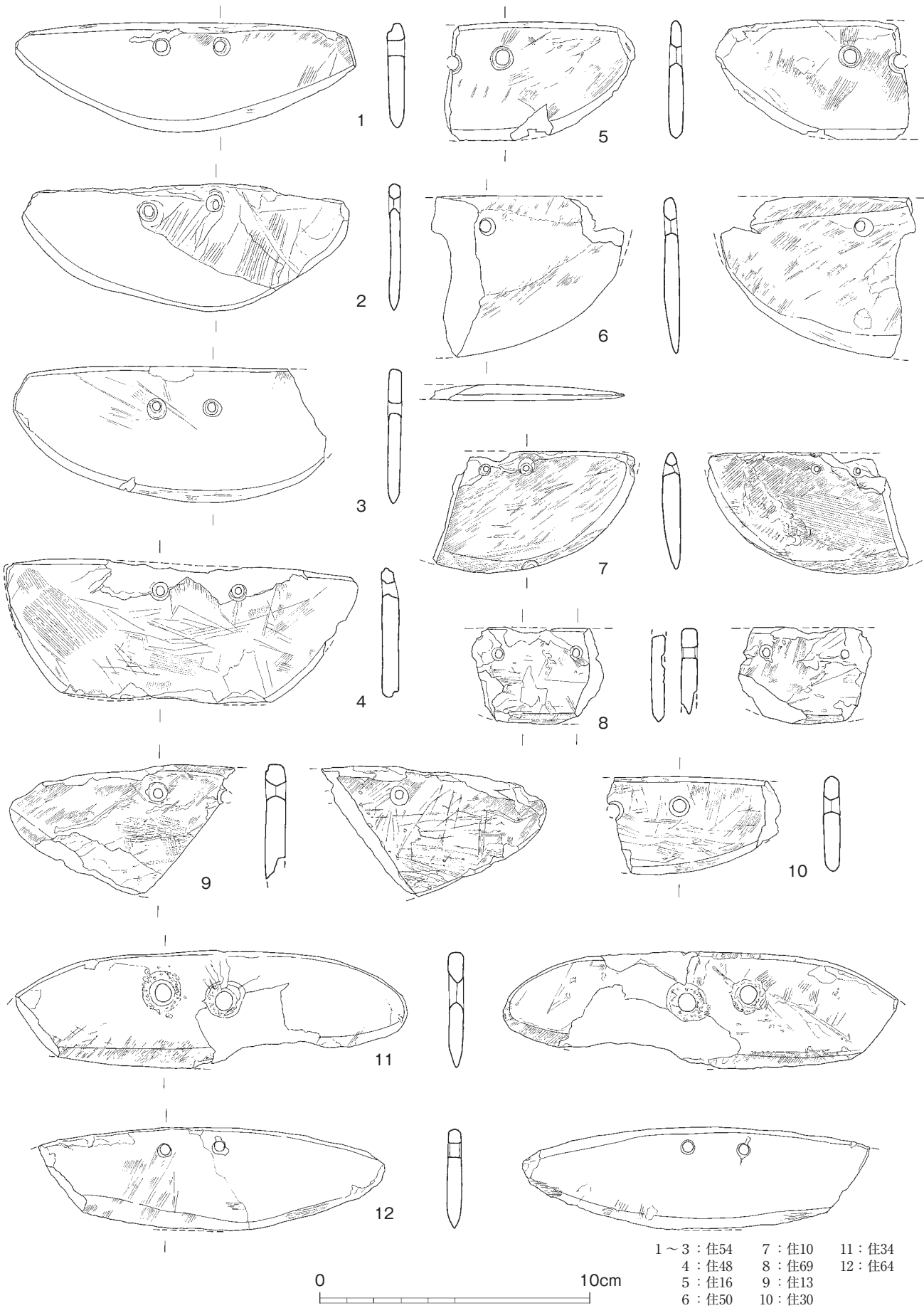
#### 出土遺物

土器（第143図） 土師器高杯でほぼ完存する。杯部下半が小振りで、上半部が直線的に大きく開く。脚部上半は中実となって、下半が内彎気味に開くが開きは小さい。円孔は4個。器表が荒れている。

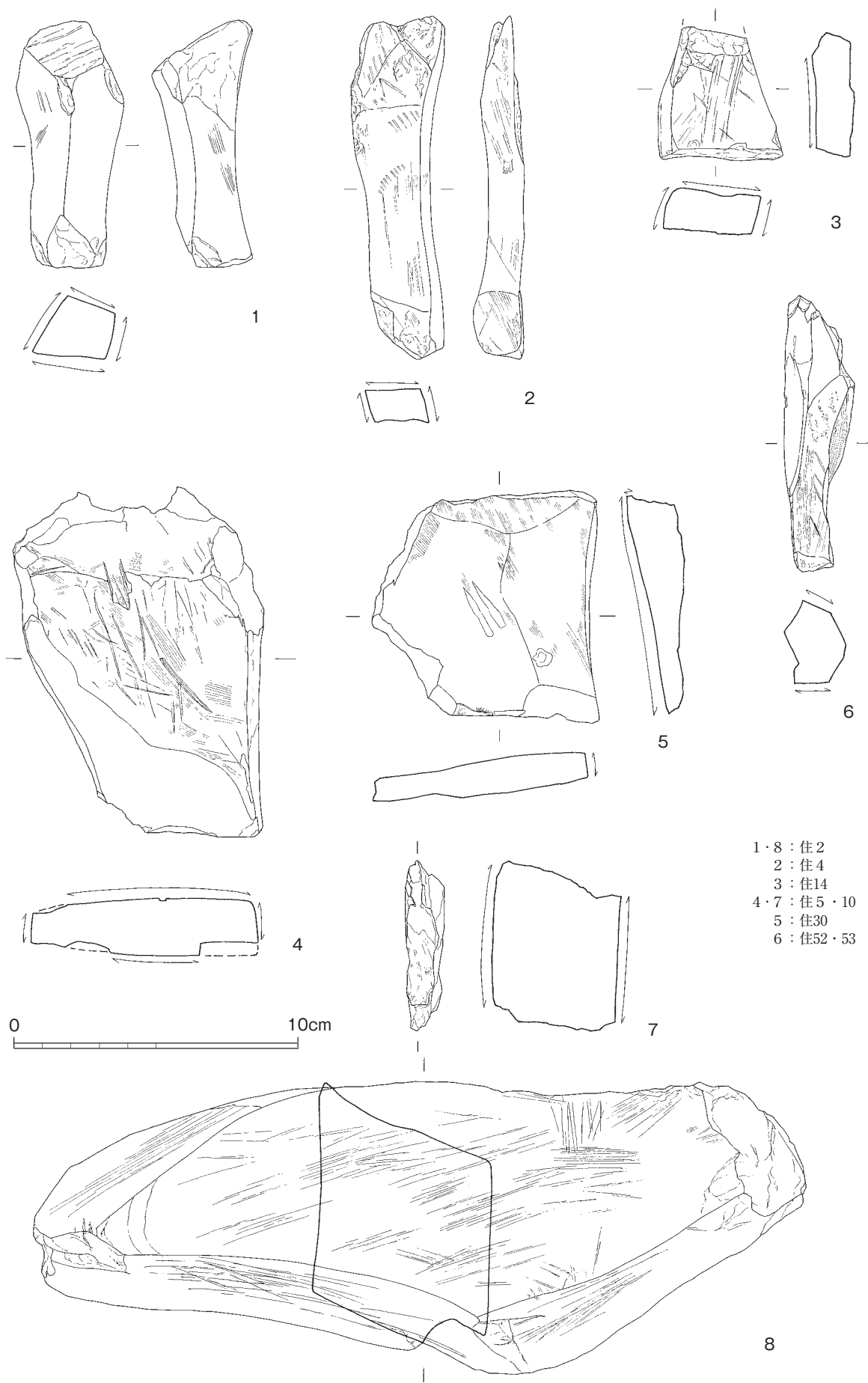


- 1 : 住33
- 2 : 住43
- 3 : 住61
- 4 : 住26
- 5・7・9 : 住52
- 6 : 住16
- 8 : 住16東
- 10 : 住37下層

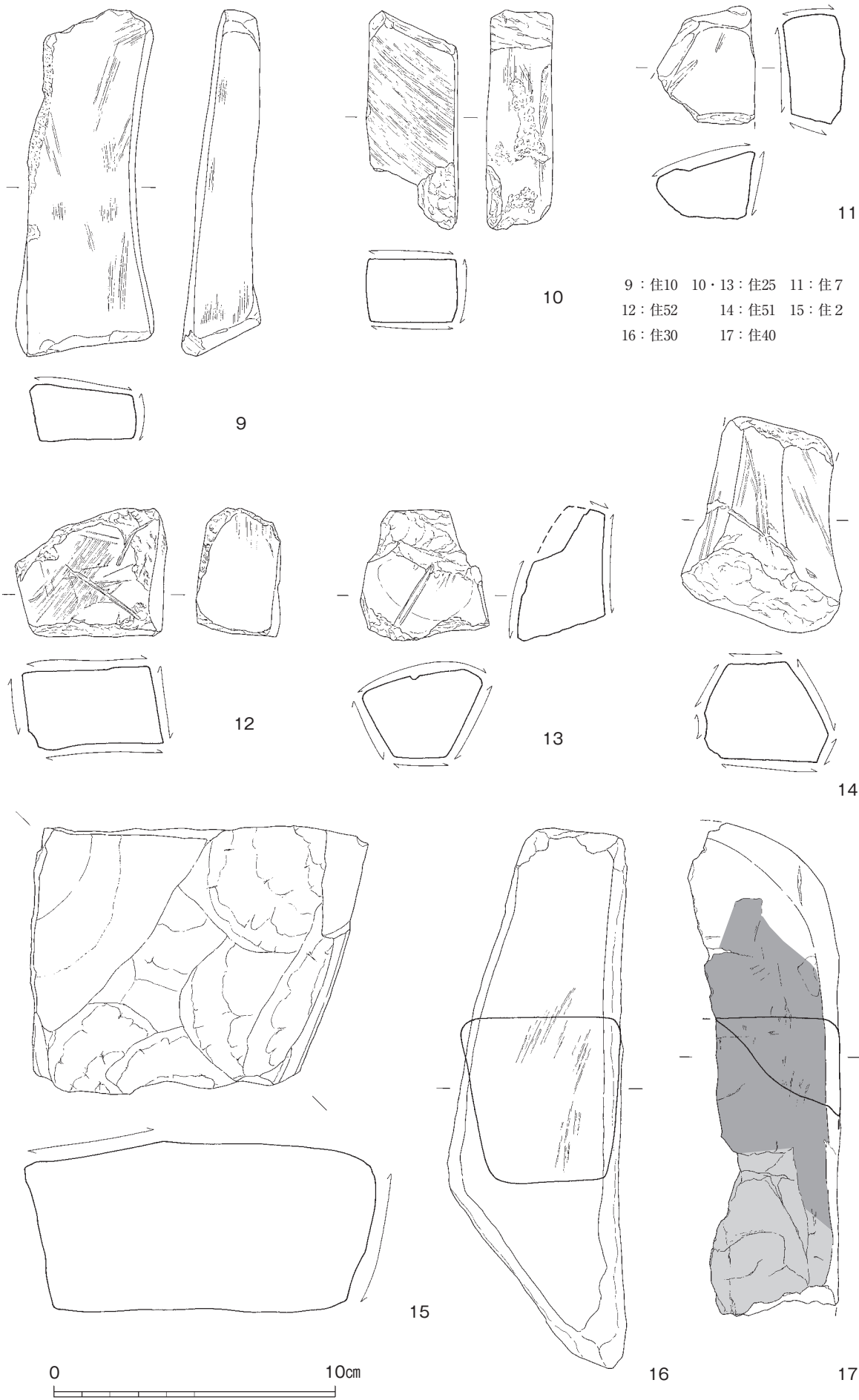
第144図 竪穴住居跡出土石製品等実測図1 (模造鏡ほか、1/2、2/3)



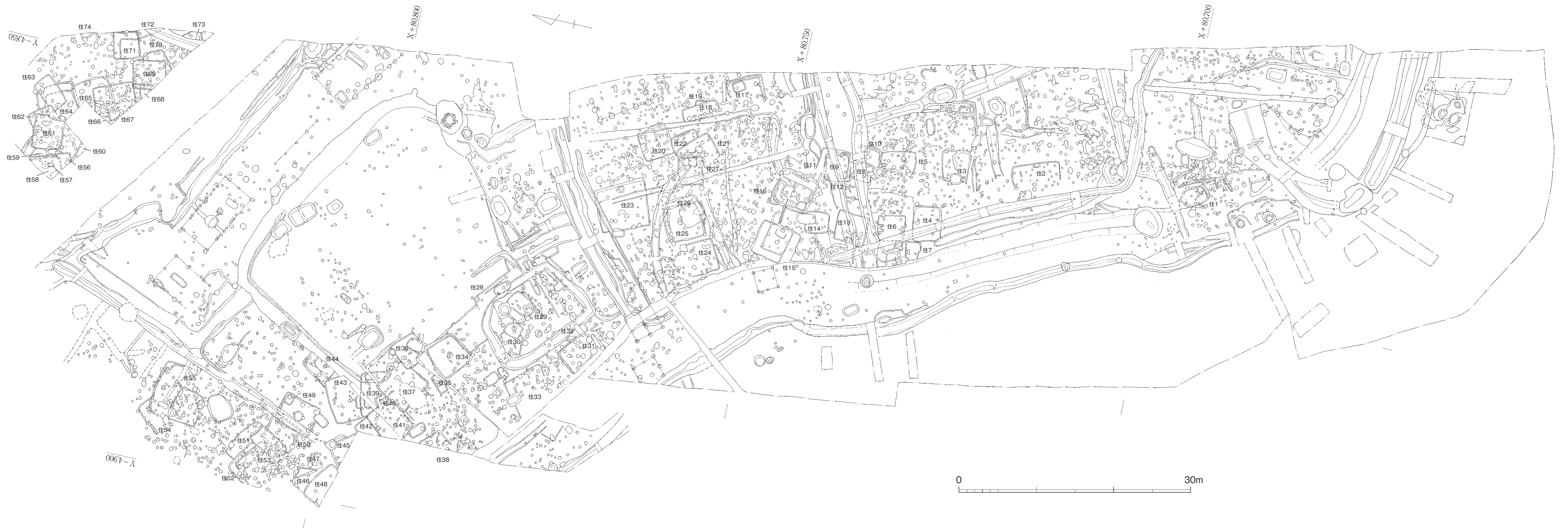
第145図 竪穴住居跡出土石製品等実測図2 (石庖丁、1/2)



第146图 竖穴住居跡出土石製品等実測图3 (砥石1、1/2)



第147図 竪穴住居跡出土石製品等実測図4 (砥石2、1/2)



第148図 延永ヤヨミ園遺跡I区遺構配置図 (1/400)

### 3. 小 結

以上が延永ヤヨミ園遺跡 I 区で調査した竪穴住居跡の内容である。一部不確かな遺構もあるが、竪穴住居跡の遺構番号は74を数えた。2・3・6区では本来高位となっていた部分が大きく削平されていたために東半部には竪穴住居跡はなかった、あるいは乏しかったが、西側では浅いものが多かったとはいえ比較的多くの住居跡が重複していた。7区や国道バイパス調査区のあり方から見れば、本来的に丘陵頂部には濃密に竪穴住居跡が営まれていたものと思われる。一方で、1区南側から5区にかけての丘陵地には竪穴住居跡は非常に少なかった。I区南端付近では10数基の弥生時代の土壙墓群が検出されていて、ここはそれほど削平されたものではないようである。集落の縁辺に当たるために密度が薄かったと考えるべきであろう。

竪穴住居跡は大きく弥生時代終末～古墳時代初めの頃と6世紀を中心とする古墳時代後期の二つの時期に分けられる。前者の指標となる遺構はベッド状遺構・炉跡あるいは2本支柱穴などで、後者のそれはカマド跡である。カマドが全く残らない場合でも、北辺～西辺の中央に近い箇所に被熱赤変した部位があればカマドの存在を推測できる。二つの時期にそれぞれ属する住居跡がいくつかあるか、上記の遺構の有無及び出土遺物から判断したところ、弥生時代終末～古墳時代初めを中心とする時期及びそれ以前の住居跡は27軒、古墳時代後期の住居跡は37軒を数えた。比率にして42%、58%である。

時期的に最も遡ると思われる住居跡は54号住居跡である。周壁溝の一部と炉跡・支柱穴の一方が残存だけで遺存状態は悪いが、やや丸みをもつ平底あるいはしっかりした平底をもつ土器が出土している。土器の形状だけでいえば後期中葉前後に比定できるものであろうが、今回報告する遺構の中では孤立している。昨年度までにこの遺跡に関する報告書が3冊刊行されているが、それらにも概期の住居跡の報告はない。ただ、II区谷部から弥生中期に遡る甕底部が出土していることから、小規模な集落が存在していたことは想定できる。今後の報告を待ちたい。

弥生時代末～古墳時代初めにかけて、いわゆる庄内式～布留式に併行する時期に集落は一つの盛期を迎える。その中でも30・71号は古い様相を呈していると思われる。30号住居跡は大量の土器が投棄されていてすべてを観察したものではないが、図示した範囲でいえば山陰系の鼓形器台片、また瀬戸内系の影響と思われる大きく浅い底部から口縁部が急角度で直線的に大きく伸びる高杯などがあるものの、畿内系土器の影響が見えない。二重口縁壺も円筒形の頸部を持つものはない。何よりも長胴の甕は在地系の特徴である。71号住居跡の出土土器は量的に少なく、広口壺の評価は難しいものの、高杯は口縁部が大きく開く在地系のみである。甕も在地系で、底部が尖底化していないことから、他に比して古く位置付けて大過なからう。

その後は次第に外来系の器形が増えていくが、25号住居跡から出土した土器群は興味深い。31～37に図示した甕は口端部をつまみ上げていて、特に33・34は顕著であり、かつ胎土が明らかに異なっていて搬入されたものであろう。27・28のように口縁部が強く外反し、体部の張る器形も当地では見慣れない器形で瀬戸内系土器の影響を受けたものであろう。この遺構からは鼓形器台(67・

遺構番号	調査時番号	辺長 (m)	深さ (m)	炉跡	ベッド状遺構	カマド位置	主柱穴	特殊遺物	備 考
1号	501	2.2- (3.6)	0.4	有					
2号	101	() -6.2	0.2			北西	4本	刀子・砥石	
3号	102	3.0-4.0	0.3			北西	4本		
4号	103	3.6-4.5	0.5			東辺南	4本	砥石	
5号	104	() -4.5	0.2			北	4本	砥石	
6号	105	() -3.6	0.4			北	4本		
7号	106	() -5.2		有	(4辺)		2本	鉄鏝・砥石	
8号	107	2.5-3.0	0.5				4本		
9号	108								
10号	110	3.0~3.2		(有)				石庖丁	
11号	111		0.05						
12号	112								
13号	113	4.1~4.2	0.4			西	4本	石庖丁	
14号	114	2.8~3.1	0.3						住居跡ではない?
15号	115	4.5~5.3	0.4	有	3辺		4本		
16号	116	5.0~5.0	0.6	有	1辺		4本	石鏝・石庖丁	
17号	118	(4.5以上)~4.8	0.2			北	4本		
18号	119	(3.4以上)~4.6	0.25				4本		
19号	120								住居跡ではない?
20号	123	4.0~4.0	0.1			北西		鉄滓	
21号	121	3.6~5.0	0.2						
22号	122	(3.0以上)~3.5	0.2			北西		鉄刀子	
23号	124	6.1~6.6	0.7				4本		
24号	125	4.2~3.4以上	0.1			南西	4本		
25号	126・127	4.4~4.7						鉄鏝・砥石	
26号	129							石匙	
27号	130	5.0~5.3	0.3						
28号	302	5.0以上	0.2					鉄滓	住居跡ではない?
29号	303	3.5~3.5	0.1	有	1辺				
30号	304	3.0以上	0.1	有				石庖丁・砥石	不整形
31号	306	3.4~(3.6以上)	0.15						
32号	305	1.2以上~3.2以上	0.5						住居跡ではない?
33号	307	(5.0以上)~5.3	0.1					石製模造鏡	
34号	301	4.7~5.0	0.5	有			2本	鉄滓・石庖丁	
35号	618	2.6~2.6	0.15	(有)					
36号	617	3.7~3.7	0.2			北西	4本		
37号	616	5.0~5.0	0.3			(北西)		碧玉	
38号	619	2.2以上~3.0以上	0.3						
39号	621	3.8以上~(5.5)		(有)	(3辺)				
40号	615	2.7以上	0.3		(有)			砥石	
41号	614	2.0以上~(4.2)	0.2			北西			
42号	613	3.6以上	0.3					滑石製白玉	
43号	612	()~6.0	0.3			北西			
44号	611	2.4以上~5.2	0.1	有	(3辺)		(4本)		
45号	620	()~(4.5)	0.3			北西			
46号	607		0.6						
47号	608		0.2						
48号	609	(4.8)~5.0	0.5			北西	(4本)	滑石製垂飾・石庖丁	
49号	610	4.0~5.0	0.2	有	(有)		2本	滑石製勾玉	
50号	606	4.0~4.0	0.4					石庖丁	
51号	605	()~6.0	0.2				4本	滑石製白玉・砥石	
52号	604	()~4.8	0.2			北西	4本	鉄滓・軽石・滑石・碧玉・砥石	
53号	604下層	()~(5.6)	0.1			北西	4本	砥石	
54号	603	5.2以上	0.1	有			(2本)		
55号	601	()~7.0	0.1	(有)			4本	石庖丁	
56号	711?	()~5.6	0.1						
57号	719		-						カマドのみ
58号	720	4以上	0.05						
59号	712	(6.6)~(7.2)	0.4	有	(1辺)		(2本)		
60号	713		0.5						
61号	710	3.8~4.5	0.1			北			鉄片・鉄滓・緑色片岩
62号	715	3.3~()	0.1			(北西)			
63号	708	2.6~4.2	0.1						
64号	709	4.8~5.0	0.3	有	2辺		(2本)	石庖丁	
65号	707	4.8~5.0	0.2			北西	4本		
66号	717		0.1						
67号	706	5.0~5.4	0.15			南西			
68号	714		0.1						
69号	702	3.8~4.2	0.2			西			鉄刀子・石庖丁
70号	704	2.7~2.9以上	0.05						
71号	701	3.4~3.4	0.25		2辺				
72号	706		0.1						
73号	703		0.3						
74号	705		0.05						

表3 延永ヤヨミ園遺跡I区竪穴住居跡一覧



68) や上下端が円形、中央部が方形となる中実の異形の器台(70～72)も出土している。4・5のように口縁部の形状や肩部の横刷毛など布留式の特徴を持つ壺なども含まれている。さらに別の遺構が重複していたとは考えられないので、過渡的な様相を示しているのであろう。このヤヨミ園集落の第一の盛期の終焉は55号住居跡などが示す須恵器出現直前の頃であったと思われる。

古墳後期の住居跡では41号住居跡から須恵邑編年のI期末に比定できる杯身が出土していて、37・45号住居跡からは一段透孔と思われる高杯片が出土している。この頃からヤヨミ園集落の第二の盛期が始まる。この時期の住居跡は4本の支柱穴と北辺～西辺の中央にカマドを付す形が基本であるが、唯一4号住居跡では東南部にカマドが設置されていた。V区でも同様の例がわずかにあって、双方ともに特殊な性格を有しているものと思われる。

この時期の出土遺物では45号住居跡出土のつまみ付き蓋が目される。胎土・作りともに精緻・精巧な陶質土器で新羅に由来する搬入品と思われる。近辺では、行橋市鬼熊遺跡の陶質縄文壺(5世紀)・苅田町番塚古墳の軟質烏足文壺(5世紀末)などが渡来系土器として比較的よく知られている例であるが新しい例を加えた。福岡県東部地域、律令制下で豊前国と呼ばれた地域から出土した朝鮮半島との関連性が推測される遺物については亀田修一氏が集成されているので参照されたい。

最も後出する住居跡は69号住居跡であろう。県道バイパス調査区V-1区では7世紀後半の官衙的建物跡群(津か?)が検出されている。この官衙的建物跡群と竪穴住居との関係は、今後の課題である。

遺跡自体は、その後も断続的ながら中世後期まで継続する。現段階で確実な遺構ははっきりしないのであるが、8世紀代の木簡・墨書土器などの遺物は遺跡の処々から出土し、古代から中世にかけての井戸も確認されている。現在の所見では、遺跡の最後は丘陵上に縦横に掘削された中世後期の区画溝である。その詳細は次年度に報告の予定である。

註1 九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡I」(『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』(2)、2012)

九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡-Ⅲ区1-」(『国道201号行橋インター関係埋蔵文化財調査報告』第1集、2013)

九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡-V-1・2・3区-」(『福岡県文化財調査報告書』第238集、2012)

註2 亀田修一「古墳時代」(『築城町誌』上巻、築城町誌編纂委員会、2006)



# 圖 版

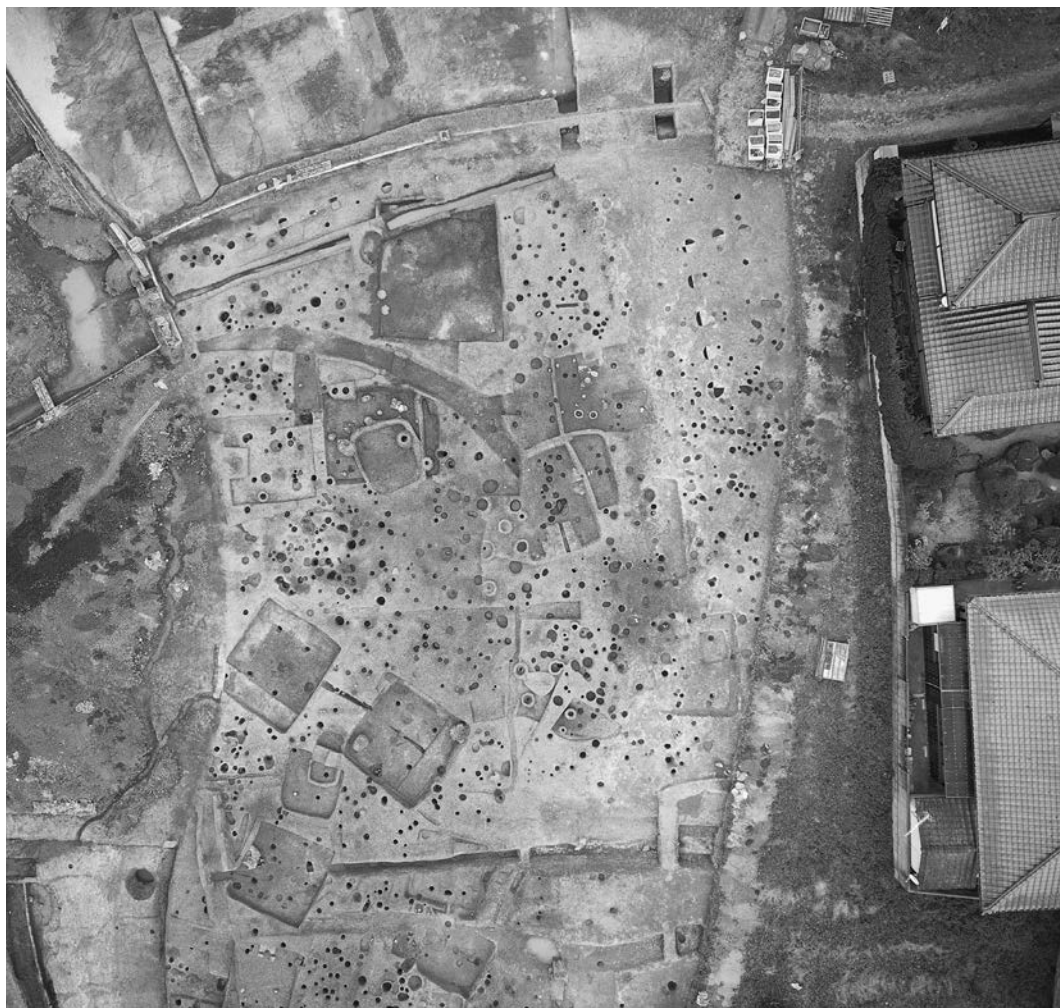




1. I・V区全景  
(南東上空から)



2. I・V区全景  
(上空から)



1. I区北半  
(上空から)



2. I区南半  
(上空から)

1. 1号竪穴住居跡  
(北西から)



2. 2号竪穴住居跡  
(南から)



3. 3号竪穴住居跡  
(西から)





1. 4号竪穴住居跡  
(東から)



2. 4号竪穴住居跡北辺  
(南から)



3. 4号竪穴住居跡東南隅付近  
(南から)



1. 4号竪穴住居跡東辺  
(東から)



2. 5号竪穴住居跡  
(東から)

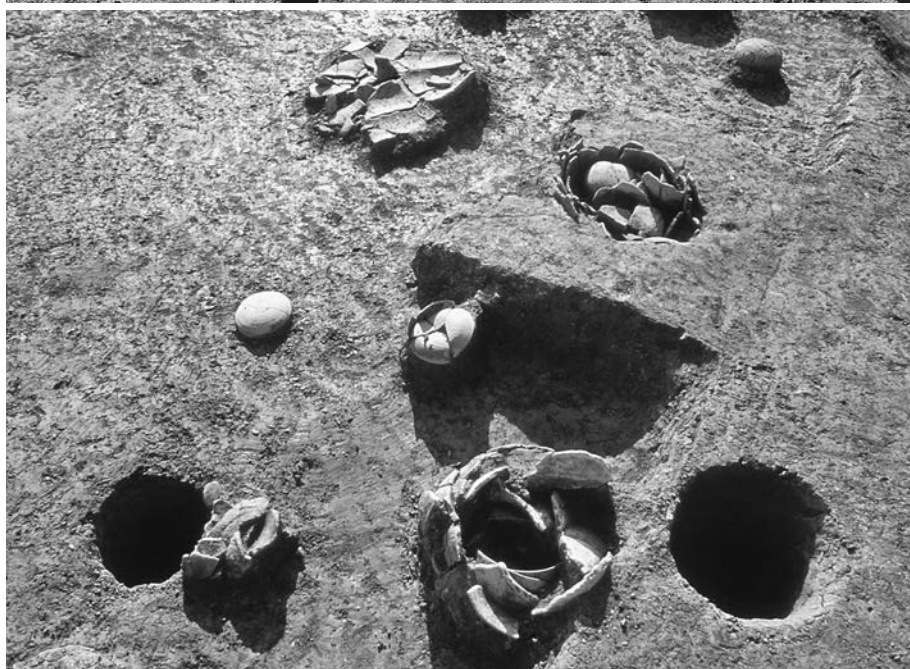


3. 5号竪穴住居跡カマド周辺  
(南西から)





1. 6号竪穴住居跡  
(東から)



2. 6号竪穴住居跡カマド周辺  
(北東から)



3. 6号竪穴住居跡カマド周辺  
(北から)

1. 6号竪穴住居跡カマド  
(南から)



2. 7号竪穴住居跡  
(西から)



3. 8～11号竪穴住居跡  
(北から)





1. 8号竪穴住居跡カマド  
(南東から)



2. 9号竪穴住居跡遺物出土状態  
(西から)



3. 10号竪穴住居跡遺物出土状態  
(東から)

1. 13号竪穴住居跡  
(北から)



2. 13号竪穴住居跡カマド検出状態  
(北から)



3. 13号竪穴住居跡カマド内  
(東から)

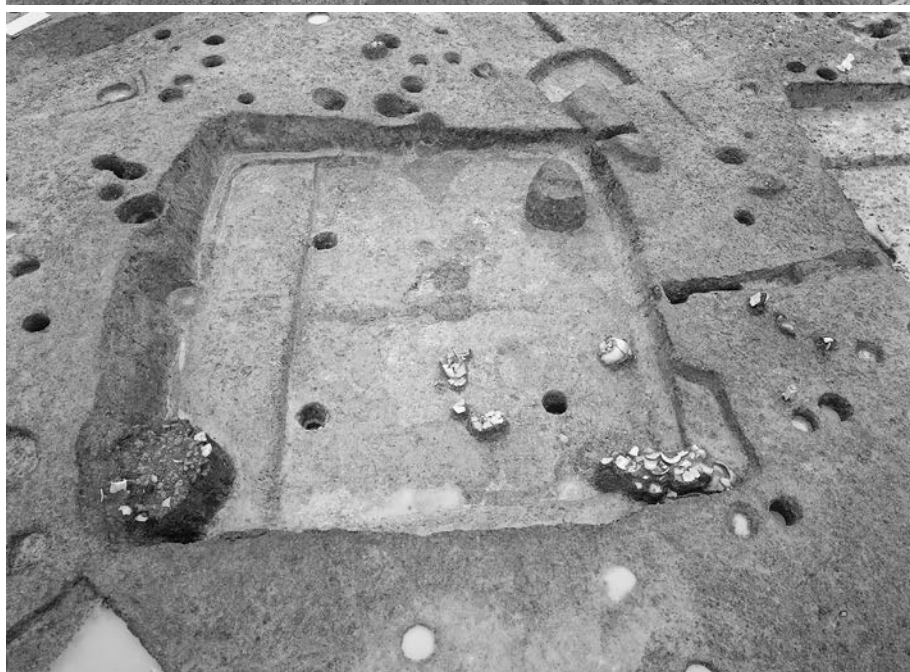




1. 14号竪穴住居跡  
(西から)



2. 15号竪穴住居跡  
(西から)



3. 16号竪穴住居跡  
(北から)

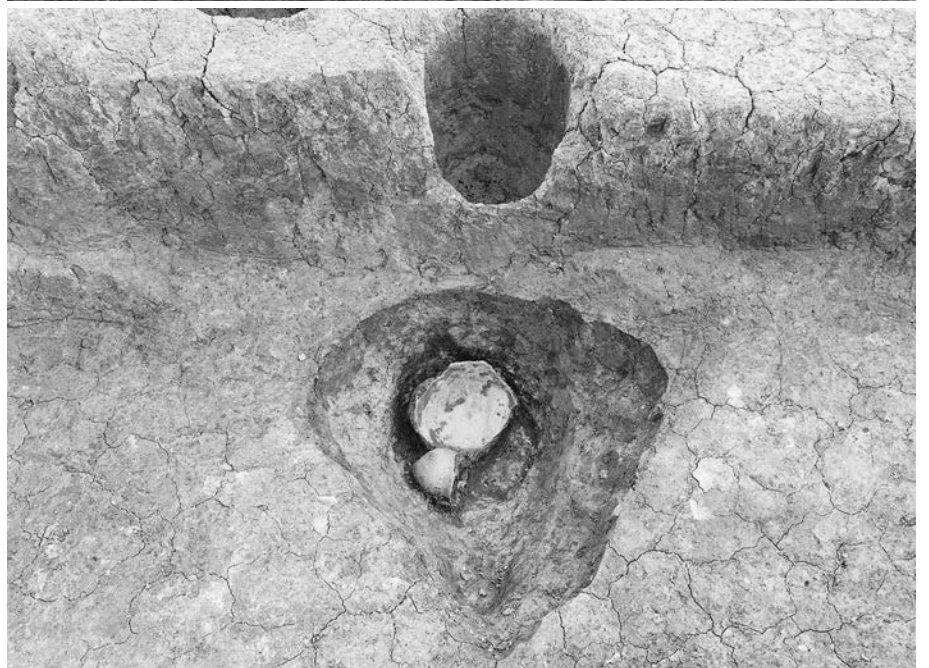
1. 16号竪穴住居跡完掘後  
(北から)



2. 16号竪穴住居跡遺物出土状態  
(南西から)



3. 16号竪穴住居跡屋内土坑  
(北から)





1. 15・16号竪穴住居跡間の溝  
(西から)



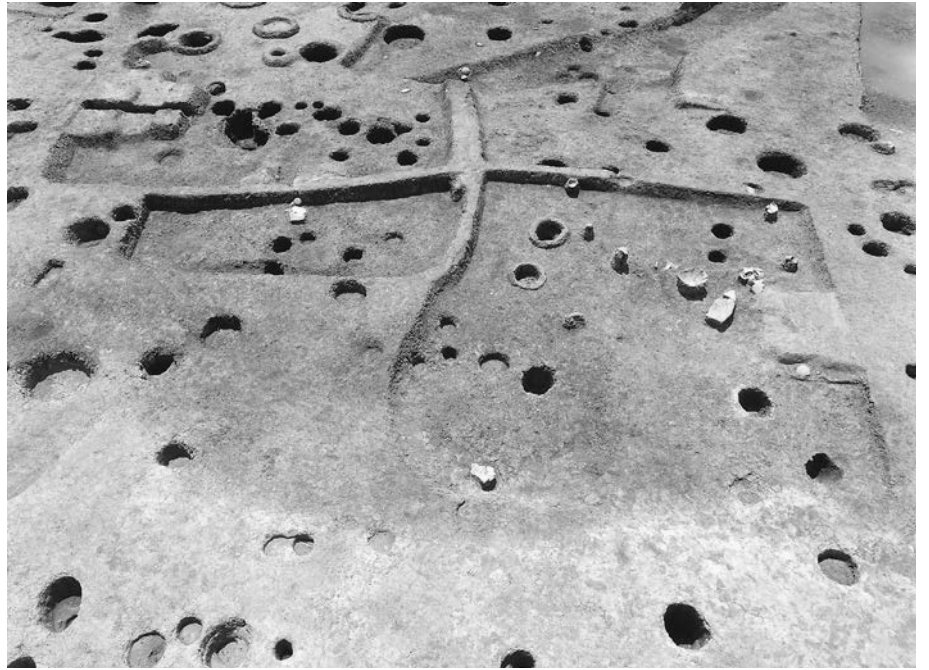
2. 17号竪穴住居跡  
(南西から)



3. 18・19号竪穴住居跡  
(南西から)



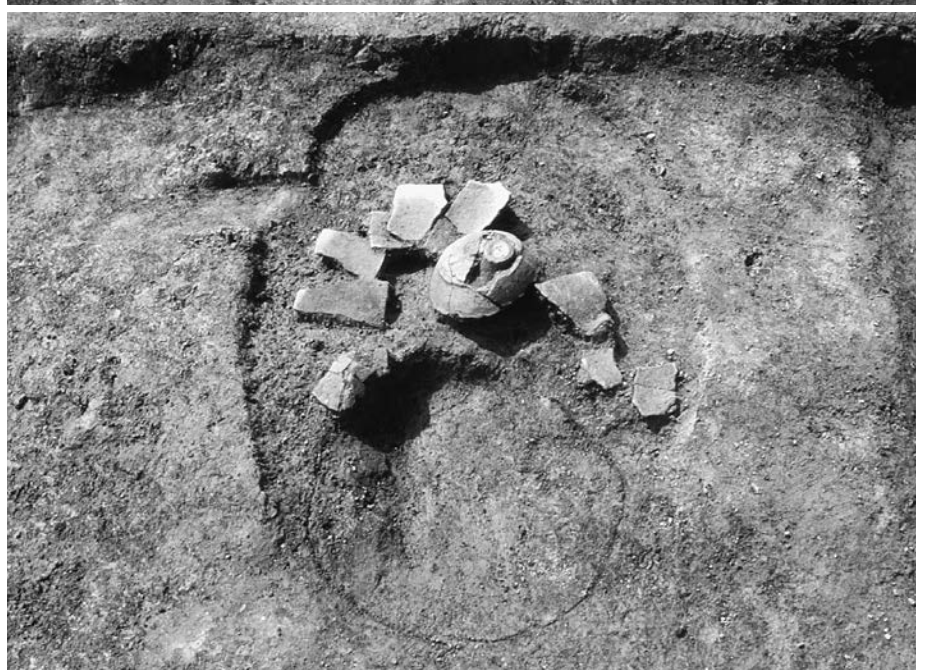
1. 20~22号竪穴住居跡  
(北東から)

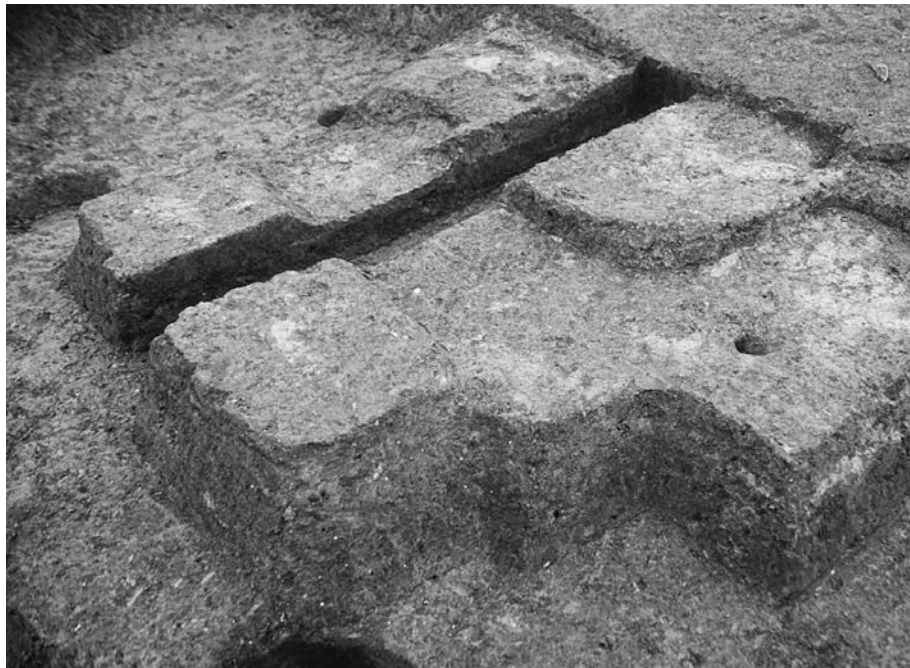


2. 20号竪穴住居跡カマド  
(南から)



3. 20号竪穴住居跡カマド完掘後  
(南東から)





1. 21号竪穴住居跡南辺  
(西から)



2. 22号竪穴住居跡東辺  
(南から)



3. 23号竪穴住居跡  
(南西から)

1. 24号竪穴住居跡  
(北西から)

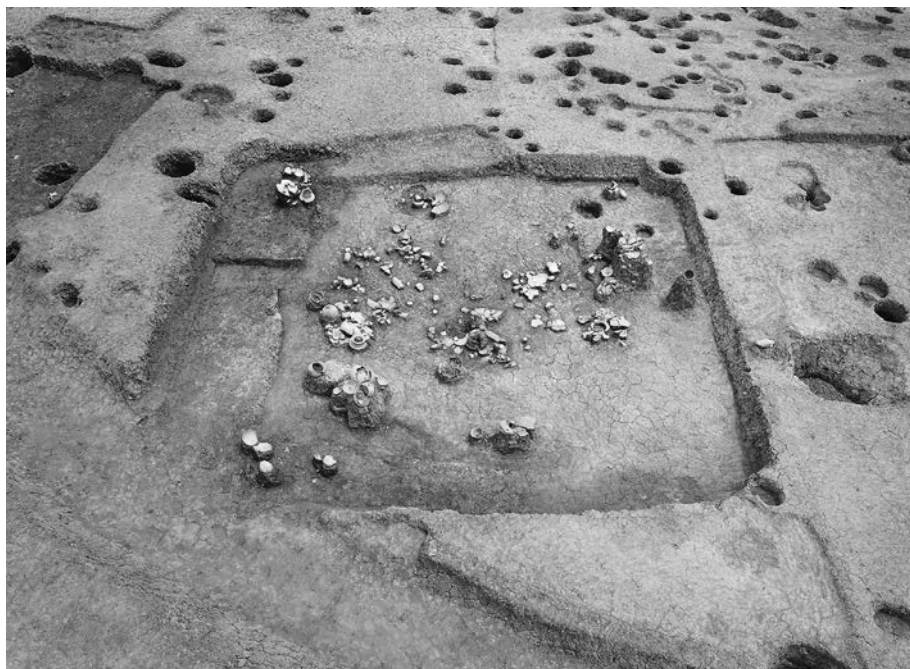


2. 24号竪穴住居跡カマド周辺  
(北東から)



3. 25・26号竪穴住居跡完掘後  
(北西から)





1. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態  
(北西から)



2. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態  
(北東から)

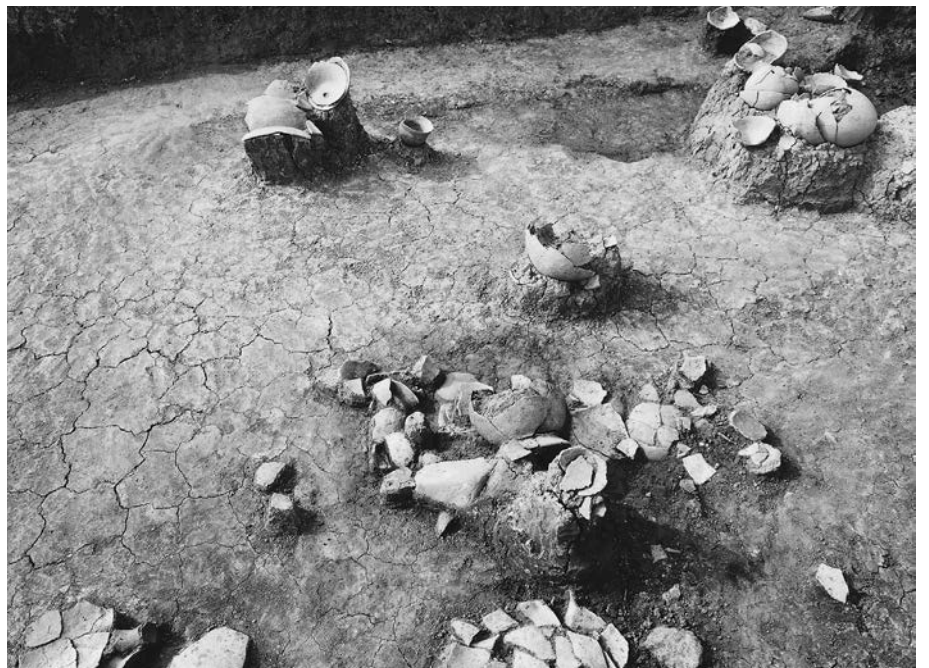


3. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態  
(北西から)

1. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態  
(南西から)



2. 25・26号竪穴住居跡遺物出土状態  
(南西から)



3. 27号竪穴住居跡  
(南東から)





1. I-3区全景  
(上空から)



2. 29号竖穴住居跡  
(南東から)



3. 29号竖穴住居跡埋甕  
(北から)

1. 30号竪穴住居跡  
(南東から)

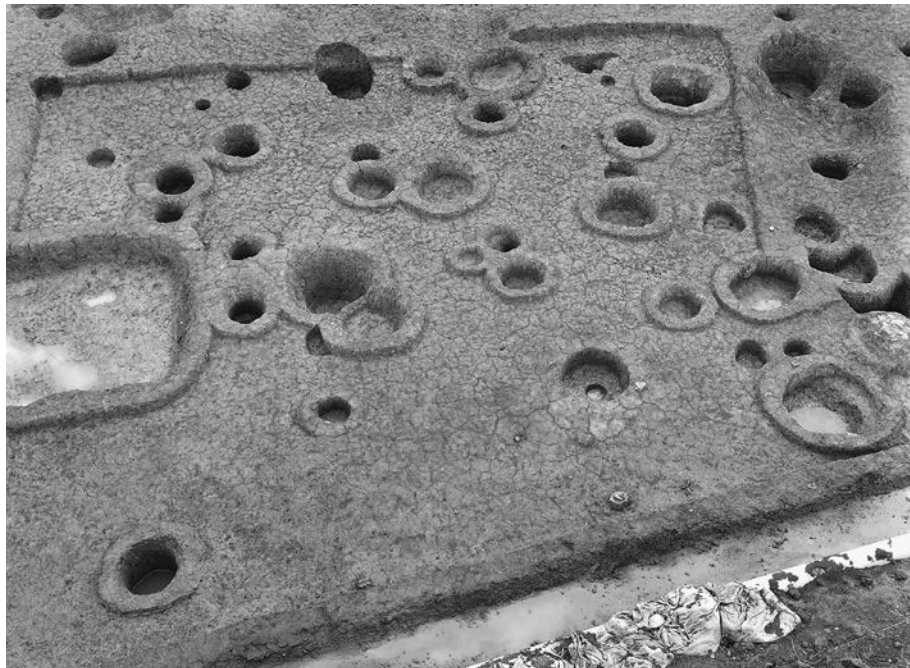


2. 31号竪穴住居跡  
(北東から)



3. 32号竪穴住居跡  
(北東から)





1. 33号竪穴住居跡  
(南西から)



2. 34号竪穴住居跡  
(南東から)



3. 35~44号竪穴住居跡  
(南東から)





1. I - 6区全景  
(上空から)



2. I - 6区北西部  
(上空から)



1. I - 6 区南西部  
(上空から)



2. I - 7 区全景  
(上空から)

1. 35号竪穴住居跡  
(南東から)



2. 38号竪穴住居跡  
(南から)



3. 41号竪穴住居跡カマド周辺  
(南東から)





1. 41号竪穴住居跡カマド  
(南東から)



2. 43号竪穴住居跡カマド付近  
(南から)



3. 45号竪穴住居跡  
(北西から)

1. 45号竪穴住居跡カマド  
(東から)

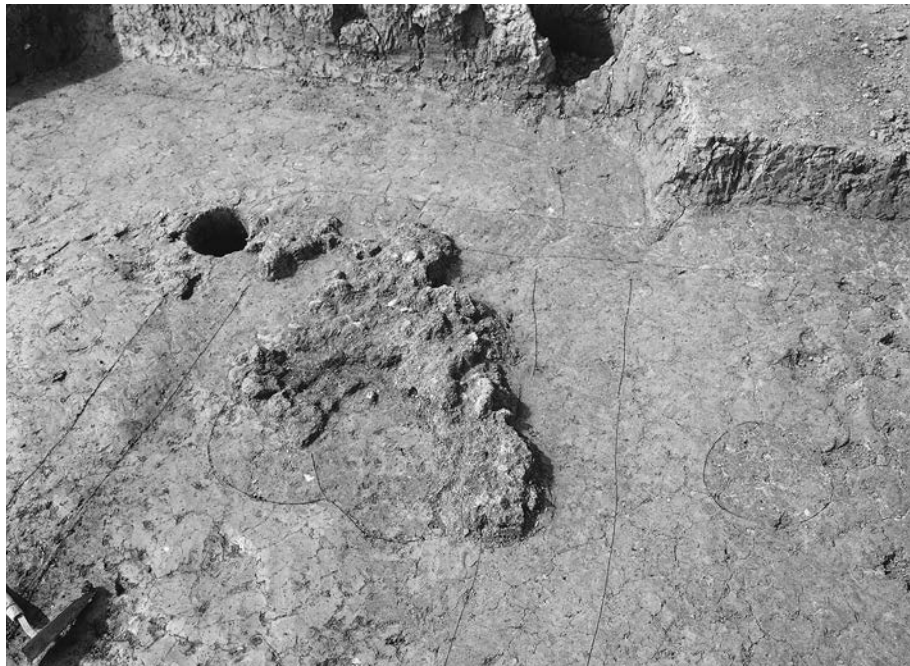


2. 46～48号竪穴住居跡  
(北東から)



3. 48号竪穴住居跡カマド  
(南東から)





1. 49・50号竪穴住居跡切合関係  
(北西から)



2. 49号竪穴住居跡  
(南西から)



3. 51・52号竪穴住居跡  
(南西から)

1. 51号竪穴住居跡遺物出土状態  
(北西から)



2. 53号竪穴住居跡石庖丁出土状態  
(北西から)

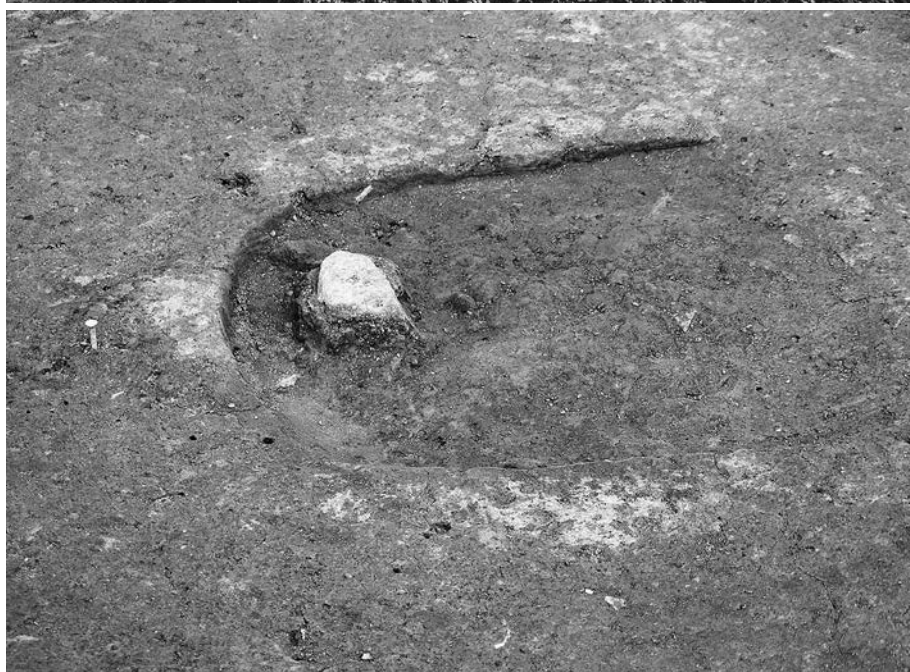


3. 54号竪穴住居跡屋内土坑  
(北から)





1. I-7区全景  
(西から)



2. 57号竪穴住居跡カマド  
(南から)



3. 58号竪穴住居跡  
(南から)



1. 59号竪穴住居跡  
(南西から)



2. 60・61号竪穴住居跡  
(東から)



3. 63号竪穴住居跡  
(南西から)





1. 64号竪穴住居跡  
(北から)



2. 64号竪穴住居跡完掘後  
(西から)



3. 65~67号竪穴住居跡  
(北から)

1. 65号竪穴住居跡カマド周辺  
(南から)



2. 65号竪穴住居跡カマド  
(南から)



3. 65～67号竪穴住居跡  
(東から)





1. 69号竪穴住居跡周辺  
(東から)



2. 71号竪穴住居跡  
(南から)



3. I-7区東端  
(西から)



住 2-3



住 4-14



住 4-5



住 4-15



住 4-8



住 4-16



住 4-9



住 4-10



住 4-18



住 4-11



住 4-20



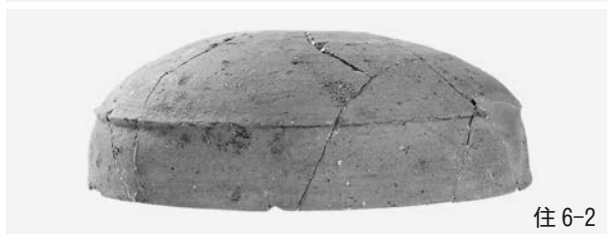
住 4-12



住 4-22



住 4-13





住 6-6



住 6-7



住 6-8



住 6-9



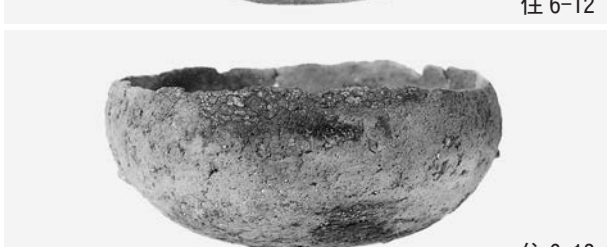
住 6-10



住 6-11



住 6-12



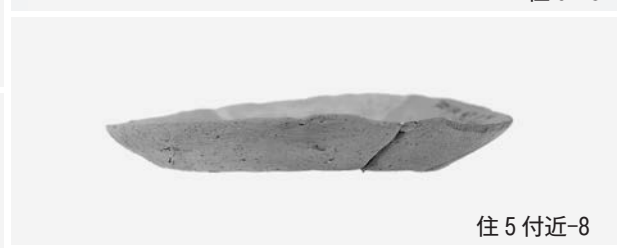
住 6-13



住 6-15



住 6-18



住 5 付近-8



住 5 付近-10



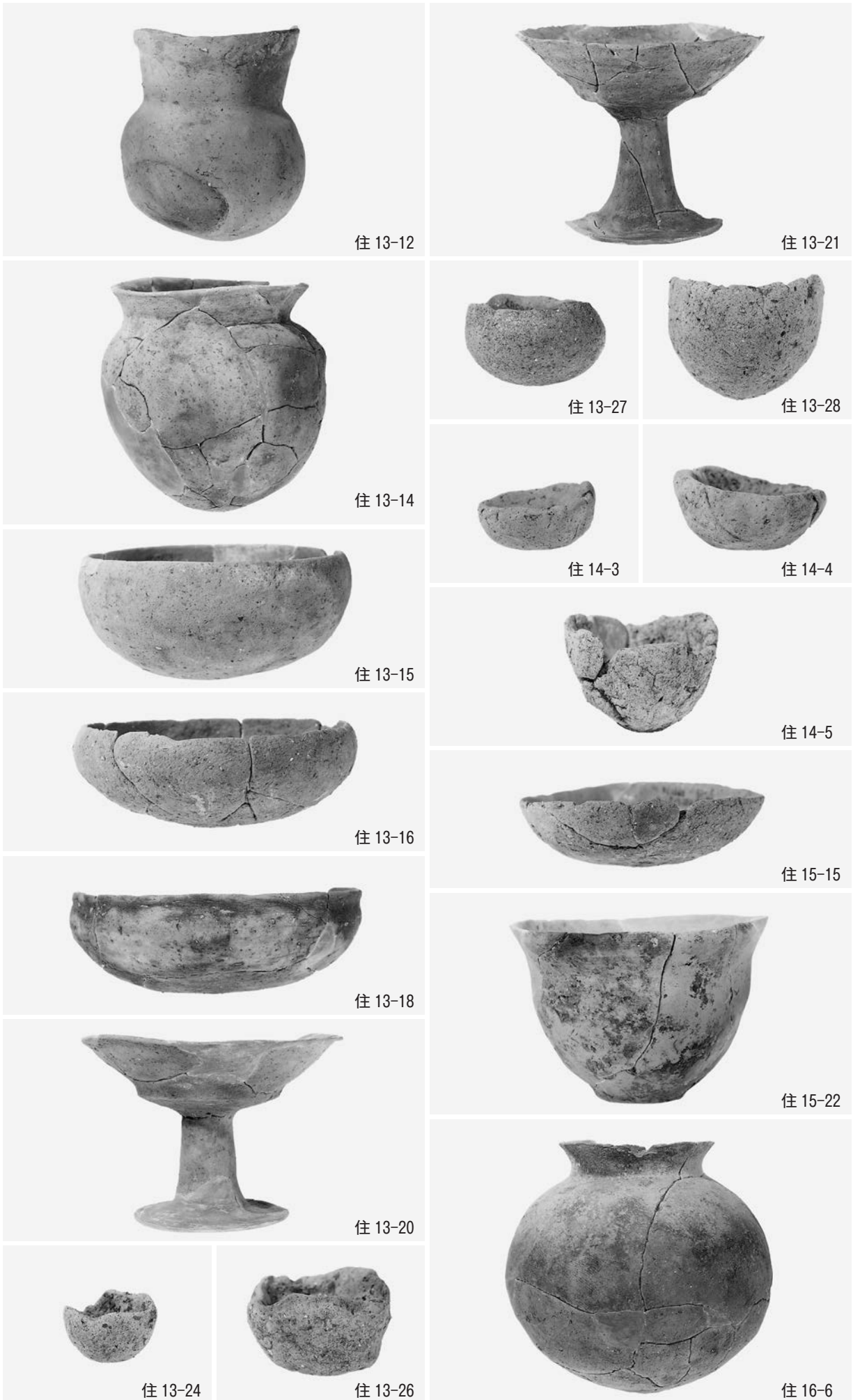
住 7-1

出土遺物 3 (土器：住 6・5 付近・7)

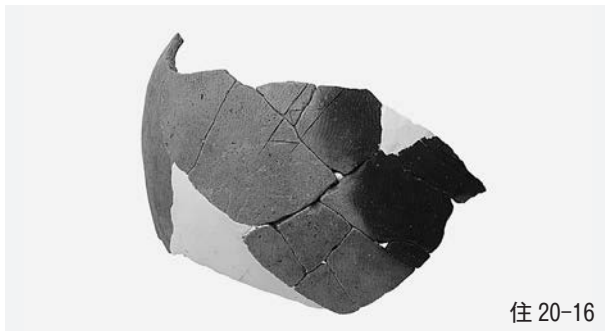
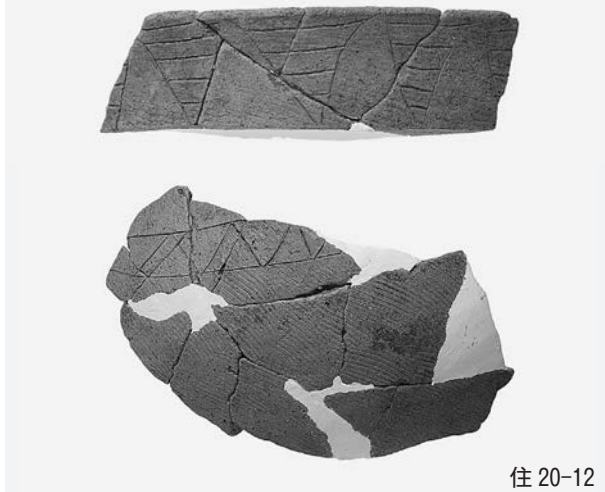


出土遺物 4 (土器：住 9・10・13)





出土遺物 5 (土器：住 13・14・15・16)





住 25-8



住 25-33



住 25-10



住 25-36



住 25-11



住 25-37



住 25-20



住 25-38

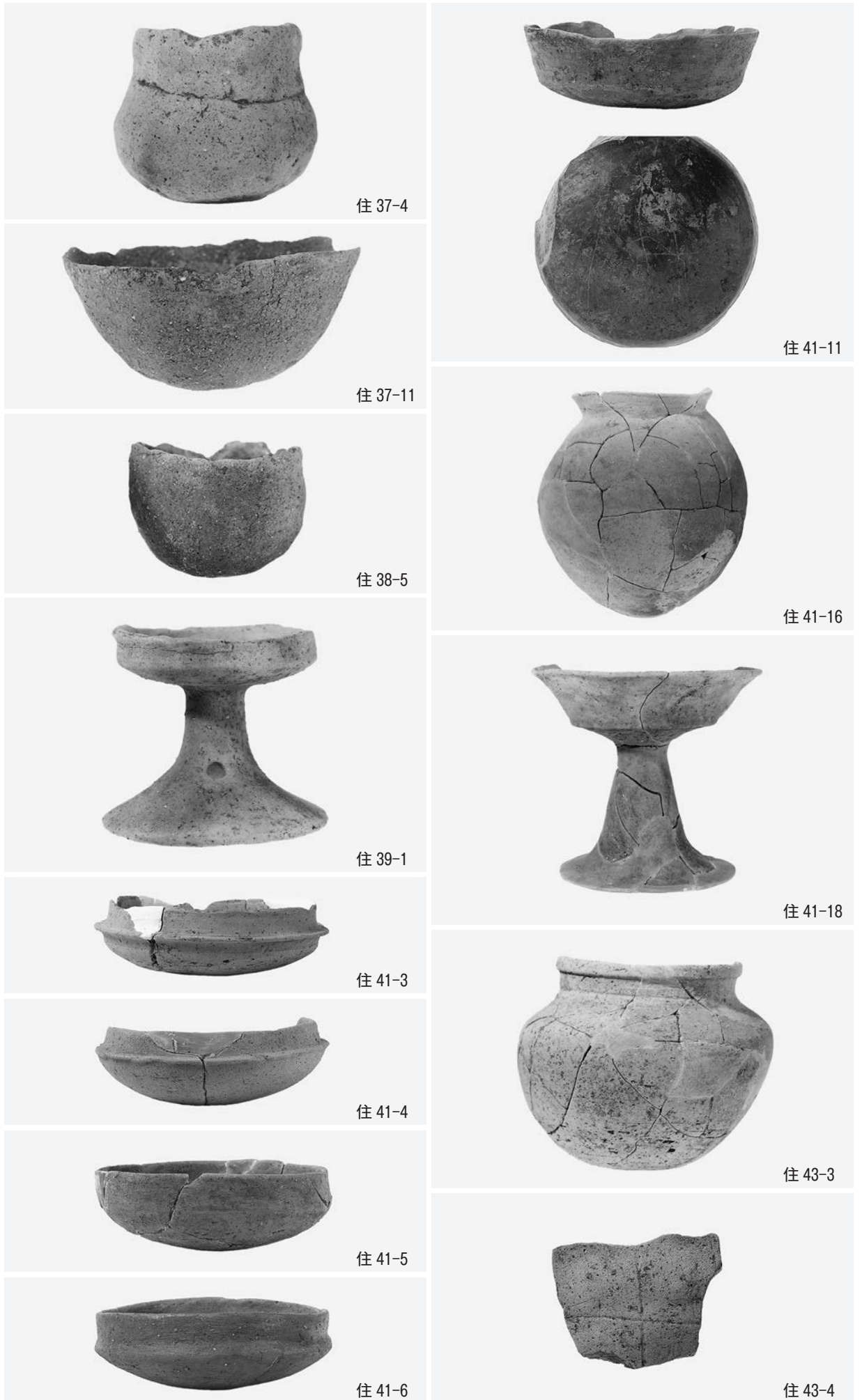


住 25-26



住 25-47





出土遺物 9 (土器：住 37~39・41・43)





住 51-36



住 63-12



住 52-4



住 69-2



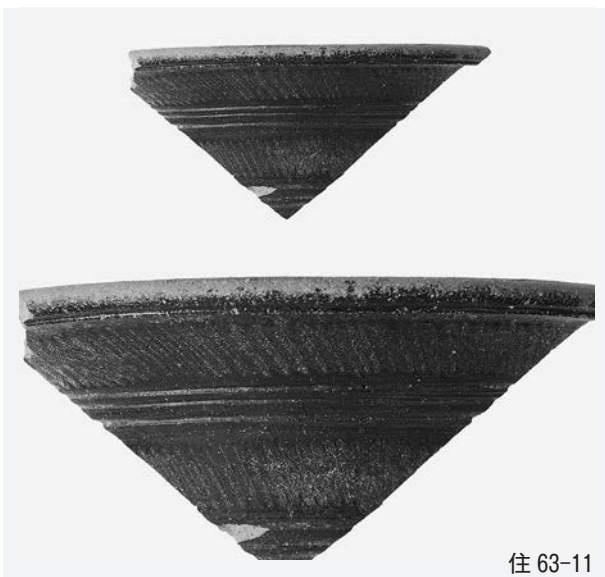
住 63-2



住 74-4



第 99 図 1~3



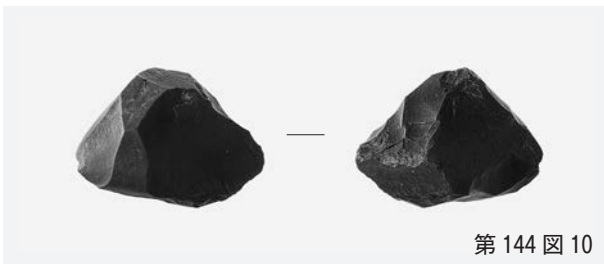
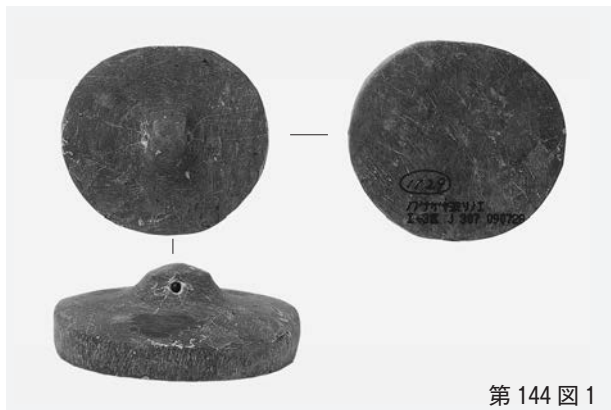
住 63-11



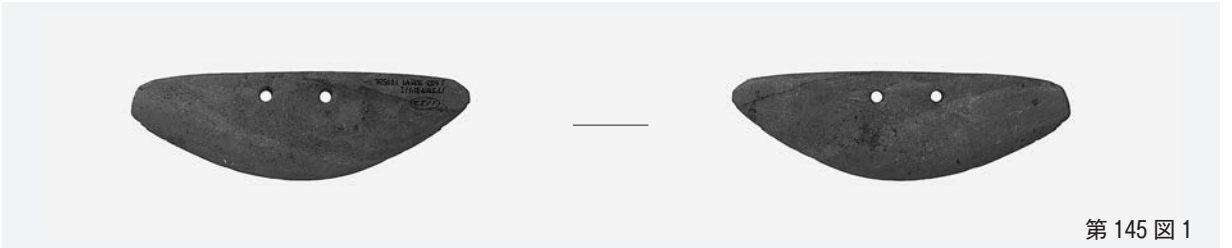
第 99 図 4



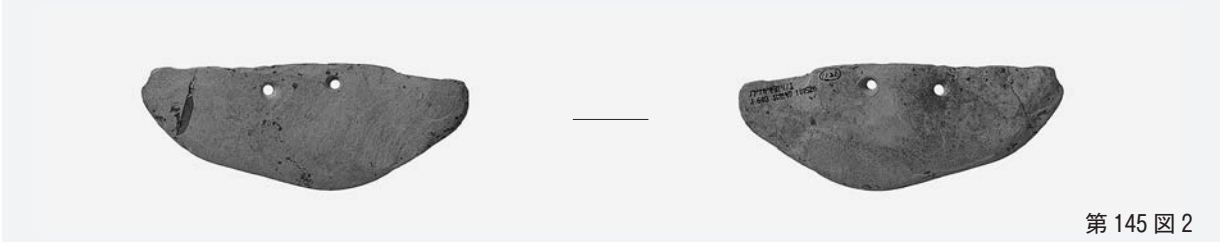
第 99 図 5



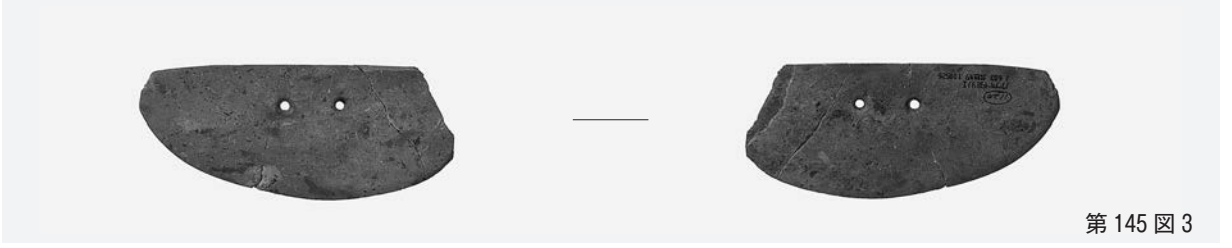




第 145 図 1



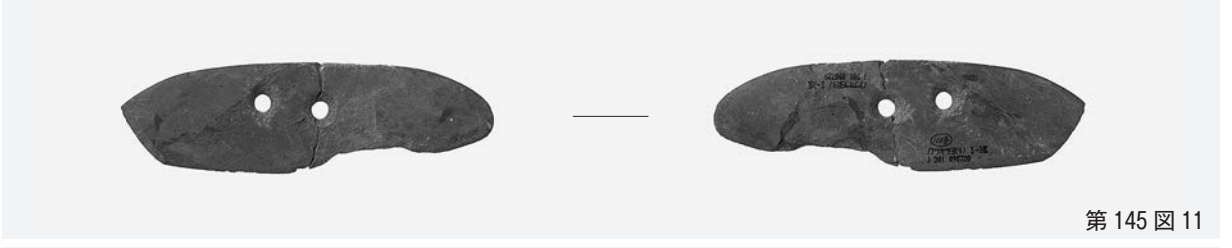
第 145 図 2



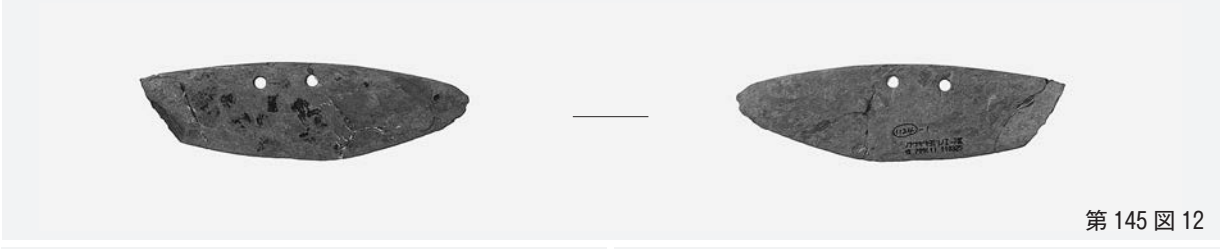
第 145 図 3



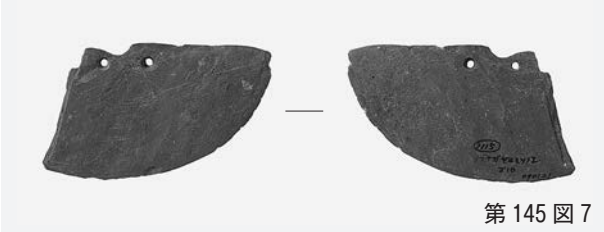
第 145 図 4



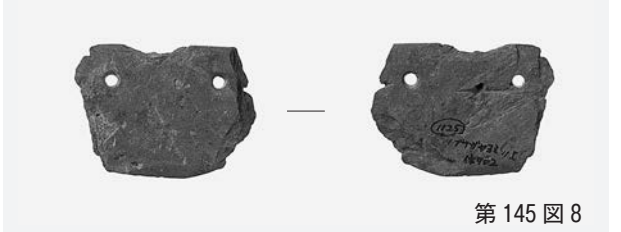
第 145 図 11



第 145 図 12



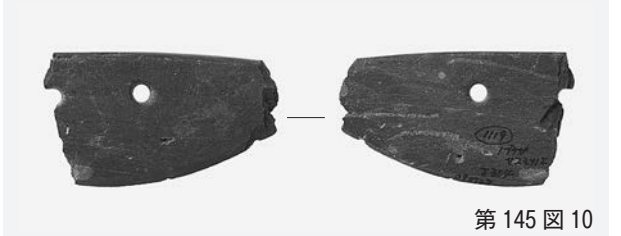
第 145 図 7



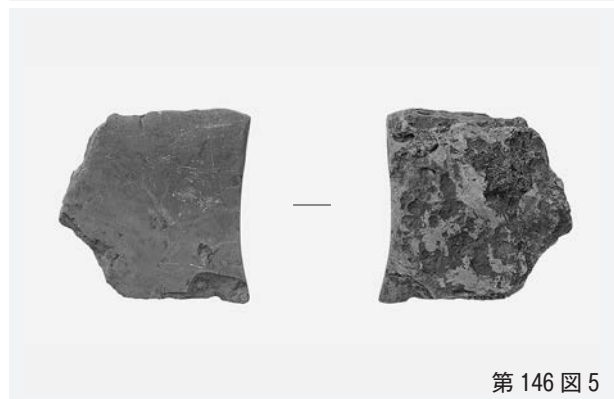
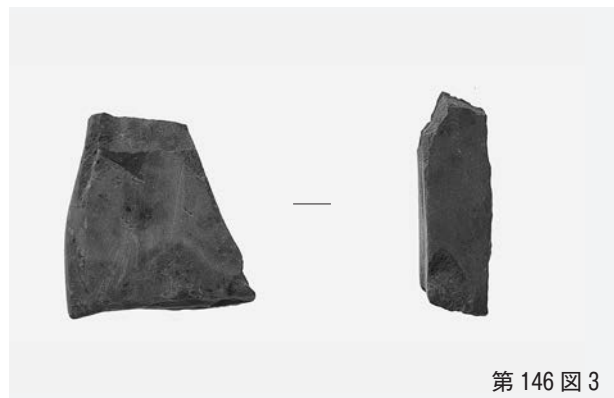
第 145 図 8

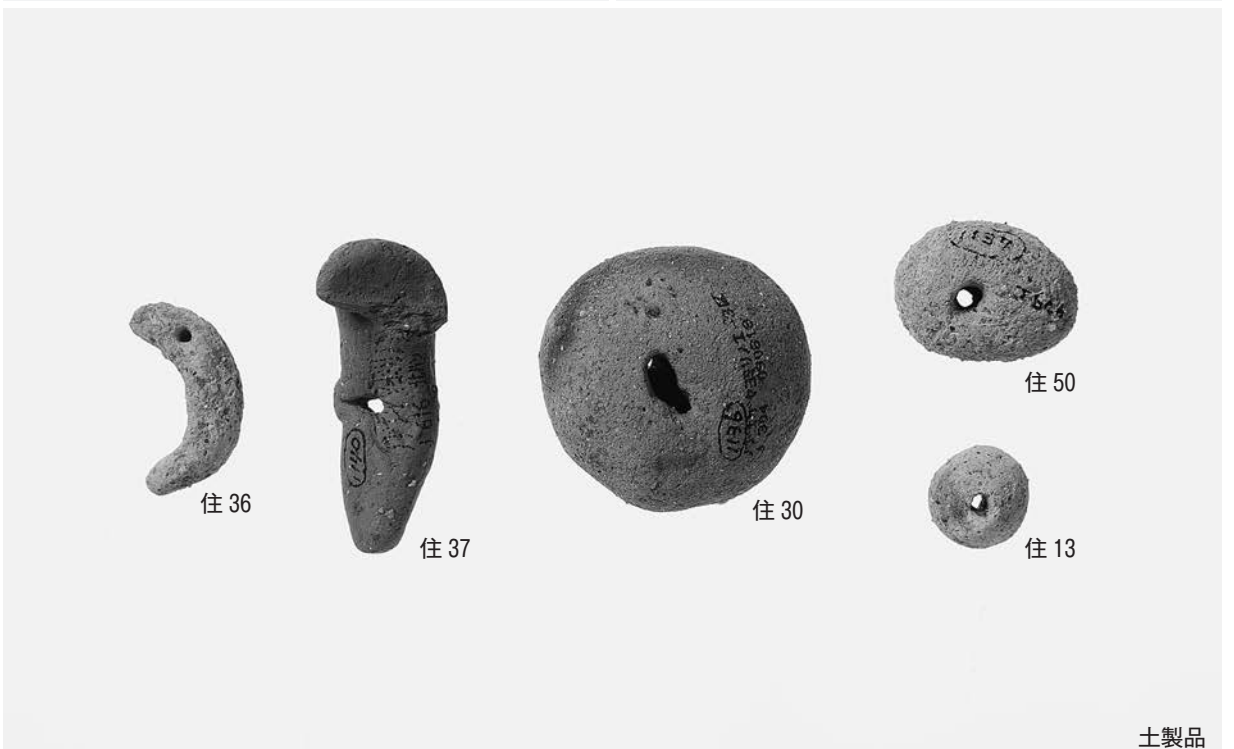
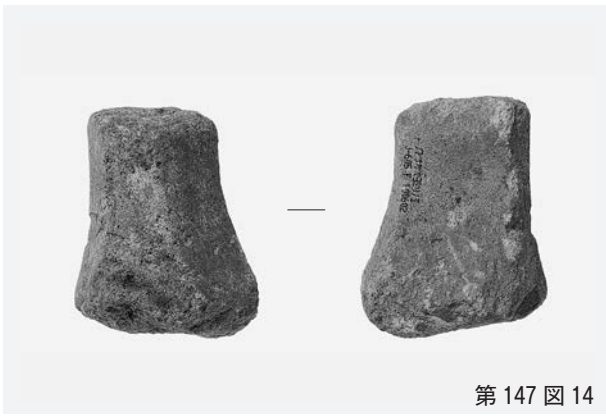
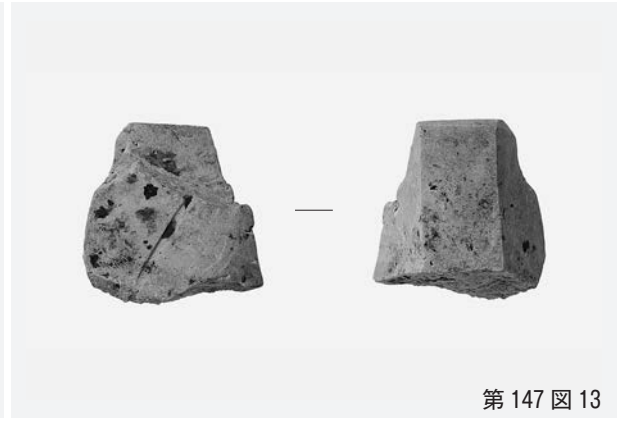


第 145 図 9



第 145 図 10





出土遺物 15 (石製品 5、土製品)



# 報告書抄録

ふりがな	のぶながやよみそのいせき I くのちょうさ 1							
書名	延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	9							
編著者名	飛野博文							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	平成25年(2013)7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡 いちく I 区	ふくおかけんゆくはしし 福岡県行橋市 おおあぎよしくに 大字吉国	402133	14115010	33度 43分 43秒	130度 56分 50秒	20071212 ～ 20110912	24,810m <sup>2</sup>	東九州自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
延永ヤヨミ園遺跡 I 区	集落	弥生	竪穴住居跡等		土器・石器等			
		古墳	竪穴住居跡・土坑・溝等		土器・鉄器・石器等		陶質土器蓋	
		古代	井戸・土坑等		土器・瓦等			
		中世	掘立柱建物跡・区画溝・運河状遺構・地下式土坑等		土器・鉄製品・鉦・木製品等			
	墓地	弥生	土壙墓					
		中世	土壙墓		土器・陶磁器・鉄器			
<p>延永ヤヨミ園遺跡は古くから知られた周知の遺跡であったが、東九州自動車道建設によって初めて発掘調査がなされた。その後、国道201号・県道バイパスなどに伴う調査が継続され、遺跡の内容が随分と明らかとなった。上記「種別」・「主な時代」・「主な遺構」に記した内容がこの低丘陵上の全面に展開し、のみならず谷地区にまで関連遺構が営まれるなど、希に見る大規模かつ稠密な遺跡であることが判明した。多くの担当者が分担調査したために、内容の総括は最終報告を待たねばならないが、弥生末～古墳時代及び6世紀を中心とする集落としては県下でも有数の規模をもつ遺跡である。</p>								

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 2

## 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 9 —

福岡県行橋市  
延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査 I

平成25年11月30日

発行 九州歴史資料館  
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 大同印刷株式会社  
〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20